国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2009-2011年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2017-06-06 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001222

国立国語研究所

年報

2009-2011 NINJAL YEARBOOK

国立国語研究所の活動（2009～2011年度）

国立国語研究所　設置記念式典・国際学術フォーラム「日本語研究の将来展望」
（2009年10月10日～12日：於国語研）

マックスプランク進化人類学研究所（ドイツ）、オックスフォード大学（イギリス）訪問
（2010年9月27日～10月5日）

国際シンポジウム
"International Symposium
on Accent and Tone (ISAT2010)"
（2010年12月19日～20日：於国語研）

国際シンポジウム
"NINJAL International Conference
on Phonetics and Phonology (ICPP 2011)"
（2011年12月10日～14日：於京都大学）

第 4 回 NINJAL チュートリアル
「数字の音韻論」
（2011 年 9 月 29 日：於神戸大学）

第 5 回 NINJAL チュートリアル
「『中納言』による BCCWJ 検索入門」
（2012 年 2 月 9 日：於国語研）

アメリカ議会図書館調査
（2012 年 2 月 7 日）

第 3 回 NINJAL フォーラム
「日本の方言の多様性を守るために」
（2010 年 12 月 18 日：於灘尾ホール）

第 4 回 NINJAL フォーラム
「日本語文字・表記の難しさとおもしろさ」
（2011 年 9 月 11 日：於一橋記念講堂）

職業体験研修会
（2010 年 9 月 22 日：於国語研）

NINJAL 探検 2011
（2011 年 7 月 20 日：於国語研）

目　　次

2009～2011 年度年報の発刊にあたって …… 1
大学共同利用機関法人 人間文化研究機関 国立国語研究所の発足 …… 2

Ⅰ．概要…… 9
１．国立国語研究所のめざすもの…… 10
２．組織…… 11
⑴ 組織構成図…… 11
⑵ 運営組織…… 14
運営会議…… 14
外部評価委員会…… 14
所内委員会組織…… 14
⑶ 構成員…… 17

Ⅱ．共同研究と共同利用…… 25
１．国語研の共同研究プロジェクト…… 26
基幹型…… 27
領域指定型…… 43
独創・発展型…… 48
萌芽・発掘型…… 56
２．人間文化研究機構の連携研究等…… 63
連携研究…… 64
アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明…… 64
海外に移出した仮名写本の緊急調査…… 64
日本関連在外資料の調査研究…… 64
研究資源の共有化…… 64
３．外部資金による研究…… 65
４．刊行物…… 70
『国語研プロジェクトレビュー』…… 70
『国立国語研究所論集』…… 72
NINJAL フォーラムシリーズ …… 73
５．2011 年度までに公開したコーパス・データベース …… 74
６．研究成果の発信と普及…… 76
Ａ．国際シンポジウム…… 76
Ｂ．研究系の合同発表会…… 83
Ｃ．プロジェクトの発表会…… 89
Ｄ．NINJAL コロキウム …… 128
Ｅ．NINJAL サロン …… 129
７．センター・研究図書室の活動…… 135
研究情報資料センター…… 135
コーパス開発センター…… 135

研究図書室…… 136

Ⅲ．国際的研究協力と社会貢献…… 137
1．国際的研究協力…… 138
オックスフォード大学との提携…… 138
マックスプランク研究所との提携…… 138
アメリカ議会図書館およびハーバード大学ライシャワー日本研究所との研究連携…… 138
国際シンポジウム・国際会議の開催…… 138
海外の研究者の招聘…… 138
2．社会貢献…… 139
消滅危機方言の調査・保存・分析…… 139
日本語コーパスの拡充…… 139
多文化共生社会における日本語教育研究…… 139
訪問者の受入…… 139
学会等の共催・後援…… 140
一般向けイベント…… 141
NINJAL フォーラム …… 141
NINJAL セミナー …… 145
人間文化研究機構関係　公開講演会・シンポジウム…… 145
児童・生徒向けイベント…… 146
職業発見プログラム…… 146
NINJAL 探検 …… 146
3．大学院教育と若手研究者育成…… 147
⑴ 連携大学院…… 147
⑵ 特別共同利用研究員制度…… 147
⑶ NINJAL チュートリアル …… 147
⑷ 優れたポストドクターの登用…… 148

Ⅳ．教員の研究活動と成果…… 149
略歴，所属学会，役員･委員，受賞歴，2009～2011 年度の研究成果の概要，研究業績（著書･編書，論文･ブックチャプター，データベース類，その他の出版物･記事），講演･口頭発表，研究調査，学会等の企画運営，その他の学術的・社会的活動，大学院教育・若手研究者育成

Ⅴ．資料…… 253
1．国立国語研究所の発足に関する巻末資料…… 254
2．運営会議…… 266
2009～2011 年度の開催状況 …… 266
運営会議の下に置かれる専門委員会…… 269
⑴ 所長候補者選考委員会…… 269
⑵ 人事委員会…… 269
⑶ 名誉教授候補者選考委員会…… 270
3．評価体制…… 270

自己点検・評価委員会…… 270
外部評価委員会…… 270
共同研究プロジェクトヒアリング…… 271
平成 21 年度実績に関する自己点検・評価状況について …… 272
4．広報…… 273
5．所長賞…… 273
6．研究教育職員の異動…… 276

2009年度～2011年度年報の発刊にあたって

国立国語研究所は，国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に創設され，独立行政法人を経て，2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所となりました。創設から60年以上の歴史の中で画期的と称してよい大変革であった大学共同利用機関法人への移行から5年間が過ぎ，遅ればせながら，草創期（2009年度から2011年度）の活動全般をまとめた年報をここに発刊いたします（2012年度，2013年度版は発刊済）。

新しい国立国語研究所（略称「国語研」）は，日本語及び日本語教育の国際的研究拠点として国内外の大学・研究機関と広範な共同研究プロジェクトを実施し，言語研究の観点から私たち人間というものの存在について理解と洞察を深めることを研究目的としています。創設からの長い伝統の中で培ってきた研究と，大学共同利用機関としての新しいアプローチを織り合わせることによって，従来は考えられなかったほど幅広い研究プログラムを展開することが可能になりました。

国語研は古くから，膨大な量の言語データを収集し大型電子計算機で統計的・数理的に処理する研究手法を先駆的に開拓してきました。この伝統的な研究方法は，現在の国語研では主として，〈時空間変異研究系〉における全国諸方言（消滅危機方言を含む）の詳細な調査研究と，〈言語資源研究系〉における現代及び過去の日本語資源を電子化するコーパス構築の研究へと発展してきました。これらは日本語の具体的な運用・使用の実態を明らかにし，日本語の多様な姿を示すことを主眼としています。他方，国語研の歴史の中で新しい観点の研究とは，主として，〈理論・構造研究系〉における一般言語学を背景とする日本語の構造と仕組みに関する研究と〈言語対照研究系〉における世界諸言語と日本語との比較研究で，これらは日本語の母語話者が脳内に持っている抽象的な言語能力の解明と結びつきます。4つの研究系は互いに知見を提供し合いながら研究を進めていますが，いずれの研究系も研究成果を日本語教育・学習に活かすことを心がけています。〈日本語教育研究・情報センター〉は，4研究系と連携しながら，国語研の伝統的な日本語教育研究に新しいコミュニケーション研究を融合させることで，外国人への日本語教育の改善に資する成果を提供しています。

大学共同利用機関の重要なミッションは，共同研究から得られた研究成果や，関連する研究文献情報を広く社会（一般社会，研究者社会，国際社会）に発信・提供し，学術研究と社会を結ぶ架け橋の役目を果たすことです。そのため，研究成果は，各種の刊行物やコーパス・データベースのオンライン公開，あるいは一般講演会や地方自治体でのセミナーなどのイベントを通して逐次お伝えしています。本年報で報告されている諸活動は，新研究所の助走期におけるもので，まだまだ十分なものとは言えません。本格的な研究成果の多くは次の2012年度から出てくることになります。この事情を斟酌して，本冊子をご覧いただければ幸いです。

国立国語研究所長
影　山　太　郎

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所の発足

所長　影山 太郎

大学共同利用機関としての最初の２年半の諸活動を年報としてまとめるにあたり，独立行政法人からの移行の経緯を中心とする創設時からの沿革と，大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員としての国立国語研究所の新しい姿をここに略述しておく。

１．経緯

●創設

我が国で唯一の国立の日本語研究機関として国立国語研究所が創設されたのは，第二次世界大戦終了から間もない 1948（昭和 23）年であった。その当時は，明治時代から続く「国語国字問題」――漢字の爆発的な増加と多様な字体の共存，仮名遣い，文語と口語の相違，さらには方言によるコミュニケーションの阻害など――が専門家や行政の頭を悩ませていただけでなく，一般国民の生活にも混乱を生じていた。また，一部の識者の間には，漢字の膨大さと複雑さが日本という国の近代化・民主化を妨げているという意識が高まっていた時代でもあった。戦後すぐに GHQ の要請によって来日した米国教育使節団も国語改革の重要性を強調し，学校や国民生活においてローマ字の使用を推奨する報告書（1946 年 3 月）を出したほどである。こういった国語国字問題を早急に解決するためには，個人の主観的な意見ではなく，広範囲から収集した客観的な資料に基づく研究が必要であった。そのため，国語審議会は 1947（昭和 22）年 9 月に「国語国字問題の重要性にかんがみ，大規模の基礎的調査機関を設けて，その根本的解決をはかられんことを望む。」という建議を文部大臣に提出した。これを承けて，研究所の設立委員会が作られ，設立準備の作業が始まった。1948（昭和 23）年 12 月 20 日には国立国語研究所設置法が発布され，「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い，あわせて国語の合理化の確実な基礎を築くために，国立国語研究所を設置する。」（第一条第 1 項）という設置目的と，「一　現代の言語生活及び言語文化に関する調査研究，二　国語の歴史的発達に関する調査研究，三　国語教育の目的，方法及び結果に関する調査研究，四　新聞における言語，放送における言語等，同時に多人数が対象となる言語に関する調査研究」（第二条第 1 項）という具体的な事業内容が規定された。一，三，四の事業については各種の報告書を通じて多数の成果が公表されたが，二（歴史的発達に関する調査研究）については，各大学の国語学科で実施されているという理由でほとんど実行されなかった。

●独立行政法人化

1968（昭和 43）年に文化庁が設置されたのに伴い，研究所も文化庁の附属機関となった。このころから，創設時の設置目的や事業内容に変化が見られ，1974（昭和 49）年には外国人に対する日本語教育に関する部門（1976 年から日本語教育センター）が設けられた。外務省管轄の国際交流基金がもっぱら海外における日本語教育の普及を行うのに対して，文化庁管轄の国立国語研究所の日本語教育部門は日本国内における日本語教育を受け持つという役割分担が暗黙のうちにできた。さらに，2001（平成 13）年には独立行政法人化し，日本語教育部門も日本語教育基盤情報センター（すなわち，全国の日本語教育関係者に対して研究･教育の基盤となる情報を提供するためのセンター）となった。同センターおよび研究所全体は，種々の教育研究情報をまとめた『日本語教育年鑑』と『国語年鑑』を毎年刊行し，さらに，難解な医療用語の平易な言い換えや，カタカナ言葉の言い換えの提言などを通じて社会的な貢献を行った。

以上のように，創設から 2009 年 9 月末日までの国立国語研究所は，国の言語政策に資するための調査研究を行う機関として「国研（こっけん）」の愛称で親しまれ，国民の言語生活や全国方言に関する大規模な調査，日本語教師の養成などに多大な成果を上げた。ところが，独立行政法人の整理合理化計画の一環として，政府は 2007（平成 19）年 12 月の閣議決定において幾つかの独立行政法人を廃止・転換することを決定し，その中で国立国語研究所が大学共同利用機関に移管することが定められた。

●大学共同利用機関への移行

国立国語研究所を大学共同利用機関に移管するとした 2007（平成 19）年 12 月の閣議決定を受け，文部科学省は，国語に関する学術研究の研究体制・研究組織の今後の在り方や国による支援の在り方などを検討するため，2008（平成 20）年 1 月に科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会に「国語に関する学術研究の推進に関する委員会」を設けた。同委員会は，日本語関係の主要学会（日本言語学会，日本語学会，日本音声学会）を含む有識者による懇談会を経て，2008（平成 20）年 7 月に次の 2 点を骨子とする報告書「国語に関する学術研究の推進について」をまとめた（報告書の詳細は巻末資料 pp.255-259. 資料 1 ）。

○国語に関する学術研究を推進するための中核的研究機関としての機能を持った大学共同利用機関を設置することが必要である。

○当該大学共同利用機関については，最も関連の深い人間文化研究機構において検討を行い，同機構に設置されることが望ましい。

これにより，石井米雄人間文化研究機構長（初代）は国立国語研究所を人間文化研究機構に設置することを決めた。移管は 2009 年 4 月 1 日の予定であった。

●日本語研究機関設置準備委員会

人間文化研究機構は，上述「国語に関する学術研究の推進について」の報告書に基づき，「人間文化研究機構日本語研究機関設置準備委員会」と事務的な作業を担当する「日本語研究機関設置準備室」を設け，設置準備委員会の下に設けられた所長予定者選考委員会において，日本語を軸とする理論言語学の研究に国際的な実績のある現所長（当時，関西学院大学教授）を日本語研究機関設置準備室長（所長就任予定者）に選び，次に，設置準備室長は新研究所の理念に共鳴する研究系長候補者を外部（神戸大学，東京大学，鹿児島大学）から選考した。また，設置準備委員会では，報告書「国語に関する学術研究の推進について」の提案に沿い，研究を行う組織として理論・構造研究系，時空間変異研究系，言語資源研究系，言語対照研究系の 4 つの研究系を設けることとした。

研究系長の選考と並行して，設置準備委員会に設けられた人事選考委員会では，旧国立国語研究所の研究員のうち希望者に対して，新研究所の教育研究職員（教授，准教授，助教）として採用するための所内優先公募を行った。この結果，発足時点では外部からの教員（専任 2 名，客員 8 名）と旧国語研からの承継職員（23 名）で船出することとなった。

設置準備室では新研究所の名称も検討し，日本語名称は当面，「国立国語研究所」（略称，国語研）を引き継ぐ一方，英語名称には日本語名称にない「言語学（linguistics）」という言葉を明記し，National Institute for Japanese Language and Linguistics（略称 NINJAL）とすることを決めた。

●国会における法律案の修正

上述の「国語に関する学術研究の推進について」の報告書は，日本語教育の重要性に触れながらも，大学での研究との競合や，教育そのものが大学共同利用機関に馴染まないという観点から，とりたてて日本語教育を新研究所の組織体系に位置づけることはしなかった。これに対して全国の日本語教育

関係者から，新研究所においても日本語教育に関する研究を継続すべきであるという意見が出たことをきっかけに，2009（平成 21）年 3 月の国会審議において，「独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律」に対して「国は，国立国語研究所において行われていた国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育に関する科学的な調査及び研究並びにこれに基づく資料の作成及びその公表等の業務が，人間文化研究機構において引き続き維持され，及び充実されるよう，必要な措置を講じなければならない。」という附則（第 14 条）が加えられた（巻末資料 p.259. 資料 2 ）。この変更により，当初は 2009（平成 21）年 4 月 1 日に予定されていた新研究所の発足は半年間延期されることになった。その間，設置準備委員会ではこの法律附則に対応するため，独立行政法人時代の日本語教育基盤情報センターに対応し，さらに情報提供だけでなく学術的研究を行う組織として「日本語教育研究・情報センター」を設けることを決めた。これにより，新研究所は，4 つの研究系と 3 つのセンター（日本語教育のほか，コーパス開発センター，研究情報資料センター）で構成されることになった。

日本語教育研究・情報センターについては，4 研究系の所内優先公募で研究教育職が決まらなかった旧職員のうち，希望者を当面，旧研究所の身分のまま同センターの「研究員」として承継することとし，研究教育職員（教授，准教授，助教）としての資格審査は新研究所に移行した後に行うことにした。それと同時に，上記附則に鑑み，将来的に同センターの長として赴任できる可能性のある教授適格者を外部に求めることとし，日本語教育の分野で研究と実践の両面において実績のある広島大学教授を当面，客員教授として招聘することにした。日本語教育に関して内外から厳しい眼が注がれていた移行期の困難な状況を乗り切ることができたのは，同教授の存在によるところが大きい。

2009（平成 21）年 3 月に成立した法律では，もうひとつ，「人間文化研究機構への移管後二年を目途として当該業務を担う組織及び当該業務の在り方について検討を加え，その結果に基づいて所要の措置を講ずるものとする」という附則第 15 条が付け加えられた（巻末資料 pp.260-261. 資料 3 ）。

ここで重要なことは，上述第 14 条と第 15 条は，あくまで「独立行政法人に係る改革を推進するための整備等」に関わる法律の附則であり，それとは別に，大学共同利用機関のミッションを規定した「国立大学法人法」が存在するという点である。大学共同利用機関としての新国語研が依拠しなければならない根本原理は「国立大学法人法」にあり，独立行政法人の整備に関わる法律はそれに対する付加的な条件と捉えられる。現在の国立国語研究所は，その理解において運営されている。

2．新国立国語研究所の発足

かくして，土地，建物，財産すべてを独立行政法人国立国語研究所から承継するという形で，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所が 2009（平成 21）年 10 月 1 日に誕生した。

●新研究所の特徴

大学共同利用機関としての国立国語研究所が，独立行政法人およびそれ以前の同研究所と異なる点で，とりわけ重要と思われるものを箇条書きにしておく。これらの相違点は，新国語研と旧国語研が異なる設置目的を持つことに由来するものである。

(1) 研究の目的

創設当初から独立行政法人時代まで，国立国語研究所の業務は「調査研究」という用語で規定されていた。調査研究とは，何らかの課題について調査・資料収集を行い，その結果を所轄官庁および国民に対して報告することを指すと理解できよう。他方，大学共同利用機関としての国立国語研究所は，調査・収集した資料（言語データ）を自らが理論的・科学的に分析し，成果を学界に発表することで

学術の発展に貢献することを目的としている。

(2) 研究テーマと研究方法

旧国語研の研究テーマの範囲は，設置目的において限定を受け，もっぱら国民の立場（いわば，ウチからの視点）の研究であった。これに対し，新国語研で行う共同研究のテーマは，一般社会における必要性も考慮しつつ，研究者コミュニティからの要望を重視して決められる。また，その範囲は日本語学，言語学，日本語教育研究，あるいは自然言語処理などの関連分野全般に及び，日本語をウチからだけでなくソト（世界諸言語）から見る視点が重視される。

(3) 所員の勤務形態と身分

旧国語研では所員は「研究員」という身分で，一定の勤務時間と 60 歳という定年が定められていた。新国語研の所員は，大学と同じく教授，准教授，助教の身分に分類され，勤務時間を特に定めない裁量労働制を取る。また，定年は 65 歳となっている。

(4) 成果発表の形態

研究成果の発表形態は，旧国語研では組織主体，新研究所では個人主体となっている。旧国語研においては，研究成果は「国立国語研究所」の名前で刊行することが義務づけられた。新研究所では，大学と同様に，研究成果は個人名で出版・刊行することを基本とし，また，国内だけでなく国際的な成果発信が強く求められている。

●設置記念式典及び設置記念国際学術フォーラム

新国立国語研究所の開所にあたり，2009（平成 21）年 10 月 10 日に，日本語・言語学の指導的研究者，文部科学省研究振興局担当者，設置準備委員会委員，人間文化研究機構本部役員，人間文化研究機構諸機関の所長・館長等の参列を得てお披露目の式典が挙行された。

人間文化研究機構国立国語研究所設置記念式典
2009 年 10 月 10 日（土）（国立国語研究所）

設置記念講演会　14：00 ～ 16：40

基調講演 1　影山太郎「複合語のタイポロジーと日本語の特質」

基調講演 2　Bernard Comrie (Director, Department of Linguistics, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology) “Japanese and the Other Languages of the World”

設置記念式典　17：00 ～ 17：30

挨拶　金田章裕（人間文化研究機構長）

挨拶　影山太郎（国立国語研究所長）

祝辞　倉持隆雄（文部科学省大臣官房審議官（研究振興局担当））

設置記念祝賀会　17：30 ～ 19：00（国立国語研究所エントランスホール）

祝辞　宮島達夫（国立国語研究所名誉所員）

乾杯　井上和子（元神田外語大学学長）

来賓祝辞　北原保雄（元筑波大学学長）
野村雅昭（国立国語研究所名誉所員）
上野善道（東京大学教授）

来賓　合田隆文（文化庁次長），倉持隆雄（文部科学省大臣官房審議官），匂坂克久（文化庁国語課課長），杉戸清樹（国立国語研究所前所長），藤井理行（情報・システム研究機構国立極地研究所所長），北川源四郎（情報・システム研究機構統計数理研究所長），鈴木泰（京都橘大学教授），原口庄輔（明海大学教授）

引き続き 10 月 11 日と 12 日の 2 日間にわたって，4 つのシンポジウムで構成される国際学術フォーラム「日本語研究の将来展望」が開催された（p.141 参照）。なお，日本語教育については，新しい日本語教育研究の方向性を示唆する国際学術フォーラムを 2010（平成 22）年 3 月 21 日に開催した（p.143 参照）。

3．「二年目の検証」

第 1 節の「国会における法律案の修正」のところで述べたように，独立行政法人国立国語研究所の廃止にあたって，「人間文化研究機構への移管後二年を目途として当該業務を担う組織及び当該業務の在り方について検討を加える」という附則（第 15 条）が付け加えられた。これに基づき，2011（平成 23）年春に，まず人間文化研究機構に設置された国立国語研究所組織・業務調査委員会において検証のための検討が開始され，その結果が「人間文化研究機構国立国語研究所の組織・業務に関する調査･検証について〔報告〕」という報告書（2011 年 7 月）としてまとめられた。ここで同委員会がとった立場は，「これを機に，新たな国立国語研究所の業務や組織が『大学における学術研究の発展等に資するために設置される大学の共同利用の研究所（国立大学法人法）』にふさわしいものになっているかについて調査・分析を行い，特に国語に関する調査研究等にかかわる旧国立国語研究所の関連業務・組織が大学共同利用機関として適切に承継されているかを検証」するというものであった。報告書では，資料・情報の収集・整理・発信等，調査研究の推進，国際交流・連携活動，大学院教育等若手研究者の育成，社会への貢献等，組織・予算等という 6 つの項目の細部にわたって旧国語研と新国語研の比較を行い，大学共同利用機関としての新国語研を次のように評価している（詳細は巻末資料 pp.261-264. 資料 4 ）。

> 新国語研の活動は，旧国語研のデータベースや業務を大学共同利用機関として適正かつ発展的に承継するとともに，「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」というテーマに研究所全体として取り組み，旧国語研では行われていなかった日本語の理論・構造研究，時間的変異研究，及び他の諸言語との対照研究の分野を含んで活発な共同研究が行われるようになったことは、大学共同利用機関として新国語研が現代日本語研究を中核とし，歴史研究を含む言語研究領域を包括する役割を十分に果たしているものと思われる。また，日本語教育研究分野についても、従来の研究内容を承継するとともに、社会言語学や心理言語学、コーパス言語学等の幅広い学問領域と連携を保つことが，当該分野の一層の発展に寄与するものと考えられる。（中略）このように，新国語研は，大学共同利用機関として，国際研究拠点として日本語を世界諸言語の中に位置付け，日本語以外の言語研究や関連する分野との共同研究を推進する業務を十分に実施していると評価できる。

この報告書は文部科学省に提出され，文部科学省では科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会の下に設けられた「国語に関する学術研究の推進に関する作業部会」において，また文化庁では文化審議会国語分科会の「国語研究等小委員会」においてそれぞれ検証が行われた。検証は 2011（平成 23）年 10 月から 2012（平成 24）年 1 月まで続き，2012（平成 24）年 2 月 29 日に両委員会合同の報告書「国立国語研究所の業務及びこれを担う組織の在り方に関する検討について」が公開された。結論のみを要約すると次のようになる（詳細は巻末資料 pp.264-266. 資料 5 ）。

国語に関する学術研究の推進に関する作業部会においては，「移管後 2 年間の国語研において，委員会報告及び独法改革法附則第 14 条等を反映した形で，組織の整備を図り，多様な業務を着実に実施している」，「国語研の在り方について，国語に関する学術研究の中核である大学共同利用機関として適切なものである」等との結論に至った。

また，国語研究等小委員会においては，「移管後も，旧国語研において行われていた国語に関する調査研究等の業務が承継して実施されており，その成果は国語政策・日本語教育政策の企画立案・推進の観点から必要に応じ，国において適切に活用されていると認められ，また今後も活用されることが期待される」，「国語に関する調査研究等の業務を実施するために必要な連携が，当該業務を担う国，国立国語研究所，大学等研究機関・団体の間で適切に図られている」等との結論に至った。

今後，人間文化研究機構及び国立国語研究所において，両委員会報告を十分に踏まえ，国語に関する調査研究等の業務の更なる充実と組織の強化に取り組むことを期待したい。あわせて，国においても，財源の確保など積極的な支援を期待したい。

この結論により，附則第 15 条の最後に書かれた「（検討の）結果に基づいて所要の措置を講ずる」という必要はなくなった。

I

概　要

I 概　要

1 国立国語研究所のめざすもの

沿革

国立国語研究所は，国語に関する総合的研究機関として 1948（昭和 23）年に誕生した。幕末・明治以来，国語国字問題は国にとって重要な課題であり，様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり，戦後，我が国が新しい国家として再生するに当たって，国語に関する科学的，総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が 1948（昭和 23）年 12 月 20 日に公布施行され，国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。この後，独立行政法人（2001（平成 13）年 4 月 1 日～ 2009（平成 21）年 9 月 30 日）を経て，2009（平成 21）年 10 月 1 日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に設置され，国立歴史民俗博物館，国文学研究資料館，国際日本文化研究センター，総合地球環境学研究所，国立民族学博物館に次ぐ 6 番目の研究機関となり，活発な活動を展開している。

ミッション

新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所として発足したことに伴い，国立国語研究所（略称「国語研」）の英語名を National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」，略称 NINJAL（ニンジャル））とした。創設以来の長い伝統と研究の蓄積を踏まえながら，日本語学・言語学・日本語教育研究の国際的研究拠点として，ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深め，国語および国民の言語生活ならびに外国人に対する日本語教育に貢献することを目的としている。日本語を世界諸言語のひとつと位置づけ，国内外の大学・研究機関と大規模な理論的・実証的共同研究を展開することによって日本語の特質の全貌を解明しようとしている。また，共同研究の成果や関連する研究文献情報を広く社会に発信・提供し，自然言語処理など様々な応用面に寄与することも重要な使命としている。

国語研の活動の概略

国語研では，国内外の諸大学・研究機関と連携して，個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開している。それらの土台となるのは「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて，各研究系・センターで研究テーマを定め，数々の共同研究プロジェクトを実施している。

国際的研究協力では，外国人研究者を専任教員，客員教員，共同研究員として招聘するとともに，オックスフォード大学日本語・日本語学研究センター，ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所との学術提携や，アメリカ議会図書館との研究連携を通して，日本語の国際的研究拠点としての活動を進めている。

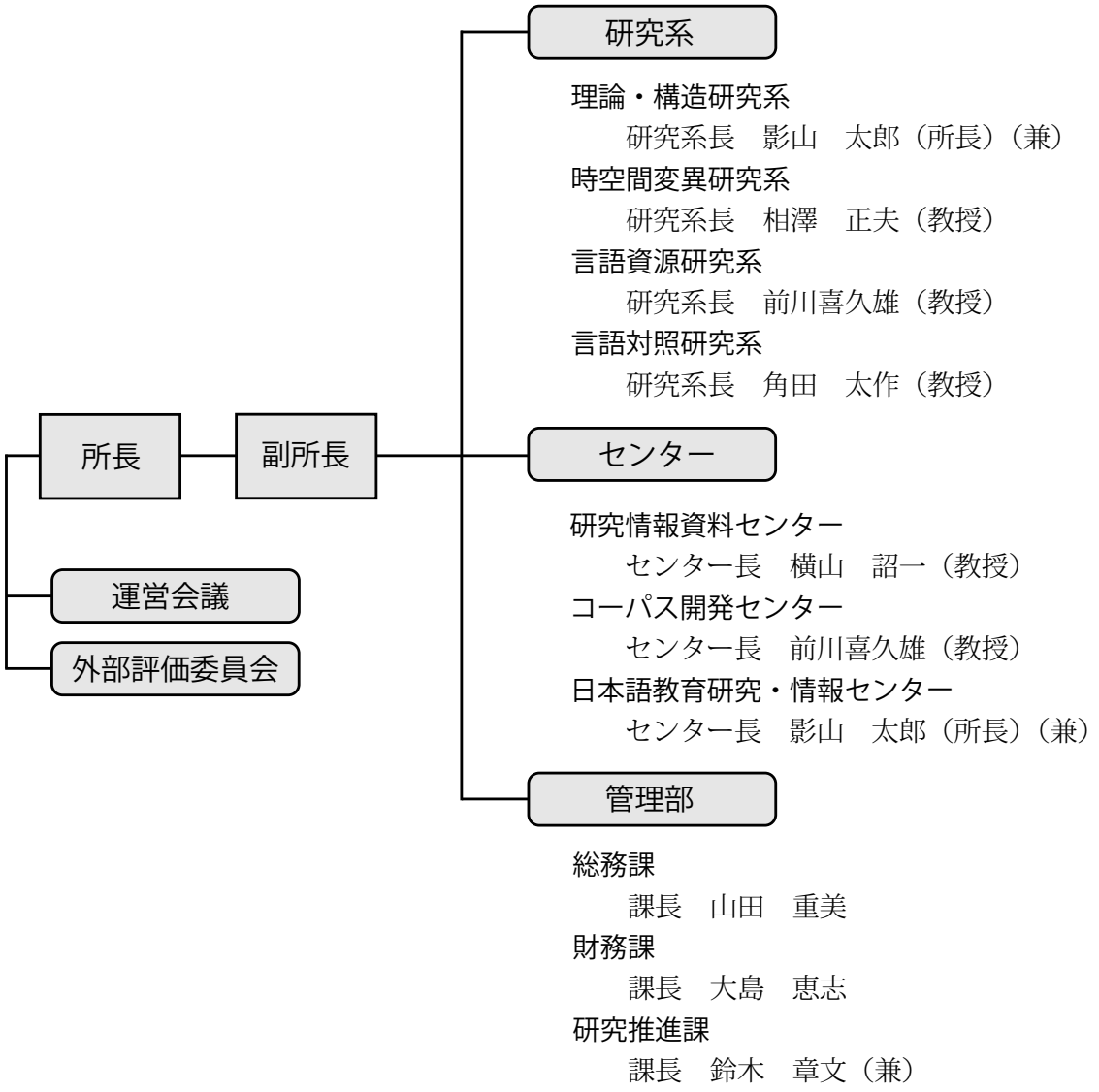
社会貢献として，学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきと考え，積極的に成果を発信している。

2 組織

（1）組織構成図

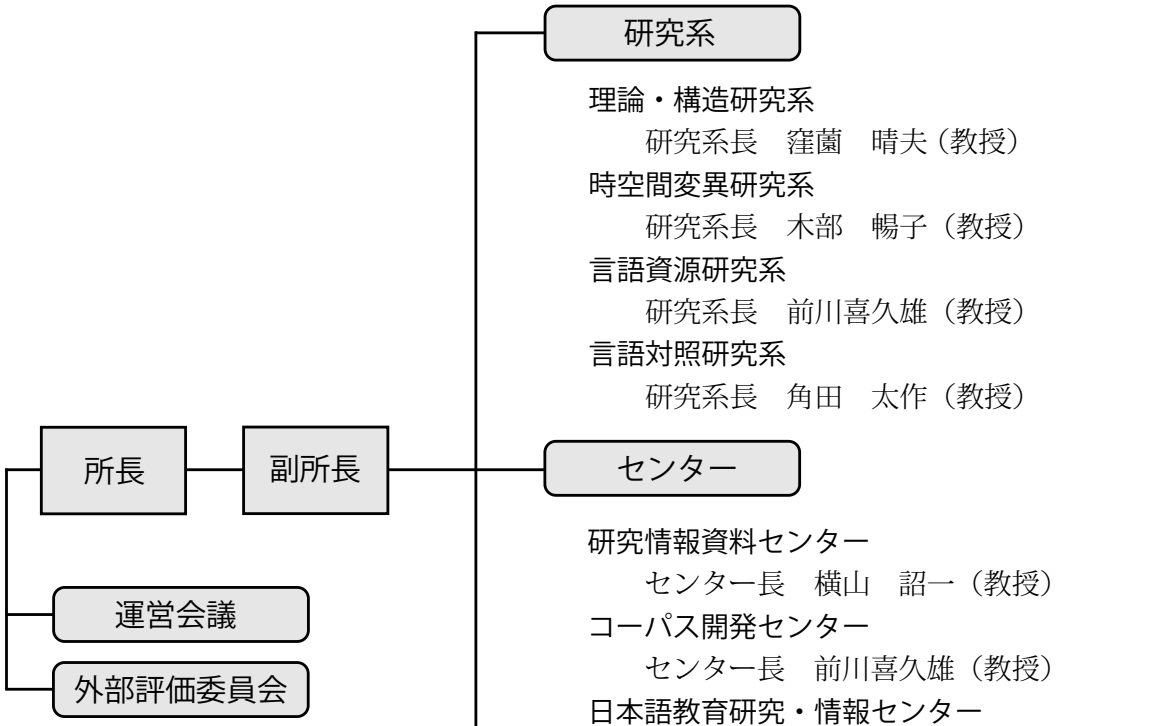
2009 年度（2009.10.1 ～）

所長　　影山　太郎
副所長　　相澤　正夫
管理部長　　鈴木　章文



2010 年度

所長　　影山　太郎
副所長　　相澤　正夫，木部　暢子
管理部長　　鈴木　章文



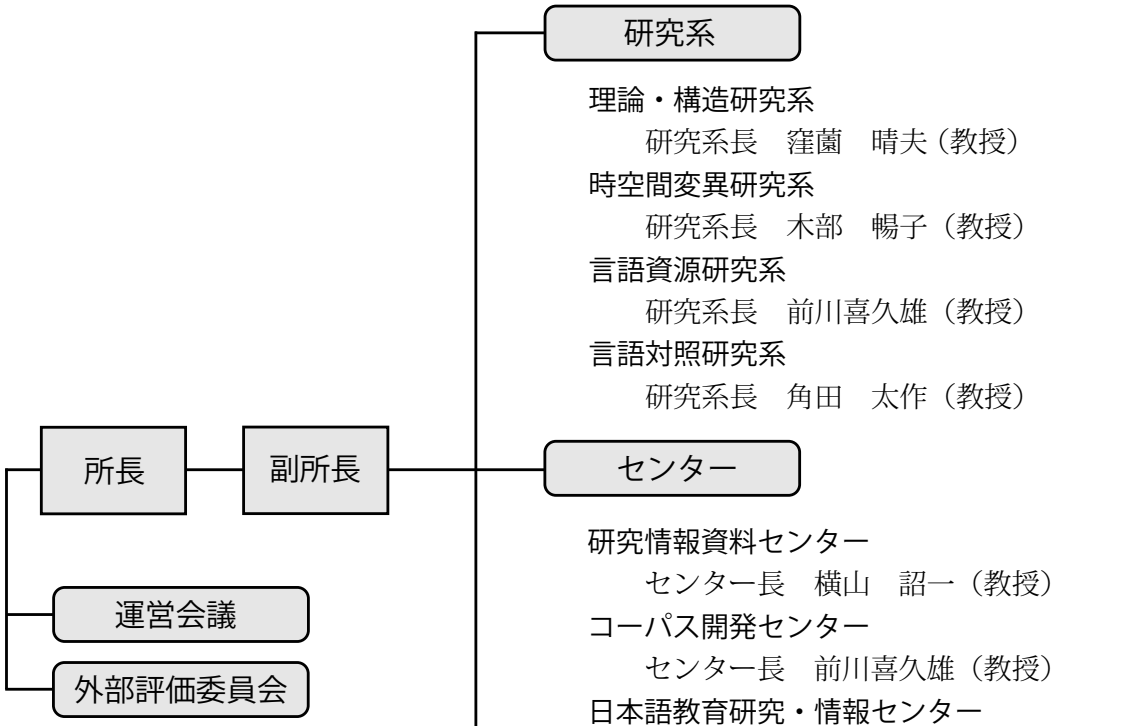
理論・構造研究系
研究系長　窪薗　晴夫（教授）
時空間変異研究系
研究系長　木部　暢子（教授）
言語資源研究系
研究系長　前川喜久雄（教授）
言語対照研究系
研究系長　角田　太作（教授）

研究情報資料センター
センター長　横山　詔一（教授）
コーパス開発センター
センター長　前川喜久雄（教授）
日本語教育研究・情報センター
センター長　影山　太郎（所長）（兼）

総務課
課長　山田　重美
財務課
課長　大島　恵志
研究推進課
課長　黒田　清彦　　（～ 2010.9.30）
鈴木　章文（兼）（2010.10.1 ～）

2011 年度

所長　　影山　太郎
副所長　　相澤　正夫，木部　暢子
管理部長　　鈴木　章文



理論・構造研究系
　研究系長　窪薗　晴夫（教授）
時空間変異研究系
　研究系長　木部　暢子（教授）
言語資源研究系
　研究系長　前川喜久雄（教授）
言語対照研究系
　研究系長　角田　太作（教授）

研究情報資料センター
　センター長　横山　詔一（教授）
コーパス開発センター
　センター長　前川喜久雄（教授）
日本語教育研究・情報センター
　センター長　影山　太郎（所長）（兼）

総務課
　課長　原田英一郎
財務課
　課長　矢野　耕一
研究推進課
　課長　田保橋　良

（2）運営組織

運営会議（2009 年度～2011 年度）

（外部委員）

梶　　茂樹　　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
工藤眞由美　　大阪大学大学院文学研究科教授
斎藤　　衛　　南山大学人文学部教授 / 言語学研究センター長
柴谷　方良　　米国 ライス大学 Deedee McMurtry Professor of the Humanities
砂川有里子　　筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
月本　雅幸　　東京大学大学院人文社会系研究科教授
東倉　洋一　　国立情報学研究所教授 / 副所長
仁田　義雄　　大阪大学大学院言語文化研究科教授
日比谷潤子　　国際基督教大学教授 / 学務副学長

（内部委員）

相澤　正夫　　副所長 / 時空間変異研究系教授
井上　　優　　言語対照研究系教授（～ 2011 年 3 月 31 日）
大西拓一郎　　時空間変異研究系教授（～ 2012 年 3 月 31 日）
木部　暢子　　時空間変異研究系客員教授（2010 年 4 月 1 日　時空間変異研究系長就任）
窪薗　晴夫　　理論・構造研究系客員教授（2010 年 4 月 1 日　理論・構造研究系長就任）
迫田久美子　　日本語教育研究・情報センター客員教授（2011 年 10 月 1 日～）
　　（2012 年 4 月 1 日　日本語教育研究・情報センター長就任予定）
角田　太作　　言語対照研究系長（～ 2012 年 3 月 31 日）
前川喜久雄　　言語資源研究系長 / コーパス開発センター長
横山　詔一　　理論・構造研究系教授 / 研究情報資料センター長

任期：2009 年 10 月 1 日～ 2011 年 9 月 30 日（2 年間）
任期：2011 年 10 月 1 日～ 2013 年 9 月 30 日（2 年間）

外部評価委員会（2009 年度～2011 年度）

板橋　秀一　　国立情報学研究所特任教授 / 筑波大学名誉教授
久野マリ子　　國學院大學文学部教授
郡司　隆男　　神戸松蔭女子学院大学学長
林　　徹　　東京大学大学院人文社会系研究科教授
廣瀬　正宜　　名古屋外国語大学外国語学部教授

任期：2009 年 12 月 1 日～ 2011 年 12 月 31 日（2 年間）

所内委員会組織

2009 年度

連絡調整会議

＜専門委員会＞

○自己点検・評価委員会
○広報委員会
○施設・防災委員会

○知的財産委員会
○安全衛生管理委員会
○情報システム・セキュリティ委員会
○情報公開・個人情報保護委員会
○ハラスメント防止委員会
○研究倫理委員会

学術推進企画会議
＜専門委員会＞
○研究情報発信・普及委員会
○文献情報等電子化・発信委員会
○研究紀要等刊行委員会
○研究図書・研究資料等委員会
○若手研究者支援委員会

国際展開企画会議
＜専門委員会＞
○国際学術フォーラム準備委員会
○海外研究交流委員会

2010 年度

連絡調整会議
＜専門委員会＞
○自己点検・評価委員会
○広報委員会
○施設・防災委員会
○知的財産委員会
○情報システム・セキュリティ委員会
○情報公開・個人情報保護委員会
○ハラスメント防止委員会
○研究倫理委員会

学術推進・国際展開企画会議
＜専門委員会＞
○研究情報発信・普及委員会
○研究図書・研究資料等委員会
○若手研究者支援委員会
○国際学術フォーラム準備委員会
○海外研究交流委員会

●安全衛生管理委員会

2011 年度

連絡調整会議
＜専門委員会＞
○自己点検・評価委員会

○広報委員会
○施設・防災委員会
○知的財産委員会
○情報システム・セキュリティ委員会
○情報公開・個人情報保護委員会
○ハラスメント防止委員会
○研究倫理委員会

学術推進・国際展開企画会議

＜専門委員会＞

○国語研プロジェクトレビュー編集委員会
○国立国語研究所論集編集委員会
○研究情報発信・普及委員会
○研究図書・研究資料等委員会
○若手研究者支援委員会
○海外研究交流委員会

NINJAL プログラム委員会

＜プログラム＞

・NINJAL 国際シンポジウム
・NINJAL コロキウム
・NINJAL サロン
・NINAJL チュートリアル
・NINJAL フォーラム
・NINJAL 職業発見プログラム
・NINJAL ジュニアプログラム

●安全衛生管理委員会

（3）構成員

＜2009 年度＞

所長

影山　太郎　　言語学，形態論，語彙意味論，統語論

専任教員

○理論構造研究系

影山　太郎（所長）（兼任）

教授

横山　詔一　　認知科学，心理統計，日本語学

ティモシー・バンス（Timothy Vance）　言語学，音声学，音韻論，表記法

准教授

小磯　花絵　　コーパス言語学，談話分析，認知科学

高田　智和　　日本語学，国語学，文献学，文字・標記，漢字情報処理

助教

三井　はるみ　　日本語学，社会言語学，方言文法

森　篤嗣　　日本語学，国語科教育，日本語教育

○時空間変異研究系

教授

相澤　正夫　　社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論

大西　拓一郎　　言語学，日本語学

准教授

尾崎　喜光　　言語学，日本語学

熊谷　康雄　　言語学，日本語学

井上　文子　　言語学，日本語学，方言学，社会言語学

朝日　祥之　　言語学，日本語学，日本語教育

助教

新野　直哉　　言語学，日本語学

齋藤　達哉　　言語学，日本語学

○言語資源研究系

教授

前川　喜久雄　　音声学 , 言語資源学

准教授

山崎　誠　　言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

田中　牧郎　　言語学，日本語学

柏野　和佳子　　日本語学

小椋　秀樹　　日本語学

小木曽　智信　　日本語学，自然言語処理

助教

山口　昌也　　情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学
丸山　岳彦　　言語学，日本語学，コーパス日本語学

○言語対照研究系

教授

角田　太作　　言語学
井上　優　　言語学，日本語学，日本語教育

准教授

宇佐美　洋　　日本語教育，評価論，言語能力論
プラシャント・パルデシ（Prashant Pardeshi）　言語学，言語類型論，対照言語学

○研究資料情報センター

教授（兼任）

横山　詔一

○コーパス開発センター

教授（兼任）

前川　喜久雄

○日本語教育研究・情報センター

影山　太郎（所長）（兼任）

研究員

島村　直己　　言語教育，教育史，教育心理学，教育社会学
金田　智子　　言語学，教育学
野山　広　　日本語学，日本語教育
福永　由佳　　日本語教育学，社会言語学，リテラシー，バイリンガリズム

客員教員（2009 年度在籍者）

客員教授

［理論・構造研究系］

窪薗　晴夫　　神戸大学教授
朱　京偉　　北京外国語大学教授
迫田　久美子　　広島大学教授

［時空間変異研究系］

木部　暢子　　鹿児島大学教授
真田　信治　　奈良大学教授
松森　晶子　　日本女子大学教授

［言語資源研究系］

近藤　泰弘　　青山学院大学教授

［言語対照研究系］

アンドレイ・マルチュウコフ（Andrej Malchukov）　マックスプランク研究所博士研究員

［日本語教育研究・情報センター］
迫田　久美子　　広島大学教授（理論・構造研究系客員教授と兼任）

外来研究員

Shishir BHATTACHARJA（日本学術振興会外国人特別研究員）　受入教員：井上　優
「文法と形態論における複合語形成の位置づけ」（2009.10 ～ 2010.11）
Atay AYSEGUL（アンカラ大学（トルコ）助手）　受入教員：井上　優
「日本語のタ形とトルコ語の過去形」（2009.10 ～ 2010.5）
邱　學瑾（国立台中技術学院（台湾）准教授）　受入教員：宇佐美　洋
「第二言語としての日本語の音韻処理の自動化」（2009.10 ～ 2010.9）
玉　栄（内蒙古大学（中国）准教授）　受入教員：前川　喜久雄
「現代モンゴル語話し言葉コーパスの構築」（2009.10 ～ 2010.9）

＜2010 年度＞

所長

影山　太郎　　言語学，形態論，語彙意味論，統語論

専任教員

○理論・構造研究系

教授
窪薗　晴夫　　言語学，日本語学，音声学，音韻論，危機方言
横山　詔一　　認知科学，心理統計，日本語学
ティモシー・バンス（Timothy Vance）　言語学，音声学，音韻論，表記法
准教授
小磯　花絵　　コーパス言語学，談話分析，認知科学
高田　智和　　日本語学，国語学，文献学，文字・表記，漢字情報処理
助教
三井　はるみ　　日本語学，社会言語学，方言文法

○時空間変異研究系

教授
木部　暢子　　日本語学，方言学，音声学，音韻論
相澤　正夫　　社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論
大西　拓一郎　　言語学，日本語学
准教授
熊谷　康雄　　言語学，日本語学
井上　文子　　言語学，日本語学，方言学，社会言語学
朝日　祥之　　社会言語学，言語学，日本語学
助教
新野　直哉　　言語学，日本語学

○言語資源研究系

教授

前川　喜久雄　　音声学，言語資源学

准教授

山崎　誠　　言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

田中　牧郎　　言語学，日本語学

柏野　和佳子　　日本語学

小椋　秀樹　　日本語学

小木曽　智信　　日本語学，自然言語処理

助教

山口　昌也　　情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学

丸山　岳彦　　言語学，日本語学，コーパス日本語学

○言語対照研究系

教授

角田　太作　　言語学

井上　優　　言語学，日本語学，日本語教育

准教授

プラシャント・パルデシ（Prashant Pardeshi）　言語学，言語類型論，対照言語学

○研究情報資料センター

教授（兼任）

横山　詔一

○コーパス開発センター

教授（兼任）

前川　喜久雄

○日本語教育研究・情報センター

影山　太郎（所長）（兼任）

准教授

野山　広　　日本語学，日本語教育

宇佐美　洋　　日本語教育，評価論，言語能力論

森　篤嗣　　日本語学，国語科教育，日本語教育

研究員

島村　直己　　言語教育，教育史，教育心理学，教育社会学

福永　由佳　　日本語教育学，社会言語学，リテラシー，バイリンガリズム

客員教員（2010 年度在籍者）

客員教授

［理論・構造研究系］

上野　善道　　東京大学名誉教授

益岡　隆志　　神戸市外国語大学教授
朱　京偉　　北京外国語大学教授
ジョン・ホイットマン（John Whitman）　コーネル大学教授
アーミン・メスター（Armin Mester）　カルフォルニア大学サンタクルーズ校教授
迫田　久美子　　広島大学教授（日本語教育研究・情報センター客員教授と兼任）
［時空間変異研究系］
真田　信治　　奈良大学教授
松森　晶子　　日本女子大学教授
田窪　行則　　京都大学教授
狩俣　繁久　　琉球大学教授
［言語資源研究系］
近藤　泰弘　　青山学院大学教授
［言語対照研究系］
アンドレイ・マルチュウコフ（Andrej Malchukov）　マックスプランク研究所博士研究員
［日本語教育研究・情報センター］
迫田　久美子　　広島大学教授
ウェズリー・ヤコブセン（Wesley Jacobsen）　ハーバード大学教授
客員准教授
［時空間変異研究系］
青木　博史　　九州大学准教授

プロジェクト PD フェロー（2010 年度在籍者）
神崎　享子　　理論・構造研究系
儀利古　幹雄　　理論・構造研究系
平山　真奈美　　理論・構造研究系
下地　賀代子　　時空間変異研究系

外来研究員
曹　婧（北京日本語学研究センター（中国）大学院生）　受入教員：田中　牧郎
「国会会議録における外来語の使用状況に関する一考察」（2010.4 ～ 2010.8）
鄧　牧（北京外国語大学（中国）大学院生）　受入教員：田中　牧郎
「近代新語辞典で見る漢語と外来語のはりあい関係」（2010.7 ～ 2010.9）
Alan H. Kim（南イリノイ大学（アメリカ）教授）　受入教員：角田　太作
「日本語と韓国語の敬語の比較」（2010.8 ～ 2010.11）
黄　賢暻（日本学術振興会外国人特別研究員）　受入教員：窪薗　晴夫
「日本語と韓国語のプロソティーに関する対照研究」（2010.9 ～ 2012.9）
Stephen Wright HORN（オックスフォード大学（イギリス）・PD 研究員）　受入教員：田中　牧郎
「Tagging noun phrases for grammatical role in a pre-modern Japanese languages corpus」（2011.3 ～ 2011.5）
玉　栄（内蒙古大学（中国）准教授）　受入教員：前川　喜久雄
「モンゴル語のコーパスの構築」（2011.2 ～ 2011.4）
Kerri RUSSELL（オックスフォード大学（イギリス）PD 研究員）　受入教員：田中　牧郎

「Lexical Representation of Argument Realization Patters in Pre-modern Japanese」（2011.3 ～ 2011.5）

＜2011 年度＞

所長

影山　太郎　　言語学，意味論，形態論，統語論

専任教員・特任教員

○理論・構造研究系

教授

窪薗　晴夫　　音韻論，音声学，社会言語学

横山　詔一　　認知科学，社会心理学，実験心理学

ティモシー・バンス（Timothy Vance）　言語学，音声学，音韻論，表記法

准教授

小磯　花絵　　談話分析，コーパス言語学，認知科学

高田　智和　　国語学（文字・表記），漢字情報処理，日本語学

助教

三井　はるみ　　日本語学

○時空間変異研究系

教授

木部　暢子　　日本語学，方言学，音韻論，音声学

相澤　正夫　　社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論

大西　拓一郎　　日本語学，方言学，言語地理学

准教授

熊谷　康雄　　言語学，言語地理学，計量的方言研究

井上　文子　　方言学，社会言語学

新野　直哉　　日本語学（近現代の言語変化）

朝日　祥之　　社会言語学，言語学，日本語学

○言語資源研究系

教授

前川　喜久雄　　音声学，言語資源学

准教授

山崎　誠　　計量日本語学，語彙論，コーパス，シソーラス

田中　牧郎　　語彙論，日本語史，コーパス，言語問題

柏野　和佳子　　日本語学，語彙・意味

小椋　秀樹　　日本語学

小木曽　智信　　国語学，日本語学，コーパス，自然言語処理

山口　昌也　　自然言語処理，教育工学

丸山　岳彦　　言語学，コーパス日本語学，文法論，意味論

○言語対照研究系

教授

角田　太作　　言語学，豪州原住民語学，言語類型論，危機言語

ジョン・ホイットマン（John Whitman）　言語学，歴史比較言語学，言語類型論，東洋言語学

プラシャント・パルデシ（Prashant Pardeshi）　言語類型論，対照言語学，日本語学

○研究情報資料センター

教授（兼任）

横山　詔一

○コーパス開発センター

教授（兼任）

前川　喜久雄

特任准教授

淺原　正幸　　自然言語処理，計算言語学，コーパス言語学，心理言語学

○日本語教育研究・情報センター

影山　太郎（所長）（兼任）

准教授

野山　広　　日本語学，日本語教育

宇佐美　洋　　日本語教育，コミュニケーション論，評価論

研究員

島村　直己　　言語教育，教育史，教育心理学，教育社会学

福永　由佳　　日本語教育学，社会言語学，教育社会学

客員教員（2011 年度在籍者）

客員教授

［理論・構造研究系］

上野　善道　　東京大学名誉教授

益岡　隆志　　神戸市外国語大学教授

アーミン・メスター（Armin Mester）　カルフォルニア大学サンタクルーズ校教授

［時空間変異研究系］

真田　信治　　奈良大学教授

松森　晶子　　日本女子大学教授

田窪　行則　　京都大学教授

狩俣　繁久　　琉球大学教授

ビャーケ・フレレスビッグ（Bjarke Frellesvig）　オックスフォード大学教授

［言語資源研究系］

近藤　泰弘　　青山学院大学教授

傳　康晴　　千葉大学教授

［言語対照研究系］

ジョン・ホイットマン（John Whitman）　コーネル大学教授　（～ 2011.10）

［日本語教育研究・情報センター］
迫田　久美子　　広島大学教授
野田　尚史　　大阪府立大学教授
客員准教授
［時空間変異研究系］
青木　博史　　九州大学准教授
［言語対照研究系］
下地　理則　　群馬県立女子大学准教授
ハイコ・ナロック（Heiko Narrog）　東北大学准教授

プロジェクト PD フェロー（2011 年度在籍者）

神崎　享子　　理論・構造研究系
儀利古　幹雄　　理論・構造研究系
竹村　亜紀子　　理論・構造研究系
小川　晋史　　時空間変異研究系
長屋　尚典　　言語対照研究系

外来研究員

Polly SZATROWSKI（ミネソタ大学（アメリカ）教授）　受入教員：角田　太作
「Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English, Japanese and Wolof」（2011.5 ～ 2011.8）
永野　マドセン　泰子（国立イェーテボリ大学（スウェーデン）教授）　受入教員：窪薗　晴夫
「日本語のアクセントとイントネーションの分析」（2011.5 ～ 2011.9）
巴達瑪敖徳斯爾（内モンゴル大学（中国）モンゴル語研究所長）　受入教員：木部　暢子
「危機言語の保護と再活性化についての研究」（2011.10 ～ 2012.9）
Galina VOROBEVA（キルギス民族大学（キルギス）上級日本語講師）　受入教員：横山　詔一
「漢字字体の階層性構造の分析とそれにもとづく『千話一話漢字物語』漢字教材作成」（2011.10 ～ 2012.9）
黄　鈺涵（国立台湾大学（台湾）助理教授）　受入教員：迫田　久美子
「モダリティ表現の語用論的分析と習得研究」（2012.3 ～ 2012.8）

Ⅱ

共同研究と共同利用

Ⅱ 共同研究と共同利用

本章では，共同研究活動として，(1) 各種の共同研究プロジェクト，(2) 人間文化研究機構の連携研究等，および (3) 外部資金による研究をまとめるとともに，共同利用のための成果として (4) 研究所からの刊行物，(5) 2011 年度までに公開の各種コーパス・データベース，および (6) 研究成果の発信･普及のための国際シンポジウム，研究系の合同発表会，プロジェクトの発表会，コロキウム，サロンなどの催しを掲げる。

1 国語研の共同研究プロジェクト

第 2 期中期計画における国語研全体の研究課題は「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」である。これを達成するため，4 研究系と日本語教育研究・情報センターは，それぞれの総合研究テーマを定め，各種規模の共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは，プロジェクトリーダーを中心とし，国内外の共同研究員の参画によって成り立っており，研究系・センター間，プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。

研究課題「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」
各研究系・センターの総合研究テーマ

理論・構造研究系	日本語レキシコンの総合的研究
時空間変異研究系	日本語の地理的・社会的変異及び歴史的変化
言語資源研究系	現代語および歴史コーパスの構築と応用
言語対照研究系	世界諸言語との対照による日本語の言語類型論的特質の解明
日本語教育研究・情報センター	多文化共生社会における日本語教育研究

共同研究プロジェクトの類別と主要な成果

共同研究プロジェクトとして，基幹型（15 件），領域指定型（6 件），独創・発展型（7 件），萌芽・発掘型（9 件）の 4 タイプを実施した。それぞれのプロジェクトの主要な成果を次に掲げるが，専任教員については，より詳しい成果報告を第Ⅳ章「各所員の活動報告」で記載する。

【基幹型】15 件

基幹型プロジェクトは，国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで，日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。4 研究系の専任教授および客員教員のリーダーシップのもと，国内外の研究者・研究機関との協業により全国的，国際的レベルで展開している。

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	**所長**	**影山　太郎**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは，語彙の仕組みを，辞書における静的な項目列挙としてではなく，意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え，日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため，理論的分析だけでなく，外国語との比較，心理実験，歴史的変化，方言，コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを採る。具体的には，ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れるような現象として，(1) 動詞の自他交替と項の変化，(2) 動詞＋動詞型の複合動詞の意味的・統語的特性，(3) 事象表現と属性表現の対比における語彙と文法の係わり，(4) 複雑な語における意味と形のミスマッチや統語構造における語形成など形態論と意味論・統語論の相互関係，という 4 つの事項に着目し，これらを解明することで，日本語から世界に発信できるような一般理論を開発する。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

・プロジェクト内の班分けを「動詞の項交替」,「属性叙述」,「動詞＋動詞型複合動詞」,「語彙と意味論・統語論」に組み替え，日本語レキシコンに関する現代的課題に絞り込んで具体的成果を出せる体制を整備した。

・公開の研究発表会を 3 回，班ごとの打ち合わせ会議を 2 回開いた。そのうち，2010 年 7 月に国語研で開催したものは，全国的な研究集会である「形態論・レキシコンフォーラム」と連携したことにより，2 日間で延べ 150 名の参加を得た。

・PD フェローを 1 名雇用し，データベースの作成やプロジェクト独自の HP 公開に取りかかった。

＜特に成果があがった点等＞

・各班において，リーダー及び共同研究者は本プロジェクトに関連する論文を国内外のジャーナル及び海外の国際会議で発表した。

・本プロジェクトの「動詞の項交替」班が中心となって，ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所とが研究所レベルでの研究協力を行うことを決定し，共同研究を開始した。

《2011 年度の主要な成果》

発表会・学会シンポジウムの開催，成果の一部の刊行，次年度に向けての出版計画等において，当初計画通り，あるいはそれを若干上回ることができた。具体的には次の項目にまとめられる。

①国際シンポジウム・学会シンポジウム

ドイツ・Max Planck 研究所との連携による動詞クラスの国際シンポジウム（2011/4，ライプチヒ），日本言語学会共催による公開シンポジウム（2011/6，日本大学），Morphology & Lexicon Forum との共同開催による研究発表会（2011/9，大阪大学），被災地支援のための院生発表を含む研究発表会（2011/12，関西学院大学）を開催した。

②被災地支援のための院生発表を含む通常発表会（2011/12，関西学院大学），理論・構造研究系合同発表会および付随する通常発表会（2012/2，国語研）を開き，発表内容・参加者・国際性・開催地域においてバラエティを持つことができた。

③出版物（予定を含む）

図書として，日本言語学会の公開シンポジウムをベースとした論文集（影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版，2012/3），レキシコン研究の入門書（影山太郎編『名詞の意味と構文』大修館書店，2011/11），影山太郎・沈力編『日中理論言語学の新展望』（全 3 巻，くろしお出版，2011-2012）を刊行ないし刊行予定。

論文はComrie & Malchukov (eds.) *Valency Classes in the World's Languages (Mouton de Gruyter), Journal of Japanese Linguistics, Japanese/Korean Linguistics 20, Cognitive Linguistics* など，国内外で刊行（または刊行予定）。

参加機関名	茨城大学，愛媛大学，岡山大学，九州大学，群馬大学，慶応義塾大学，甲南大学，神戸市外国語大学，神戸大学，大阪大学，筑波大学，東京大学，東北大学，同志社大学，富山大学，名古屋大学，北海道大学，北京外国語大学，インディアナ大学，ハーバード大学，バーミンガム大学
共同研究員数	33 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語レキシコンの音韻特性	**理論・構造研究系教授**	**窪薗　晴夫**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

本研究は促音とアクセントの 2 つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し，世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究員として参画してもらうことにより，通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で，時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し，また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが，本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより，日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを，音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域（音声学，音韻論，国語史，言語獲得，日本語教育）の専門家を集め共同研究を推進する。

アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより，（ｉ）日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究，類型論研究にどのような知見を与えるか，（ii）逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

・共同研究者を 28 名に増やしたことに加え，2 回の公開研究発表会（6 月，8 月，10 月）および 2 回の国際シンポジウム（12 月のアクセントシンポジウム，1 月の促音シンポジウム）を開催したことにより，国内外に研究者ネットワークを形成した。

・上記の公開研究発表会と国際シンポジウムにおいて延べ 350 名の参加者を得，合計 67 件の研究発表を実施した。

・このほか，若手研究者の養成，研究成果の公開・発信についても研究計画を上回る成果をあげることができた。

＜特に成果があがった点等＞

①国内外の専門家を多数招いて国際シンポジウムを 2 回開催した。これにより，日本語の音韻構造を通言語的な視点からより深く考察することができ，同時に国際的な研究者ネットワークの形成，若手研究者の育成も推進することができた。

②研究発表会や国際シンポジウムを他のプロジェクトや他の組織（学会・研究会，大学）と共同開催することにより，研究ネットワークをさらに広げることができた。

③若手研究者養成のため，PD フェロー（2 名）を雇用した。また研究発表会と国際シンポジウムへ多数の若手研究者の参加を可能にし，研究発表の場を提供した。

④プロジェクト独自のホームページを開設し，研究発表会や国際シンポジウムの情報を発信した。

⑤ 2 年後のウェブ公開に向けて方言資料のデジタル化と文献リスト（Classified bibliography）の作成に着手した。

《2011 年度の主要な成果》

プロジェクトのテーマであるアクセントと促音を中心に，「日本語レキシコンの音韻特性」について公開の研究発表会を合計 6 回（計 14 日）実施し，合計 95 件の研究発表（ポスター発表含む）を行うことができた。このうち海外からの発表が合計 35 件（招聘研究者 8 名分を含む），若手研究者の発表が 32 件（うち 23 件に対し旅費の支援）であった。とりわけバンス班と合同で行った国際シンポジウム ICPP 2011 では国内外から 150 名を超える参加者を得て，研究成果の発信，国際的研究の推進，若手研究者の養成などの点で予想以上の成果を収めることができた。

国際的な研究成果の発信という点では，これまでの成果を複数の国際会議で口頭発表しただけでなく，海外の研究誌 *The Linguistic Review* に方言アクセントの論文が採択・掲載され，また前年度開催した国際会議（ISAT 2010, GemCon 2011）の主要論文（合計 14 本）をとりまとめ国際誌 *Lingua* と *Journal of East Asian Linguistics* の Special issue に投稿した。

成果の社会発信においては，プロジェクト HP（英語）で更新する作業に加え，甑島方言アクセントのデジタル資料とアクセント・促音関係の文献資料（Classified Bibliography）の公開に向け，前年度に着手した編集作業をほぼ終えることができた。

参加機関名	青山学院大学，大妻女子大学，大阪大学，大阪保健医療大学，金沢大学，京都産業大学，京都大学，九州大学，神戸市外国語大学，神戸大学，昭和音楽大学，筑波大学，東京大学，東京大学大学院，同志社大学，日本女子大学，広島大学，北海道大学，北星学園大学，松山大学，室蘭工業大学，法政大学，三重大学，明海大学，立命館大学，早稲田大学，理化学研究所，情報通信研究機構，カリフォルニア大学
共同研究員数	31 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語レキシコン ―連濁事典の編纂	**理論・構造研究系教授**	**Timothy J.Vance**	2010.11-2014.3

《研究目的及び特色》

本プロジェクトの最終目的は，連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は，(1) 連濁の由来と史的変化，(2) ライマンの法則，(3) 右枝条件，(4) 連濁と形態・意味構造，(5) 連濁と語彙層，(6) 他の音韻交替と連濁の相互作用，(7) アクセントと連濁の相互作用，(8) 連濁と表記法，(9) 連濁に関する心理言語学研究，(10) 方言の連濁，(11) 連濁と日本語学習，(12) 連濁研究史，等々である。事典には，包括的な参考文献一覧も含める。

本共同研究は，定期的に開催する研究発表会と国際シンポジウムを中心に推進する。研究発表の内容をそのまま事典に取り入れるわけではなく，スタイルの統一性を保証するために，プロジェクト・リーダーは各寄稿者と協力する。なるべく多くの言語学者に本プロジェクトの成果が利用できるように，日英対訳の形で出版する予定である。連濁研究に役立つ語彙のデータベースも作成し，公開する。

《2011 年度の主要な成果》

プロジェクト HP を開設し，連濁研究に関する情報を発信した。さらに研究者間のネットワーク構築及びプロジェクトの組織作りを順調に推進してきた。共同研究発表会を 2 回（共同研究員発表者 9 名），国際シンポジウムを 1 回（共同研究員発表者 5 名）開催し，それぞれの研究成果を積極的に発信した。

また，総合地球環境学研究所の「自然と文化」プロジェクト及び会津大学の福島方言プロジェクトとの連携を開始したことにより，連濁の方言差に関する研究が進展した。

参加機関名	会津大学，大同大学，千葉大学，山形大学，名古屋大学，神戸市外国語大学，山口大学，金沢大学，文京学院大学，国際教養大学，カリフォルニア大学，シェフィールド大学，モンタナ大学，マカオ大学，ラトガース大学
共同研究員数	20 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	**理論・構造研究系教授**	**横山　詔一**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

日本語の文字表記について，文字環境（文字レキシコンを含む）のモデルを作成する。そのモデルは，日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか，日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また，本プロジェクトが提唱する文字環境モデルは，音声コミュニケーションに関する研究にも利用できる。具体的には，山形県鶴岡市で 1950 年から約 20 年間隔で 3 回行われた共通語化の縦断調査や，愛知県岡崎市で 1951 年から実施されてきた敬語の経年調査などの大規模データベースを活用しながら，時空間変異研究系と連携して言語変化の新たな理論を導出する。とりわけ，山形県

鶴岡市の共通語化研究については，統計数理研究所のプロジェクトと連動しながらデータ整理を進め，言語変化理論の検証に必要な統計解析を可能にするための基盤を整備する。さらに，米国シアトル市で 1956 年から 7 年間隔で継続されている「知能の生涯変化」に関する大規模な縦断研究との比較もおこない，言語習得研究や老人学研究にも貢献できる言語変化研究の方法論を確立する。このような学術的挑戦は，単に文字論だけではなく，社会言語科学や計量言語学にも新たな発展をもたらし，既存の分野の枠を超えた学際領域の創出につながる。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

国語研は山形県鶴岡市を定点観測フィールドとして「地域社会における方言の共通語化」に関する大規模な調査を 1950 年から経年的に約 40 年間にわたって 3 回実施してきた。この調査対象となった 1,723 名のインフォーマントの音声共通語化データを整理し，データベースを完成させた。

(1) インフォーマントを住民基本台帳からランダム抽出して毎回 400 名ほど調査したデータと，同一人物を数十年間にわたって追跡した調査データを用いて，共通語化の実態を解明する分析を開始した。そこでは，文字環境のモデル化に関する先行研究で導出された理論を基礎として，愛知県岡崎市での敬語意識変化に関する予測モデルを応用する形で共通語化予測の研究を展開した。

＜特に成果があがった点等＞

(1) 鶴岡調査と基本的に同じ調査デザインは，加齢医学，老年学，生涯発達心理学，認知科学などの分野では世界的に注目されており，コーホート系列法と呼ばれる。鶴岡調査は世界で最初にスタートしたコーホート系列法による調査であり，その知見は日本語学や言語学の枠を超えて，統計科学，認知科学など幅広い分野に貢献する貴重なものとして期待される。

(2) 愛知県岡崎市における敬語・敬語意識の経年調査のデータベース整備をさらに進め，井上史雄教授（明海大）がリーダーを務める領域指定型共同研究「敬語と敬語意識の半世紀：愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に」プロジェクトでも活用できる準備を完了した。

《2011 年度の主要な成果》

統計数理研究所と共同研究の連携協定を締結したうえで，山形県鶴岡市において第 4 回の共通語化調査を実施した。個別面接法で収集したデータは，ランダム・サンプルが約 400 名，パネル・サンプルが約 350 名に達した。プロジェクトをより強力に推進するため，岡崎敬語調査プロジェクト（リーダーは井上史雄氏）との連携を深め，7 月と 8 月に合同で研究発表会を実施した。

第 4 回鶴岡調査については，朝日新聞，読売新聞などによる報道のほか，NHK 山形放送局によるテレビのニュースで延べ 7 回にわたって放送された。さらに，NHK ラジオ全国放送『ラジオ深夜便』の「くらしの中のことば」コーナーでは，共同研究員の佐藤亮一氏が鶴岡市の調査本部から生中継で出演し，鶴岡調査の意義などを解説した。

参加機関名	愛知教育大学，京都工芸繊維大学，神戸松蔭女子学院大学，帝塚山大学，ノートルダム清心女子大学，弘前大学，法政大学，明海大学，統計数理研究所，キルギス国立民族大学，ペンシルベニア大学，ヴィクトリア大学
共同研究員数	24 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	**時空間変異研究系教授**	**木部　暢子**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

①各共同研究者がプロジェクト研究発表会，学会等で研究成果の発表を行った。また，プロジェクト研究発表会を「語彙の音韻特性」プロジェクトと共同開催とすることにより，研究の幅を広げた。

② 2010 年 9 月に鹿児島県喜界島方言（奄美語）の合同調査を実施した。

＜特に成果があがった点等＞

① 9 月に鹿児島県喜界島で合同調査を行った。共同研究員 21 名，若手研究者 14 名（学振 PD3 名，大学院生 11 名），合計 35 名が参加し，合同で調査を実施した。また，方言の調査・記述・分析に関する意見交換を行った。

② 9 月に喜界町において，市民向けの「喜界町文化講演会」，および高校生生向けの「喜界高校キャリアアップガイダンス」を開催した。

③ 2010 年 11 月より 2013 年 2 月まで，調査参加者が喜界町の広報誌「きかい」にリレーでエッセイを連載した。

④国立国語研究所第 3 回国際学術フォーラム「方言の多様性を守るために」を開催した。来場者 224 名。その講演内容を NINJAL フォーラムシリーズ『日本の方言の多様性を守るために』（2011 年 3 月）として刊行した。

《2011 年度の主要な成果》

① 2011 年 9 月に沖縄県宮古島において合同調査を行った。共同研究員 14 名，大学院生 12 名，若手研究者 13 名，合計 39 名が参加し，4 日間で 45 名のインフォーマントの調査を行った。

②『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究―喜界島方言調査報告書』（国立国語研究所共同研究報告 11-01，2011 年 8 月）を刊行した。これは，2010 年 9 月に実施した鹿児島県喜界島方言の合同調査の報告書で，内容は，調査の概要，喜界島方言の概要（音韻・アクセント・文法），喜界島方言の特徴（論文 3 編），喜界島方言調査データ集，文献一覧よりなる。

③『消滅危機方言の調査･保存のための総合的研究 仮名文字に表記による喜界島方言調査データ集』（国立国語研究所共同研究報告 11-02，2012 年 3 月）を刊行した。これは，調査データを地元の

人に活用してもらうために，上記報告書の語彙，文法データの音声記号表記をかな表記に換えたものである。

④「若手研究者育成のための危機方言調査支援プログラム」事業を実施した。これは，危機方言のフィールド調査研究をめざす若手研究者を育成するための事業で，プログラムの内容は，次のとおりである。(1) 応募者に対する方言（言語）の総合的記述に関する集中講義（下地理則担当），(2) 方言調査の指導と調査に係る経費の補助，(3) 当該方言の簡易文法の作成。集中講義には 6 名が参加，そのうち 5 名に対して調査経費の補助と調査の指導を行った。

⑤研究成果の発表を行った。主な発表は，次のとおりである。

・『日本語の研究』7-4（2011 年 10 月，日本語学会）の特集「琉球語を見る／琉球語から見る」に本プロジェクトの共同研究員 4 名，プロジェクト PD フェロー 1 名が論文を発表。

・日本島嶼学会招待講演「しまの方言を守るために」（徳之島中央公民館，2011 年 9 月 10 日）。

参加機関名	岡山大学，沖縄国際大学，金沢大学，九州大学，京都大学，首都大学東京，千葉大学，一橋大学，広島大学，別府大学，日本女子大学，琉球大学，オークランド大学，フランス国立科学研究所
共同研究員数	24 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	**時空間変異研究系教授**	**相澤　正夫**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

この共同研究は，20 世紀前半から 21 世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性，すなわち「動態」を，従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明することを目的とする。あわせて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。

国立国語研究所・時空間変異研究系のプロジェクトとして，「時間的変異」と「社会的変異」の双方の観点からサブテーマを設定し，変化して止まない現代日本語の研究に，従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓する。そのため，近接領域で類似の言語現象を研究していながら，従来は一堂に会して議論をする機会の少なかった国語学，日本語学，言語学，社会言語学など様々な背景を持つ所内外の研究者に，情報交換や相互啓発のための「場」を提供する。

《2010 年度の主要な成果》

1. 現代日本語の動態研究の分野における国語学と言語学，文献派とフィールド派の交流・融合を意図して，個別には成果をあげていながら，これまで共同研究・共同討議の場を持たなかった有力研究者に声をかけ，3 回の公開研究発表会の開催を通して共同研究態勢を整えた。
2. 今後，調査研究を進める際の観点として，ほぼ当初の想定どおり，次の 4 点が有効であるとの見通しが立てられた。①言語変化の先端現象の把握，②多元的分析手法の開発，③新規資料の発掘・分析，④言語問題の解決に資する応用研究。
3. メンバー間の共同利用が可能な基礎資料として，①世論調査型の「全国規模の意識調査」（2009 年度 1 回分，2010 年度 2 回分）のデータ，②昭和戦前期を中心とする「SP 盤貴重音源資料」が

得られた。予算規模が比較的大きかったことにより，全国規模の意識調査の委託実施，高価な貴重音源資料の購入が可能となった。これにより研究基盤作りが大きく進展した。

《2011 年度の主要な成果》

1. プロジェクト本格始動後の 4 年計画 2 年次として，目標に掲げた 4 つの観点，①言語変化の先端現象の把握，②多元的分析手法の開発，③新規資料の発掘・分析，④言語問題の解決に資する応用研究，それぞれの研究成果について，4 回の公開研究発表会において前年度に引き続き中間発表を行った。多様な専門的背景をもつ研究者による意見交換によって，建設的な方向への修正・発展が行われた。
2. 「全国規模の意識調査」については，各自のテーマに関連して効果的に実施・活用することにしているが，今年度もコーパス調査との併用による多角的な分析が見込まれる項目を選定して，2 回実施した。また，2010 年度に実施した「方言意識に関する全国調査」については，結果の分析が迅速に行われ，得られた新知見が 2011 年度前半に論文，著書として公表された。
3. 「SP 盤貴重音源資料」の文字化作業を精力的に進め，作業手順と役割分担の工夫によって，予定よりも早く年度内に全体（約 18.5 時間分，約 40 万字相当）を完了することができた。
4. 社会貢献面については，プロジェクトの成果が反映されたメンバーの著書（田中ゆかり『「方言コスプレ」の時代 ―ニセ関西弁から龍馬語まで』，岩波書店）が，全国紙 2 紙の書評欄ほかで取り上げられ，関連記事も多数各紙に掲載された。また，「病院の言葉」を分かりやすくする提案に関連する普及活動も，医療関係団体等の求めに応じて，言語問題の解決に資する応用研究の成果も生かしながら活発に行った（担当：田中牧郎）。

参加機関名	日本大学，大阪大学，神戸松蔭女子学院大学，ノートルダム清心女子大学，早稲田大学，横浜国立大学，立命館大学，NHK 放送文化研究所，統計数理研究所
共同研究員数	11 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
方言の形成過程解明のための全国方言調査	**時空間変異研究系教授**	**大西拓一郎**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

本研究は，日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に，全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては，言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を 50 年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方，大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は，中心から分布が広がると考える「方言周圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり，現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する，世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。

《2010 年度の主要な成果》
＜プロジェクト全体の進捗状況等＞
・全国 100 地点を調査することで，全国調査の完遂に向けて，順調に進捗した。
・2009 年度に行った「事前研究」の内容を 3 種類の報告書にすることで，成果の具体化･データベース化した。
＜特に成果があがった点等＞
・日本語学会 2010 年度秋季大会でのワークショップ「ことばの変化と伝播」の企画・開催により，「方言分布の形成過程解明」に関する議論を開始させた。
《2011 年度の主要な成果》
ほぼ目標に近い地点数の調査を達成し，分布形成の過程に関する仮説設定と検証を開始することができた。中間段階ではあるが，従来考えられてきた周圏論的変化とは異なる分布変化が見えてきていることが，第 14 回国際方言学方法論学会での発表，テーマ設定公開共同研究発表会「方言周圏論の再検証 ―近畿を中心に―」（2011 年 12 月）をとおして検討できた。なお，後者の公開研究発表会には共同研究者 30 名のほか，大学院生約 15 名を含む計 50 名が参加した。東日本大震災にあたっては，共同研究者とともに被災状況の把握につとめ，調査地点の再検討を行った。調査結果は入力作業・校正をともなうデータベース化を進め，プロジェクトメンバー用 web サイトを通した共同研究者・調査協力者どうしのデータ共有化も開始した。

参加機関名	岩手県立大学，岡山大学，金沢大学，関西大学，共愛学園前橋国際大学，岐阜大学，熊本大学，群馬県立女子大学，県立広島大学，呉工業高等専門学校，広島大学，弘前学院大学，甲南大学，高知大学，佐賀大学，滋賀大学，鹿児島大学，松山東雲女子大学，信州大学，新潟県立大学，神戸女子大学，神戸松蔭女子学院大学，神田外語大学，椙山女学園大学，千葉大学，大阪大学，大分大学，東北大学，徳島大学，日本大学，富山大学，福岡教育大学，福岡女学院大学，福島大学，文教大学，琉球大学，仙台高等専門学校
共同研究員数	47 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語変種とクレオールの形成過程	**時空間変異研究系客員教授**	**真田　信治**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》
アジア･太平洋の各地には，戦前･戦中に日本語を習得し，現在もその日本語能力を維持する人々が数多く存在する。特に台湾や旧南洋群島では，母語を異にする人々の間でのリンガフランカとして用いられ続けている。また，台湾宜蘭県の一部には，日本語を上層とするクレオール語が形成されている。本プロジェクトでは，これらの地域（台湾・パラオ・マリアナ諸島・サハリンなど）を対象としたフィールドワークによって，現地での日本語変種，及びクレオール語の記述・記録を行い，海外における日本語を交えた異言語接触による言語変種の形成過程，ならびにそこに介在した社会的背景を究明する。なお，台湾宜蘭県における「宜蘭クレオール（Yilan Creole）」は，各世代を通して使用されているが，それを除けば，各地の日本語話者は現在そのほとんどが 75 歳以上の高齢に達しており，その日本語運用に関するデータの蓄積と記述は，まさに急務である。

《2010 年度の主要な成果》
＜プロジェクト全体の進捗状況等＞
・各地でフィールドワークを実施して，収録したデータを大量に蓄積し，個々に分析を進めている。研究プロジェクトは全体として予定通り順調に進行している。
＜特に成果があがった点等＞
・旧南洋群島に関しては，データ集として『ミクロネシア･サイパン残存日本語の談話データ』（2011 年 3 月，国立国語研究所）を刊行した。これは，ポナペ島，トラック島，及びサイパン島における日本語談話の文字化資料である。また，台湾の宜蘭クレオールに関する英語論文を公刊した。
《2011 年度の主要な成果》
・アジア・太平洋各地での現地調査は順調に進んでいる。現在までに蓄積されている成果を「海外の日本語シリーズ」（単行本）として順次公刊する計画に関しては，本年度，『台湾に渡った日本語の現在 ―リンガフランカとしての姿―』（2011 年 9 月，明治書院）を出版した。続けて，マリアナ篇，サハリン篇を刊行する予定である。また，データ集として，本年度は，『サハリンに残存する日本語の談話データ』（2012 年 2 月，国立国語研究所）を刊行した。これは，サハリン（樺太）における朝鮮系ロシア人を主たる対象とした日本語談話の文字化資料である。

参加機関名	京都工芸繊維大学，首都大学東京，天理大学，奈良大学，延辺大学，国立東華大学
共同研究員数	7 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
コーパスアノテーションの基礎研究	**言語資源研究系 教授**	**前川喜久雄**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》
共同利用研国立国語研究所においては，コーパスの開発作業はコーパス開発センターにおいて実施するが，そのための基礎研究とコーパスを利用した応用研究は言語資源研究系において実施する。本研究では，コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行う。
先に述べたようにコーパスの価値は代表性とアノテーションの積として定まるが，日本語コーパスの場合，形態素よりも上位の階層に属するアノテーションに関する研究を進展させる必要がある。アノテーションは基本的には言語学の範疇に属する知識に立脚した作業であるが，我が国ではこれまで言語学者（日本語研究者）がコーパスのアノテーションに関与することが少なく，主に自然言語処理研究者の手によってアノテーションの研究が進められてきた。そのため，言語学の観点からすると，仕様に一貫性が欠けていたり，単位の斉一性に問題が生じていたりすることがあった。一方，言語学者の考案する「理論」は品詞分類のような具体的な問題まで含めて，現実の用例をどの程度まで説明しうるかが不明であることが多かった。
本研究の目的は，自然言語処理研究者と言語学者とが協力して，現代日本語を対象とする各種アノテーションの仕様を考案し，検討することにある。

《2010 年度の主要な成果》
＜プロジェクト全体の進捗状況等＞
今年度は特定領域研究の最終年度と重なったために，精力の過半を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築・公開準備に割いた。そのため共同研究会の開催実績が必ずしも十分ではなかった。
《2011 年度の主要な成果》
BCCWJ コアを共通データとした種々のアノテーション試行実験は順調に進展した。短単位に基づいた係り受け構造のアノテーションは，年度末に完了した。助動詞の用法のうち「れる･られる」の自動分類のためのデータも BCCWJ コアに対するラベリングを年度末に完了した。形態素情報の階層的表示（短単位と長単位の関係）の問題についても検討を開始しており，現在は BCCWJ コアに含まれる白書と Web のサンプルを対象として，ラベリング基準の整備を進めた。

参加機関名	東北大学，奈良先端科学技術大学院大学，東京工業大学，筑波大学，岡山大学，慶應義塾大学，京都大学，山梨大学，情報通信研究機構
共同研究員数	14 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
コーパス日本語学の創成	**言語資源研究系 教授**	**前川喜久雄**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》
日本語を対象としたコーパス言語学（コーパス日本語学）は，『日本語話し言葉コーパス』，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の構築によって研究インフラが整いつつあるが，一連のコーパスを徹底的に解析して，コーパス日本語学ならではの研究成果を挙げることは今後に残された課題である。本研究の目的は，各種コーパスを利用した定量的かつ実証的な日本語研究を幅広く推進して先進的な成果を得，それを学界に周知させることによって，日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることである。この点で本研究は科研費特定領域研究「日本語コーパス」の活動を戦略的に継承するものであり，一種の学会に相当する機能を提供することを目指している。
《2010 年度の主要な成果》
＜プロジェクト全体の進捗状況等＞
今年度は特定領域研究の最終年度と重なったために，精力の過半を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築･公開準備に割いた。そのため共同研究会の開催実績が必ずしも十分ではなかったが，実際には，音声対話 G においても語彙文法文体歴史 G においても，メンバー間の共同研究が自発的に始まっており，当初予想していたよりも順調な進捗状況である。
＜特に成果があがった点等＞
独法時代から引き継いだ『現代日本語書き言葉均衡コーパス』をほぼ予定どおりに当初計画で予定していた規模まで構築。
《2011 年度の主要な成果》
本プロジェクトは特定かつ個別的な研究課題の遂行を目指すものではなく，コーパスを利用した日本語研究全般の普及と振興を目指すものである。そのために最も重要な活動のひとつは「コーパス日本語学ワークショップ」の開催である。今年度は 54 件の応募があり，そのうち 20 件が共同研究者以外の研究発表であった。本プロジェクの活動が共同研究の枠を超えて社会的に認知されつつ

あると考える。ちなみに 2011 年 8 月には，震災により 2010 年度より繰り越した「BCCWJ 完成記念講演会」を開催し，招待講演 2 件を含む 37 件の発表･デモを行ったところ，290 名の参加者があった。

もうひとつの重要な課題は，いわゆる文系の研究者に対して先進的なコーパスの分析手法を普及させることである。これについては，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の形態論情報検索用ウェブインターフェースである『中納言』を無償公開するとともに，『中納言』による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』検索法の講習会を 3 回（NINJAL チュートリアル 2 回と所内講習会 1 回）開催した。また，萌芽・発掘型研究「会話の韻律機能に関する実証的研究」（代表者：小磯花絵）と協力して，『日本語話し言葉コーパス』の一部を RDB テーブル化し，RDB ソフトによる検索を可能とし，その講習会を 2 回開催した。その後，希望する共同研究員には RDB 検索用インターフェースソフトの購入をサポートした。

このような普及活動を実施するとととともに，従来からコーパスを使い慣れたメンバーには積極的に論文を発表するよう要請している。2010, 2011 両年度で学会誌に掲載された査読論文が 9 本あり，そのうち 1 本は国際的な学術誌に掲載され，他の 1 本が 2011 年度の日本音声学会優秀論文賞を受賞した。

参加機関名	愛知学院大学，愛知淑徳大学，大阪大学，千葉大学，広島大学，山形大学，神戸大学，早稲田大学，大東文化大学，筑波大学，東京学芸大学，東京女子大学，同志社女子大学，同志社大学，日本大学，法政大学，鳴門教育大学，理化学研究所，統計数理研究所
共同研究員数	34 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
通時コーパスの設計	**言語資源研究系 客員教授**	**近藤　泰弘**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

日本語の史的研究に用いることができる本格的な「通時コーパス」を構築する準備段階として，コーパスの設計にかかわる諸問題について研究する。①コーパスの対象に含める文献資料をどのようにして選定するか，②選定した資料をどのように電子化しどのような情報を付与するか，③古典テキストに対応した形態素解析をどのように行うかなど，通時コーパス設計のための重要問題を中心に，基礎的な研究を展開する。こうした研究は，日本語史上のいくつかの時点の主要資料についてコーパスを試作し，これを活用した日本語史研究を実践することを通して行う。また，コーパスの構築作業における他機関との連携の可能性を探り，コーパス公開のために不可欠な著作権処理の問題についての検討も行い，通時コーパスの構築・公開に向けた諸課題に見通しを付ける。

言語資源研究系の現代語コーパスにかかわる研究と連携を取り，コーパス開発センターで実施中の現代語コーパスの構築作業，著作権処理業務などとも関連付けて研究を進めていく。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

非常に順調に進捗している。古典語コーパスの作成というまったく新しいテーマについて，共同研究プロジェクトという体制がよく機能している。

古典語の総合的な通時コーパスの作成は，一個人でできるものではない。今回，多数の研究者の協力によって，着実な成果が得られる見通しがついた。

＜特に成果があがった点等＞

出版社との協力関係を維持し，コーパス作成について問題となる著作権問題についての見通しを得ることができたことは大きい成果であった。また，中古語のデータについての形態素解析におおよそのめどがたったことも重要である。

《2011 年度の主要な成果》

前年度から継続している平安時代語についての作業を進め，データベースの形で整備した。また，前年度の小学館への著作権交渉に引き続き，本年度は，近世語関係の大手出版社への著作権交渉を行い，近いうちに契約ができる可能性が高くなった。近世語のデータ入力も進行中である。今年度は 2 回の共同研究発表会を行い，うち 1 回は大阪大学において，オックスフォード大プロジェクトとの共催で行った。

研究成果の公表としては，独自ドメインの Web サイトを構築し公開した。また，本研究に関わる論文を相当数刊行した。

参加機関名	青山学院大学，群馬大学，恵泉女学園大学，埼玉大学，就実大学，千葉大学，東京外国語大学，東京工業大学，福井大学，国立情報学研究所，オックスフォード大学
共同研究員数	14 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
形容詞節と体言締め文：名詞の文法化	**言語対照研究系 教授**	**角田　太作**	2009.10-2012.3

《研究目的及び特色》

日本語の「太郎が東京に行く予定だ」や「外は雨が降っている模様だ」のように，「節の述語＋体言＋だ」が一つの複合的な述語を形成する文を角田太作（1996）は体言締め文と呼んだ。この構文は，従来，あまり研究されていない。本研究では，この構文について，（ⅰ）地理的分布，（ⅱ）意味と機能，（ⅲ）体言・名詞の文法化のプロセスなどを明らかにすることを目的とする。

《2010 年度の主要な成果》

2010 年度は，国内・海外の研究協力のネットワークが整ってきた。現地調査も行った。共同研究発表会を 4 回行い，のべ 12 人が発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

《2011 年度の主要な成果》

2011 年度は，体言締め文について各共同研究員が担当する言語のデータを収集し，分析を進めた。研究会を 5 回行い，合計 8 人が研究成果を発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

《特に成果があがった点等》

研究目的に沿って言語学的成果を整理すると次のようになる。（ⅰ）地理的分布については，20 言語（アジア，アフリカ）で当該構文が見つかった。（ⅱ）意味と機能に関しては，テンス，アスペクト，ムード，証拠性，スタイル，談話機能などがあり，統語的に体言締め文とは逆の体言始ま

り構文も見つかった（両構文を「人魚構文」と総称)。（iii）文法化に関しては，体言スロットに現れる名詞は「もの，こと，ところ，とき」などに当たる総称的な意味を持つ名詞と「様子，形」などに当たる証拠性を表す名詞の 2 種類があり，形態的に独立語のままである場合のほか，接語あるいは接尾辞になる場合があった。

【編集追記】本プロジェクトの成果は，のちに次の報告書としてまとめられた。

Tasaku Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Nouns.* (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). 国立国語研究所 . 2013.4.

参加機関名	愛知県立芸術大学，愛知教育大学，青山学院大学，大阪学院大学，大阪大学，岡山大学，小樽商科大学，九州大学，京都大学，群馬県立女子大学，国立民族学博物館，札幌学院大学，清泉女子大学，千葉大学，東京外国語大学，東京女子大学，東京大学，同志社大学，富山大学，名古屋工業大学，名古屋大学，松山大学，美作大学，室蘭工業大学，明治学院大学，山口大学，立正大学，和歌山大学，早稲田大学
共同研究員数	37 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
節連接へのモーダル的・発話行為的な制限	**言語対照研究系 教授**	**角田　太作**	2009.10-2012.3

《研究目的及び特色》

角田三枝（2003, 2004）は，日本語の原因・理由，条件，逆接の三つの意味分野を考察し，節連接について五つのレベル（即ち，五段階）を提案した。特に，どの接続表現がどのレベルで使えるか，使えないかについて，同じ意味分野の接続表現（例えば，原因･理由を表す「ために」,「ので」,「から」）でも，五段階における分布が異なることを示した。本研究は，世界各地の 30 近くの言語を対象として , その原因・理由，条件，逆接の三つの意味分野について，以下のことなどを明らかにすることを目的とする。（ i ）接続表現がいくつあるか，（ ii ）どの接続表現がどのレベルで使えるか，使えないか，（iii）どの接続表現がどのレベルで使えるか，使えないかについて，通言語的な共通点はあるか，相違点はあるか。

《2010 年度の主要な成果》

2010 年度は，国内・海外の研究協力のネットワークが整ってきた。現地調査も行った。共同研究発表会を 4 回行い，のべ 12 人が発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

《2011 年度の主要な成果》

2011 年度は，節連接について，各共同研究員が担当する言語のデータを収集し，分析を進めた。研究会を 5 回行い , 合計 20 人が研究成果を発表した。共同研究発表会以外の場でも , 口頭発表を行い , 論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

《特に成果があがった点等》

上記の研究目的に沿って言語学的成果を整理すると次のようになる。（ i ）接続表現の数については，従属節の接続表現の方が等位文の接続表現より多いという傾向が見られた。従属節の接続表現が少ない言語でも , 原因･理由の接続表現と条件の接続表現は存在する傾向があった。（ ii ）と（iii）

接続表現が使えるレベルに関しては，通言語的に，大まかな傾向として，節連接の五段階のレベルⅠ，Ⅱ，Ⅲで使いやすく，Ⅳ，Ⅴで使いにくく，また，五段階において連続帯を成す傾向がある。節連接の五段階の区別は通言語的に有効である。

【編集追記】本研究は，のちに次の報告書にまとめられた。

Tasaku Tsunoda (ed.) *Five Levels in Clause Linkage*. Two volumes. Tsukuba, Japan: The editor, 2013.9.

参加機関名	愛知教育大学，愛知県立芸術大学，青山学院大学，岡山大学，大阪学院大学，大阪大学，小樽商科大学，外務省，九州大学，京都大学，群馬県立女子大学，国立民族学博物館，札幌学院大学，清泉女子大学，千葉大学，東京外国語大学，東京女子大学，東京大学，同志社大学，富山大学，名古屋工業大学，名古屋大学，松山大学，美作大学，室蘭工業大学，明治学院大学，山口大学，立正大学，和歌山大学，早稲田大学
共同研究員数	43 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	**言語対照研究系教授**	**井上　優（Prashant Pardeshi：2011.4-）**	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が（ⅰ）出来事の認識，（ⅱ）その言語表現および（ⅲ）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約 40 言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

・日本語，韓国語・中国語の比較対照を通じて，言語の基本デザインに関する類型論的研究を展開するための観点が見出された。

＜特に成果があがった点等＞

・他動性の研究に新たな，かつ重要な展開をもたらすための枠組みが構築できた。
・他動詞文の実現に関して，他動性と意図性のどちらが，どの程度優先するかという観点から類型化できることが明らかになった。

《2011 年度の主要な成果》

言語類型論チームおよび心理言語学チームでは上述以外に数々の成果があがっている。言語類型論チームの最終成果は論文集の形で纏める予定である。心理言語学チームの成果は主に国内外の学会や論文雑誌などに公開する予定である。言語習得チームでは類型論と第二言語習得研究の共同研究の基盤整備を行っており，成果が出るのは時間がかかると見通している。言語習得チームの成果も主に国内外の学会や論文雑誌などに公開する予定である。

参加機関名	愛知教育大学，桜美林大学，大阪大学，岡山大学，沖縄大学，小樽商科大学，岐阜大学，慶応大学，熊本大学，神戸夙川学院大学，札幌学院大学，拓殖大学，東京大学，北海道大学，名古屋大学，名古屋工業大学，京都大学，金沢大学，昭和女子大学，神戸大学，神田外語大学，東京外国語大学，東北大学，東洋大学，同志社大学，富山大学，広島大学，防衛大学校，名古屋大学，麗澤大学，早稲田大学，総合地球環境学研究所，サンフランシスコ州立大学，ピッツバーグ大学，ハーバード大学
共同研究員数	54 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
多文化共生社会における日本語教育研究	**日本語教育研究・情報センター客員教授**	**迫田久美子**	2010.4-2014.3

《研究目的及び特色》

2009 年の国際交流基金の調査では，世界の日本語学習者の数は 365 万人を超え，日本政府は 2020 年を目処に留学生 30 万人計画を発表，近年では看護･介護士の労働力を外国人に期待しており，日本社会の多言語化，多文化化がさらに進むことが見込まれる。

このような現状をふまえ，本プロジェクトでは，第二言語習得研究，対照言語学，社会言語学，心理言語学，コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により，多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について，実証的な研究を行う。特に 2012 年度以降は，専任の教授が 2 名増員されることに伴ってサブプロジェクトの再構成を行い，「コミュニケーションについての研究」という中核的テーマのもと，各サブプロジェクト間の一層の連携を図る。研究の成果および研究の過程で蓄積されたデータは，教育現場での活用も視野に入れて積極的に発信する。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

本年度から新たに開始された習得研究では，国内外の研究者を招いての研究会・シンポジウムを複数回開催し，堅固な研究ネットワークを形成することができた。また独立行政法人時代から継続して実施されている研究（評価研究，生活日本語研究，辞書研究）については当初予定通り，データ整備とその分析を進め，成果を学会誌・学会発表などの形で公開した。

＜特に成果があがった点等＞

「生活のための日本語」の成果が，文化庁文化審議会 日本語教育小委員会「「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」の作成に影響を与え，参考とされたことは，特に大きな社会貢献であった。

《2011 年度の主要な成果》

多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐる諸問題の研究の基盤的発展を目的として，(ⅰ)データ収集の継続と(ⅱ)データに基づく研究および(ⅲ)成果物の公開を行った。

（ⅰ）データ収集の継続については，学習者コーパス研究における「海外学習者に対するパイロット調査」，評価研究における「日本人の発話データに対する学習者からの評価調査」，生活のための日本語研究における「広島地域における学習者の日本語学習ニーズ調査」，基本語彙研究における「教育基本語彙データベースの理解度調査」等を実施した。 （ⅱ）データに基づく研究については，既存のデータを用いた習得研究をはじめ，「評価プロセスモデル」の改訂，これまで収集されたデータの分析による在住外国人の日本語学習ニーズに関する研究が行われ，中国･天津の国際大会（ICJLE2011）を含む国内外での 22 件の口頭発表，『社会言語科学』や『国立国語研究所論集』などへの 16（うち 11 件査読付き）件の論文などにより，成果を発表した。 （ⅲ）成果物の公開については，「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」プロジェクトとの連携により，寺村秀夫『外国人学習者の日本語誤用例集』の完成，研究所内の報告書『日本語基本語辞典 ―基本 501 位～1000 位―』作成，システム検索が可能な縦断的発話データの一部公開を行った。	
参加機関名	大阪大学，大阪府立大学，京都教育大学，一橋大学，横浜国立大学，学習院大学，実践女子大学，上智大学，帝塚山大学，東洋学園大学，名古屋外国語大学，日本女子大学，広島大学，広島国際学院大学，広島修道大学，麗澤大学，国際交流基金，情報通信研究機構，サンフランシスコ州立大学，タマサート大学，ピッツバーグ大学
共同研究員数	35 名

【領域指定型】6 件

国語研が指定した特定のテーマを扱うプロジェクトで，外部の研究者をリーダーとする公募型の共同研究。

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
敬語と敬語意識の半世紀 ―愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に―	**明海大学 教授**	**井上　史雄**	2010.11-2012.3
《研究目的及び特色》 敬語の使用と敬語についての意識の在り方は，日本語の実態や歴史を把握したり国語施策・国語教育施策を立案したりする上で重要な論点である。また，人口移動の活発化，地域社会の変容，家族構成の変化，高度情報化など激しく変化する現代社会においては，敬語・敬語意識について静態的な情報としてではなく，社会変化の中での動態として把握することが不可欠である。こうした課題意識に基づいて，国立国語研究所は 1953（昭和 28）年，1972（昭和 47）年，2008（平成 20）年の三回，愛知県岡崎市において大規模な定点･経年の臨地調査（以下，岡崎調査と称す）を実施し，敬語使用の多様化，敬語選択要因や敬語意識の変化に資する調査データを収集・蓄積してきた。このような定点・経年の大規模言語調査は世界的に稀な事例である。この実時間の経過を踏まえて，敬語と敬語意識の変化・不変化を把握することが学界等において強く期待されている。本研究は，以上のような研究課題の下に，岡崎調査に関するデータを高度学術利用することにより，学際的な研究を目指すものである。			

《2011 年度の主要な成果》

国立国語研究所が保有する敬語と敬語意識のデータ・資料を分析し，理論的・実証的研究を展開するため研究メンバー全員が参加する「(1) 全体研究会」を開催するとともに, 分科会として「(2) 丁寧さの段階付け研究会」を組織して，分析のためのデータを整備した。

参加機関名	大阪府立大学，関西大学，京都工芸繊維大学，神戸学院大学，神戸松蔭女子学院大学，滋賀大学，専修大学，中京大学，ノートルダム清心女子大学，別府大学
共同研究員数	20 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究	**南山大学教授**	**村杉（斎藤）恵子**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

日本語獲得に関する研究は，過去に優れた記述的研究が行なわれているものの，その多くは，理論的研究の成果に基づいたものではないため，生得的な言語獲得機構がもたらす言語の普遍性に対し新たな知見を与える成果が限られてきた。また，理論的研究において中心的な役割を果たしてきた研究課題（格，複合名詞句構造，移動規則，削除など）は，これまでの獲得研究においては個別に扱われ，それらの獲得段階にみられる関係についての考察や分析はほとんど行なわれていない。本プロジェクトは，（ｉ）日本語に関する理論研究の成果を詳細に検討し，（ii）言語知識の普遍的属性を反映していると思われる現象について，その仕組みと獲得過程について，縦断的・横断的な実証的に考察すること主な目的とする。さらに，日本語を母語とする幼児１名（1 歳～３歳）の新たな縦断的発話コーパスの構築も行い，記述的な側面での貢献も目指す。

本研究の主な意義は，以下の３点である。①生成文法理論の枠組みで日本語に関する理論研究を行う。②これまで明らかにされていない現象の仕組みと獲得過程を明らかにし，言語獲得理論の構築に寄与する。③日本語に関する理論研究を獲得の観点も取り入れて考察することにより，言語理論研究に対して示唆を与える。特に，格，併合，移動，削除，文法構造などについて精査し，その上で，それらの項目に関する普遍的属性が言語獲得の早期の段階から発現していることを実証的に示すとともに，広く知られている幼児の誤用（格の誤用，自動詞と他動詞・使役動詞の代替誤用，複合名詞句内の「の」の過剰生成等）に対し，理論的研究の成果に基づいた新たな示唆を与える。

《2011 年度の主要な成果》

本プロジェクトは, 削除現象, wh 移動, 併合, CP を中心とした右方周辺部分の構造, 関係節構造, 格，複合述語文の構造など，多岐にわたる現象に関して，言語理論研究と言語獲得研究の両面を射程に入れた研究を，複数の研究員が協力しながら進めている点に特徴がある。言語理論と言語獲得研究を結びつける研究を個別あるいは共同で実施し，その成果を南山大学と神戸大学において発表し，意見交換を行った。

さらにプロジェクトの成果は，北アメリカ生成文法獲得学会（GALANA），ボストン大学言語発達学会（BUCLD）をはじめ, GLOW, WAFL などの国際学会, 日本言語科学学会, 第二言語習得学会, 日本英語学会，日本言語学会，などの国内学会，あるいは，南山大学言語学研究センター，仙台言語学サークルなどにおいて積極的に公開した。また，日本語を母語とする幼児の縦断的観察研究のデータ整理を南山大学言語学研究センターと連携して行い，幼児（ゆうた）の発話資料集としてまとめた。

更に，プロジェクトリーダーはこれらの成果を反映した内容を心理言語学入門書として医学評論社から出版する予定で，執筆にとりかかっている。またプロジェクト全体の研究成果は，本プロジェクトのメンバーを共同執筆者とした書籍としてまとめる予定であり，その準備を進めた。

参加機関名	神戸大学，東北大学，南山大学，三重大学
共同研究員数	6 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアノテーションの可能性 ―日本語諸方言の同意要求表現を中心に考える―	**新潟大学 准教授**	**岡田　祥平**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

従来の日本語話し言葉音声のアノテーションは，音声そのものの記述（分節音・音調）に主眼が置かれる傾向にあった。しかし，音調，特に文末の音調は発話意図と密接な関係があり，文末音調と発話意図とを統合したアノテーションを行うことが出来れば，音声研究のみならず，文法研究にも資するところがあろう。そこで，本共同研究では，音調と発話意図とを統合したアノテーションの可能性を模索することを目的とする。「アノテーションのしやすさ」という観点からは，まずは有標の現象を取り上げるのが妥当であると考える。そこで，本共同研究においては，日本語諸方言における同意要求表現の音調を分析対象の中心に据えることとする。その背景として，日本語諸方言における同意要求表現は，種々の先行研究で，他の発話意図とは異なる（有標の）文末音調が観察されるという報告や，当該発話意図に特化した表現形式が観察されるという報告があることが挙げられる。また，調査対象地点も，種々の先行研究において，同意要求表現特有の音調が存在するという報告がある場所を選択した（首都圏・愛媛県宇和島市）。

《2011 年度の主要な成果》

共同研究者間での検討の結果，自然談話を収集する方向で研究を進めることとした。それは，文末音調の調査は，朗読音声では自然性に欠ける（日常生活において観察される音調が，朗読音声では得てして生起しない。逆に，日常生活において観察されない音調が，朗読音声では得てして生起しない）ためである。なお，既に「首都圏標準語」（改まった場面で使用される言語）については，音響分析にも耐えうる高音質のコーパスとして，既に『日本語話し言葉コーパス』の対話音声が利用できるが，本研究の主眼である「同意要求表現」に観察される特徴的な音調は「標準語」では生起しにくい（この件は，『日本語話し言葉コーパス』の対話音声を検索したうえでの結論である）。そのため，首都圏若年層のカジュアル場面での対話（親しい友人同士での対話）を収録し，『日本語話し言葉コーパス』の対話の書き起こし基準を利用し，コーパス化を進めている。

非公開の共同研究発表会を開催し，異なる分野を専門とする共同研究者間で忌憚のない意見交換をすることで，本共同研究に関して，それぞれの分野での知見，認識，見解を共有し，今後の共同研究の方向性，計画について確認した。当初の計画から変更し，研究発表会を非公開で行ったのは，今年度は本共同研究が本格的に胎動しはじめたことに加え，本共同研究は異なる分野を専門とする研究者で組織されており，共同研究のまずはお互いの見解を交換するためである。また，共同研究者間で，適宜，メール会議を開催し，知見，見解の交換を行った。また，コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所言語資源研究系，2012.3）で，ポスター発表を行った。

さらに，本共同研究について，日本音声学会第 323 回研究例会でシンポジウム発表を行った（2011.6. 山梨大学）。

参加機関名	大阪大学，九州共立大学，京都産業大学，山梨大学
共同研究員数	5 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発	**東京大学教授**	**峯松　信明**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本研究は，日本語音声教育の発展に寄与することを目的とする。学習者は上級になるほど自然なアクセント・イントネーション習得を望んでいるが，従来体系的な教育が多くの機関で行われず，教材が不足し，教授法が未確立である。我々は，少なくとも共通語（東京方言話者の）アクセントに関する情報を学習者に与えるべきとの立場に立ち，比較的変形が規則的な用言のアクセント教育を支援する。なお既存のアクセント辞書は，辞書形のアクセント型が主たる記述で，アクセント変形は規則の例示があるのみで学習者にとって理解しにくく，また高価である。そこで基本活用形に関して，アクセント変形を視覚的，網羅的，聴覚的に呈示する無償のオンラインアクセント辞書を開発する。次に，基本活用形以外の複雑な後続語表現に対しても，そのアクセント型を示すモジュールを開発する。更に，用言以外の任意の文入力に対して，それを読み上げた時に予想されるピッチパターンを，アクセント変形を考慮した上で呈示する韻律読み上げチュータも開発する。この韻律読み上げチュータの開発には高精度なアクセント変形予測モジュールが必要となるが，これは，機械学習を用いて実装する。これらの辞書やモジュールは，東京方言話者ではない母語話者，非母語話者教師自身の参照用としても有用である。本辞書は規範となるアクセント情報を提供するが，アクセントは揺れを有するのも事実である。日本語話し言葉コーパスを用いた揺れの実態調査を行ない，辞書記載に反映させる。

《2011 年度の主要な成果》

1）技術的には数詞表現におけるアクセント変形予測の高精度化を実現し，2）教育的には本アクセント辞書の日本語教育における試験的利用を開始し，3）基礎研究的には日本語話し言葉コーパス（CSJ）のコアデータに対するブラウザの開発とそれを用いたアクセント核位置のコーパス分析に着手した。

参加機関名	東京大学，慶應義塾大学，早稲田大学，吉林華橋外国語学院
共同研究員数	8 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化	**宇都宮大学 准教授**	**森　大毅**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

音声が伝達するパラ言語情報および非言語情報は，音声学・語用論を含む言語学だけでなく，音声認識・理解・合成を含む知能情報学，心理学・行動科学などの多彩な学問分野において強い関心が向けられており，パラ言語・非言語情報のアノテーションを含む音声言語資源の整備は極めて重要である。しかし，このような言語情報を超えたアノテーションの研究は未成熟であり，研究コミュニティ（学問分野・流派）や個別のコーパス開発の枠を超えた共通のディシプリン構築が喫緊の課題である。

本研究は，発話の意図・態度，話者の感情状態，話者の個人性などに代表される，パラ言語情報および非言語情報に関与する基本概念として，(1) 何が含まれ，(2) それらの本質は何か，を整理し体系化することを目的とする。

《2011 年度の主要な成果》

今年度の主要な研究目標は，文献収集および用語・概念の問題点整理であった。この目標についての主な成果は次の 2 点である。第 1 は，文献調査によって関連分野における用語の混乱・矛盾を明らかにしたことである。国内の心理学研究関連学術雑誌の調査の結果，感情を対象とした研究の中でも，表情との関係を検討している場合には基本 6 感情を，より大きな文脈でとらえようとしている場合にはそれ以外を含めた感情を対象としているものが多いことがわかった。このことは，「感情」という言葉ひとつ取ってもその研究の背景が異なれば指し示している概念も異なることを意味し，用語の使用においては「文脈化」が重要であることを明確にした。また，用語の混乱の原因となる立場の違いとして，《生成側からの記述 vs 解釈側からの記述》が重要な対立軸であることが明らかになった。第 2 は，言語情報・パラ言語情報および感情や個人性情報に関連する概念を再分類する基準を策定したことである。その基準の 1 つは，音声によって伝達される情報が，意志を持って選択されたものか否かである。これにより，従来の枠組では特殊なものと考えられていた演技による感情表現を，むしろコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすパラ言語情報であると明確に位置付け，話者の意志によらない感情の発露との性質の違いを陽に表すことができるようになる。

総括すると，やや専門分野の異なる少数のメンバーによる勉強会を重ねることによって，パラ言語情報・非言語情報の基礎概念に関する問題点が徐々に明確なものとなり，今後の整理・体系化への道筋を付けることができた。

参加機関名	宇都宮大学，京都大学，東北工業大学
共同研究員数	6 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究	**神戸大学教授**	**松本　曜**	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》 今までの移動表現の類型論的研究においては，ダイクシス動詞が果たす役割について正当な注目がなされてこなかった。しかし，日本語などの言語の移動表現の性質はダイクシスを無視しては明らかにできない。本研究の目的は，そのダイクシス動詞の役割に注目することにより，日本語の性質がうまく捉えられるような，移動表現の新しい類型論を打ち立てることにある。 本研究の特色として，通言語的な実験的研究を行うことが挙げられる。このような手法は Max Planck Institute などで意味の類型論的研究において用いられてきたものであるが，日本国内ではあまり例を見ないものである。その調査をもとに，各言語（特に日本語）が，1）どのような場合にダイクシスを表現し，どの場合に無視するか，2）表現する場合に，移動の要素（様態，経路）との競合の中で，どの要素によって表現するのか，の二点を明らかにする。このような詳細な研究は，日本語の特色に迫る上で重要な意味を持つ。			
《2011 年度の主要な成果》 実験ビデオの作成と一部の言語のおける実験の開始を目指していた。実験用プログラムの開発により，各言語版の作成は予想以上にスムーズに進み，それを用いた調査も，すでに半数の言語において，目標としていた 10 名のデータが得られた。それと同時に，予備調査の成果に基づいて学会発表を行い，関連する研究に関しても論文発表を行うことが出来た。来年度からの本格的な分析作業に入る準備も進めた。			
参加機関名	上智大学，大阪大学，神戸大学，東京大学，防衛大学校，神田外語大学，神戸市立工業高等専門学校，滋賀大学，慶應義塾大学，岐阜大学，関西大学，リヨン第 2 大学，ナポリ東洋大学		
共同研究員数	17 名		

【独創・発展型】7 件

独創性に富む斬新なテーマを扱う中小規模プロジェクト。

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
複文構文の意味の研究	**理論・構造研究系客員教授**	**益岡　隆志**	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》 日本語の複文の研究は単文の研究に比べ個別的な研究に偏りがちな傾向にあり，その進展は十分なものとは言いがたい。その現状を踏まえ，本研究では，日本語の複文研究に携わっている研究者の共同研究により，複文の総合的研究を行う。 本共同研究は，様々な分野・地域の研究者をつなぐ「交流・対話の場」とし，個別的なテーマに絞り込むのではなく，総合的なテーマを設定し，多様な研究の方向へ発展させることを目指す。			

《2013 年度の主要な成果》

公開の研究発表会（5 月及び 9 月）と公開ワークショップ（12 月）を実施した。複文に関する総合的な研究を目指し，研究発表会・ワークショップでは，文法史・語用論・対照言語学などを含む様々な分野の研究者に発表を依頼した（発表件数:計 16 件)。また，若手研究者に研究発表会･ワークショップへの参加を呼びかけるとともに,ワークショップの発表者に若手研究者 (2 名) を加えた。

研究発表会・ワークショップでの発表資料（計 16 件）を研究所 HP により公開した。また，複文に関する海外の研究文献（書籍）の情報を収集し,「研究文献リスト」として研究所 HP により公開した。

参加機関名	神戸市外国語大学，学習院大学，首都大学東京，筑波大学，名古屋大学
共同研究員数	6 名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
接触方言学による「言語変容類型論」の構築	**時空間変異研究系准教授**	**朝日　祥之**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは，様々な特性を持つ地域社会で生じている言語変容の類型化を，文献調査，実時間調査の手法を用いて行うことを目的とする。2011 年に刊行された Peter Trudgill の *Sociolinguistic Typology*（Edinburgh University Press）をその類型化の手がかりとし，日本国内外で形成された地域社会（地方都市，ニュータウン，移民社会）をフィールドとした調査研究を実施する。類型化を行う上で Peter Trudgill をはじめとする関連領域の研究者とにもプロジェクトに参画してもらい，検討を行う。

本研究領域は，国内外の研究動向を踏まえてもまさに前衛的な研究であり，社会言語学，接触言語学，言語類型論などの領域への貢献が期待でき，方言研究の新たなアプローチの確立を目指すものである。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

計画した通り，順調に進んでいる。「言語変容類型論」は Sociolinguistic Typology として研究が着手されているものの，その枠組みは十分ではなく，本プロジェクトの貢献が見込めることを確認できた。当該分野の国内外の研究者とのネットワークを構築し，学会発表 10 件，和文・英文の研究論文を 9 件刊行することができた。各地でのフィールドワークも順調に進んでいる。また，本研究課題を遂行する上で必要な調査の策定も行い，実施に向けた準備を行っている。

＜特に成果があがった点等＞

・言語類型論者をはじめとする関連分野の研究者とのネットワークを構築できた。
・約 20 件にのぼる研究成果活動，*Journal of Pidgin and Creole Languages* をはじめとする英文雑誌にも 3 件に掲載された。
・「言語変容類型論」構築に向けたデータ収集，調査の企画を確実に行った。
・「職場体験研修会」での講演など，社会との連携活動も積極的に行った。

《2011 年度の主要な成果》

本年度は言語変容類型論を構築するために必要なデータを収集することに重点を置いた。札幌市，

釧路市における経年調査の実施，音調変異，空間参照指示枠，特定地域（札幌市山鼻地区）での経年調査，ハワイのオーラルヒストリーデータの分析，ニュータウンの調査研究をもとにした出版企画などを行った。	
参加機関名	愛知大学，大阪大学，鹿児島大学，首都大学東京，福岡女学院大学，北星学園大学，ノートルダム清心女子大学，アグデル大学，ニューイングランド大学，ランカシャー大学，国立シンガポール大学，マックスプランク研究所
共同研究員数	14 名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
大規模方言データの多角的分析	**時空間変異研究系准教授**	**熊谷　康雄**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

国立国語研究所では，日本の方言研究の基盤的な資料である『日本言語地図』（調査期間 1957 ～ 1965，調査地点数 2400，調査項目数 285）や「各地方言収集緊急調査」（調査期間 1977 ～ 1985，全国約 200 地点）の資料等の電子化・データベース化を進めてきた。これらは全国レベルの大規模な方言研究の資料であり，日本の方言研究における重要な資料である。本研究では（1）『日本言語地図』データベースや全国方言談話データベースなどの資料・データの整備を研究基盤として進めるとともに，（2）既に電子データが公開されている『方言文法全国地図』等の利用も視野に入れ，計量的方言研究，言語地理学，日本語史，談話研究など専門を異にする共同研究員が，これらの大規模方言データを共同利用し，複数の視点から多角的に研究を実施する。研究の基盤となる大規模方言データの整備ならびにこれが持つ可能性を引き出す多角的な研究を通して，ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する新たな知見の獲得，研究方法の開発，研究基盤となる資料・データの整備・共有，公開や利用法の蓄積などを行う。

《2010 年度の主要な成果》

収録地点別である『全国方言談話データベース』に，全都道府県の統合版のデータベース（11,388 発話）および対訳形式テキストファイルを作成，統合版文字化テキストデータの共通語訳テキスト，方言テキストのそれぞれについて，文節単位の KWIC（約 15 万レコード）を作成し，KWIC を検索できるデータベースおよび，対訳形式の KWIC のテキストファイルを作成した。音声データも含め，共同研究者で共有した。『方言談話資料』と『方言録音資料シリーズ』のテキストデータ，音声ファイルも共有とした。『日本言語地図』のデータベース化に関しては，原資料を見るまでは分からない，個々に対応を要する事例が多数あり，点検，校正に労力を要したが，その過程で，原資料に関する知識も整理されてきた。29 項目を整備し，共同研究者でデータを共有した。『日本言語地図』所収の参考地図である，近代道路図，近世藩領図，地勢図の電子地図化（シェープファイル，AI ファイル）を行った。各分担者が分析の方向性等を検討し，試行した。

《2011 年度の主要な成果》

基盤となる『日本言語地図』データベース（LAJDB）の整備の加速に注力した。原資料によるデータ化上の様々な問題点への対応に時間を要したが，原資料からデータベース化する設計方針による構築を進め，74 項目を追加（合計 103 項目）した。ネットワークにより，逐次，共同研究者に迅速に提供できる環境を整え，データ共有を推進した。関連データとして，話者の属性情報や参考地

図の電子地図等の整備も進めた。また，基幹プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」から依頼のあった 33 項目については優先的に整備，提供した。分担者による分析や利用を進めた。談話資料のデータの利用法の試行や談話データと言語地図の対比などの分析が進められた，LAJDB については，データの項目数が増えて来た段階で，これまでは難しかった 2400 地点の地点別集計による全国規模の詳細な地理的なパターンの計量的な観察が可能になるなど，LAJDB を利用した分析の有効性が確かめられた。

参加機関名	信州大学，東北大学，群馬県立女子大学，関西大学，和歌山大学
共同研究員数	10 名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語文法の歴史的研究	**時空間変異研究系 客員准教授**	**青木　博史**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは，日本語の歴史に正面から取り組む研究である。歴史的変化という観点から日本語のしくみを考え，言語の構造を明らかにすることを目的とする。

言語のしくみを考えるにあたって歴史的観点からの研究は必要不可欠なものであるが，中でも文法に関する研究は，現代語の記述に対しても有効にはたらくものとして重要である。本プロジェクトは，古典語における単なる観察・記述にとどまらず，現代語（もちろん方言も含む）までを視座に収めながら歴史変化を描く研究，あるいは現代語との対照を意識しながら理論的にも有用な研究を目指していく。

これらの研究成果については，国内外の学界に向けて広く発信していくものとする。

《2011 年度の主要な成果》

今年度における特筆すべき成果は，共同研究者全員が執筆した論文集『日本語文法の歴史と変化』（青木博史編，くろしお出版）の刊行である。学界に向けて広く成果を発信したものであり，すでに多くの反響が寄せられている。「日本語文法史関係論文データベース」については，2009 年から 2011 年の 3 年分が完成した。

参加機関名	愛知県立大学，國學院大學，九州大学，実践女子大学，成城大学，聖心女子大学，千葉大学，就実大学，名古屋大学，福岡大学，早稲田大学
共同研究員数	10 名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
近代語コーパス設計のための文献言語研究	**言語資源研究系 准教授**	**田中　牧郎**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

国立国語研究所に対しては，日本語の史的研究に幅広く活用できる通時コーパスを構築し，これを活用した日本語史研究を多彩に展開することが期待されている。基幹型プロジェクト「通時コーパスの設計」が，江戸時代までを対象とした「通時コーパス」の設計を行うのに対して，本プロジェクトは，明治初年（1868 年）から第二次大戦終了（1945 年）までを扱う「近代語コーパス」の設計を行うための研究として位置付ける。また，すでに構築されている「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「通時コーパス」を接続する際の問題点を整理し，日本語の歴史を総合的にとらえる通時的なコーパスの設計に役立つ形で，研究成果をまとめていく。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

・研究を計画通りに進めた。

・研究遂行上よりよい環境整備が望まれると思われた部分には，例えば，雑誌データの整備を行って利用できるコーパスを増やすなど，新しい手立てを講じた。

＜特に成果があがった点等＞

・作成中の近代語資料の約 5700 件のリストをもとに，資料選定の議論を本格化させる準備を整えた。

・近代語コーパスの形態素解析辞書「近代文語 UniDic」は，学会等で発表を重ねた。

・公開研究発表会には，共同研究者以外の参加が増加しており，近代語コーパスをめぐる研究者ネットワークが形成され始めた。

《2011 年度の主要な成果》

研究活動は多彩に展開され，総じて，順調に進んでいる。日本語史をとらえる通時コーパスの一角を担う「近代語コーパス」について，その役割，含められるべき資料，備えられるべき仕様，付加されるべき情報，提供されるべき利用ツール，開拓されるべき研究領域などを多面的に研究した上での，設計の考え方とその具体像を提示していきつつある。それらを，近代語コーパスの設計に直接役立つ形でまとめる手段についても，報告書の編集とモデルとなるコーパスの公開を計画に定めることで，明確にできた。

参加機関名	明治大学，二松学舎大学，大阪大学，岩手大学，成城大学，北京外国語大学，啓明大学校
共同研究員数	10 名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成	**言語対照研究系 准教授**	**Prashant Pardeshi**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

本研究の学術的な目標は，関連分野の知見を結集し，「理想的な日本語基本動詞用法ハンドブックのプロトタイプ」の開発を目指すことである。また，応用的な目標は，当該プロトタイプに基づいて，世界の日本語学習者の体系的且つ効率的な学習に役立つ日中，日韓，日英，日＝マラーティー語版の日本語基本動詞用法ハンドブックの作成を試みることである。所内の言語資源研究系との連携で『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を最大限に活用し，コーパスから見えてくる頻度，コロケーション，文型などに関する知見を研究成果に反映させる。また，研究情報資料センターを通じて研究成果のデータベース化および公開を図り，日本語教育研究・情報センターを通じて世界の日本語教育現場への還元を図る。

特色：日本初・世界初の機能を盛り込んだハンドブック・辞典の開発を目指す

・コーパス準拠のネット版のハンドブック・辞書
・語義ごとのコロケーション表示と，コーパスの実例との連動
・コーパスにおける当該動詞の文法的な振る舞いに基づいた豊富な作例
・視聴覚コンテンツの導入
・認知言語学の知見の導入
・該当動詞の意味拡張・統語的な振る舞いの詳細な記述
・対照研究の知見の導入：学習者の母語の視点からの対照情報，学習上の注意点の記述
・ネット上で時間と空間を超えて見出し執筆・編集の実現

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

今年度は基本動詞 6 語の見出しプロトタイプの作成を予定していたが，中心メンバーと議論を深める中で，中途半端に見出しの執筆を始めるより，コーパスに基づく辞書（ハンドブック）作りの基盤整備が先という結論になった。現在，BCCWJ コーパスからコロケーション，格，頻度，結びつき度（MI-score，茶漉の t-score など）の情報を抽出・表示するツール（LagoWordProfiler）を開発しており，3 月中旬に研究会でデモンストレーションを行う予定である。また，共同研究者の一人である阿辺川武氏が開発した「なつめ」はネットのデータからコロケーション，格，頻度，結びつき度（MI-score，茶漉の t-score など）の情報を抽出･表示するツールである。現在，このツールを見出し執筆用に改良中である。

＜特に成果があがった点等＞

コーパス言語学を専門とする研究者がプロジェクトに多数加わり，日本語としては初めての，コーパスに基づく辞書（ハンドブック）作りの基盤ができつつある。

《2011 年度の主要な成果》

ハンドブックの見出し作成に必要な基盤として，

(1) 日本人の正用のコーパスデータ（BCCWJ）を参考にし，見出し執筆のもとになる情報を得るために BCCWJ ブラウジングツール（NINJAL-LWP）を開発した。2012 年 5 月に一般公開する予定。

(2) 学習者の誤用データ（寺村誤用例集）をデータベース化し，オンラインで検索できる環境を整えた。2011 年 12 月 9 日に一般公開した。
(3) ネットを利用して見出しが編集できる環境（エディタ）を開発した。
上記の基盤を利用して，
(1) 日本語の見出し原案の執筆（10 語）を開始し，ピア・レビュー中である。レビュー作業は 3 月末に終了予定。
(2) 見出しの対照版（日・中，日・韓，日・英，日・マラーティー）の作業に着手した。日英に関してはメンバーの人数や時間的な制限などにより作業が難航している。
(3) 1 見出しのイメージスキーマ（動画）の作成をした。また 2 見出しの例文の音声ファイルを作成した。これらを見出しに取り入れ，視聴覚的な情報を取り入れたハンドブックのプロトタイプの試案を作成した。
本プロジェクトの成果を国内外の学会で発表し，共同研究の知見を世界に発信した。また若手育成にも積極的に取り組んだ。

参加機関名	愛媛大学, 関西学院大学, 関西大学, 岐阜大学, 九州大学, 慶應義塾大学, 神戸大学, 神田外語大学，早稲田大学，大阪大学，大阪府立大学，大東文化大学，筑波大学，東京外国語大学，東京工業大学，東京大学，東北大学，広島大学，美作大学，北海道大学，名古屋大学，鳴門教育大学，麗澤大学，国立情報学研究所，延世大学校，慶一大学校，北京外国語大学，北京日本学研究センター，EFL 大学，ジョージア工科大学，サンフランシスコ州立大学，ピッツバーグ大学，プネ大学，メルボルン大学
共同研究員数	61 名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究	**日本語教育研究・情報センター准教授**	**野山　広**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》
本プロジェクトでは，主として旧日本語教育基盤情報センターで実施した縦断調査（約 2 年半）で得られた会話データの分析や新たなデータの収集・整備，分析を言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて行いつつ，蓄積する。そのことで，多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者の日本語習得，言語生活の実態をより的確に捉え，日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題にできるだけ応えようとする，応用言語学的アプローチの基盤を築くのが目的である。
特色は，定住外国人の日本語習得と言語生活の実態を探るために，その方法として，例えば地域の定住外国人≒日本語学習者の会話データの収集のために OPI の枠組みを活用したインタビューを実施し，そのデータを毎年 1 回ずつ収集しながら旧センター時代から現在に至るまで，5 年間の縦断調査を行ったことである。また，こうした調査やデータ収集に際しては，ウェルフェア・リングイスティクス（福利としての言語学）（徳川：1999）の考え方を尊重しつつ，以下のような現場生成型の調査方法を基盤として協働実践研究を行い，質的なデータの収集を重ねてきた。

現場生成型研究（佐藤他：2006）の観点から，関係者へのインタビュー調査や協働実践活動等を行う。なお，現場生成型の研究では，地域の特徴や研究分担者・協力者の専門性や独創性を考慮しつつも，①～③の方法を基本として，協働実践研究を行い，大量調査では把握しきれない質的情報の収集を目指す。

①関係性の組み替えのための方法の模索

②自らその「場」に関与し，その関与を含めた実践活動と「場」の変容を観察し，記述するという方法の模索

③自らの関与を織り込み，関係性の中で自己の変容と「場」の相互変容を記述し，さらに課題解決にむけた新しい関係性の構築というダイナミックな過程をとらえる方法

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

縦断調査の実施及びそのデータの文字化や分析準備，データベース化に向けた整備作業など，予定通り進んでいる。多分野に跨る研究者ネットワークの構築・拡充，特に海外の共同研究者や横山 G の共同研究者とは，お互いの理解を深めることができ，相互の研究動向を把握することができた。

＜特に成果があがった点等＞

国内外での研究発表を積極的に行った。これまでの調査結果や経験知等を踏まえた発表，報告，研修，講演など，成果の発信・普及活動についても積極的に行い，関連分野や多分野の人々とネットワークの構築・拡充を図ることができた。

《2011 年度の主要な成果》

・本プロジェクトの中核である分散地域（秋田県能代市）および集住地域（群馬県大泉町）での縦断調査（データ収集や継続的な整理・分析）や地域関係者・共同研究者・協力者等との情報交換・検討を進めた。

・調査地域（能代）での共同研究発表会（一般公開）の実施（2011 年 12 月）をはじめとして，さまざまな地域，機関，学会，国際学会，マスコミ等の招聘・依頼に応じて成果報告，成果の応用・援用も含めた講演，ワークショップ，解説等を行った。

・研究成果の発信等については，プロジェクトの HP の作成までは至らなかったが，その他の手段・方法，機会・場や手段を通して（地域，機関，学会，国際学会，マスコミ等で），積極的に発信した。

参加機関名	関西学院大学，佐賀大学，滋賀大学，東京国際大学，東京女子大学，名古屋外国語大学，常葉学園大学，モナシュ大学，イースタン・ミシガン大学，カリフォルニア大学
共同研究員数	15 名

【萌芽・発掘型】9件

研究系・センターの枠を超えた新たな研究領域の創成が期待されるプロジェクト。

<table>
<tr><td rowspan="2">萌芽・発掘型プロジェクト</td><td colspan="2">プロジェクトリーダー</td><td rowspan="2">研究期間</td></tr>
<tr><td>所属・職名</td><td>氏　名</td></tr>
<tr><td>会話の韻律機能に関する実証的研究</td><td>理論・構造
研究系准教授</td><td>小磯　花絵</td><td>2010.11-2013.10</td></tr>
<tr><td colspan="4">《研究目的及び特色》
本研究の目的は，音声コーパスに基づく定量的分析を通して会話相互作用における韻律の特徴・機能を実証的に解明することである。会話における韻律の特徴や機能を検討する際，会話音声のみを分析対象とする従来の研究方法に限界があることを踏まえ，本研究では，同一話者による会話と独話を対象に韻律（句末音調や声の高さ・大きさ・速さ・ポーズ・言い淀みなど）の傾向を比較し，両者の類似点・相違点などを明らかにした上で，会話における韻律機能を会話固有の機能（話者交替や相槌など話者間の相互作用に関連する機能）と，会話・独話を含む話し言葉一般に見られる機能（統語構造や談話構造など多様なレベルの情報の終了性・継続性に関する表示機能など）に分けて捉え直す。具体的には，(1) 主に統語構造（従属度の異な3種類の節単位情報や挿入構造・統治構造など）・談話構造（数段階の切れ目の強さで認定される談話境界情報）との関係から会話と独話の韻律の比較を行い，両者の類似点・相違点を体系的に明らかにすると同時に，(2) 会話研究の中で指摘されてきた個別現象（例：発話権保持のために文末のあとポーズを置かず文末から次の文頭まで発話速度を上げて発話する現象など）に着目して会話と独話の比較を行うことによって，韻律の機能について総合的に検討する。</td></tr>
<tr><td colspan="4">《2011年度の主要な成果》
『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に基づく会話・独話の比較を通して会話における韻律の役割を検討するというプロジェクトの目標を達成するため，2011年度は主にデータの整備と予備的分析を実施した。
データ整備については，①CSJコアの韻律・統語情報の修正・追加ラベリング，②①を適宜反映させたCSJ DVD第3刷の構築・一般公開，③リレーショナルデータベース（RDB）の構築・試験的公開，④アクセント句構成XMLの構築を実施した。特に文系研究者･若手研究者の高度なデータベース利用を促し分野を活性化することを目指し，講習会（非公開）を2回実施した。
予備的分析については，構築したデータベースに基づき主として統語構造と韻律との関係に関する研究を実施し，プロジェクト研究発表会（12月開催）で4件，理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表会（2月開催）で1件，コーパス日本語学ワークショップ（3月開催）で4件の研究発表を行った。</td></tr>
<tr><td>参加機関名</td><td colspan="3">京都大学，広島大学，早稲田大学，国立情報学研究所</td></tr>
<tr><td>共同研究員数</td><td colspan="3">5名</td></tr>
</table>

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
訓点資料の構造化記述	**理論・構造研究系准教授**	**高田　智和**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

漢文訓点資料は，文字，音韻，語彙，語法などの面で，日本語史研究の資料として活用されてきた。訓点資料は歴史的・文化財的・教学的価値の高いものが多く，原本調査の難しいものが多い。そのため，重要典籍については，研究者による釈文や，影印，複製が公刊されているものもあるが，釈文は純然たる一次資料ではなく，影印，複製それ自体が稀覯品であったり，白黒印刷であったりと，研究利用にあたって少なからず問題もある。また，訓点資料研究においては，釈文の電子テキスト化や，原本の画像化など，総じてデジタル技術の導入が，他の分野に比べて立ち遅れている現状である。

本研究では，国立国語研究所蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』（平安末期書写加点）を例に，(1) 原本調査に基づいて，解読結果である釈文の構造化記述の方法を検討し，(2) 釈文と原本デジタル画像とを対照表示できるシステム開発の基礎研究を行う。 総じて，資料研究における共同利用・共同研究のやり方を模索し，国立国語研究所における資料研究の定着を図る。

また，韓国の口訣資料を扱う研究者との共同研究によって，研究方法や資料共有について知見を交換するとともに，漢文訓読の日韓対照研究の可能性を探ることも視野に入れる。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

3 回の共同研究プロジェクト研究会を通して，訓点資料研究者だけでなく，歴史学，仏教学，情報工学など，関連する他分野の研究者の参画を得て，構造化記述の方法を検討した。また，博物館と寺院において，日本の訓点資料研究者，韓国の口訣研究者とともに，原本調査を実施するとともに，資料所蔵者である博物館や寺院関係者との，信頼関係の基づく研究ネットワークの構築に努めた。さらに，館蔵資料である院政期白点資料『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』の解読を進めると同時に，同資料の高精度撮影を実施し，公開に向けた準備を行った。

＜特に成果があがった点等＞

『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』全巻の高精度撮影ができ，画像公開に向けた第一段階を終了した。

《2011 年度の主要な成果》

2 回の共同研究プロジェクト研究会（海外 1 回，国内 1 回）を通して，訓点資料研究者だけでなく，歴史学，国文学，情報工学など，関連する他分野の研究者の参画を得て，構造化記述の方法を検討した。また，博物館と寺院において，日本の訓点資料研究者，韓国の口訣研究者とともに，原本調査を実施し，資料所蔵者である博物館や寺院関係者との，信頼関係に基づく研究ネットワークの構築に努めた。さらに，館蔵資料である院政期白点資料『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』の解読を進めると同時に，同資料の高精度撮影画像の公開に向けた準備を行った。

また，共同研究員とともに，論文発表，学会発表（ワークショップ等）も実施した。

参加機関名	札幌大学，東京大学，富山大学，立命館大学，早稲田大学，岐阜工業高等専門学校，崇実大学校，ソウル大学校
共同研究員数	9 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
首都圏の言語の実態と動向に関する研究	**理論・構造研究系助教**	**三井はるみ**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

首都圏の言語は多様性・多面性に富むが，研究対象としては，それぞれの方法論にしたがった角度から部分が切り取られ，分析が行われてきた。これまでの代表的な研究は，(1) 近世期の江戸語から東京語がどのように成立したかを捉える「東京語」研究，(2) 伝統的地域方言としての関東方言・東京方言を記述し，分布と変化を捉える「東京方言」研究，(3) 社会調査の手法を用いた大規模調査による「都市言語」研究，に大別される。さらに 1990 年代後半以降は，「首都圏」という地域を措定して，その内部における言語の実態と動向を，背後にある言語意識とともに捉えようとする「言語動態」研究が現れた。

これらの研究はそれぞれに成果を挙げ，知見を蓄積してきた。しかし，多様・多面的である首都圏の言語の全体像を見通すためには，個々の研究がそれぞれに精緻化を図るだけでなく，再びそれらを総合する必要がある。そのためには，それぞれの方法論による研究成果を相互に参照し，取り入れ，首都圏の言語の実態と動向を総合的に捉えることが求められる。

本研究では，言語構造と動態の両面にわたって，首都圏の言語の実像を多角的重層的に把握し，この地域の言語を対象とした，記述的研究，言語地理学的研究，社会言語学的研究，計量的研究の相互乗り入れを図り，首都圏の言語の総合的研究の基盤を築くことを目的とする。

首都圏の言語の多様性がどのように存在し，生まれつつあるか，具体的なケースから明らかにする。そのための一つの観点として，現代首都圏における地域差がどのような言語項目・言語意識に見られるか調査により把握する。

《2011 年度の主要な成果》

次の三つの活動を柱に進めた。(1) 研究会活動：公開の共同研究発表会（3 回），共同研究員を中心とした懇話会 (8 回), ゲストスピーカーによる勉強会 (1 回) を開催した。共同研究発表会では，「地理的研究と歴史的研究の橋渡し」,「首都圏の言語研究の対象と方法」について議論を深めた。(2) 新規調査研究活動：首都圏の調査環境に配慮した調査法，データ収集法について検討し，その結果を踏まえて，分析までを視野に入れた , 携帯電話を利用した調査システム（ベータ版）を構築した。これを利用して複数の大学で試行調査を実施し，今後調査すべき内容についての探索を行った。このほか, 首都圏における方言の地域資源としての利用に関する調査を行った。以上の結果の一部は，学会の口頭発表等で報告した。(3) これまでの研究資産を見直し再構築する活動：首都圏の言語に関する研究文献リストを作成した。また，既存の首都圏言語関連資料の電子化について入力の試行を行った。このプロジェクトの活動から得られた知見を踏まえて，立川市立中学校教育研究会，立川市立第四中学校で講演を行った。

参加機関名	國學院大學，日本大学，文教大学
共同研究員数	5 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
方言談話の地域差と世代差に関する研究	**時空間変異研究系准教授**	**井上　文子**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは，将来，方言談話の類型と変容に関する大規模な調査・研究を実施することを前提として，そのためのパイロット調査的な役割を果たすものである。重点地域において必要な諸データを得ること，次の点に関わる仮説や枠組みを明確にすることを目的とする。

1. 方言談話の収集・分析を通じて，文法研究および談話分析の観点から，実際の文脈の中における言語事象の使用実態や機能を把握する。
2. 地域間比較をおこない，方言談話の類型を記述する。
3. 世代間比較をおこない，その変容の方向を明らかにする。

本プロジェクトは，時空間変異研究系が目標とする「現在および過去における地理的・社会的変異，歴史的変化の様相を解明する」研究として位置づけられ，「方言の全国調査，琉球など消滅危機方言の調査，現代日本語の動態の解明，日本語変種の形成過程といった共同研究」を補完するデータを提供するものである。収録した方言談話は，研究者に活用されることを想定し，研究情報資料センターにも保存する。

《2011 年度の主要な成果》

方言談話の地域差と世代差についての仮説をたてるために，秋田・東京・大阪・大分において，それぞれ，高年層男性ペア，高年層女性ペア，若年層男性ペア，若年層女性ペアを対象として，場面設定による演技的なロールプレイ会話の収録調査を実施した。収録データのテキスト化を進めた。公開研究発表会を 2 回開催した。

参加機関名	関西大学，群馬県立女子大学，東京女子大学，広島大学，別府大学
共同研究員数	7 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
近現代日本語における新語・新用法の研究	**時空間変異研究系准教授**	**新野　直哉**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本研究は，近現代日本語の新語・新用法について，いつごろ，なぜ，どのように発生・拡大し，現在はどのような状況にあるのを，文献調査に加え，アンケート調査や統計的手法などを用いて明らかにしていく。また，言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し，言語の変異そのものの記述的研究に加え，これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は，古代語や中世語の言語変化の事例に対し，そのプロセスの観察や，背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である，というメリットがある。その成果として，日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で，本研究は，現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

《2011 年度の主要な成果》

2010 年 11 月に開始した本プロジェクトは，2010 年度中は 3 月に研究発表会を行った。2011 年度は副詞“全然”に関する研究というテーマのもとで，これまでほとんど使われてこなかった中国資料や日記，昭和 10 年代の学術誌といった資料に基づき各自が研究を行い，メンバー 4 名が 6 月と 9 月の研究発表会で 2 名ずつ発表した。その際及びその後の意見交換・討論を経て，10 月の日本語学会でブース発表を行った。ここでは，「“全然”は本来否定を伴うべき副詞である」という規範意識は昭和 10 年代にはまだ発生していなかった可能性が高いことを明らかにした。この発表については，日本経済新聞ウェブ版「ことばオンライン」（12 月 13 日掲載）で取り上げられ，アクセスランキングが当日の全記事中 1 位，月間でも 3 位となった。

参加機関名	相模女子大学，花園大学，二松学舎大学
共同研究員数	4 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
統計と機械学習による日本語史研究	**言語資源研究系 准教授**	**小木曽智信**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

言語資源研究系で基礎研究を行っている通時コーパスの構築には，さまざまな技術開発や研究手法の発展が必要とされる。技術開発の面では，形態素解析辞書こそ開発が進んでいるものの文節・長単位の解析は全く手つかずとなっている。また，歴史的資料は現代語と異なり，表記や語法の面で極めて多様であるため，濁点の自動付与や仮名遣いの整備などの形態素解析前のテキスト処理が必要となるほか，形態素解析辞書の分野適応が必要になっている。本プロジェクトの目的の一つは，自然言語処理技術を用いてこのような通時コーパス構築に必要な基盤を整備することである。さらに進んで，Oxford VSARPJ Corpus のアノテーションを活用し機械学習による構文情報の自動付与の可能性を探る。

研究手法の面では，従来の手作業による用例収集をベースとした方法を超えて，タグ付きコーパスから引き出した大量の用例をもとに統計的な処理を行う新しい研究手法が必要とされている。「茶器」などのコーパス利用ツールを歴史的資料に対応させて人文系研究者に利用しやすくするとともに，多変量解析等の手法を用いて実際の記述研究の成果としてまとめていくのがもう一つの目的である。

《2011 年度の主要な成果》

無濁点資料に対する濁点の自動付与技術を開発し国際学会で発表したほか，歴史的資料を対象とした形態素解析辞書の整備を進めた。これにより通時コーパス構築の進展に寄与した。

形態素解析済みコーパスを用いて日本語史研究を行うための環境整備を進め，コーパスとコロケーション強度等を用いた新しい手法による日本語史の研究を行い学会発表と論文執筆を行った。

参加機関名	成城大学，就実大学，奈良先端科学技術大学院大学，情報通信研究機構，オックスフォード大学
共同研究員数	8 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
テキストの多様性を捉える分類指標の策定	**言語資源研究系 准教授**	**柏野和佳子**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

大規模なコーパスを様々な学術研究や教育に活用するためには，テキストを所望の目的で分類できるように多くの情報が付与されていることが望ましい。欧米では，1 億語規模の BNC に対し，Lee（2001）が 70 種類（書き言葉 46 種，話し言葉 24 種）の言語使用域や，対象読者の性別や年齢層別，著者の属性等によって分類したものが知られている。書き言葉の使用域は，アカデミックか否か，人文科学・自然科学・医学・法律・技術・社会科学…か，エッセーかフィクションか手順書…か，手紙か新聞…か，等の観点で分類されている。

BCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』）は，構築の段階でメディア（書籍，新聞，雑誌，Web 等），NDC によるジャンル（総記・哲学・歴史・社会科学・自然科学・技術，工学・産業・芸術，美術・言語・文学）により分類され，著者の属性や，書籍については日本図書コード（C コード）による販売対象，発売形態等の情報が付与されている。よって，それらについては，Lee よりも詳細かつ正確な分類が構築時に実現していると言える。しかしながら，Lee がエッセーかフィクションか手順書…かという観点で分類を試みようとした，テキストの文体を捉えようとする分類情報が BCCWJ には不足していた。

そこで，本研究では，テキストの多種多様な文体的な特徴を捉えるための分類指標の設計と検証を行い，コーパス言語学，テキスト研究の発展に資する理論とデータとを提供することを目的とする。

コーパスの構築，および，コーパス言語学は，近年活況を帯びているが，テキストの文体的特徴に基づく分類指標の設計とデータの構築という本研究は，国内はもとより世界的にみても新規性，独創性は高い。

《2010 年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

・テキスト分類についての議論を，言語学，教育学，自然言語処理という様々な観点から議論を進めた。
・共同研究者の協力のもと，難易度に関して，計算機による自動分類と人手分類との比較の方法を具体化させ，新しい作業データの作成に着手することができた。

＜特に成果があがった点等＞

・前回のヒアリングにて，アノテーター間のカッパ係数を計測し，判断の一致度を調べるとよいとのアドバイスを受け，実施し，その調査結果と考察をまとめた。テキスト分類の意義と人手によるテキスト分類の困難さなどの問題点について，国際会議にて発表するという成果につなげることができた。

《2011 年度の主要な成果》

・昨年度まではプロジェクトリーダー主導のデータ作成を中心に進めていたが，2011 年度は，共同研究者主導の研究を複数開始することができ，研究会，ワークショップでの複数の成果発表につなげることができた。特に，難易度に関する人の判断と機械の判断の比較分析を行い，難易度は人による判断のゆれはあるが，多数決をとれば決まってくるということ，また，機械も一人の人としての精度があるということなどの，興味深い知見を導き出すことができた。

参加機関名	東京工業大学，名古屋大学，はこだて未来大学，早稲田大学
共同研究員数	7名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究	**言語資源研究系 准教授**	**山口　昌也**	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

文脈情報は，従来から，シソーラスの自動構築，多義語の曖昧性解消など自然言語処理のタスクにおいて利用されてきた。多くの研究では，「類似する文脈に出現する語は意味的にも類似している」という「分布仮説」を前提としており，文脈情報は一種の意味記述として利用されている。本研究プロジェクトでは，単語周辺の文脈情報から，複合的な言語要素（例：複合動詞）の意味記述（文脈情報）を合成的に導出する理論の確立を目指し，(1)（個々の）単語周辺の文脈情報と，複合的に用いられたときの文脈情報との関係の解明，(2) 文脈情報の表現方法などを含めた分布仮説の検証を行う。さらに，確立した理論の応用として，(a) 複合的な言語要素の意味合成処理を実現し，その結果を言語学的観点から検証する，(b) 日本語教育における複合動詞学習支援手法を開発する。

《2010年度の主要な成果》

＜プロジェクト全体の進捗状況等＞

・研究対象を日本語の複合動詞と定め，複合動詞とその構成要素の動詞間の格要素の対応関係を用例から自動的に認識する手法のプロトタイプを作成した。
・用例収集ツールの整備が徐々に進み，実際のデータで考案した手法を検証できるようになった。さらに，収集した結果を使って，提案手法の検証ができるようにした。

＜特に成果があがった点等＞

・許容しうる時間（4000 ～ 5000用例で3 ～ 4時間）で半自動的に特定の動詞の用例を収集し，大量の格フレームを作成できるようにした。
・実験を実施可能な量と質の用例が得られることを確認し，考案した手法を検証できるところまで研究を進めた。

《2011年度の主要な成果》

(1) Web用例収集ツールの改善，用例分析用ツールの整備，用例の収集，(2) 複合動詞・構成要素動詞間の関係分析，(3) 日本語教育の作文教育への基盤整備を行った。

(1) は，複合動詞の用例収集･分析を行う環境を構築し，複合動詞･構成動詞の用例集を構築した。また，用例集を簡単に検索，分析するために全文検索システム『ひまわり』の拡張を行った。用例集は今後3倍程度拡充する予定である。(2) では，収集した用例を用いた分析を行った。今年度は格要素の対応関係に着目して分析を行った。(3) では，対応関係分析結果，および，収集した用例集を日本語教育に応用するための基盤整備を目的として，作文支援システムを用いた作文授業を海外の二つの大学で行った。

参加機関名	学習院大学，名古屋学院大学，北陸先端科学技術大学院大学，麗澤大学，ワルシャワ大学
共同研究員数	8名

<table>
<tr><td rowspan="2">萌芽・発掘型プロジェクト</td><td colspan="2">プロジェクトリーダー</td><td rowspan="2">研究期間</td></tr>
<tr><td>所属・職名</td><td>氏　名</td></tr>
<tr><td>テキストにおける語彙の分布と文章構造</td><td>言語資源研究系
准教授</td><td>山崎　誠</td><td>2009.10-2012.9</td></tr>
<tr><td colspan="4">《研究目的及び特色》
本研究は，コーパス開発センターで構築が進められている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されているひとまとまりの完結したテキスト（複数）等を対象にして，語（内容語及び機能語）の出現状況と時間軸に沿って展開される文章の流れとを有機的に関連付けて動的に捉える観点を提案し，計量語彙論に基づく定量的手法と，語の出現状況及び文章構造・文章展開のモデル化とを通して，より実証的な文章論を開拓するものである。語彙調査に代表される従来の計量語彙論は，断片的なテキストの集合を扱っていたため，文脈から切り離された分析が中心であった。そのため，文章展開や文章構造など，まとまりのある文章が持つ特徴との関係を把握することが出来なかった。本研究では，テキストにおける語彙の量的構造と文章構造及び当該テキストの持つ特性（表現意図，ジャンル，文体等）との相関を調査・分析し，語彙に内包された文章構成機能を明らかにする。</td></tr>
<tr><td colspan="4">《2010 年度の主要な成果》
＜プロジェクト全体の進捗状況等＞
次の 2 点において，当初の計画の方向性を変えた。
(1) 分析目的の一つに「語彙的結束性」のという概念を加えた。
(2) 多義語の意味の使用状況の分析を行う必要上，必ずしもテキスト内の位置に寄らない分析の方法を取り入れた。
＜特に成果があがった点等＞
多義語を構成する意味の出現状況（ひとつのテキスト内での距離の測定）を日本語で具体的に分析した。
《2011 年度の主要な成果》
今年度は共同研究発表会を 2 回（ほか合同のワークショップ 1 回を予定）実施した。共同研究員が随筆，学術入門書，学術論文の 3 つのデータを共通利用データとしてそれぞれの観点から分析を行うため，共通の仕様を検討した。また，論文や学会で成果発表を行った。</td></tr>
<tr><td>参加機関名</td><td colspan="3">お茶の水女子大学，慶應義塾大学，実践女子短期大学，同志社大学，日本女子大学，北海道教育大学，国際交流基金，統計数理研究所</td></tr>
<tr><td>共同研究員数</td><td colspan="3">9 名</td></tr>
</table>

2　人間文化研究機構の連携研究等

人間文化研究機構では，人間文化研究の新たな領域を従来の枠組みを超えて創出し，先端的・国際的研究を展開するために，機構に所属する諸機関の間での連携研究など各種の事業を実施し，国立国語研究所もそれらの事業に参画している。

連携研究

人間文化研究機構を構成する個々の機関が培ってきた研究基盤と成果を，機関の枠を超えてつなぎ，補完的，有機的に結合させることで，新たな視座を開拓し，より高次なものに発展させようと企画，実施してきたのが連携研究である。

アジアにおける自然文化の重層的関係の歴史的解明

日本を含むアジア地域には，歴史的に形成された多様な文明と文化が存在する。とくに，文化はいわゆる自然とのかかわりのなかから生まれてきた。人間は自然からどのような恩恵を受け，あるいは災害や自然の脅威にどのように対処してきたのか。この問いに，国語研では言語世界から見た自然への認識と思想，言語表現の多様性と普遍性という側面から研究を推進している。

研究課題：言語分析による自然観・自然思想の研究

研究期間：2010 ～ 2014

・昔がたりにみる自然観・自然思想の解明（木部暢子，時空間変異研究系教授）

・河川流域の自然・人間社会と方言の分布（大西拓一郎，時空間変異研究系教授）

・鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査（窪薗晴夫，理論・構造研究系教授）

・Rendaku across Dialects（Timothy J. Vance，理論・構造研究系教授）

海外に移出した仮名写本の緊急調査

研究代表者：高田智和（理論・構造研究系准教授）

研究期間：2010，2011 ～ 2012

海外に移出した仮名写本（米国議会図書館蔵『源氏物語』）について，同図書館との連携のもと原本調査を行い，翻字本文・書誌情報などの基礎研究成果を，国内外の日本語学研究者・日本文学研究者へ速報的に提供している。

日本関連在外資料の調査研究

日本関連在外資料の国際共同研究は，欧米などにおける日本文化研究の比重低下の打開と，日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしている。本研究はオーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料のデジタル化，ならびにその資料の書き起しを行った上でアノテーションを作成するのと同時に，その資料を所蔵する機関との合意のもとに資料を公開することに目的としている。

・近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究

音声資料チーム「ハワイと北米へ渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」（朝日祥之，時空間変異研究系准教授）

研究資源の共有化

人間文化研究機構を構成する 6 研究機関のデータベースを横断検索が可能な統合検索システムに次のデータベースを提供している。

・ことばに関する新聞記事見出しデータベース

・蔵書目録（図書）データベース

3 外部資金による研究

○科学研究費補助金

2009 年度

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額（千円）（直接経費）
特定領域研究	山崎　誠	代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築	33,408
特定領域研究	田中　牧郎	言語政策に役立つ，コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用	7,600
特定領域研究	前川喜久雄	代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備	11,600
基盤研究（A）一般	杉戸　清樹	敬語と敬語意識の半世紀 ―愛知県岡崎市における第 3 次調査―	10,400
基盤研究（B）一般	大西拓一郎	地理情報システムに基づく言語地理学の再構築	3,600
基盤研究（B）一般	尾崎　喜光	国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究 ―関西方言と他方言の対照研究―	5,000
基盤研究（B）一般	金田　智子	「生活のための日本語」に関する基盤的研究：段階的発達の支援をめざして	3,500
基盤研究（C）一般	井上　優	日本語方言の終助詞の意味の類型に関する研究	1,100
基盤研究（C）一般	井上　文子	日本語方言における間投表現の使用の様相に関する研究	1,100
基盤研究（C）一般	田中　牧郎	「単語情報付きコーパス」を用いた近現代の語彙・語法史の研究	1,400
基盤研究（C）一般	小木曽智信	和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発	1,400
基盤研究（C）一般	小磯　花絵	書き言葉コーパスに基づくテキスト分類尺度の探索的研究	1,500
基盤研究（C）一般	三井はるみ	日本語諸方言における意味的隣接表現の文法体系への取り込みに関する研究	1,700
基盤研究（C）一般	山口　昌也	学習者の自発的学習と柔軟な運用を考慮した作文支援システムの実現	700
基盤研究（C）一般	柏野和佳子	辞書用例の記述仕様標準化のための実証研究	1,200
基盤研究（C）一般	山崎　誠	日本語のコロケーションを記述するための統計指標のコーパスによる検証	800
基盤研究（C）一般	吉田　雅子	明治期国語調査委員会資料と『日本言語地図』『方言文法全国地図』による分布解釈研究	700
若手研究（B）	佐野　大樹	日本語「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」測定法の設計	900
若手研究（B）	小椋　秀樹	漢字政策の改定が漢字使用に及ぼす影響に関する研究	1,300
若手研究（B）	金　愛蘭	20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化に関する調査研究	3,000

若手研究（B）	鑓水　兼貴	埼玉県における方言形成の構造に関する言語地理学的研究	1,300
若手研究（B）	齋藤　達哉	公共情報媒体としての広報紙を対象とした表記法の在り方に関する調査研究	1,700
若手研究（B）	朝日　祥之	樺太方言と北海道方言の言語変容に見られる関係についての調査研究	1,100
挑戦的萌芽研究	相澤　正夫	「福祉言語学」の創成・確立に資する研究モデルの探索	1,100
若手スタートアップ	宮内佐夜香	近世後期日本語逆説条件表現に関する記述的研究	350
特別研究員奨励費	影山　太郎（Shishir BHATTACHARJA）	文法と形態論における複合語形成の位置づけ	400

2010 年度

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額（千円）（直接経費）
特定領域研究	山崎　誠	代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築	17,500
特定領域研究	田中　牧郎	言語政策に役立つ，コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用	7,600
特定領域研究	前川喜久雄	代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備	19,700
基盤研究（A）一般	窪薗　晴夫	日本語のアクセントとアクセント類型論	10,800
基盤研究（B）一般	高田　智和	漢字字体変容の原理 ―敦煌文献から現代日本戸籍漢字まで―	4,000
基盤研究（B）一般	宇佐美　洋	学習者の日本語運用に対する日本人評価の類型化・モデル化に関する研究	6,600
基盤研究（B）一般	木部　暢子	N 型アクセントに関する総合的調査研究	4,000
基盤研究（C）一般	山口　昌也	学習者の自発的学習と柔軟な運用を考慮した作文支援システムの実現	1,100
基盤研究（C）一般	柏野和佳子	辞書用例の記述仕様標準化のための実証研究	700
基盤研究（C）一般	山崎　誠	日本語のコロケーションを記述するための統計指標のコーパスによる検証	1,000
基盤研究（C）一般	吉田　雅子	明治期国語調査委員会資料と『日本言語地図』『方言文法全国地図』による分布解釈研究	700
基盤研究（C）一般	井上　優	日本語方言の終助詞の意味の類型に関する研究	900
基盤研究（C）一般	井上　文子	日本語方言における間投表現の使用の様相に関する研究	1,500
基盤研究（C）一般	田中　牧郎	「単語情報付きコーパス」を用いた近現代の語彙・語法史の研究	1,000

基盤研究（C）一般	小木曽智信	和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発	900
基盤研究（C）一般	小磯　花絵	書き言葉コーパスに基づくテキスト分類尺度の探索的研究	1,000
基盤研究（C）一般	三井はるみ	日本語諸方言における意味的隣接表現の文法体系への取り込みに関する研究	800
基盤研究（C）一般	竹田　晃子	日本語方言オノマトペの記述モデル構築に関する研究	1,700
基盤研究（C）一般	上野　善道	南琉球諸方言要地アクセントの緊急調査研究	1,400
基盤研究（C）一般	飛田　良文	明治以降の文学作品に使用された外来語の実態研究	1,100
若手研究（B）	朝日　祥之	樺太方言と北海道方言の言語変容に見られる関係についての調査研究	1,100
若手研究（B）	佐野　大樹	日本語「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」測定法の設計	500
若手研究（B）	小椋　秀樹	漢字政策の改定が漢字使用に及ぼす影響に関する研究	900
若手研究（B）	金　愛蘭	20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化に関する調査研究	500
若手研究（B）	鑓水　兼貴	埼玉県における方言形成の構造に関する言語地理学的研究	800
若手研究（B）	中野　真樹	近代日本語「点字資料」を用いた仮名遣い改定史の調査研究	1,500
若手研究（B）	森　篤嗣	学習言語が教科内容の理解に及ぼす影響の研究	1,400
挑戦的萌芽研究	相澤　正夫	「福祉言語学」の創成・確立に資する研究モデルの探索	1,000
挑戦的萌芽研究	窪薗　晴夫	優れた言語学プログラム構築のための調査研究	1,400
研究活動スタート支援	ティモシー・バンス	現代日本語の音韻交替	1,210
研究成果公開促進費	新野　直哉	現代日本語における進行中の変化の研究	1,400
特別研究員奨励費	小川　晋史	琉球方言地域における標準語語彙を用いたプロソディーの継承・喪失・獲得過程の研究	900
特別研究員奨励費	影山　太郎（Shishir BHATTACHARJA）	文法と形態論における複合語形成の位置づけ	800
特別研究員奨励費	窪薗　晴夫（HWANG, Hyun Kyung）	フォーカスとイントネーションのインターフェースに関する日韓語対照研究	1,000

2011 年度

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額（千円）（直接経費）
基盤研究（A）一般	窪薗　晴夫	日本語のアクセントとアクセント類型論	8,800
基盤研究（A）一般	大西拓一郎	方言分布変化の詳細解明 ―変動実態の把握と理論の検証・構築―	9,100
基盤研究（B）一般	高田　智和	漢字字体変容の原理 ―敦煌文献から現代日本戸籍漢字まで―	3,400
基盤研究（B）一般	宇佐美　洋	学習者の日本語運用に対する日本人評価の類型化・モデル化に関する研究	2,200
基盤研究（B）一般	木部　暢子	N 型アクセントに関する総合的調査研究	4,700
基盤研究（C）一般	吉田　雅子	明治期国語調査委員会資料と『日本言語地図』『方言文法全国地図』による分布解釈研究	700
基盤研究（C）一般	井上　文子	日本語方言における間投表現の使用の様相に関する研究	700
基盤研究（C）一般	田中　牧郎	「単語情報付きコーパス」を用いた近現代の語彙・語法史の研究	900
基盤研究（C）一般	小木曽智信	和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発	1,000
基盤研究（C）一般	小磯　花絵	書き言葉コーパスに基づくテキスト分類尺度の探索的研究	800
基盤研究（C）一般	三井はるみ	日本語諸方言における意味的隣接表現の文法体系への取り込みに関する研究	800
基盤研究（C）一般	飛田　良文	明治以降の文学作品に使用された外来語の実態研究	1,100
基盤研究（C）一般	竹田　晃子	日本語方言オノマトペの記述モデル構築に関する研究	700
基盤研究（C）一般	上野　善道	南琉球諸方言要地アクセントの緊急調査研究	1,000
基盤研究（C）一般	前川喜久雄	自発音声データの定量的解析による日本語韻律構造理論の再構築	1,400
基盤研究（C）一般	柏野和佳子	コーパス分析に基づく辞書の位相情報の精緻化	1,300
基盤研究（C）一般	藤本　雅子	促音の発声・調音に関わる音声生理学的研究	1,900
若手研究（B）	小椋　秀樹	漢字政策の改定が漢字使用に及ぼす影響に関する研究	700
若手研究（B）	鑓水　兼貴	埼玉県における方言形成の構造に関する言語地理学的研究	800
若手研究（B）	中野　真樹	近代日本語「点字資料」を用いた仮名遣い改定史の調査研究	700
若手研究（B）	朝日　祥之	サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性に関する社会言語学的研究	1,500

若手研究（B）	儀利古幹雄	日本語アクセントの平板化に関する実証的研究	800
若手研究（B）	中上　亜樹	第二言語習得理論に基づく日本語指導法の実証的研究 ―インプット重視の処理指導の実践	700
若手研究（B）	金　愛蘭	基本外来語の談話構成機能に関するコーパス言語学的研究	1,200
挑戦的萌芽研究	相澤　正夫	「福祉言語学」の創成・確立に資する研究モデルの探索	900
研究活動スタート支援	ティモシー・バンス	現代日本語の音韻交替	1,110
研究成果公開促進費	木部　暢子	危機方言データベース	4,700
特別研究員奨励費	窪薗　晴夫（HWANG, Hyun Kyung）	フォーカスとイントネーションのインターフェースに関する日韓語対照研究	900

○受託研究　2010 年度

「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」（木部　暢子）文化庁 2,888 千円

4 刊行物

『国語研プロジェクトレビュー』（NINJAL Project Review）

個々の共同研究プロジェクトの研究活動の総体を展望することによって国語研全体の動向を展望する。年 3 回程度，オンラインで刊行し，まとめたものを冊子体で発行している。オンライン版は国語研 Web サイトで公開し，冊子体は全国の大学図書館等で利用できる。

○第 1 号（2010 年 5 月）

影山太郎

「『国語研プロジェクトレビュー』〈NINJAL Project Review〉の刊行にあたって」pp.1-2.

国際学術フォーラム「日本語研究の将来展望」（2009 年 10 月 10 日～ 12 日開催）プログラム，pp.3

影山太郎

「複合語のタイポロジーと日本語の特質 ―「日本語は特殊でない」というけれど―」pp.5–27.

Bernard Comrie

“Japanese and the Other Languages of the World”, pp.29–45.

○第 2 号（2010 年 7 月）

国際学術フォーラム「日本語教育における教育と研究の融合 ―過去と未来を繋ぐ―」（2010 年 3 月 21 日開催）プログラム，pp.1

Rod Ellis

“Does Explicit Grammar Instruction Work?”, pp.3-22.

木部暢子

「方言アクセントの誕生」pp.23-35.

○第 3 号（2010 年 3 月）

Andrej L. Malchukov

“Towards a Typology of Transitivity Splits”, pp.1-15.

窪薗晴夫

「語形成と音韻構造 ―短縮語形成のメカニズム―」pp.17-34.

○第 4 号（2011 年 3 月）

朱 京偉

「蘭学資料の三字漢語についての考察 ―明治期の三字漢語とのつながりを求めて」pp.1-25.

Armin Mester & Junko Ito

“A Note on Unstressability”, pp.27–44.

○第 5 号（2011 年 6 月）

ウェスリー・M・ヤコブセン

「日本語における時間と現実性の相関関係 ―「仮定性」の意味的根源を探って―」pp.1-19.

前川喜久雄

「/z/ の調音様式の変異 ―コーパスによる分析―」pp.21-45.

○第 6 号（2011 年 10 月）

木部暢子

「『国語研プロジェクトレビュー』（NINJAL Project Review）のリニューアルにあたって」p.1

〈共同研究プロジェクト紹介〉

窪薗晴夫

「理論・構造研究系の共同研究プロジェクト」pp.1-2.

窪薗晴夫

「日本語の促音とアクセント」pp.3-15.

影山太郎

「デキゴトの叙述とモノの叙述」pp.17-25.

横山詔一

「言語変化は経年調査データから予測可能か？」pp.27-37.

〈受賞紹介〉

横山詔一，朝日祥之

「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」pp.39-42.

高田智和

「文字コードの標準化 ―ISO/IEC 10646 の開発―」pp.43-45.

〈著書紹介〉

プラシャント・パルデシ

堀江 薫, プラシャント･パルデシ 著／山梨正明 編『言語のタイポロジー ―認知類型論のアプローチ―』研究社，pp.47-49.

〈論文紹介〉

窪薗晴夫

Haruo Kubozono“Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese”*Lingua* 120: 2323-2335 (2010), pp.51-54.

○第 7 号（2012 年 2 月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

角田太作

「言語対照研究系の共同研究プロジェクト」pp.1-2.

角田太作

「人魚構文と名詞の文法化」pp.3-11.

角田太作

「節連接の五段階」pp.13-21.

プラシャント・パルデシ

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」pp.23-29.

〈受賞紹介〉

小木曽智信

「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」pp.31-34.

宇佐美洋

「言語の研究から，言語を使う人間の研究へ」pp.35-40.

小川晋史

「今帰仁方言のアクセント体系」pp.41-43.

新野直哉

『現代日本語における進行中の変化の研究 ―「誤用」「気づかない変化」を中心に―』pp.45-48.

〈論文紹介〉

下地賀代子

「石垣・宮良方言の係助辞 -du の文法的意味役割」,『日本語文法』10（2）：143-159（2010）pp.49-52.

『国立国語研究所論集』（NINJAL Research Papers）

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として，各年度に 2 回（5 月と 11 月），オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

○第 1 号（2011 年 5 月）

影山太郎

『国立国語研究所論集』（NINJAL Research Papers）の刊行にあたって

儀利古幹雄

「東京方言におけるアクセントの平板化 ―外来語複合名詞アクセントの記述―」pp.1-19.

井上 優

「動的述語のシタの二義性について」pp.21-34.

下地賀代子

「南琉球・多良間島方言の基本的な ja 構文について」pp.35-51.

角田太作

「人魚構文 : 日本語学から一般言語学への貢献」pp.53-75.

山泉 実

“Left-Dislocation in Japanese and Information Structure Theory”, pp.77-92.

朱 京偉

「在華宣教師の洋学資料に見える三字語 ―蘭学資料との対照を兼ねて―」pp.93-112.

○第 2 号（2011 年 11 月）

儀利古幹雄，大下貴央，窪薗晴夫

「語末が「ズ」であるチーム名・グループ名のアクセント分析」pp.1-18.

江田すみれ

「「ている」の論理的な文章中での使われ方 ―「効力持続」「長期的な動作継続」を重点にして―」pp.19-47.

木部暢子

「天草市本渡方言のアクセント ―動詞句のアクセント―」pp.49-76.

奥野由紀子，金 玄珠

「漢字圏学習者の「の」の脱落における言語転移の様相 ―「の」「의」「的」の対応関係に着目して―」pp.77-89.

須永哲矢

「コロケーション強度を用いた中古語の語認定」pp.91-106.

角田三枝

「モノノとナイマデモ：節連接の五つのレベルにおける逆接と譲歩条件」pp.107-134.

上野善道

「与那国方言動詞活用形のアクセント資料（2）」pp.135-164.

朱 京偉

「蘭学資料の四字漢語についての考察 ―語構成パターンと語基の性質を中心に―」pp.165-184.

NINJAL フォーラムシリーズ

一般の方向けの講演会として「NINJAL フォーラム」を年に数回開催し，その内容を「NINJAL フォーラムシリーズ」として公開している。

○ NINJAL フォーラムシリーズ『日本の方言の多様性を守るために』（2011 年 3 月 31 日）

（2010 年 12 月 18 日に開催された国立国語研究所第 3 回 NINJAL フォーラムでの講演を文字化したもの）

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。日本の方言も例外ではない。もし，ことばの地域差がなくなってしまったら，私たちの生活は，さぞかし味気ないものになってしまうことだろう。このフォーラムでは，4 人のパネリストがそれぞれ，奄美・沖縄方言を長年，調査・研究している立場から，子供たちに方言を伝えるための活動を行っている立場から，奄美・沖縄方言を研究している外国人の立場から，外国で少数民族の言語の調査・研究を行っている立場から，各言語・方言が置かれている現状を報告し，ことばの多様性を守ることの重要性について考えてみた。

《目次》

まえがき　影山太郎　p.1
はじめに　p.3
講演 1　狩俣繁久（琉球大学）
「琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機」pp.4-11.
講演 2　菊 秀史（与論民族村経営〔私設民俗資料館〕）
「与論の言葉で話そう ―バイリンガル島を目指して―」pp.12-22.
講演 3　トマ・ペラール（日本学術振興会外国人特別研究員）
「消えてゆく小さな島のことば」pp.24-31.
講演 4　呉人 恵（富山大学）
「辺境から発信する言語学 ―シベリアのコリャーク語は今―」pp.32-45.
講演 5　木部暢子（国立国語研究所）
「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究」pp.46-52.
パネルディスカッション
（司会：木部暢子，パネル：狩俣繁久，菊 秀史，トマ・ペラール，呉人 恵）pp.53-61.

5　2011 年度までに公開したコーパス・データベース

Web サイトにおいて，共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベースを公開している。2011 年度までに下記資料を公開している。

データベース

・ことばに関する新聞記事見出しデータベース

1949 年から 2009 年 3 月までの新聞記事の切り抜きを電子化し，検索できるようにしたもの。2009 年以前からの継続公開。

・日本語研究・日本語教育文献データベース

2009 年以前に刊行された『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の中から研究論文文献の情報を抜き出してデータベース化するとともに，2009 年以降の学術雑誌，大学紀要，論文集などに掲載された日本語学・日本語教育に関する論文情報を毎年追加し，年 3 回程度更新している。

・雑誌『国語学』全文データベース

国語学会（現在, 日本語学会）の機関誌『国語学』全巻（第 1 輯（昭和 23 年）～終刊第 219 号（平成 16 年））の全文テキストデータベース。

・国立国語研究所蔵書目録データベース

日本で唯一，日本語及び日本語教育に関する研究文献をほぼ網羅的に収集している本研究所の研図書室に所蔵された全図書が検索できるデータベース。

KOTONOHA 計画によるコーパス等

日本語の書き言葉や話し言葉を，その実態を調べることができるように電子化したコーパス（言葉のデータベース）。豊富な情報を付加し，検索ツールとともに提供している。

・現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

現代の書き言葉の縮図となるように設計された 1 億語をおさめる。次の検索方法を提供している。

・少納言（オンライン利用。登録不要）

文字列検索で，簡単な検索ができる。例文や出典情報は，500 件まで表示。

・中納言（オンライン利用。要登録）

本文を単語に区切り見出し語や品詞などの情報が付与されたコーパスが検索できる。前後の単語や品詞などを指定した高度な検索も可能。

・DVD 版（要申し込み。アカデミック利用または一般利用）

コーパスのすべてのデータを収録。プログラムを組んで分析する専門家向き。

・日本語話し言葉コーパス（CSJ）

講演やスピーチなどの独話について，音声，転記テキスト，それらへの豊富な付加情報を収める。

・形態素解析辞書 UniDic

コーパスに形態論情報（単語の情報）を付与するための，コンピュータ用の辞書。解析器とともに用いることで，電子テキストに自動的に単語情報を付与することができる。対象とするコーパスの時代別に 3 種を公開。

UniDic-MeCab（現代語用），中古和文 UniDic，近代文語 UniDic

・コーパス検索ツール

・全文検索システム『ひまわり』

コーパスを高速に検索し，前後の文脈や出典の情報とともに，閲覧できるシステム。パソコンに

インストールして利用。

・『ひまわり』支援ツール

既存の電子テキストや自作のコーパスを，『ひまわり』で検索できるようにするツール。

・『たんぽぽ』，『プリズム』

構造化された電子テキストから情報を抽出し検索するツール。

・作文支援システム TEachOtherS

学習者と教師が教え合いながら作文するのを支援する，添削システム。

・『分類語彙表増補改訂版』（研究用データ）

語を意味によって分類した『分類語彙表』の電子データ。見出し語や分類番号などを，データベースソフトに取り込める csv 形式で公開。

方言・言語生活の調査研究

・日本言語地図

1966 年～ 1974 年にかけて刊行した『日本言語地図』に掲載された全地図の画像を PDF 形式で公開したもの。

・方言文法全国地図

1989 年～ 2006 年に刊行した『方言文法全国地図』所載の全地図の画像を PDF で公開したもの。

・方言研究の部屋

『方言文法全国地図』の作成元である各地点の回答語形ならびに地図上の見出し語形のデータ，ならびに地図作成のためのプログラムを公開。

・全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」

日本語教育に関する研究・資料等

・研究用データ（要会員登録）

・日本語学習者会話データベース

・日本語学習者会話ストラテジーデータ

・言語行動意識調査

・名大会話コーパス

・日本語学習者会話データベース 縦断調査編

・日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究

その他

・外来語言い換え提案

・「病院の言葉」を分かりやすくする提案

・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表

・「学校の中の敬語」調査（アンケート調査）のデータ公開

・国際社会における日本語についての総合的研究（新プロ「日本語」）

・X 線映画「日本語の発音」

・基礎日本語活用辞典（インドネシア語版）

・「簡約日本語」に関する研究

6　研究成果の発信と普及

国語研では，研究成果を社会に発信・還元するために，各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは専門家向けのものを挙げる。

A．国際シンポジウム

国語研が主体となって実施する研究や，他機関との連携研究による優れた研究成果のうち，時宜を得た課題を取り上げ，海外からの専門家も交えて，論旨を深めながら学術界に公表するため，国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をしている。

Ⅰ．NINJAL 国際シンポジウム

○NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2011)

2011 年 12 月 10 日～ 14 日（京都大学）

Session 1

〔Invited lecture 1〕

Jeroen van de Weijer (Shanghai International Studies University)

“Rendaku in the combined model”

John Kupchik (Kyoto University, JSPS)

“Rendaku as a rhythmic stabilizer in Eastern Old Japanese poetry”

Session 2

Mark Irwin (Yamagata University)

“Rendaku dampening and prefixes”

Mutsuko Ihara, Katsuo Tamaoka and Hyunjung Lim (Chiba University/Nagoya university/Tamaguchi Prefectural University)

“Rendaku and markedness: Phonetic and phonological effects”

Shigeto Kawahara (Rutgers University)

“Lyman's Law is active in loan and nonce words: Evidence from judgement studies”

Session 3

〔Invited lecture 2〕

Yutaka Suzuki (Bunkyo Gakuin University)

“The history of Rendaku research - How Lyman's law has been accepted”

Session 4

〔Invited lecture 3〕

John Kingston and Shigeto Kawahara (University of Massachusetts at Amherst/Rutgers University)

“The phonological consequences of geminate phonetics”

Session 5

Feng-fan Hsieh and Yueh-chin Chang (National Tsing Hua University)

“Gemination in Taiwanese diminutives: A typological anomaly?”

Masako Fujimoto (NINJAL)

“Physiological characteristics of Sokuon: A preliminary study”

Wayne P. Lawrence (The University of Auckland)

"Geminate plosives in Japanese and Ryukyuan - A phonological perspective on a phonetic difference"

Session 6

Ranjan Sen (University of Sheffield)

"The Littera-rule: Inverse compensatory lengthening in Latin"

Somdev Kar (IIT Popar)

"Gemination before liquids in Bangla"

Shashikanta Tarai (IIT Madras)

"Role of gemination and degemination in the adaptation of loanwords:A study of English loanwords in Japanese and Arabic loanwords in Odia"

Poster session 1

1. Mizuki Miyashita (The University of Montana)
   "Phonetics-phonology of geminate and triplet consonants in Blackfoot"
2. Setyo Prasiyanto Cahyono and Raden Arief Nugroho (Dian Nuswantoro University)
   "Errors in pronunciation of final stop consonants by Indonesian EFL"
3. Yasushi Otaki (Tokyo University of Foreign Studies)
   "A diachronic account of consonant gemination in Japanese"
4. Yutaka Sato, Mahoko Kato and Reiko Mazuka (RIKEN BSI/RIKEN BSI/ RIKEN BSI, Duke University)
   "Development of single/geminate obstruent discrimination by Japanese infants"
5. Saris Phoongprasertying and Phanintra Teeranon (Mae Fah Luang University)
   "Students' reflection stimulated through cross learning session to drive change of learning activities"
6. Miki Taniguchi-Tagashira (Tokai University)
   "Analysis of tone and function on conjunctions using the corpus of spontaneous Japanese"
7. Takehiro Shioda (NHK Broadcasting Culture Research Institute)
   "The age difference of Rendaku on nationwide surveys"
8. Emil Tanev (Osaka University)
   "World knowledge and competition in the information-prosody interface"

Session 7

Emiko Kaneko, Ian Wilson and Yusuke Abe (University of Aizu)

"Gemination of final consonants in English nonsense words:The effects of orthography, vowel duration, and borrowers' L2 proficiency on loanword adaptation"

Itsue Kawagoe and Akiko Takemura (Kyoto Sangyo University/NINJAL)

"Geminate perception of English-like words by Japanese native speakers:Differences in the borrowed forms of "chapter" and "Chaplin""

Toshiyuki Tabata (Chiba University)

"Geminate nature of [eng] in Japanese loanwords"

Session 8

〔Invited lecture 4〕

Rachid Ridouane (CNRS, University of paris 3)

"The phonetics and phonology of geminate consonants"

Session 9

Mahjoub Zirak and Peter M. Skaer (Hiroshima University)

"Evidence of gemination in Persian"

Mohammed Nour Yousef Abu-Guba (Sharjar University)

"Gemination in English loanwords in Jordanian Arabic"

Session 10

Wencui Zhou and Carlos Gussenhoven(Max Planck Institute for Psycholinguistics/Radboud University Nijmegen, Queen Mary University of London)

"Exploiting the effect of pitch contour shape on perceived duration"

Yoko Mori, Tomoko Hori and Donna Erickson (Doshisha University/Tokyo National College of Technology/Showa Music University)

"The roles of duration, F0, F1, and jaw displacement in the realization of accent for English vs. Japanese speakers"

Mafuyu Kitahara, Ken'ya Nishikawa, Yosuke Igarashi and Reiko Mazuka (Riken BSI, Waseda University/RIKEN BSI/RIKEN BSI, Hiroshima University/RIKEN BSI, Duke University)

"Delayed-fall of pitch accents in Japanese Infant-Directed and Adult-Directed Speech"

Session 11

〔Invited lecture 5〕

Stuart Davis (Indiana University)

"Surveying strategies of loanword prosody"

Dongmyung Lee (Dong-A University)

"Tone patterns of the loanword compounds in South Kyungsang Korean"

Session 12

Zhuting Chang and Dianne Bradley (CUNY Graduate Center)

"Tonal assignment for English loanwords in Mandarin: An experimental approach"

Karen Huang (University of Hawaii)

"Another look at the prosody of English loanwords in Taiwan Mandarin – A case study of an online forum"

Siu-lun Lee & Chen Yongyin (The Chinese University of Hong Kong)

"Tonal structure and stress patterns of English loanwords in Cantonese and in Japanese"

Session 13

Haruo Kubozono and Mikio Giriko (NINJAL)

"Where does loanword prosody come from? Analysis of alphabetic acronyms in Japanese dialects"

Shin'ichi Tanaka (Kobe University)

"Syllable weight, word length and compound accentuation in Japanese"

Yuki Asano and Bettina Braun (University of Konstanz)

"Integrating lexical and post-lexical suprasegmental information in native and non-native Japanese"

Poster session 2

1. Tetsuo Nishihara (Miyagi University of Education)

"On the stress placement in blending phonological headedness"

2. Yoko Saikachi, Mafuyu Kitahara, Ken'ya Nishikawa, Ai Kanato and Reiko Mazuka (RIKEN BSI/RIKEN BSI, Waseda University/RIKEN BSI/Waseda University/RIKEN BSI, Duke University)

"Acoustic analysis of lexical pitch accent in Japanese Infant-Directed speech"

3. Tokiko Okuma (McGill University)

"L2 acquisition of Japanese compound noun accent rules"

4. Mariko Sugahara (Doshisha University)

"Variations in the shiki domain formation of Kinki Japanese compound words: A pilot study"

5. Si Chen and Caroline Wiltshire (University of Florida)

"Differences of tone representation between younger and older speakers of Nanjing dialect"

6. Anastasia Karlsson and Arthur Holmer (Lund University)

"Pragmatic function of low boundary tone in Puyuma: Question intonation and beyond"

7. Toshio Matsuura (Hokusei Gakuen University)

"Question prosody and intonational phrasing in Fukuoka Japanese"

Session 14

Carlos Gussenhoven (Radboud University Nijmegen, Queen Mary University of London)

"You take the High Rise and I take the Low Rise. On the fate of two question intonations in Dutch dialects"

〔Invited lecture 6〕

Nobuko Kibe (NINJAL)

"Intonation at the end of interrogative sentences in Japanese dialects"

Session 15

〔Invited lecture 7〕

Annie Rialland (CNRS, University of Paris 3)

"The African "Lax" question prosody: Its realizations and areal distribution"

Bruce Connell, Elven Koo, Will Bennett and Ebitare Obikudo (York University/University of Toronto/Rutgers University/University of Port Harcourt)

"Question prosody in two Nigerian languages"

Session 16

Hyun Kyung Hwang (NINJAL/JSPS)

"Pre-and post-focal compression and question prosody"

Nicholas Bacuez (The University of Texas at Austin)

"Linguistic vagueness: Applying soft-computing to closed questions prosody"

Kenji Yoshida (Indiana University)

"Phonetic evidence for the three phonological pitch levels in Japanese dialects"

Session 17

Junko Ito and Armin Mester (UC Santa Cruz, ICU/UC Santa Cruz, NINJAL)

"Non-prominent positions"

Hisao Tokizaki (Sapporo University)

"Japanese as an accent and stress language"

James Byrnes (University of Tronto)

"Towards a universal framework of pitch accent languages"

Session 18

Radwa Fathi (Universite Paris 7/LLF-CNRS)

"Length, duration and some other prosodic aspects of Colloquial Egyptian Arabic (CEA)"

Yasunori Takahashi (Tokyo University of Foreign Studies/JSPS)

"Effects of morpho-syntactic and phonetic factors on two tone sandhi in Shanghai Chinese"

Shigeki Kaji (Kyoto University)

"Lokolé, the talking drum of the Mongo"

Ⅱ．その他の国際会議

○国際学術研究集会：漢字漢語研究の新次元

2010 年 7 月 30 日（国立国語研究所）

ここ十年来，漢字漢語研究が目覚ましい進展を見せ，数多くの成果が蓄積されてきた。この研究集会では，漢字漢語研究の第一線に携わってきた研究者を招き，漢字漢語研究の歩みを顧みながら，新しい情報の提供や今後の課題と展開について語り合った。

PART Ⅰ　司会：宮島達夫（国立国語研究所名誉所員）

1. 日中漢語語基の意味と造語力（荒川清秀・愛知大学）
2. 日中における新漢語の創出 ―語形成論からのアプローチ（沈 国威・関西大学）

PART Ⅱ　司会：笹原宏之（早稲田大学）

3. 蘭学資料に見える三字語 ―漢訳洋書との対照を兼ねて（朱 京偉・国立国語研究所客員教授）
4.「新漢語」とはなにか ―漢籍出典を有する語を中心に（陳 力衛・成城大学）
5. 韓国語の近代新漢語研究における諸問題（李 漢燮・高麗大学）

PART Ⅲ　司会：山下喜代（青山学院大学）

6. 雑誌コーパスでとらえる明治・大正期の漢語の変動（田中牧郎・国立国語研究所）
7. 現代漢語データベースからみえてくるもの（野村雅昭・国立国語研究所名誉所員）

○ International Syimposium on Accent and Tone 2010（ISAT 2010）

2010 年 12 月 19 日～ 20 日（国立国語研究所）

国内および海外から，第一線で活躍するアクセントやトーンの研究者を迎え，11 の口頭発表および 20 のポスター発表からなる国際シンポジウムを開催した。

December 19 (Sun)

Session　1

Harry van der Hulst (University of Connecticut)

"Typology of pitch accent systems"

Zendo Uwano (NINJAL)

"Types of accent kernels and their geographical distribution in Japanese"

Session　2

Tetsuo Nitta (Kanazawa University)

"On the accent of the Shiramine dialect"

Haruo Kubozono (NINJAL)

"Accent of the Koshikijima dialect"

Session　3

Yosuke Igarashi (Hiroshima University)

"Typology of prosodic phrasing in Japanese dialects from a cross-linguistic perspective"

Carlos Gussenhoven (Radboud University Nijimegen)

"A typology of tones, with reference to the intonation of some varieties of English"

December 20 (Mon)

Session 4

José I. Hualde (University of Illinois, at Urbana-Champaign)

"Basque prosody"

Ryan Bennett and Robert Henderson (University of California Santa Cruz)

"Accent of Uspanteko, a Mayan language"

Yeonju Lee (Hokkaido University)

"The accent system and phrasal intonation in Middle Korean as compared with the accent systems and Modern Kyeongsang dialects"

Session 5

Poster presentations

Group A

1. Hyesun Cho (Seoul National University)
   "Phonologically-conditioned variations in tonal timing in Tokyo Japanese"
2. Mikio Giriko, Takao Ohshita and Haruo Kubozono (NINJAL / Kobe University / NINJAL)
   "On the accent of the plural morpheme [zu] in Japanese: The emergence of the unmarked"
3. Hyun Kyung Hwang (JSPS)
   "Overriding Syntactic Islands with Prosodically Marked Wh-scope"
4. Shinichiro Ishihara (Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main)
   "Intonation of wh-questions with lexically unaccented wh-phrases"
5. Masahiko Masuda (Kyushu University)
   "Tone sandhi in Suzhou Chinese"
6. Toshio Matsuura (Hokusei Gakuen University)
   "An acoustic-phonetic investigation of word tone in Nagasaki Japanese"
7. Tatsuyuki Mimura (Kogakuin University)
   "Prosody of the compounds in the Sandnes dialect of Norwegian: A descriptive study"
8. Dongmyung Lee (Dong-A University)
   "On accentless words in South Kyungsang Korean"
9. José Joaquín Atria, Takuya Kimura, Hirotaka Sensui, Miyuki Takasawa and Atsuko Toyomaru (Tokyo University of Foreign Studies / Seisen University / Nanzan University / Waseda University / Takushoku University)
   "Influence of sentence intonation in the perception of Spanish accent position by Japanese learners"
10. Shuichiro Nakao (Kyoto University)
    "'Split prosody' in Juba Arabic, an Arabic-based pidgin"

Group B

1. Mariko Sugahara (Doshisha University)
   "The perception of English stress: English speakers vs. Japanese speakers"

2. Izumi Takiguchi (Sophia University)
"Effects of pitch cues on the identification of vowel length in L2 Japanese"
3. Akiko Takemura (Kobe University)
" F Tonal change in Kagoshima Japanese: the case of noun+ga (nominative)"
4. Hajime Takeyasu and Mikio Giriko (Mie University/NINJAL)
"Effects of the lexical accent on the perception of geminate stops in Japanese"
5. Timothy J. Vance (NINJAL)
"Lyman's description of the late 19th-century Tokyo accent system"
6. Kyoko Yamaguchi (The University of Tokyo)
"Deaccenting morphemes in Japanese"
7. Tetsuo Nishihara (Miyagi University of Education)
"On phonological head and stress placement: From a variety of viewpoints"
8. Noa Nishimoto (Kyoto University)
"Morphological derivation and stress shift in the Tandroy dialect of Malagasy"
9. Markus Rude (Tsukuba University)
"Raising awareness on accentuation and its meaning among students of German:The influence of symbolic vs. geometric visualizations of sentence stress in teaching materials"
10. Hisao Tokizaki (Sapporo University)
"Prominence location in languages with tone and pitch accent"

Session 6

Tomas Riad (Stockholm University)
"Culminativity in Swedish in comparison with Japanese, Basque and Greek"
René Kager (Utrecht University)
"Typology of stress language: with special reference to stress windows"

General discussion

○International Symposium:Interdisciplinary approaches to oral history data
2011 年 8 月 28 日（ハワイ大学マノア校）

Panel 1: Purpose of the Symposium
Yoshiyuki Asahi (National Institute for Japanese Language and Linguistics)
"Why use oral history records for linguistic studies?"

Panel 2: Oral History Records in Hawai'i
Warren and Michiko Nishimoto (University of Hawai'i at Mānoa)
"Oral History Interviews with Japanese in Hawai'i"
Brian Niiya (Japanese Cultural Center of Hawai'i)
"Resources in the Collection of the Japanese Cultural Center of Hawai'i"
Yosihiko Sinoto (Bishop Museum)
"Japanese Immigrant Material Collections in the Bishop Museum"

Panel 3: History of Japanese Immigrants and Oral Records
Kosuke Harayama (National Museum of Japanese History)
"Rethinking exhibitions of Japanese - American immigration history: Learning from our museum's special exhibition experiences"

Panel 4: Influence of Japanese Language in Hawai'i

Yoshihiko Asahi, Gavin Furukawa and Mie Hiramoto (National Institute for Japanese Language and Linguistics, University of Hawai'i at Mānoa and National University of Singapore)

"Japanese language in Hawai'i"

Panel 5: Research Based on Oral History Data

Katie Drager (University of Hawai'i at Mānoa)

"Using Oral History Data to Study Language Change: Examples from Māori, English, and... Japanese?"

Timothy Vance (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

"Rendaku in non – Tokyo dialects and in the Japanese of immigrants to Hawai'i"

Commentary & discussion

Toyotomi Morimoto (Waseda University)

Open-floor discussion

B．研究系の合同発表会

研究系単位の合同発表会を次のように開催した。

理論・構造研究系

○プロジェクト研究成果合同発表会

2012 年 2 月 19 日（国立国語研究所）

影山太郎，岸本秀樹，佐々木冠

「日本語レキシコンの特性 ―動詞の自他と項交替―」

窪薗晴夫

「借用語プロソディーと方言のアクセント変化」

ティモシー・J・バンス，マーク・アーウィン

「連濁事典と連濁データベース」

横山詔一

「言語変化は経年調査データから予測可能か？」

井上史雄

「岡崎敬語の現代史と世界の敬語史」

村杉恵子

「幼児言語から探る文法のメカニズム」

益岡隆志

「複文研究へのアプローチ ―接続形式をめぐって―」

ポスター発表：

松田謙次郎

「岡崎敬語調査トレンドサンプルの分析」

玉岡賀津雄，伊藤たかね，酒井 弘

"Is the Base Structure of a Sentence Shared by Its Corresponding Noun Phrase?"

小林由紀，杉岡洋子，伊藤たかね

「日本語の動詞活用における記憶と演算：事情関連電位計測の結果から」

松浦年男
「福岡方言におけるイントネーション句境界の音響特徴」
竹安 大
“Effects of the Duration of the Preceding Syllable on the Perception of Geminate Stops in Japanese”
儀利古幹雄
「東京方言におけるアクセントの平板化：外来語複合名詞アクセントの分析」
高田智和
「訓点資料の解読と構造化記述」
ティモシー・J・バンス
“Rendaku in a Dialect that Retains Prenasalization: Kahoku-chō, Yamagata”
三井はるみ，鑓水兼貴
「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」
中村 隆
「共通語使用割合の変化に対する年齢・時代・世代効果 ―第 1 次～第 3 次鶴岡言語調査の結果から―」
阿部貴人，前田忠彦，米田正人
「第 4 回鶴岡調査の概要」
神崎享子
「複合動詞データベースの構築に向けて」
菅原真理
“Variations in the Shiki Domain Formation of Kinki Japanese Compound Words: A Pilot Study”
大滝靖司
「借用語における促音化の通時的解釈」
ホワン・ヒョンギョン
「Distinct Types of Focus and WH-Question Intonation」
松井理直
「無声摩擦成分の知覚様式と借用語における無声摩擦促音の抑制について」
小磯花絵
「会話と独話の句末境界音調の比較」
當山日出夫
「日本における『白氏文集』「長恨歌」の漢字字体 ―写本から版本へ―」
浅井 淳
“A Feature Mapping for Rendaku Occurrences”
岸本秀樹
「日本語の節の投射：等位節と主節不定詞」
村上敬一
「鶴岡方言と九州方言」
間淵洋子
「コーパス構築における類似字形の扱い」

時空間変異研究系

○合同発表会 Japanese Language Variation and Change Conference 2012

2012 年 3 月 20 日（国立国語研究所）

招待講演

Peter Trudgill

“Mature linguistic phenomena and societies of intimates”

口頭発表：

下地理則（群馬県立女子大学）

「3 点セットの作成 ―日本の危機方言研究の新たな一歩に向けて」

大西拓一郎（国立国語研究所）

「言語変化と分布変化」

田中ゆかり（日本大学），前田忠彦（統計数理研究所）

「全国方言意識調査の話者分類に基づく地域類型化の試み」

新野直哉（国立国語研究所）

「「“全然”＋肯定」に関する日本語学研究者の言語規範意識」

朝日祥之（国立国語研究所）

「移民社会の言語変化研究資料としてのオーラルヒストリー資料」

真田信治（奈良大学）

「宜蘭クレオールの形成とその実態」

ポスター発表：

新井文人（神戸松蔭女子学院大学大学院生）

「「い抜き」に係わる言語的・社会的要因の影響度」

清水勇吉（徳島大学大学院生），松田将平（徳島大学学生）

「九州方言の変異と変化 ―蟹の甲羅，柿のへた，かさぶたの言語地図を例に―」

平塚雄亮（大阪大学大学院生）

「高年層のことばからみえてくるもの ―福岡市方言を例に―」

小野原彩香（同志社大学大学院生）

「岐阜県旧徳山村における地理的ネットワーク分析と言語的距離」

大槻知世（東京大学学生）

「津軽方言の推量形式「ビョン」」

太田一郎（鹿児島大学）他 4 名

「日本語方言の音調レベルの変異について」

中澤光平（東京大学大学院生）

「淡路島方言におけるアクセントの地域差と歴史―京阪神方言，四国方言との対照―」

言語資源研究系

○第 1 回コーパス日本学ワークショップ

2012 年 3 月 5 日～ 6 日（国立国語研究所）

口頭発表（1）

服部 匡

「程度的な名詞と尺度形容詞類の共起傾向の推移」

田野村忠温

「「少納言」「中納言」検索結果活用ツール」

岡 照晃

「統計的機械学習による歴史的資料への濁点の自動付与」

竹内史郎

「古代日本語の主節の無助詞名詞句 ―活格性との関わりから―」

ポスター発表（1）

佐野真一郎

「『日本語話し言葉コーパス』を用いた「全然」の変化の詳細化」

加藤恵梨

「「かなしい」と「つらい」の意味について」

STRAFELLA Elga Laura，林部祐太，松本裕治

「現代日本語におけるコロケーション：検出と分析」

姜 紅

「コーパスに基づく多義語「甘い」の意味再分類及び語義分布調査」

村中淑子

「外来語由来の接尾辞「チック」と類義語との比較」

古宮嘉那子，奥村 学

「語義曖昧性解消のための領域適応手法の決定木学習による選択 ―三手法からの決定―」

侯 海霞，古宮嘉那子，柴原一友，藤本浩司，小谷善行

「形態素と文字の情報を用いた中国語形態素解析」

阿部裕司，森田 一，古宮嘉那子，小谷善行

「Web 関連度と確率的翻訳モデルを併用した質問応答システム」

古橋 翔

「文の長さ分布に見られる対数正規性」

高橋 暦，堀江 薫

「言語接触の観点からみた非有生名詞主語の「見る」構文 ―文語体コーパスを利用して―」

伊藤裕佑，古宮嘉那子，小谷善行

「文書分類における補集合を併用した Naive Bayes」

川口裕子

「日本語並立助詞「と」・「や」と英語冠詞に関する一考察 ―BCCWJ データに基づいて―」

村上仁一，藤波 進

「日本語と英語の対訳文対の収集と著作権の考察」

柏野和佳子，立花幸子，保田 祥，丸山岳彦，奥村 学，佐藤理史，徳永健伸，大塚裕子，佐渡島沙織

「テキストの硬さと軟らかさの考察 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に―」

保田 祥，柏野和佳子，立花幸子，丸山岳彦

「「語り性」を有する書きことばの典型例の分析」

鯨井綾希

「反復語の使用実態から見る話し言葉と書き言葉の連続性 ―コーパスを用いた定量的分析を通して―」

岩井智哉

「モラウとイタダクのヲ格名詞・動名詞の違いについて」

竇 梓瑜，古宮嘉那子，小谷善行

「コーパスを用いた中国語ネット語の判定システム」

小磯花絵，石本祐一

「日本語話し言葉コーパスを用いた「発話」の韻律的特徴の分析 ―イントネーション句を切り口として―」

小木曽智信

「コーパス管理ツール「茶器」による中古和文コーパスの利用」

千葉庄寿

「大規模コーパスを用いた用例の典型性評価 ―大規模コーパスを利用した学習辞書作成のために―」

口頭発表（2）

佐藤理史，柏野和佳子

「テキストの難易度に対する人間の判断と機械の判断」

丸山岳彦

「大規模コーパスの利用とメタデータの役割」

前川喜久雄

「「形容詞＋です」述語の生起要因についての準備的考察」

山崎 誠

「共起語率の分布からみるテキストの語彙的特徴

口頭発表（3）

伝 康晴，土屋智行，小磯花絵

「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」

近藤泰弘

「通時コーパスをどう使うか」

山元啓史，田中牧郎，近藤泰弘

「通時コーパスと言語空間論」

田中牧郎

「近代語史をとらえるための文献選定とコーパス」

ポスター発表（2）

渡辺美知子，清水信哉

「『日本語話し言葉コーパス』における文節境界のフィラーの出現率」

近藤明日子

「明治初期論説文における一人称代名詞の分析 ―『明六雑誌』コーパスを用いて―」

林 洋子，国吉ニルソン，野口ジュディ，東條加寿子

「日英の理工系口頭発表コーパスの構築と検索サイト JECPRESE」

郭 潔，伝 康晴

「日本語対話コーパスにおける倒置構文について：聞き手の反応に注目して」

単 珊，白勢彩子

「現代日本語書き言葉均衡コーパスに基づく外来語音の表記に関する試論」

渡邊ゆかり

「「リアル」を構成要素とする複合名詞の語彙的特徴」

岡嶋裕子
「機能動詞結合における動詞の選択制約 ―「影響を与える」と「影響する」―」
八木 豊，ホドシチェク・ボル，仁科喜久子
「BCCWJ と学習者作文コーパスを利用した日本語作文支援 ―表記と共起に関する誤用添削プロトタイプ構築―」
小椋秀樹
「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査 ―BCCWJ コアデータを資料として―」
岡田祥平，江崎哲也
「「文末音調と発話意図とを統合したアノテーション」を施した音声コーパスを考える際に必要となる視点は何か？ ―「同意要求表現」を中心に―」
ホドシチェク・ボル，仁科喜久子
「BCCWJ における出典情報とトピックおよびレジスターとの関係」
田頭（谷口）未希
「接続助詞「が」の音調と意味用法 ―『日本語話し言葉コーパス』の分析を通して―」
山口昌也，井上 優，柏野和佳子，北村雅則，白井清昭，千葉庄寿
「用例に基づく複合動詞の構造分析と教育への応用」
菊池英明，宮島崇浩
「日本語話し言葉コーパスにおける句末音調のバリエーション」
五十嵐陽介，小磯花絵
「『日本語話し言葉コーパス』における句末境界音調のピッチレンジ制御」
鈴木敬文，阿部佑亮，宇津呂武仁，松吉 俊，土屋雅稔
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における複合辞の検出と評価」
阿部佑亮，鈴木敬文，宇津呂武仁，山本幹雄，松吉 俊，河田 容
「階層的機能表現辞書の意味的等価クラスおよび対訳用例を用いた機能表現の日英翻訳」
天野成昭，山川仁子，近藤眞理子
「日本語音声コーパスにおける促音・非促音の判別」
森 大毅
「話し言葉が伝えるものとは，結局何なのか？ ―概念の整理および課題―」
小磯花絵，伝 康晴，前川喜久雄
「『日本語話し言葉コーパス』RDB の構築」

シンポジウム
浅原正幸，小野 創，狩野芳伸
「コーパスアノテーションと心理言語学」

日本語教育研究・情報センター

○共同研究プロジェクト公開シンポジウム「多文化共生社会における日本語教育研究」
2011 年 1 月 23 日（国立国語研究所）

基調講演
西原鈴子（元東京女子大学）
「多文化共生社会における日本語教育とは？」

招待講演
W. M. ヤコブセン（ハーバード大学・国立国語研究所客員教授）

「日本語教育のための言語研究とは？ ―『目に見えない』言語構造の教え方を中心に―」
プロジェクト進捗状況発表
宇佐美 洋（国立国語研究所）
「社会における相互行為としての『評価』 ―教室から社会へと踏み出そう」
金田智子（学習院大学）
「『生活のための日本語』の内容に関する研究 ―在住外国人が社会の一員として生活できることを目指して」
迫田久美子（広島大学 / 国立国語研究所客員）
「学習者の言語環境と日本語の習得過程に関する研究」
招待講演
野田尚史（大阪府立大学）
「日本語教育のための日本語教育研究とは？ ―言語の研究からコミュニケーションの研究への転換―」

○共同研究プロジェクト公開シンポジウム「多文化共生社会における日本語教育研究」
2012 年 2 月 18 日（国立国語研究所）
全体テーマ「多文化共生社会におけるコミュニケーションとその教育」
講演 1
石井恵理子（東京女子大学）
「多文化社会形成のためにことばの教育は何をすべきか」
講演 2
柳瀬陽介（広島大学）
「単一的言語コミュニケーション力論から複合的言語コミュニケーション力論へ」
ポスター発表
宇佐美洋，金田智子，迫田久美子，島村直己，中上亜樹，野原ゆかり，福永由佳，野山 広　他

C．プロジェクトの発表会

各共同研究プロジェクトでは，年に 2 ～ 3 回の研究発表会を国立国語研究所だけでなく全国各地で開催した。

理論・構造研究系

○日本語レキシコンの音韻特性
プロジェクトリーダー　窪薗晴夫
2009 年 12 月 6 日（国立国語研究所）
窪薗晴夫（国立国語研究所）
「鹿児島方言の複合法則について」
遠藤光暁（青山学院大学）
「上海語･チベット語ラサ方言･フランス語の音節長の短縮に伴う諸音韻変化 ―円唇前舌母音･鼻母音・語声調など―」
梶 茂樹（京都大学）
「ウガンダ西部のバンツー系諸語の声調の比較研究，特にトーロ語の声調消失について」

2010 年 2 月 22 日（国立国語研究所）
儀利古幹雄（神戸大学学術研究員）
「日本語における疑似複合構造と平板型アクセント」
松森晶子（日本女子大学，国立国語研究所客員教授）
「2 種類の重起伏音調のふるまいの違い ―鳥取県の n+1 型アクセント体系を例にして―」
2010 年 3 月 8 日（青山学院大学）
竹安 大（神戸大学学術研究員）
「借用語における促音挿入の音声学的基盤」
福井 玲（東京大学）
「15 世紀の楽譜「致和平譜」に反映された韓国語のアクセント」
2010 年 6 月 6 日（京都大学）
Thomas PELLARD（日本学術振興会特別研究員・京都大学）
「宮古語大神方言の音声と音韻．類型論的観点から見た南琉球の危機言語の特殊性と重要性」
松浦年男（北星学園大学）
「長崎方言における二型音調の音声実現」
2010 年 8 月 1 日（国立国語研究所）
（消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究（リーダー：木部暢子）との合同研究発表会）
高山林太郎（東京大学大学院）
「母音の甲乙が確認される現代方言の報告（1）～八丈島方言～」
新田哲夫（金沢大学）
「石川県白峰の複合動詞アクセントと諸方言のタイプ」
2010 年 10 月 3 日（国立国語研究所）
李 連珠（北海道大学）
「韓国語諸方言におけるアクセント型の現れとアクセントの単位に関する考察」
窪薗晴夫（国立国語研究所）
「甑島方言のアクセント ―High Tone Deletion を中心に」
2011 年 5 月 21 日～ 22 日（神戸大学）
（消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究（リーダー：木部暢子）との合同研究発表会）
5 月 21 日 ［公開シンポジウム］N 型アクセントの原理と成立
上野善道（東京大学名誉教授 / 国立国語研究所客員）
「N 型アクセントとは何か」
木部暢子（国立国語研究所）
「九州 2 型アクセントの実態」
窪薗晴夫（国立国語研究所）
「鹿児島県甑島方言のアクセント規則」
松森晶子（日本女子大学 / 国立国語研究所客員）
「隠岐島 3 型アクセントの再解釈」
新田哲夫（金沢大学）
「福井市周辺部の N 型アクセント」
ディスカッション
司会：ウェイン・ローレンス（ニュージーランド オークランド大学）
5 月 22 日 プロジェクト共同研究発表会

まつもとひろたけ（「危機言語」プロジェクト共同研究員）
「奄美喜界島方言のアリ・リ系のかたちをめぐって」
髙橋康徳（東京外国語大学大学院・日本学術振興会特別研究員）
「上海語変調におけるピッチ下降現象」
2011 年 7 月 16 日～ 17 日（国立国語研究所）
（消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究（リーダー：木部暢子）との合同研究発表会）
青井隼人（東京外国語大学）
「舌端の狭めを伴う母音の音声的記述：宮古多良間方言の事例研究」
又吉里美（志學館大学）
「沖縄津堅島方言の文末詞について」
新永悠人（東京大学大学院 /JSPS），小川晋史（国立国語研究所）
「北琉球奄美湯湾方言のアクセントについて」
五十嵐陽介（広島大学），田窪行則（京都大学 / 国立国語研究所客員），林 由華（京都大学），久保智之（九州大学）
「琉球語宮古池間方言の三型アクセント体系」
2011 年 10 月 1 日～ 2 日（国立国語研究所）
（日本語レキシコン ―連濁事典の編纂（リーダー：ティモシー・バンス）との合同研究発表会）
鈴木 豊（文京学院大学）
「4 拍語を後部成素とする複合語の連濁」
平野尊識（山口大学）
「連濁と非連濁に関わる要因」
Mutsuko Ihara (St. Marianna University School of Medicine), Katsuo Tamaoka (Nagoya University), Hunjung Lim (Yamaguchi Prefectural University)
“Rendaku and markedness: Phonetic and phonological effects”
佐藤 裕（理化学研究所），加藤真帆子（理化学研究所），馬塚れい子（理化学研究所 / Duke University）
「日本人乳児における促音知覚の発達的変化」
中西裕樹（同志社大学）
「「老借詞調類一致之謎」と中国南方少数民族言語の tonogenesis」
2012 年 2 月 16 日～ 17 日（滋賀県大津市）
（日本語レキシコン ―連濁事典の編纂（リーダー：ティモシー・バンス）との合同研究発表会）
Session 1　Haruo Kubozono (NINJAL)
［Keynote lecture 1］
Edward Flemming (MIT)
“Violations are ranked, not constraints: A revised model of constraint interaction in phonology”
Shin-ichi Tanaka (University of Tokyo)
“A gradual step toward the theory of deletion and epenthesis in Harmonic Serialism: Placeless and mannerless segments at the intermediate pass”
Session 2　Shosuke Haraguchi (Meikai University)
大槻知世（東京大学）
「津軽方言における長音から撥音への置換現象の音韻論的解釈」

中澤光平（東京大学）
「淡路島方言における音節融合と代償延長」
大滝靖司（東京外国語大学）
「借用語に現れる重子音の通言語的研究」
Session 3　Itsue Kawagoe (Kyoto Sangyo University)
Emil Tanev (Osaka University)
"On measuring prominence"
[Keynote lecture 2]
Jongho Jun (Seoul National University)
"Speakers' knowledge of alternation is uni-directional: Evidence from Seoul Korean verb paradigms"
Session 4　Zendo Uwano (NINJAL)
西原哲夫，Adrian Leis（宮城教育大学）
「英語の再音節化と L2 音韻論における流暢さとの関係について ―閉音節構造と開音節構造の構造と機能の相異から―」
植田尚樹（京都大学）
「モンゴル語の母音調和と母音の弱化 ―外来語を用いた分析―」
Yuki Asahi (University of Tokyo)
"Acquisition of vowel harmony: A theoretical implication"
Session 5　Hideki Zamma (Kobe City University of Foreign Studies)
白田理人（京都大学）
「琉球語喜界島上嘉鉄方言のアクセント」
平田 秀（東京大学）
「ブラケット付与による日本語諸方言のアクセント分析」
Session 6　Timothy J. Vance (NINJAL)
Ayat Hosseini (University of Tokyo)
"F Acoustic correlates of stress in unaccented, accented and focused words of Persian"
Shigeto Kawahara (Rutgers University)
"Abrupt amplitude changes imply male names: A case of acoustic-based sound symbolism"
Seunghun Lee, Melanie Pangilinan, Sang-Im Lee and Shigeto Kawahara (Central Connecticut State University/Rutgers University/New York University/Rutgers University)
"An acoustic comparison of palatal fricatives and whistled fricatives in Xitsonga"

○日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性
プロジェクトリーダー　影山太郎
2010 年 3 月 20 日（国立国語研究所）
発表
辻村成津子（インディアナ大学）
「新動詞の造語パターンと構文文法」
ワークショップ：サブテーマ A「日本語で注目すべき形態論の現象」
影山太郎（国立国語研究所）
「世界的に特異な日本語の語形成現象」

竝木崇康（茨城大学）
「日本語における外来語複合語の特異性 ―『リンスインシャンプー』を中心に―」
青木博史（九州大学）
「名詞の機能語化 ―形式名詞を中心に―」
ワークショップ：サブテーマＢ「日本語で注目すべき語彙統語論の現象」
杉岡洋子（慶應義塾大学），神崎享子（国立国語研究所）
「日本語の接辞の意味的・統語的特徴 ―基体の選択を中心に」
岸本秀樹（神戸大学）
「イディオム的な述語表現の特殊性について」
竹沢幸一 (筑波大学)
「日本語における述語活用と文構造の関連性とその理論的意味合い」
ワークショップ：サブテーマＣ「日本語で注目すべき語彙意味論の現象」
竝木崇康（茨城大学）
「複合語特有の意味概念 ―複合語に特有の下位意味について―」
松本 曜（神戸大学）
「日本語の語彙的使役化・反使役化」
小野尚之（東北大学）
「名詞の事象性」
由本陽子（大阪大学）
「複合語の形成メカニズムと意味解釈」
影山太郎（国立国語研究所）
「属性叙述の文法と意味」
2010 年 7 月 11 日（国立国語研究所）
ワークショップ「日本語レキシコンの諸問題」
栗林 裕（岡山大学）
「日本語とトルコ語のレキシコンの対照」
沈 力（同志社大学）
「中国語と日本語の結果構文について」
上原 聡（東北大学）
「日本語の形容詞と動詞の区別における形態と意味：韓国語との対照を中心に」
斎藤倫明（東北大学）
「拘束形式語基の特質と位置づけ ―二字漢語の場合―」
玉岡賀津雄（名古屋大学）
「日本語動詞の二重処理モデル」
長谷部郁子（筑波大学非常勤講師）
「日本語の擬態語と名詞化について」
今泉志奈子（愛媛大学），藤縄康弘（東京外国語大学）
「所有と関与のあいだ：ヴァレンス拡大の意味論的基盤についての日独対照」
2010 年 9 月 5 日（国立国語研究所）
伊藤たかね（東京大学），杉岡洋子（慶応義塾大学）
「語レベルの言語処理に関わる心的・脳内メカニズム」
加藤重広（北海道大学）

「状態述語のアスペクト ―北奥方言から標準語へ―」
澤田浩子（筑波大学）
「日本語と中国語の属性叙述に関する構文について」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語の属性叙述形式とその特異な統語操作」
2011 年 6 月 19 日（日本大学）
影山太郎（国立国語研究所）
「属性と事象の区別とその言語学的意義」
八亀裕美（京都光華女子大学）
「日本語諸方言の形容詞述語文」
Stephen Wright Horn（Oxford 大学）
「日本語のいわゆる〈主語から目的語への繰り上げ構文〉」
角田太作（国立国語研究所）
「ワロゴ語（豪州）における属性の表現」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語の属性叙述専用形式と異常な統語操作」
沈 力（同志社大学）
「中国語の付加詞主語構文について」
益岡隆志（神戸市外国語大学，国立国語研究所客員）
「日本語の属性叙述と主題標識」
2011 年 9 月 25 日（大阪大学）
田川拓海（千葉大学非常勤講師）
「動詞から派生される連用形名詞の存在について：分散形態論を用いた分析」
鄭 聖汝（大阪大学）
「ナル型言語と他動性 ―実験調査による日本語・韓国語・マラーティー語の相違を通して―」
秋田喜美（東京大学，日本学術振興会），臼杵 岳（福岡大学）
「僕らが銀座をぶらぶらとしない理由 ―オノマトペ述語の意味特性と「と」の分布再考―」
影山太郎（国立国語研究所）
「レキシコン研究とコーパスの活用」
小林英樹（群馬大学）
「漢語サ変動詞の主要部について」
竹沢幸一（筑波大学）
「「見える」類動詞の非時制補文節におけるテ形述語と述語分類」
青木博史（九州大学）
「クル型複合動詞の史的展開」
2011 年 12 月 24 日（関西学院大学）
岸本秀樹（神戸大学）
「統語的複合動詞構文の格付与について」
松本 曜（神戸大学）
「主語一致の原則と主体的移動を伴う事象を表す複合動詞」
玉岡賀津雄（名古屋大学）
「語彙的・統語的複合動詞のエントロピーおよび冗長度指標からの考察」

栗林 裕（岡山大学）
「日本語とトルコ語の複合動詞の対照」
塚本秀樹（愛媛大学）
「日本語と朝鮮語の複合動詞研究における問題点（続）」
葉 秉杰（東北大学院生）
「中国語の「偏正式複合動詞」の再分類 ―構文による「動詞度」の検証―」
陳 奕廷（神戸大学院生）
「複合動詞におけるフレームの融合」
小菅智也（東北大学院生）
「日本語の複合動詞文「A が B と（お互いに）V+ 合う」に関する統語論的考察」
2012 年 2 月 18 日（国立国語研究所）
竝木崇康
「複合名詞における意味の稀薄化」
由本陽子
「語彙的複合動詞の意味解釈再考：高生産性の要因」
斎藤倫明
「拘束複合字音語基の分類と位置づけ ―従来の複合字音語基分類との関わりで―」
陳 劼懌（東北大学大学院生）
「「他動性調和の原則」再考～なぜ語彙的複合動詞に「他動性調和」が存在しているのか～」
赤瀬川史郎，プラシャント・パルデシ
「理論言語学とコーパスの接点 ―NINJAL-LWP による言語分析―」

○文字環境のモデル化と社会言語科学への応用
プロジェクトリーダー　横山詔一
2009 年 11 月 27 日（国立国語研究所）
横山詔一（国立国語研究所）
「文字環境論と共通語化研究」
井上史雄（明海大学）
「経年調査にみる言語変化と成人後採用」
指定討論その 1：佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）
指定討論その 2：佐藤和之（弘前大学）
2010 年 3 月 29 日（学術総合センター）
阿部貴人（国立国語研究所）
「鶴岡共通語化研究資料のデータベース化について」
佐藤和之（弘前大学）
「山形県鶴岡市での共通語化調査について」
佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）
「方言における意味認識の世代差と個人差 ―山形県庄内方言を例として―」
2010 年 8 月 27 日（弘前大学）
阿部貴人（国立国語研究所）
「山形県鶴岡市における共通語化研究」
佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）

「方言の衰退と安定」
佐藤和之（弘前大学）
「多様化する 21 世紀の地域住民と言語調査の新手法適用についての試論」
2010 年 9 月 6 日（関西学院大学）
（定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究（リーダー：野山 広）との合同研究発表会）
横山詔一（国立国語研究所）
「鶴岡市共通語化パネルデータの解析理論」
阿部貴人（国立国語研究所）
「弘前市共通語化の縦断調査に向けて」
尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）
「調査会社委託方式による音声調査の開拓」
指定討論：松尾 慎（東京女子大学），野山 広（国立国語研究所）
全体討論：共通語化の調査手法について，野山プロジェクトと横山プロジェクトの連携について
2011 年 7 月 2 日～ 3 日（津田ホール）
（敬語と敬語意識の半世紀 ―愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に―（リーダー：井上史雄）との合同研究発表会）
阿部貴人（国立国語研究所）
「岡崎敬語調査データベースの共同利用について」
米田正人（国立国語研究所名誉所員）
「鶴岡市での共通語化調査：第 4 回目の実施にむけて」
2011 年 8 月 28 日（鶴岡市図書館）
（敬語と敬語意識の半世紀 ―愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に―（リーダー：井上史雄）との合同研究発表会）
阿部貴人（国立国語研究所）
「鶴岡調査と岡崎調査の「点と線」」
松田謙次郎（神戸松蔭女子大学）
「岡崎調査・パネルと継続データの分析現状報告」
堀 司朗（鶴岡市史編纂委員）
「鶴岡市の歴史と文化」

○日本語レキシコン―連濁事典の編纂
プロジェクトリーダー　ティモシー・J・バンス
2011 年 6 月 4 日～ 5 日（山形テルサ）
Mark Irwin（山形大学）
「The Rendaku Database: A Mid-Term Report」
玉岡賀津雄（名古屋大学）
「Influence of Existing Rendaku Items on Voiced-or-Voiceless Determination of Neutral Items」
浅井 淳（大同大学）
「連濁箇所および前部要素における有標性の作用程度」
太田 聡（山口大学），宮下瑞生（モンタナ大学）

「4 モーラ語における連濁」

James Low（滋賀県長浜市教育委員会）

“Solving the Nasal Paradox and Reevaluating Current Theories of Rendaku Mechanics”

田端敏幸（千葉大学）

「PNV（Post Nasal Voicing）について：数詞のふるまい」

Timothy J. Vance（国立国語研究所）

“The Intractable Problem of Rendaku in Sino-Japanese Elements”

大野和敏（中国 広州）

「連濁研究についての覚書」

2011 年 10 月 1 日～ 2 日（国立国語研究所）

（日本語レキシコンの音韻特性（リーダー：窪薗晴夫）との合同研究発表会）

鈴木 豊（文京学院大学）

「4 拍語を後部成素とする複合語の連濁」

平野尊識（山口大学）

「連濁に関わる要因と規則化の試み」

Mutsuko Ihara, Katsuo Tamaoka, Hunjung Lim（Chiba University, Nagoya University, Yamaguchi Prefectural University）

“Rendaku and markedness: Phonetic and phonological effects”

佐藤 裕（理化学研究所），加藤真帆子（理化学研究所），馬塚れい子（理化学研究所 / Duke University）

「日本人乳児における促音知覚の発達的変化」

中西裕樹（同志社大学）

「「老借詞調類一致之謎」と中国南方少数民族言語の tonogenesis」

2012 年 2 月 16 日～ 17 日（滋賀県大津市）

（日本語レキシコンの音韻特性（リーダー：窪薗晴夫）との合同研究発表会）

Session 1　Haruo Kubozono (NINJAL)

［Keynote lecture 1］

Edward Flemming (MIT)

“Violations are ranked, not constraints: A revised model of constraint interaction in phonology”

Shin-ichi Tanaka (University of Tokyo)

“A gradual step toward the theory of deletion and epenthesis in Harmonic Serialism: Placeless and mannerless segments at the intermediate pass”

Session 2　Shosuke Haraguchi (Meikai University)

大槻知世（東京大学）

「津軽方言における長音から撥音への置換現象の音韻論的解釈」

中澤光平（東京大学）

「淡路島方言における音節融合と代償延長」

大滝靖司（東京外国語大学）

「借用語に現れる重子音の通言語的研究」

Session 3　Itsue Kawagoe (Kyoto Sangyo University)

Emil Tanev (Osaka University)

“On measuring prominence”

［Keynote lecture 2］

Jongho Jun (Seoul National University)

“Speakers’ knowledge of alternation is uni-directional: Evidence from Seoul Korean verb paradigms”

Session 4　Zendo Uwano (NINJAL)

西原哲夫，Adrian Leis（宮城教育大学）

「英語の再音節化と L2 音韻論における流暢さとの関係について ―閉音節構造と開音節構造の構造と機能の相異から―」

植田尚樹（京都大学）

「モンゴル語の母音調和と母音の弱化 ―外来語を用いた分析―」

Yuki Asahi (University of Tokyo)

“Acquisition of vowel harmony: A theoretical implication”

Session 5　Hideki Zamma (Kobe City University of Foreign Studies)

白田理人（京都大学）

「琉球語喜界島上嘉鉄方言のアクセント」

平田 秀（東京大学）

「ブラケット付与による日本語諸方言のアクセント分析」

Session 6　Timothy J. Vance (NINJAL)

Ayat Hosseini (University of Tokyo)

“F Acoustic correlates of stress in unaccented, accented and focused words of Persian”

Shigeto Kawahara (Rutgers University)

“Abrupt amplitude changes imply male names: A case of acoustic-based sound symbolism”

Seunghun Lee, Melanie Pangilinan, Sang-Im Lee and Shigeto Kawahara (Central Connecticut State University/Rutgers University/New York University/Rutgers University)

“An acoustic comparison of palatal fricatives and whistled fricatives in Xitsonga”

○敬語と敬語意識の半世紀 ―愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に―

プロジェクトリーダー　井上史雄（明海大学）

2011 年 7 月 2 日～ 3 日（津田ホール）

（文字環境のモデル化と社会言語科学への応用（リーダー：横山詔一）との合同研究発表会）

阿部貴人（国立国語研究所）

「岡崎敬語調査データベースの共同利用について」

米田正人（国立国語研究所名誉所員）

「鶴岡市での共通語化調査：第 4 回目の実施にむけて」

2011 年 8 月 28 日（鶴岡市図書館）

（文字環境のモデル化と社会言語科学への応用（リーダー：横山詔一）との合同研究発表会）

阿部貴人（国立国語研究所）

「鶴岡調査と岡崎調査の「点と線」」

松田謙次郎（神戸松蔭女子大学）

「岡崎調査・パネルと継続データの分析現状報告」

堀 司朗（鶴岡市史編纂委員）

「鶴岡市の歴史と文化」

○言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約

プロジェクトリーダー　村杉恵子（南山大学）

2011 年 2 月 19 日～ 20 日（南山大学）

杉崎鉱司（三重大学）

“Constraints on Argument Ellipsis in Child Japanese”

中谷友美，村杉恵子（南山大学）

「主節不定詞としてのオノマトペ」

村杉恵子（南山大学）

「幼児の言語獲得からみる言語の多様性」

言語獲得討論

高橋大厚（東北大学）

“Parallelism for Argument Ellipsis”

齋藤 衛（南山大学）

「併合による格認可仮説の再考」

岸本秀樹（神戸大学）

「日本語の所有者上昇について」

2012 年 3 月 7 日（南山大学）

齋藤 衛（南山大学）

「幼児日本語にみられる属格主語と Finite Head の性質」

岸本秀樹（神戸大学）

「日本語の節構造，語彙認可，および，主節不定節現象」

村杉恵子（南山大学）

「主節不定詞と談話不変化詞から探る幼児の文法構造」

杉崎鉱司（三重大学）

「普遍的制約の早期発現：日英語における移動現象の獲得から」

佐野哲也（明治学院大学）

「焦点標識の幼児による解釈について」

○複文構文の意味の研究

プロジェクトリーダー　益岡隆志（神戸市外国語大学外国語学部）

2011 年 2 月 19 日（大学共同利用施設「ユニティ」）

益岡隆志（神戸市外国語大学，国立国語研究所客員）

「中立形接続構文とテ形接続構文」

大島資生（日本女子大学）

「連体修飾節構造に関する検討課題」

堀江 薫（名古屋大学）

「日本語の複文の「内」と「外」：類型論の複文研究の成果を踏まえて」

丸山岳彦（国立国語研究所）

「日本語コーパスを用いた複文研究の可能性」

発表に対するコメント：橋本 修（筑波大学）

2011 年 5 月 7 日（国立国語研究所）

前田直子（学習院大学）

「日本語教育のための複文研究 ―受身・使役・「ている」と複文―」

大関浩美（麗澤大学）

「言語習得過程から見た日本語の名詞修飾節」

楊 凱栄（東京大学）

「日中連体修飾節の相違について」

2011 年 9 月 11 日（名古屋大学）

宮地朝子（名古屋大学）

「名詞の形式化・文法化と複文構成 ―ダケ・キリにみる―」

橋本 修（筑波大学）

「上代・中古資料における非制限的連体修飾節の分布」

坪本篤朗（静岡県立大学）

「いわゆる主要部内在型関係節の形式と意味と語用論 ―〈全体〉と〈部分〉から複文構文を考える―」

2011 年 12 月 17 日～ 18 日（大学共同利用施設ユニティ）

長辻 幸（奈良女子大学大学院）

「現代日本語のタリに関する一考察 ―並列節マーカーの語用論的分析―」

横森大輔（京都大学）

「相互行為の資源としての複文構文の意味 ―カラ節とケド節の言いさし現象の考察から―」

丸山岳彦（国立国語研究所）

「日本語の自発音声に見られる節連鎖構造の分析」

加藤重広（北海道大学）

「複文の単文化 ―節性と非節化―」

遠藤喜雄（神田外語大学）

「複文とフォーカス」

建石 始（神戸女学院大学）

「「～たばかり」と「～たところ」の意味・用法の広がり ―コーパスを用いた複文研究に向けて―」

下地早智子（神戸市外国語大学）

「接続形式としての“着”」

米田信子（大阪大学）

「バントゥ諸語の名詞修飾節 ―スワヒリ語とヘレロ語の例―」

高山善行（福井大学）

「条件表現とモダリティ表現の接点 ―文法史の視点から―」

松木正恵（早稲田大学）

「接続関係を表示する複合辞的表現」

○訓点資料の構造化記述

プロジェクトリーダー　高田智和

2009 年 12 月 25 日（国立国語研究所）

高田智和（国立国語研究所）

「漢文訓点資料構造化の試み」
渡辺さゆり（札幌大学）
「訓点資料としての『文選』における「文選読」の表記形式について」
呉 美寧（崇実大学校）
「韓国の伝統的漢文読法＜口訣＞について」
2010 年 5 月 24 日（京都テルサ）
高田智和（国立国語研究所）
「国立国語研究所蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』について」
岡本隆明（立命館大学）
「訓点の整理と資料の共有を目的とするデジタル画像データの利用について」
2010 年 7 月 9 日（国立国語研究所）
呉 美寧（崇実大学校）
「小学の受容と訓読に関する日韓比較研究」
小助川貞次（富山大学）
「漢文訓読史研究を学ぶ学生の視点」
2010 年 12 月 26 日～ 27 日（国立国語研究所）
唐 煒
「西大寺本金光明最勝王経平安初期点における中国口語起源二字漢語の訓読 ―二字動詞を中心として―」
當山日出夫
「和漢朗詠集と文字コード」
永崎研宣
「人文学における構造化記述の意義と課題」
高田智和
「白点資料のデジタル画像化」
2011 年 7 月 9 日（韓国・ソウル大学校）
高田智和
「国語研本『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』の漢字字体」
呉 美寧
「韓国ソウルにおける「漢文訓読研究会」の活動（2006 年～）について」
2011 年 9 月 13 日（専修大学）
（人間文化研究連携共同推進事業　海外に移出した仮名写本の緊急調査（研究代表者：高田智和）との合同研究発表会）
高田智和（国立国語研究所），森安 辰（東京農工大学工学府）
「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文（桐壺から藤裏葉まで）の公表」
伊藤鉄也（国文学研究資料館）
「源氏物語本文研究のためのデータベース」
斎藤達哉（専修大学）
「仮名写本における文字・表記の諸相 ―米国議会図書館本源氏物語を例として―」

○会話の韻律機能に関する実証的研究
プロジェクトリーダー　小磯花絵

2011 年 12 月 17 日（国立国語研究所）
小磯花絵（国立国語研究所）
「『日本語話し言葉コーパス』を用いた会話と独話の韻律特徴の比較 ―句末境界音調に着目して―」
五十嵐陽介（広島大学）
「韻律ラベルを用いた句末境界音調（BPM）の分析」
菊池英明（早稲田大学）
「アクセント句単位の F0 パタンの量的特徴」
石本祐一（国立情報学研究所）
「発話末の到来を聞き手に伝える韻律的特徴」

○首都圏の言語の実態と動向に関する研究
プロジェクトリーダー　三井はるみ
2011 年 2 月 25 日（国立国語研究所）
田中ゆかり（日本大学）
「アキバの言語景観」
三井はるみ（国立国語研究所）
「関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及とその背景」
2011 年 10 月 30 日（國學院大學渋谷キャンパス）
竹田晃子（国立国語研究所）
「「東京語調査」の概要 ―山手線沿線調査を中心に―」
飛田良文（国立国語研究所名誉所員）
「私のとらえたい東京語」
指定討論：鑓水兼貴（国立国語研究所）
2012 年 3 月 12 日（国立国語研究所）
鑓水兼貴（国立国語研究所）
「「東京語調査」の概要 ―山手線沿線調査を中心に―」
亀田裕見（文教大学）
「埼玉県西部地域における伝統的方言の分布調査の経過報告」
久野マリ子（國學院大學）
「首都圏方言の伝統的古相の記述とその変容 ―小田原市穴部方言の音声―」
司会・コメント：田中ゆかり（日本大学）

時空間変異研究系

○消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
プロジェクトリーダー　木部暢子
2009 年 12 月 19 日（国立国語研究所）
松森晶子（日本女子大学，国立国語研究所客員）
「琉球アクセント調査のための語彙開発とその活用法」
狩俣繁久（琉球大学）
「接触が伝統方言に及ぼす影響をどう評価すべきか」
林 由華，田窪行則（京都大学）

「宮古池間方言の係り結び」
2010 年 3 月 20 日（国立国語研究所）
下地理則（群馬県立女子大学）
「伊良部島方言における述語の焦点化」
金田章宏（千葉大学）
「八丈方言の諸特徴」
下地賀代子（千葉大学非常勤）
「南琉球方言の文法論」
中島由美（一橋大学））
「「文の辞典」の可能性 ―『徳之島方言二千文辞典』」
2010 年 8 月 1 日（国立国語研究所）
（日本語レキシコンの音韻特性（リーダー：窪薗晴夫）との合同研究発表会）
高山林太郎（東京大学大学院）
「母音の甲乙が確認される現代方言の報告（1）～八丈島方言～」
新田哲夫（金沢大学）
「石川県白峰の複合動詞アクセントと諸方言のタイプ」
2011 年 5 月 21 日～ 22 日（神戸大学）
（日本語レキシコンの音韻特性（リーダー：窪薗晴夫）との合同研究発表会）
5 月 21 日 ［公開シンポジウム］N 型アクセントの原理と成立
上野善道（東京大学名誉教授 / 国立国語研究所客員）
「N 型アクセントとは何か」
木部暢子（国立国語研究所）
「九州 2 型アクセントの実態」
窪薗晴夫（国立国語研究所）
「鹿児島県甑島方言のアクセント規則」
松森晶子（日本女子大学 / 国立国語研究所客員）
「隠岐島 3 型アクセントの再解釈」
新田哲夫（金沢大学）
「福井市周辺部の N 型アクセント」
ディスカッション
司会：ウェイン・ローレンス（ニュージーランド オークランド大学）
5 月 22 日　プロジェクト共同研究発表会
まつもとひろたけ（「危機言語」プロジェクト共同研究員）
「奄美喜界島方言のアリ・リ系のかたちをめぐって」
髙橋康徳（東京外国語大学大学院，日本学術振興会特別研究員）
「上海語変調におけるピッチ下降現象」
2011 年 7 月 16 日～ 17 日（国立国語研究所）
（日本語レキシコンの音韻特性（リーダー：窪薗晴夫）との合同研究発表会）
7 月 16 日
青井隼人（東京外国語大学）
「舌端の狭めを伴う母音の音声的記述 : 宮古多良間方言の事例研究」
又吉里美（志學館大学）

「沖縄津堅島方言の文末詞について」
7月17日
新永悠人（東京大学大学院 /JSPS），小川晋史（国立国語研究所）
「北琉球奄美湯湾方言のアクセントについて」
五十嵐陽介（広島大学准），田窪行則（京都大学 / 国立国語研究所客員教授），林 由華（京都大学），久保智之（九州大学）
「琉球語宮古池間方言の三型アクセント体系」
2012年2月18日～19日（国立国語研究所）
2月18日
日高水穂（関西大学）
「昔話の「語りの型」とその地域差」
新田哲夫（金沢大学）
「日本語史資料としての方言テキスト」
高木千恵（大阪大学）
「関西方言の自然談話にみるワ行五段動詞ウ音便形の衰退と残存」
2月19日
パネルディスカッション
大槻知世（東京大学学部生）
「津軽方言における推量形式『ビョン』の使用状況」
麻生玲子（東京外国語大学大学院，日本学術振興会研究員）
「八重山波照間方言における動詞の屈折と派生をテキストから考察する」
白田理人（京都大学大学院生）
「喜界島方言―テキストから見る動詞形態論上の問題」
全体討議
コメンテーター：中山俊秀（東京外国語大学），風間伸次郎（東京外国語大学），木部暢子（国立国語研究所）

○方言の形成過程解明のための全国方言調査
プロジェクトリーダー　大西拓一郎
2010年3月23日（国立国語研究所）
大西拓一郎（国立国語研究所）
「共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」のアウトライン」
吉田雅子（国立国語研究所）
「全国方言準備調査における語彙項目の結果分析と考察」
日高水穂（秋田大学）
「全国方言準備調査における文法項目の結果分析と考察」
2010年12月19日（国立国語研究所）
鑓水兼貴（国立国語研究所）
「「全国方言分布調査」データベースの概要と利用法」
小林 隆（東北大学）
「方言分布の経年比較 ―分布はどう動くか？―」
2011年7月17日（国立国語研究所）

竹田晃子（国立国語研究所）
「言語地図データベースの特徴と利用方法」
2011 年 12 月 17 日（大阪大学）
全体テーマ「方言周圏論の再検証 ―近畿を中心に―」
岸江信介（徳島大学）
「近畿圏内における言語変化と言語伝播 ―GAJ 以後の調査との比較―」
中井精一（富山大学）
「近畿地方およびその周辺部における中央語の受容とその変化」
松丸真大（滋賀大学）
「東西日本方言接触地域における方言の変化と維持」

○多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明
プロジェクトリーダー　相澤正夫
2010 年 3 月 18 日（国立国語研究所）
相澤正夫（国立国語研究所）
「『現代日本語の動態』プロジェクトの概要と進捗状況」
金 愛蘭（国立国語研究所）
「新聞における抽象的な外来語の増加傾向とその要因」
新野直哉（国立国語研究所）
「日本語研究の成果と『日本語本』等の記述 ―『“全然”＋肯定』の場合―」
尾崎喜光（国立国語研究所）
「外来語音は現在どのくらい普及しているか？ ―全国多人数録音調査から見る現状と今後―」
2010 年 6 月 12 日（国立国語研究所）
田中牧郎（国立国語研究所）
「専門家と非専門家の情報共有のための語彙論的課題」
松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学）
「法令の言語変異を探る」
田中ゆかり（日本大学）
「『方言コスプレ』は『東京的』な現象か？」
2010 年 10 月 2 日（国立国語研究所）
石井正彦（大阪大学）
「通時的な言語使用データの解釈をめぐって」
金澤裕之（横浜国立大学）
「新聞データ（朝日『聞蔵』）に見る「なく中止形」の動向」
2011 年 1 月 22 日（国立国語研究所）
新野直哉（国立国語研究所）
「“世間ずれ”の「誤用」について」
塩田雄大（NHK 放送文化研究所）
「ウェブサイト上の記述から，ことばの地域差や年齢差を計量的に観察することは，可能か。」
2011 年 4 月 23 日（国立国語研究所）
金 愛蘭（国立国語研究所）
「外来語動詞「チェックする」の基本語化 ―20 世紀後半の通時的新聞コーパスを用いて―」

尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）
「道教え場面における補助動詞「もらう」「いただく」の使用傾向 ―全国多人数調査と国立国語研究所「岡崎調査」から―」
2011年7月16日（国立国語研究所）
田中ゆかり（日本大学）
「全国方言意識調査に基づく地域の類型化と分類の試み」
田中牧郎（国立国語研究所）
「専門用語と教科用語の対照 ―医療用語を例に―」
2011年10月8日（国立国語研究所）
松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学）
「動詞活用のゆれに関するオムニバス調査の構想」
塩田雄大（NHK放送文化研究所）
「NHKアナウンサーのアクセントの現在　序章」
2012年1月21日（国立国語研究所）
石井正彦（大阪大学）
「語彙化現象の動態をめぐって ―名詞句化・臨時一語化・複合語化など―」
相澤正夫（国立国語研究所）
「動詞ヒモトクの伝統用法と新用法をめぐって」
○日本語変種とクレオールの形成過程
プロジェクトリーダー　真田信治
2009年11月6日（国立国語研究所）
真田信治（国立国語研究所客員）
「共同研究プロジェクトの概要」
朝日祥之（時空間変異研究系）
「樺太方言と千島方言の形成に関する一考察」
簡 月真（東京大学外国人特別研究員）
「台湾における宜蘭クレオール ―その現状と特徴―」
ダニエル・ロング（首都大学東京）
「「南洋方言」は存在するか？ ―小笠原諸島の日本語とマリアナ諸島の日本語を比較して―」
2010年5月15日（サイパン・ビジターセンター）
真田信治（国立国語研究所）
「台湾，および他地域における日本語の諸相」
朝日祥之（国立国語研究所）
「サハリンの日本語を記録する」
ダニエル・ロング（首都大学東京）
「日本語によるマリアナ諸島のオーラルヒストリーを記録する」
2010年10月2日（国立国語研究所）
水野義道（京都工芸繊維大学）
「中国東北部における日本語の残存について」
2011年12月2日（国立国語研究所）
白岩宏行（京都光華女子大学非常勤講師）
「南米沖縄系移民の生活と言語接触の様相について」

○大規模方言データの多角的分析

プロジェクトリーダー　熊谷康雄

2010 年 3 月 15 日（国立国語研究所）

熊谷康雄（国立国語研究所）

「共同研究大規模方言データによる多角的分析の目的と概要」

小林 隆（東北大学），澤村美幸（東北大学大学院生 / 日本学術振興会特別研究員）

「消えゆく日本語方言の記録調査 ―『日本言語地図』との関連で―」

沢木幹栄（信州大学）

「分布の類型と孤例」

2010 年 7 月 17 日（国立国語研究所）

熊谷康雄（国立国語研究所）

「『日本言語地図』による方言分布データの計量的研究の探索」

井上文子（国立国語研究所）

「『全国方言談話データベース』を用いた表現法の地域差の分析試論」

2011 年 12 月 10 日（国立国語研究所）

熊谷康雄（国立国語研究所）

「『日本言語地図』データベースの構築過程とその性格」

小林 隆（東北大学）

「方言周圏論の発展と現代的位置」

澤木幹栄（信州大学・教授）

「言語解析ソフトを利用した大量方言テキストデータの処理法」

2012 年 3 月 19 日（国立国語研究所）

熊谷康雄（国立国語研究所）

「『日本言語地図』データベースの環境を利用した回答語形の分布に関わる観察」

○日本語文法の歴史的研究

プロジェクトリーダー　青木博史

2011 年 3 月 7 日（国立国語研究所）

福嶋健伸（実践女子大学）

「～テイルの成立とその発達」

岡部嘉幸（千葉大学）

「近世後期江戸語のノダロウ」

2011 年 8 月 30 日（JR 博多シティ）

吉田永弘（國學院大學）

「「る・らる」による可能表現」

竹内史郎（成城大学）

「日本語のアスペクト形式の主観性と主観化」

2012 年 3 月 4 日（国立国語研究所）

青木博史（九州大学 / 国立国語研究所客員）

「「統語的複合動詞」再考」

江口 正（福岡大学）

「程度・量・限定と因果関係」

○接触方言学による「言語変容類型論」の構築

プロジェクトリーダー　朝日祥之

2010 年 1 月 5 日（国立国語研究所）

朝日祥之（国立国語研究所）

「共同研究プロジェクトの概要」

ダニエル・ロング（首都大学東京）

「接触方言について ―小笠原や琉球の現象を例に―」

太田一郎（鹿児島大学）

「社会言語学的類型からみた地方都市の言語変化」

二階堂整（福岡女学院大学）

「福岡における若年層の方言使用について」

高野照司（北星学園大学）

「札幌方言の共通語化　四半世紀後の様相 ～札幌山鼻地区の実時間調査による検証～」

片岡邦好（愛知大学）

「名古屋近郊および西三河における空間参照枠の地理的・歴史的変異」

2010 年 8 月 2 日（北星学園大学）

Asahi Yoshiyuki (NINJAL)

"Innovative contact-induced phenomena in an endocentric urban community of New Town"

朝日祥之（国立国語研究所），ダニエル・ロング（首都大学東京）

「ハワイ方言の形成に見られる方言接触現象」

太田一郎（鹿児島大学）

「方言音調の変異から言語変容類型論を考えるための試論」

片岡邦好（愛知大学）

「名古屋近郊および西三河における空間参照枠の地理的・歴史的変異」

2010 年 9 月 20 日（国立国語研究所）

Mie Hiramoto (National University of Singapore)

"Phonological Change of Tohoku Dialect Spoken in Hawai'i"

2010 年 12 月 11 日（福岡女学院大学天神サテライト）

高野照司（北星学園大学）

「札幌方言アクセントの実時間調査～山鼻地区パネル調査から見えてくるもの（その 1）～」

Kataoka Kuniyoshi (Aichi University)

"Synchronic and diachronic changes of preference in the use of frames of reference in contemporary Japan"

朝日祥之（国立国語研究所），尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）

「北海道釧路市における言語変容：札幌・富良野調査との比較から」

2011 年 9 月 2 日（国立国語研究所）

白岩宏行（京都光華女子大学）

「ハワイ移民 1 世に見る方言接触 ―福島県出身者による文法形式の使用―」

Mie Hiramoto (National University of Singapore)

"Oral history records and linguistics: a case of the northern Japanese plantation immigrants in Hawai 'i"

2011 年 12 月 9 日～ 10 日（国立国語研究所）

12月9日
Jane Stuart-Smith (University of Glasgow)
“Theory, method and practice: exploring the relationship between spoken language in the media and speech change in society”
白岩広行（大阪大学助教），平本美恵（シンガポール大学）
「ハワイ移民1世に見る東西方言の接触 ―文字化資料の整備と新たな発見―」
12月10日
太田一郎（鹿児島大学）
「日本語方言の韻律的変異と言語変化について」
朝日祥之（国立国語研究所），尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）
「北海道札幌市／釧路市における共通語化に関する実時間調査」
2012年3月19日（国立国語研究所）
朝日祥之（国立国語研究所）
「「言語変容類型論」構築に向けて」
Kuniyoshi Kataoka (Aichi University)
“Synchronic and diachronic variation of spatial "frames of reference" (FOR) in Japanese wayfinding discourse”

○方言談話の地域差と世代差に関する研究
プロジェクトリーダー　井上文子
2011年7月31日（国立国語研究所）
小西いずみ（広島大学大学院）
「文法事象の地域差の計量的把握 ―既存の談話資料を用いて―」
熊谷智子（東京女子大学）
「秋田県若年層会話における「ンダ」と「ソウ」」

○近現代日本語における新語・新用法の研究
プロジェクトリーダー　新野直哉
2011年3月5日（国立国語研究所）
新野直哉
「新語“なにげに”をめぐる国語意識 ―現代「国語意識史」記述の試みとして―」
2011年6月18日（国立国語研究所）
梅林博人（相模女子大学）
「戦前戦中の「全然＋肯定」の一側面 ―『古川ロッパ昭和日記』（戦前篇，戦中篇）を資料とし，同書の資料性にもふれる―」
橋本行洋（花園大学）
「近世中国語「全然」の日本語への受容について」
2011年9月18日（花園大学）
新野直哉（国立国語研究所）
「昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識」
島田泰子（二松学舎大学）
「全量性副詞と否定（的表現）との結び付き傾向について」

余田弘実（京都西山短期大学）
「近世から近代の“いためる”について ―料理書を資料にして―」

言語資源研究系

○コーパスアノテーションの基礎研究
プロジェクトリーダー　前川喜久雄
2010年1月15日（国立国語研究所）
乾健太郎（奈良先端科学技術大学院大学）
「日本語書き言葉コーパスへの重層的意味情報付与に向けて」
宇津呂武仁（筑波大学）
「日本語機能表現の言語解析体系および言語資源構築とその分析」
前川喜久雄（国立国語研究所）
「話し言葉コーパス韻律アノテーションの活用事例」
2010年8月17日（NAIST 東京事務所）
松本裕治（奈良先端科学技術大学院大学）
「コーパスへの統語情報アノテーションに関する諸問題」
2010年12月21日（NAIST 東京事務所）
奥村 学（東京工業大学）
「語義タグ付コーパスを用いた自然言語処理」
2011年6月21日（国立情報学研究所）
竹内孔一（岡山大学大学）
「動詞項構造シソーラスの構築と課題」
佐野大樹（情報通信研究機構）
「ディスコースアノテーションの枠組み構築に向けて」
2011年7月19日（NAIST 東京事務所）
松吉 俊（山梨大学大学）
「複合辞アノテーションの枠組み構築に向けて」
森 信介（京都大学）
「単語単位の係り受け解析」

○コーパス日本語学の創成
プロジェクトリーダー　前川喜久雄
2010年2月1日（国立国語研究所）
山崎 誠（国立国語研究所）
「テキストにおける語の分布を利用した文章特性の記述」
茂木俊伸（鳴門教育大学）
「外来語の文法」の構想
田野村忠温（大阪大学）
「コーパスからのコロケーション情報の抽出」
2010年3月26日（国立国語研究所）
伝 康晴（千葉大学）
「音声対話コーパスを用いた話者交替研究 ―適正なモデルの構築に向けて―」

前川喜久雄（国立国語研究所）
「コーパスを利用した自発音声研究」
2010 年 8 月 29 日（国立国語研究所）
服部 匡（同志社女子大学）
「話者の出生年代を考慮した言語変化の研究 ―国会会議録を利用して―」
荻野綱男（日本大学）
「コーパスとしての WWW と研究方法の変化と教育的効果」
2010 年 12 月 19 日（国立国語研究所）
杉本 武（筑波大学）
「複合助詞の語形と品詞性」
丸山直子（東京女子大学）
「動詞の格情報 ―国語辞書の記述とコーパス―」
2011 年 6 月 4 日（国立国語研究所）
李 在鎬（国際交流基金日本語試験センター）
「BCCWJ のデータを日本語能力試験に使うなら ―大規模言語テスト, 多変量解析, コーパス」
石川慎一郎（神戸大学）
「大規模日本語コーパスから得られた言語データの分類：統計手法をどう生かすか」
石井正彦（大阪大学）
「対談番組のマルチメディア・コーパスを用いた映像＝談話分析の試み」
2011 年 9 月 3 日（国立国語研究所）
前川喜久雄（国立国語研究所）
「助動詞「です」をともなう形容詞述語文について：BCCWJ の予備的分析」
山崎 誠（国立国語研究所）
「共起語集合の頻度分布と語の属性との相関」
田野村忠温（大阪大学）
「コーパスをめぐる 2，3 の報告 ―作家の表現の比較ほか―」

○通時コーパスの設計
プロジェクトリーダー　近藤泰弘
2010 年 3 月 3 日（国立国語研究所）
近藤泰弘（国立国語研究所客員）
「通時コーパス研究の展望と目標」
小木曽智信（国立国語研究所）
「通時コーパス構築のための情報基盤 ―歴史的資料を対象とした UniDic と形態論情報データベース―」
山元啓史（東京工業大学）
「通時コーパスで見る語彙論的トポロジーとトランジション」
2010 年 9 月 20 日（国立国語研究所）
岡部嘉幸（千葉大学）
「近世後期江戸語における副詞「必ず」について ―否定と呼応する場合を中心に―」
2011 年 9 月 16 日（国立国語研究所）
村上 謙（埼玉大学）

「『手作業』による用例検索を専らとする一研究者が通時コーパスを使ってみる ―動詞否定形式「～ハセヌ」類における上接動詞の通時的なあり方を例に―」

山田昌裕（恵泉女学園大学）

「古典語に見られる〈名詞句＋副助詞〉の格」

近藤泰弘（国立国語研究所客員）

「通時コーパスの利用法と設計」

○文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアノテーションの可能性 ―日本語諸方言の同意要求表現を中心に考える―

プロジェクトリーダー　岡田祥平

2011 年 3 月 4 日（ハートピア京都）

岡田祥平（九州共立大学）

「全国諸方言における同意要求表現とその音調に関する覚書 ―『とびはね音調』を中心に―」

○パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化

プロジェクトリーダー　森 大毅

2011 年 2 月 22 日（国立国語研究所）

森 大毅（宇都宮大学）

「共同研究プロジェクト『パラ言語・非言語情報の基本概念』の概要」

高梨克也（京都大学）

「談話行為タグ付与の概要とその現代的課題」

○テキストにおける語彙の分布と文章構造

プロジェクトリーダー　山崎 誠

2010 年 2 月 15 日（国立国語研究所）

山崎 誠（国立国語研究所）

「テキストにおける多義語の意味分布と語彙的結束性」

江田すみれ（日本女子大学）

「科学的な書物における「ている」の使われ方 ―「運動長期」「パーフェクト」の果たす「話題提供」「結論」の機能について―」

2010 年 8 月 23 日（同志社大学）

山崎 誠（国立国語研究所）

「出現間隔と意味的距離から見た多義語の意味分布」

清水まさ子（日本大学非常勤）

「社会科学系論文の本論における構成要素間の結びつき」

2010 年 12 月 5 日（日本女子大学）

清水まさ子（日本大学非常勤）

「学術論文の本論における論の展開 ―構成要素のつながりから見る―」

江田すみれ（日本女子大学）

「「させる」文の文脈の違いによる使用状況について ―会話・小説・科学的入門書のコーパスによる調査結果―」

山崎 誠（国立国語研究所）

「テキストにおける語彙的連鎖」
2011年3月6日（国立国語研究所）
村田 年（慶應義塾大学）
「「手」の慣用句を指標とした文章の所属ジャンル判別の可能性 ―現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて―」
馬場俊臣（北海道教育大学）
「接続表現の二重使用と文章ジャンル」
金 明哲（同志社大学）
「文節の語彙属性パターンに基づいた文体分析」
2011年6月26日（国立国語研究所）
山崎 誠（国立国語研究所）
「語彙の分布の視覚化」
清水まさ子（日本大学）
「論文の構成要素の分布から学術論文のタイプを見る」
高崎みどり（お茶の水女子大学）
「文章と語彙の関わりについて」
2011年9月24日（北海道教育大学札幌駅前サテライト）
山崎 誠（国立国語研究所）
「文章における共起語率の分布」

○テキストの多様性を捉える分類指標の策定
プロジェクトリーダー　柏野和佳子
2009年12月11日（国立国語研究所）
柏野和佳子（国立国語研究所）
「テキストの多様性を捉える分類基準の検討」
佐藤理史（名古屋大学）
「日本語テキストの難易度推定」
徳永健伸（東京工業大学）
「心理実験によるシステムの評価」
小磯花絵（国立国語研究所）
「テキスト評定実験の紹介」
2010年9月29日（計量計画研究所）
柏野和佳子（国立国語研究所）
「書籍サンプルより捉えたいテキストタイプの検討」
大塚裕子（計量計画研究所）
「定性的な可読性指標を定量的に扱うための検討」
佐渡島紗織（早稲田大学）
「テキスト分類の観点 ―国語教育「書くこと」という視点から―」
2010年11月18日（国立国語研究所）
柏野和佳子（国立国語研究所）
「PACLIC24 ポスター発表報告：An Approach toward Register Classification of Book Samples in the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese」

玉城伸仁（京都大学大学院生），佐藤理史（名古屋大学）
「大きなコーパスを基準に文の機能性を定量する技術」
2011 年 8 月 30 日（公立はこだて未来大学）
柏野和佳子（国立国語研究所）
「書籍テキストへの分類指標付与試行作業の進捗報告」
佐藤理史（名古屋大学）
「テキストの難易度に対する人間の判断と機械の判断」

○統計と機械学習による日本語史研究
プロジェクトリーダー　小木曽智信
2011 年 3 月 4 日（国立国語研究所）
小木曽智信（国立国語研究所）
「“統計と機械学習による日本語史研究”がめざすもの」
岡 照晃（奈良先端科学技術大学院大学大学院生）
「明治初期の雑誌データを対象とした濁点の自動付与」
2011 年 9 月 2 日（就実大学）
須永哲矢（国立国語研究所）
「中古語辞書見出し語認定におけるコーパスと統計指標活用の可能性」
岡崎友子（就実大学）
「指示詞を組み合わせた語に関する歴史的一考察」
小林雄一郎（法政大学非常勤講師，大阪大学大学院，日本学術振興会）
「言語研究における機械学習の活用」

○文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究
プロジェクトリーダー　山口昌也
2009 年 12 月 28 日（国立国語研究所）
山口昌也（国立国語研究所）
「プロジェクトの概要と合成的な意味記述」
北村雅則（名古屋学院大学）
「助動詞の多義性に関わる言語学的分析と自然言語処理との関連性」
井上 優（国立国語研究所）
「文法形式の意味・用法をどうとらえるか」
白井清昭（北陸先端科学技術大学院大学）
「コーパスと辞書に基づく意味解析」
千葉庄寿（麗澤大学）
「コーパスを用いた「一般名詞」の意味記述の方法概観」
2010 年 7 月 25 日（国立国語研究所）
山口昌也（国立国語研究所）
「複合動詞の合成的な意味記述と用例の収集」
白井清昭（北陸先端科学技術大学院大学）
「クラスタリングならびに分類器学習に基づく語義曖昧性解消」
柏野和佳子（国立国語研究所）

「テキストタイプのアノテーション作業の検討 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を用いて―」

2010 年 12 月 27 日（国立国語研究所）

白井清昭（北陸先端科学技術大学院大学）

「用例クラスタと語義の対応付けに基づく新語義の検出」

北村雅則（名古屋学院大学）

「形容詞による連体修飾と連用修飾について」

山口昌也（国立国語研究所）

「用例に基づく複合動詞の構成分析（試行）」

2011 年 12 月 27 日（国立国語研究所）

井上 優（麗澤大学）

「事象の叙述様式に関する日中対照」

山口昌也（国立国語研究所）

「用例に基づく複合動詞の構成分析（試行 2）」

言語対照研究系

○形容詞節と体言締め文：名詞の文法化

プロジェクトリーダー　角田太作

2009 年 12 月 12 日（国立国語研究所）

下地理則（群馬県立女子大学）

“Noun-concluding constructions in Irabu Ryukyuan”

金 廷珉（松山大学）

“Noun-concluding construction in Korean”

アンナ・ブガエワ（早稲田大学）

“Noun-concluding and related construction in Ainu (or Mermaid and Co.)”

2010 年 3 月 27 日（国立国語研究所）

桐生和幸（美作大学）

“Adnominal clauses and noun-concluding constructions in Kathumandu Newar”

梅谷博之（東京大学）

“Preliminary remarks on the noun-concluding (or mermaid) construction in Khalkha Mongolian”

アンドレイ・マルチューコフ（国立国語研究所客員）

“Towards a typology of transcategorial operations: focus on deverbalization”

アンドレイ・マルチューコフ（国立国語研究所客員）

“Some remarks of noun concluding constructions「エヴェン語」”

2010 年 7 月 24 日～ 25 日（国立国語研究所）

（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）

井土愼二（愛知県立芸術大）

“Noun-concluding constructions in Kathumandu Newar”

加藤昌彦（大阪大）

“Noun-concluding construction in colloquial Burmese”

片桐真澄（岡山大）
「タガログ語の体言締め文」
千田俊太郎（京都大）
「ドム語（パプアニューギニー）における五段階」
角田太作（国立国語研究所）
“Questionnaire for Five Levels”

2010 年 10 月 16 日～ 17 日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
10 月 16 日
角田太作（国立国語研究所）
「日本語の体言締め文」
井上 優（国立国語研究所）
「体言締め文：日本語，韓国語，中国語の比較」
宮地朝子（名古屋大学）
「日本語の体言締め文の歴史」
10 月 17 日
角田太作（国立国語研究所）
「五段階：導入」
北野浩章（愛知教育大学）
「カパンパンガン語（フィリピン）における五段階」
永井忠孝（青山学院大学）
「イヌピアク語（アラスカ）における五段階」

2010 年 12 月 11 日～ 12 日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
12 月 11 日
角田太作（国立国語研究所）
「日本語の体言締め文（後半）」
白井聡子（名古屋工業大学）
「ダパ語の体言締め文」
海老原志穂（清泉女子大学）
「アムド・チベット語の体言締め文」
12 月 12 日
風間伸次郎（東京外国語大学）
「ナナイ語における五段階」
大角 翠（東京女子大学）
「ネク語における五段階」
辻 笑子（東京大学大学院生）
「オロエ語の副詞節」

2011 年 4 月 23 日～ 24 日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
4 月 23 日
米田信子（大阪大学）

「ヘレロ語における五段階」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語の体言締め文」
遠藤 史（和歌山大学）
「ユカギル語の体言締め文」
4 月 24 日
今村泰也（国立国語研究所）
「ヒンディー語の体言締め文」
ティモシー・バンス（国立国語研究所）
「英語における五段階」
河内一博（防衛大学校）
「シダーマ語の体言締め文」
2011 年 6 月 25 日～ 26 日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
6 月 25 日
小野秀樹（東京大学）
「中国語の体言締め文」
笹間史子（大阪学院大学）
「海岸ツィムシアン語における五段階」
八杉佳穂（国立民族学博物館）
「カクチケル語における五段階」
塩谷 亨（室蘭工業大学）
「ハワイ語における五段階」
6 月 26 日
山田久就（小樽商科大学）
「アバル語における五段階」
桐生和幸（美作大学）
「ネワール語における五段階」
下地理則（群馬県立女子大学）
「琉球語伊良部方言における五段階」
2011 年 10 月 15 日～ 16 日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
10 月 15 日
高橋清子（神田外語大学）
「タイ語における体言締め文」
白井聡子（名古屋工業大学）
「ダパ語における五段階」
加藤昌彦（大阪大学）
「ビルマ語における五段階」
ハイコ・ナロック（東北大学，国語研）
「階層構造モデルの比較と検証―テンス・アスペクト・モダリティ・ムードを中心に」
10 月 16 日

佐々木冠（札幌学院大学）
「日本語水海道方言における五段階」
平野尊識（山口大学）
「タガログ語における五段階」
梅谷博之（東京大学）
「モンゴル語における五段階」
2011年12月10日～11日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
12月10日
児島康宏（東京外国語大学）
「グルジア語における五段階」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語における五段階」
佐々木冠（札幌学院大学）
「日本語水海道方言の人魚構文」
12月11日
高橋清子（神田外語大学）
「タイ語における五段階」
小林正人（東京大学）
「クルフ語の人魚構文」
遠藤 史（和歌山大学）
「コリマ・ユカギール語における五段階」
2012年3月10日～11日（国立国語研究所）
（節連接へのモーダル的・発話行為的な制限（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
3月10日
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「マラティー語における五段階」
小林正人（東京大学）
「サンタル語における五段階」
角田三枝（立正大学）
「日本語における五段階：応用」
金 恩愛（福岡県立大学）
「韓国語における五段階」
3月11日
沈 力（同志社大学）
「中国語における五段階」
ハイコ・ナロック（東北大学）
「ドイツ語における五段階」
長屋尚典（国立国語研究所）
「インドネシア語における五段階」

◯節連接へのモーダル的・発話行為的な制限

プロジェクトリーダー　角田太作
2009 年 12 月 13 日（国立国語研究所）
角田三枝（立正大）
「日本語共通語」
海老原志穂（清泉女子大）
“Modal and speech-act constraints on clause-linkage in Amdo Tibetan”
2010 年 3 月 28 日（国立国語研究所）
角田太作（国立国語研究所）
“Five levels: summary so far”
角田太作（国立国語研究所）
“Questionnaire for Five Levels”
角田太作（国立国語研究所）
“Five levels: Warrongo「ワロゴ語」”
角田太作（国立国語研究所）
“Five levels: Djaru「ジャル語」”
アンドレイ・マルチューコフ（国立国語研究所客員教授）
「エヴェン語とロシア語」
2010 年 7 月 24 日～ 25 日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
井土愼二（愛知県立芸術大）
“Noun-concluding constructions in Kathumandu Newar”
加藤昌彦（大阪大）
“Noun-concluding construction in colloquial Burmese”
片桐真澄（岡山大）
「タガログ語の体言締め文」
千田俊太郎（京都大）
「ドム語（パプアニューギニー）における五段階」
角田太作（国立国語研究所）
“Questionnaire for Five Levels”
2010 年 10 月 16 日～ 17 日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
10 月 16 日
角田太作（国立国語研究所）
「日本語の体言締め文」
井上 優（国立国語研究所）
「体言締め文：日本語，韓国語，中国語の比較」
宮地朝子（名古屋大学）
「日本語の体言締め文の歴史」
10 月 17 日
角田太作（国立国語研究所）
「五段階：導入」
北野浩章（愛知教育大学）

「カパンパンガン語（フィリピン）における五段階」
永井忠孝（青山学院大学）
「イヌピアク語（アラスカ）における五段階」
2010年12月11日～12日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
12月11日
角田太作（国立国語研究所）
「日本語の体言締め文（後半）」
白井聡子（名古屋工業大学）
「ダパ語の体言締め文」
海老原志穂（清泉女子大学）
「アムド・チベット語の体言締め文」
12月12日
風間伸次郎（東京外国語大学）
「ナナイ語における五段階」
大角 翠（東京女子大学）
「ネク語における五段階」
辻 笑子（東京大学大学院生）
「オロエ語の副詞節」
2011年4月23日～24日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
4月23日
米田信子（大阪大学）
「ヘレロ語における五段階」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語の体言締め文」
遠藤 史（和歌山大学）
「ユカギル語の体言締め文」
4月24日
今村泰也（国立国語研究所）
「ヒンディー語の体言締め文」
ティモシー・バンス（国立国語研究所）
「英語における五段階」
河内一博（防衛大学校）
「シダーマ語の体言締め文」
2011年6月25日～26日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
6月25日
小野秀樹（東京大学）
「中国語の体言締め文」
笹間史子（大阪学院大学）
「海岸ツィムシアン語における五段階」

八杉佳穂（国立民族学博物館）
「カクチケル語における五段階」
塩谷 亨（室蘭工業大学）
「ハワイ語における五段階」
6 月 26 日
山田久就（小樽商科大学）
「アバル語における五段階」
桐生和幸（美作大学）
「ネワール語における五段階」
下地理則（群馬県立女子大学）
「琉球語伊良部方言における五段階」
2011 年 10 月 15 日～ 16 日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
10 月 15 日
高橋清子（神田外語大学）
「タイ語における体言締め文」
白井聡子（名古屋工業大学）
「ダパ語における五段階」
加藤昌彦（大阪大学）
「ビルマ語における五段階」
ハイコ・ナロック（東北大学，国語研客員）
「階層構造モデルの比較と検証 ―テンス・アスペクト・モダリティ・ムードを中心に」
10 月 16 日
佐々木冠（札幌学院大学）
「日本語水海道方言における五段階」
平野尊識（山口大学）
「タガログ語における五段階」
梅谷博之（東京大学）
「モンゴル語における五段階」
2011 年 12 月 10 日～ 11 日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
12 月 10 日
児島康宏（東京外国語大学）
「グルジア語における五段階」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語における五段階」
佐々木冠（札幌学院大学）
「日本語水海道方言の人魚構文」
12 月 11 日
高橋清子（神田外語大学）
「タイ語における五段階」
小林正人（東京大学）

「クルフ語の人魚構文」
遠藤 史（和歌山大学）
「コリマ・ユカギール語における五段階」
2012 年 3 月 10 日～ 11 日（国立国語研究所）
（形容詞節と体言締め文：名詞の文法化（リーダー：角田太作）との合同研究発表会）
3 月 10 日
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「マラティー語における五段階」
小林正人（東京大学）
「サンタル語における五段階」
角田三枝（立正大学）
「日本語における五段階：応用」
金 恩愛（福岡県立大学）
「韓国語における五段階」
3 月 11 日
沈 力（同志社大学）
「中国語における五段階」
ハイコ・ナロック（東北大学）
「ドイツ語における五段階」
長屋尚典（国立国語研究所）
「インドネシア語における五段階」

○述語構造の意味範疇の普遍性と多様性
プロジェクトリーダー　井上 優（～ 2011 年 3 月）プラシャント・パルデシ（2011 年 4 月～）
2010 年 3 月 22 日（国立国語研究所）
定延利之（神戸大学）
「過去形の変化表現再考」
渋谷勝己（大阪大学）
「山形市方言の引用・伝聞のテとド」
益岡隆志（神戸市外国語大学）
「述語の形と意味の言語対照 ―日本語からのパースペクティブ―」
2010 年 10 月 31 日（関西学院大学梅田キャンパス）
井上 優（国立国語研究所）
「日本語はなぜ「ナル」的言語か」
益岡 隆志（神戸市外国語大学）
「属性のタイプと主題標識」
2011 年 6 月 4 日（国立民族学博物館）
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「他動性プロジェクトの全体像について」
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「マラティー語における他動性のスペクトル」
栗林 裕（岡山大学）

「トルコ語における自他動詞の概要と諸問題」
高橋 清子（神田外語大学），大崎紀子（京都大学）
「タイ語の他動性について」
2011 年 10 月 22 日（京都大学）
梶 茂樹（京都大学）
「トーロ語の自動詞と他動詞」
米田信子（大阪大学）
「マテンゴ語の動詞の自他 ―派生接辞の形態による分類―」
塩田勝彦（大阪大学）
「ヨルバ語動詞と他動性」
河内一博（防衛大学校）
「Sidaama 語（エチオピア, ハイランド･イースト･クシ）と Kupsapiny 語（ウガンダ, 南ナイル）における他動性」
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「他動性と意図性に関わる言語表現使用の検証 ―日本語とマラーティー語の対照研究および日本語教育への応用―」
2012 年 2 月 4 日（TKP 東京駅八重洲カンファレンスセンター）
佐々木冠（札幌学院大学）
「北海道方言の他動性交替」
ブガエワ・アンナ（早稲田大学）
「'S:O' voice alternations in Ainu」
梅谷博之（東京大学）
「モンゴル語の自動詞と他動詞」
円山拓子（北海道大学）
「韓国語の語彙的自他対応と他動性」

○日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成
プロジェクトリーダー　プラシャント・パルデシ
2010 年 1 月 30 日（国立国語研究所）
石川慎一郎（神戸大学）
「辞書編纂とコーパス：英語から日本語へ」
西光義弘（神戸大学）
「学習者用基本動詞辞典のサンプル項目」
桐生和幸（美作大学）
「辞書作成のための共同執筆オンラインシステムの概要と課題」
山崎 誠（国立国語研究所）
「基本動詞選定のための基礎データについて」
2010 年 3 月 5 日（神戸大学）
井上 優（国立国語研究所）
「中国語話者のための日本語学習辞書について」
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「対照研究の知見をいかに活用したか？ ―『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』の

作成を振り返って―」

今井新悟（山口大学）

「日本語学習辞典開発にむけて」

2011 年 3 月 24 日（関西学院大学）

赤瀬川史郎（Lago 言語研究所）

「ハンドブック執筆のためのコーパスシステム LWP+BCCWJ の使用法」

李 在鎬（（独）国際交流基金）

「動詞の語形と意味の関連について」

田中茂範（慶應義塾大学）

「基本動詞の意味の捉え方と辞書記述のあり方」

2011 年 7 月 3 日（国立国語研究所）

石川慎一郎（神戸大学）

「学習者コーパス研究の可能性」

赤瀬川史朗（Lago 言語研究所）

「国語研の大規模コーパス（BCCWJ）の日本語研究・日本語教育への活用に向けて ―コーパスを読むツール NINJAL-LWP のデモンストレーション―」

2012 年 2 月 25 日（関西学院大学）

籾山洋介（名古屋大学）

「「あがる」の記述」

今井新悟（筑波大学），砂川有里子（筑波大学），高原真理（筑波大学非常勤）

「見出し語「走る」「あげる」「もらう」の執筆について」

赤瀬川史朗（Lago 言語研究所），プラシャント・パルデシ（国立国語研究所），今村泰也（国立国語研究所非常勤）

「NINJAL-LWP の一般公開と今後の展開」

桐生和幸（美作大学）

「日本語基本動詞編集用エディタ：機能と活用方法について」

李 相穆（九州大学）

「辞書情報の効果的な視覚化と今後の展望」

2012 年 3 月 25 日（インド・プネー市）

プラシャント・パルデシ（国立国語研究所），今村泰也（国立国語研究所）

「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」プロジェクトの歩み

西光義弘（神戸大学名誉教授）

「辞書に含むべき内容について ―基本動詞「つくる」を材料として」

山崎 誠（国立国語研究所）

「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の概要」

赤瀬川史朗（Lago 言語研究所）

「BCCWJ コロケーション検索ツール NINJAL-LWP デモンストレーション」

桐生和幸（美作大学）

「時空間を超える見出し編集ツールとその活用方法」

李 相穆（九州大学）

「辞書情報の効果的な視覚化と今後の展望」

プラシャント・パルデシ（国立国語研究所），赤瀬川史朗（Lago 言語研究所）

「コロケーションをどう教えるか ―学習者向けコロケーション可視化ツールの開発―」

○空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究

プロジェクトリーダー　松本 曜

2011 年 2 月 10 日～ 11 日（国立国語研究所）

松本 曜（神戸大学）

「ダイクシスと移動類型論」

河内一博（防衛大学校）

「シダーマ語におけるダイクシスと移動表現」

田村幸誠（滋賀大学）

「ユッピック語におけるダイクシスと移動表現」

プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）

「マラーティ語におけるダイクシスと移動表現」

高橋清子（神田外語大学）

「タイ語におけるダイクシスと移動表現」

吉成裕子（岐阜大学）

「イタリア語におけるダイクシスと移動表現」

古賀裕章（慶応大学）

「ダイクシスと移動表現」

江口清子（大阪大学非常勤）

「ハンガリー語におけるダイクシスと移動表現」

松瀬育子（慶応大学非常勤）

「ネワール語におけるダイクシスと移動表現」

秋田喜美（東京大学学振 PD）

「英語におけるダイクシスと移動表現」

守田貴弘（東京大学特任研究員）

「フランス語におけるダイクシスと移動表現」

長屋尚典（ライス大学大学院生）

「ラマホロット語におけるダイクシスと移動表現」

アンナ・ボルディロフスカヤ（神戸大学大学院生）

「ロシア語におけるダイクシスと移動表現」

モニカ・カフンブル（神戸大学大学院生）

「スワヒリ語におけるダイクシスと移動表現」

2012 年 3 月 27 日（国立国語研究所）

河内一博（防衛大学校）

「Sidaama 語（エチオピア，クシ語族）のビデオ実験の報告」

今里典子（神戸市立工業高等専門学校）

「日本手話の分析」

吉成裕子（岐阜大学），ファビアーナ・アンドレアーニ（ナポリ東洋大学大学院生）

「イタリア語の実験報告」

守田貴弘（東京大学特任研究員）

「フランス語の実験報告」

江口清子（大阪大学非常勤講師）
「ハンガリー語のダイクシス表現 ―実験映像 A9 を用いて―」

日本語教育研究・情報センター

○多文化共生社会における日本語教育研究
プロジェクトリーダー　迫田久美子
2010 年 9 月 25 日（国立国語研究所）
テーマ「日本語学習者の多様性 ―第二言語習得の関連領域から学ぶ―」
岩立志津夫（日本女子大学）
「第一言語の動詞の発達 ―実態と説明理論，今後の方向性―」
ダニエル・ロング（首都大学東京）
「言語接触と日本語習得」
阿部敬信（別府大学短期大学部）
「日本手話を母語とする聴覚障害児の日本語習得」
2010 年 11 月 20 日（国立国語研究所）
テーマ「日本語教育研究における学習者コーパスの役割」
李 在鎬（国際交流基金 日本語試験センター）
「学習者コーパスの構築における課題 ―タグ付き KY コーパスの開発経験から―」
山内博之（実践女子大学）
「学習者コーパスの使用方法の一例 ―KY コーパスからわかったこと―」
大関浩美（麗澤大学）
「学習者コーパスを使った言語習得研究 ―発話データから何が見えてくるか―」
特別講演
白井恭弘（ピッツバーグ大学）
「言語習得・処理・障害における普遍性はどこから来るのか ―コーパス研究からわかること，わからないこと―」
2011 年 11 月 13 日（国立国語研究所）
テーマ「学習者コーパスを活用した外国語教育研究」
開会挨拶とプロジェクト説明
研究発表
奥野由紀子（横浜国立大学）
「日本語学習者の「の」の脱落から見えてくるもの ―コーパスと文法性判断テストの分析から―」
特別講義
杉浦正利（名古屋大学）
「学習者コーパス研究の現状と課題 ―英語学習者コーパスを例に―」

○定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究
プロジェクトリーダー　野山 広（国立国語研究所）
2010 年 9 月 6 日（関西学院大学）
（文字環境のモデル化と社会言語科学への応用（リーダー：横山詔一）との合同研究発表会）
横山詔一（国立国語研究所）

「鶴岡市共通語化パネルデータの解析理論」
阿部貴人（国立国語研究所）
「弘前市共通語化の縦断調査に向けて」
尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）
「調査会社委託方式による音声調査の開拓」
指定討論：松尾 慎（東京女子大学），野山 広（国立国語研究所）
全体討論：共通語化の調査手法について，野山プロジェクトと横山プロジェクトの連携について
2011 年 10 月 31 日（関西学院大学）
野山 広（国立国語研究所）
「「縦断調査」の実施地域の現状と今後の展開について ―OPI の枠組みの活用から次の段階へ―」
森本育代（関西学院大学）
「秋田県能代市での縦断調査からみえてきたこと」
指定討論：阿部 新（名古屋外国語大学），松丸 真大（滋賀大学）
2011 年 12 月 21 日（秋田県能代市中央公民館）
野山 広（国立国語研究所）
「能代での「縦断調査」の実施状況と今後の展開について ―学習者のための形成的評価と協同学習の可能性―」
特別講演
横溝紳一郎（佐賀大学），大津由紀雄（慶應義塾大学）
「学習者のためにできること・すべきこと」
指定討論（座談会）：大津由紀雄（慶應義塾大学），北川裕子（のしろ日本語学習会），横溝紳一郎（佐賀大学），野山 広（国語研，司会・進行）
「学習者のために何ができるか」

○学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築
プロジェクトリーダー　山内博之（実践女子大学）
2011 年 12 月 23 日（国立国語研究所）
庵 功雄（一橋大学）
「新しい文法シラバスの構築に向けて」
岩田一成（広島市立大学）
「日本語教育初級シラバスはどこから来たのか？」
建石 始（神戸女学院大学），橋本直幸（福岡女子大学）
「実質語の使用実態と指導項目の選定」
2012 年 2 月 26 日（石川四校記念文化交流館）
俵山雄司（群馬大学）
「接続表現の使用傾向について」
西川寛之（明海大学）
「会話における文末詞の機能と習得について」
松田 真希子（金沢大学），宮永愛子（金沢大学 非常勤講師）
「テキストマイニング技術を活用した日本語学習者の語彙ネットワークの分析と応用」
柳田直美（早稲田大学）

「議論の場における「他者発言容認の前置き表現」使用の縦断的変化 ―中国人日本語学習者の場合―」

渡辺倫子（広島大学）

「日本語コースにおける主観テスト項目データの分析事例」

D．NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院生のみならず一般にも公開。原則として月 1 回，国立国語研究所で開催している。

○第 1 回　2009 年 12 月 4 日

喜多壮太郎（英国・バーミンガム大学）

「なぜ言語は情報を線状的に表現するのか？ ―ニカラグア手話言語と子供のジェスチャー使用からの洞察―」

○第 2 回　2010 年 2 月 22 日

伊藤順子（米国・カリフォルニア大学サンタクルーズ校）

“Parsing constraints and the prosodic hierarchy”

○第 3 回　2010 年 3 月 19 日

柴谷方良（米国・ライス大学）

「理論研究と方言研究をつなぐもの ―準体助詞の機能と展開―」

○第 4 回　2010 年 5 月 8 日

Andrej Malchukov（国語研客員教授）

“Cross-linguistically rare patterns of case-marking and their theoretical implications”

○第 5 回　2010 年 5 月 21 日

下地理則（群馬県立女子大学）

「統語記述におけるテキストの重要性 ―琉球語伊良部方言を例に―」

○第 6 回　2010 年 6 月 8 日

南 雅彦（米国・サンフランシスコ州立大学）

「語りの結束性・一貫性 ―日英バイリンガル児童の作話をどう評定するか―」

○第 7 回　2010 年 7 月 8 日

朴 鎭浩（韓国・ソウル大学校）

「韓国口訣資料の電子的構造化」

○第 8 回　2010 年 9 月 24 日

Robin Lickley（英国・クィーン マーガレット大学）

“Issues in the production and perception of disfluent speech”

Dale Barr（英国・グラスゴー大学）

“Mutual understanding and the paradox of egocentrism in communication”

○第 9 回　2010 年 10 月 19 日

Armin Mester（米国・カリフォルニア大学サンタクルーズ校，国語研客員教授）

“The loanword debate in German and Japanese: a linguistic perspective”

○第 10 回　2010 年 11 月 16 日

Peter Hook（米国・ミシガン大学）
“Complex Predicates in Hindi-Urdu”

○第 11 回　2010 年 12 月 21 日
Wayne Lawrence（ニュージーランド・オークランド大学）
「北琉球方言の音調再建について」

○第 12 回　2011 年 1 月 18 日
John Whitman（米国・コーネル大学 / 国語研客員教授）
「文法理論の観点からみた脱文法化（Degrammaticalization）―日本語の「ケレド」を中心に―」

○第 13 回　2011 年 2 月 15 日
Wesley Jacobsen（米国・ハーバード大学教授 / 国語研客員教授）
「日本語条件文における時間とモダリティーの相互関連性 ―「仮定性」の意味的根源を探って―」

○第 14 回　2011 年 5 月 17 日
辻村成津子（米国・インディアナ大学）
「「てある」構文における社会言語学的「ゆれ」」

○第 15 回　2011 年 6 月 14 日
Polly Szatrowski（米国・ミネソタ大学）
「試食会での食べ物のカテゴリー化とそれに関する知識のやりとりについて ―日本語，ウロフ語（Wolof），エーギマー語（Eegimaa），英語の場合―」

○第 16 回　2011 年 5 月 17 日
Sean Lee（東京大学大学院総合文化研究科大学院生），長谷川寿一（東京大学）
“Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages”

○第 17 回　2011 年 10 月 18 日
Anna Bugaeva（早稲田大学）
“Valency patterns, voice alternations, and verb-categorization in Ainu”

○第 18 回　2011 年 11 月 15 日
Greville G. Corbett（英国・サリー大学）
“Complex morphology in the Caucasus: a canonical approach”

○第 19 回　2011 年 12 月 6 日
Jane Stuart-Smith（英国・グラスゴー大学）
“Does watching TV alter the way you speak? Empirical evidence from an urban dialect”

○第 20 回　2012 年 2 月 14 日
金水 敏（大阪大学）
「日本語の動詞活用の歴史的変化の一側面 ―統語論の観点から―」

○第 21 回　2012 年 3 月 20 日
Peter Trudgill（英国・イーストアングリア大学）
“Mature linguistic phenomena and societies of intimates”

E．NINJAL サロン

国語研の研究者（共同研究員を含む）を中心として，各々の研究内容を紹介することによって情報交換を行う場である。外部からの聴講も歓迎している。

○第 1 回　2009 年 11 月 17 日
プラシャント・パルデシ（言語対照研究系）
「言語理論と日本語教育の融合を目指して」
○第 2 回　2009 年 11 月 24 日
朱 京偉（理論・構造研究系客員教授，北京外国語大学）
「日中語彙交流の課題へのアプローチ」
○第 3 回　2009 年 12 月 8 日
井上 優（言語対照研究系）
「日本語・韓国語・中国語の「体言締め文」」
○第 4 回　2009 年 12 月 22 日
前川喜久雄（言語資源研究系）
「日本語の 'final lowering'（発話末下降）について」
○第 5 回　2010 年 1 月 19 日
高田智和（理論・構造研究系）
「国語研本『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』の書誌と訓点」
○第 6 回　2010 年 2 月 2 日
山崎 誠（言語資源研究系）
「語彙の分布から見るテキストの統計的特性」
○第 7 回　2010 年 2 月 16 日
朝日祥之（時空間変異研究系）
「接触方言の形成に見られる特性」
○第 8 回　2010 年 3 月 2 日
島村直己（日本語教育研究・情報センター）
「近代学校と寺子屋 ―文字教育を中心に―」
○第 9 回　2010 年 4 月 6 日
横山詔一（理論・構造研究系），阿部貴人（研究情報資料センター非常勤研究員）
「共通語化研究はおもしろいのか？」
○第 10 回　2010 年 4 月 13 日
ティモシー・バンス（理論・構造研究系）
「Benjamin S. Lyman と連濁 ―法則の発見―」
○第 11 回　2010 年 4 月 20 日
山口昌也（言語資源研究系）
「相互教授モデルに基づく作文支援システムの開発と実践」
○第 12 回　2010 年 5 月 11 日
阿部貴人（研究情報資料センター非常勤研究員）
「岡崎敬語調査における「丁寧さの段階付け」の再検討」
○第 13 回　2010 年 5 月 18 日
木部暢子（時空間変異研究系長）
「ゴンザの記録した日本語（じつは薩摩語）について」
○第 14 回　2010 年 5 月 25 日
鑓水兼貴（時空間変異研究系非常勤研究員）
「全国方言調査におけるデータベース化」

○第 15 回　2010 年 6 月 1 日
佐野大樹（コーパス開発センター非常勤研究員），田中牧郎（言語資源研究系）
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた難解語の種類の判別 ―医療分野における難解語を例に―」
○第 16 回　2010 年 6 月 15 日
窪薗晴夫（理論・構造研究系）
「語形成と音韻構造 ―外来語短縮を中心に―」
○第 17 回　2010 年 6 月 22 日
角田太作（言語対照研究系）
「日本語研究からの一般言語学への貢献」
○第 18 回　2010 年 6 月 29 日
森 篤嗣（理論・構造研究系）
「フランス語母語話者の作文における日本語母語話者の評価 ―日本語教師と一般日本語母語話者による全体評価と部分評価の相関から―」
○第 19 回　2010 年 7 月 6 日
新野直哉（時空間変異研究系）
「“役不足”の「正用」と「誤用」の勢力図 ―世論調査と実例調査の「ズレ」―」
○第 20 回　2010 年 7 月 13 日
宇佐美洋（日本語教育研究・情報センター）
「日本語学習者の書いた謝罪文に対する日本語教師の評価態度 ―質的分析によるその多様性の解明―」
○第 21 回　2010 年 7 月 20 日
野山 広（日本語教育研究･情報センター），桶谷仁美（共同研究員，イースタン･ミシガン大学教授）
「定住外国人の日本語レベルと言語生活の変容に関する縦断的研究 ―集住地域に定住する日系ブラジル人生徒の事例を中心に―」
○第 22 回　2010 年 7 月 27 日
小磯花絵（理論・構造研究系）
「話者交替に関する漸進的発話末予測モデルの検討 ―コーパスに基づく定量的分析を通して―」
○第 23 回　2010 年 9 月 7 日
今村泰也（言語対照研究系プロジェクト非常勤研究員）
「日本語から見たヒンディー語の関係節 ―いわゆる「外の関係」を中心に―」
○第 24 回　2010 年 9 月 14 日
邱 學瑾（外来研究員 / 博報招聘研究員 / 台湾技術学院）
「台湾人日本語学習者における日本語の漢字語彙処理の問題点 ―単語認知の研究結果に基づいて―」
○第 25 回　2010 年 9 月 15 日
森 信介（京都大学学術情報メディアセンター），グラム・ニュービック（京都大学情報学研究科博士課程）
「部分的アノテーションによる言語処理」
○第 26 回　2010 年 9 月 21 日
平山真奈美（理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー）
「日本語の母音無声化における韻律単位の実在性」

○第 27 回　2010 年 9 月 28 日
上野善道（理論・構造研究系客員教授）
「奈良田方言について」
○第 28 回　2010 年 10 月 5 日
小林正行（コーパス開発センター非常勤研究員）
「狂言台本における例示の副助詞デモ」
○第 29 回　2010 年 10 月 12 日
儀利古幹雄（理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー）
「東京方言における外来語複合名詞アクセントの平板化」
○第 30 回　2010 年 10 月 26 日
アラン H. キム（外来研究員，南イリノイ大学）
「奈良朝古語における尊敬の接尾語「賜」の消滅をめぐって ―その文法化に及ぼした通時的余波―」
○第 31 回　2010 年 11 月 2 日
プラシャント・パルデシ（言語対照研究系）
「意図性と他動性の相関関係の解明を目指して ―理論的研究と実証的研究の融合の事例研究―」
○第 32 回　2010 年 11 月 9 日
山泉 実（言語対照研究系非常勤研究員）
「日本語の左方転移構文と無助詞名詞句 ―情報構造理論的考察―」
○第 33 回　2010 年 11 月 17 日
ウィリアム・マクルア（ニューヨーク市立大学クイーンズ校）
「日本語の学習を通して学べることは何 ―言語学と文化―」
○第 34 回　2010 年 11 月 30 日
柏野和佳子（言語資源研究系）
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における非外来語のカタカナ表記及び古語的な語の出現実態調査」
○第 35 回　2010 年 12 月 7 日
井上 優（言語対照研究系）
「テンスと文法」
○第 36 回　2010 年 12 月 14 日
三井はるみ（理論・構造研究系）
「「～てほしい」の共通語としての普及とその背景」
○第 37 回　2011 年 1 月 11 日
神崎享子（理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー）
「形容詞的な意味機能をもつ「名詞＋の」について」
○第 38 回　2011 年 1 月 25 日
金 愛蘭（時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員）
「20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化」
○第 39 回　2011 年 2 月 1 日
大西拓一郎（時空間変異研究系）
「コ言語変化と方言分布の変化」
○第 40 回　2011 年 2 月 8 日

下地賀代子（時空間変異研究系プロジェクト PD フェロー）
「南琉球・多良間島方言の主題表現について」
○第 41 回　2011 年 2 月 22 日
丸山岳彦（言語資源研究系）
「話し言葉の文法」
○第 42 回　2011 年 3 月 1 日
佐野大樹（コーパス開発センタープロジェクト特別研究員）
「評価表現の分類と『日本語アプレイザル評価表現辞書（態度表現編）』の構築」
○第 43 回　2011 年 3 月 8 日
鑓水兼貴（時空間変異研究系非常勤研究員）
「言語地図にみる方言変化・共通語化」
○特別編 1　2012 年 3 月 29 日
発題者：野山 広，宇佐美洋，田中牧郎，山田貞雄　司会：木部暢子
「今回のような大震災において，言葉の研究に携わる者は何ができるのか」
○特別編 2　2012 年 4 月 5 日
発題者：高田智和，丸山岳彦　司会：木部暢子
「続編：今回のような大震災において，言葉の研究に携わる者は何ができるのか」
○第 44 回　2011 年 4 月 19 日
田中牧郎（言語資源研究系）
「近代漢語の定着 ―『太陽コーパス』に見る―」
○第 45 回　2011 年 5 月 10 日
ケリー・ラッセル（外来研究員，オックスフォード大学 PD 研究員）
「通時コーパスで使用する辞書の構築について」
○第 46 回　2011 年 5 月 10 日
儀利古幹雄（理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー）
「チーム名を形成する形態素「ズ」のアクセント分析 ―無標の表出について―」
○第 47 回　2011 年 5 月 31 日
前川喜久雄（言語資源研究系）
「PNLP の音声的形状と言語的機能」
○第 48 回　2011 年 6 月 7 日
永野マドセン泰子（外来研究員，博報招聘研究員，スウェーデン イェーテボリ大学）
「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」
○第 49 回　2011 年 6 月 21 日
小川晋史（時空間変異研究系プロジェクト PD フェロー）
「琉球語の表記法について」
○第 50 回　2011 年 6 月 28 日
影山太郎（所長，理論・構造研究系）
「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界 ―影山班「事象と属性チーム」研究経過報告」
○第 51 回　2011 年 7 月 5 日
竹田晃子（時空間変異研究系非常勤研究員），三井はるみ（理論・構造研究系）
「「全国方言文法の対比的研究」調査の概要とそのデータ分析（1）―原因・理由表現―」
○第 52 回　2011 年 7 月 19 日

吉田雅子（時空間変異研究系非常勤研究員），阿部貴人（研究情報資料センター非常勤研究員）
「「全国方言文法の対比的研究」調査のデータ分析（2）―言い切り表現・打ち消し表現―」

○第 53 回　2011 年 7 月 26 日
須永哲矢（コーパス開発センタープロジェクト奨励研究員），小木曽智信（言語資源研究系）
「形態素解析辞書『中古和文 UniDic』とコロケーション強度を利用した中古語の単語認定」

○第 54 回　2011 年 9 月 6 日
ティモシー・バンス（理論・構造研究系）
「日本語の漢字仮名交じり文と古アッカド語の楔形文字表記の共通点 ―現代日本語学習者が昔の異文化から学べる教訓―」

○第 55 回　2011 年 9 月 13 日
黄 賢暻（外来研究員 / 日本学術振興会外国人特別研究員）
「疑問詞疑問文とフォーカスのイントネーション ―日本語福岡方言と韓国慶尚南道方言の場合―」

○第 56 回　2011 年 9 月 20 日
角田太作（言語対照研究系）
「変な受動文 :「熊がやむを得ず射殺されました。」」

○第 57 回　2011 年 10 月 25 日
竹村亜紀子（理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー）
「方言習得における親の母方言の影響 ―鹿児島方言の場合―」

○第 58 回　2011 年 11 月 1 日
ジョン・ホイットマン（言語対照研究系）
「上代・中世初期の日本語資料におけるいわゆる主格助詞「イ」の分布と由来について ―『続日本紀宣命』と 9 世紀の訓点資料を中心に」

○第 59 回　2011 年 11 月 8 日
長屋尚典（言語対照研究系プロジェクト PD フェロー）
「日本語から見たタガログ語の名詞修飾構文 : 言語対照研究が教えてくれること」

○第 60 回　2011 年 11 月 22 日
和田 潔（研究情報資料センター非常勤研究員）
「常用漢字表の基礎調査」

○第 61 回　2011 年 11 月 29 日
小西 円（日本語教育研究・情報センタープロジェクト奨励研究員）
「日本語教育のための文法記述を考える」

○第 62 回　2011 年 12 月 13 日
新野直哉（時空間変異研究系）
「現代における「言語意識史」記述の試み ―新語“なにげに”について」

○第 63 回　2011 年 12 月 20 日
小磯花絵（理論・構造研究系）
「会話における復唱発話」

○第 64 回　2012 年 1 月 17 日
プラシャント・パルデシ（言語対照研究系）
「マックスプランク研究所での滞在を振り返って」

○第 65 回　2012 年 1 月 24 日

神崎享子（理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー）
「複合動詞データベースの構築に向けて」
○第 66 回　2012 年 1 月 31 日
小椋秀樹（言語資源研究系）
「コーパスに基づく表記のゆれに関する予備調査」
○第 67 回　2012 年 1 月 22 日
高田智和（理論・構造研究系），山田貞雄（研究情報資料センター）
「国語研究所所蔵の言語研究資料 ―和古書と近代語関係資料―」
○第 68 回　2012 年 3 月 13 日
角田太作（言語対照研究系）
「私の言語学人生：今日の苦労は明日の幸せ。」

7　センター・研究図書室の活動

研究資料情報センター

研究者の共同利用に供するため，日本語学・言語学・日本語教育学に関する行内外の各種研究情報・研究資料を調査・収集している。

・これまで行われてきた日本語研究及び日本語教育研究に関する各種研究調査成果・資料等の収集と整理を行い，共同利用に供するために電子化及び情報発信を行った。
・『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』のデータを統合し,「日本語研究・日本語教育研究文献データベース」として公開を開始した。
・国民の言語生活に貢献するため引き続きことば（日本語・国語・言語）の質問に対応した。
・学術専門情報誌として「国語研プロジェクトレビュー」（NINJAL Project Review），研究活動の活性化と成果の公表及び所内若手研究者育成を目的とした「国立国語研究所論集」（NINJAL Research Papers）を刊行開始し，共同研究プロジェクトや個人研究の成果の発信を行った。

コーパス開発センター

コーパス開発センターでは，日本語言語資源の整備計画である KOTONOHA 計画に従って，国内外の研究者の共同利用に供するため，各種言語資源の開発を進めている。開発に際しては言語資源研究系との間に密接な協力関係を維持している。

・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の『少納言』『中納言』によるオンライン公開を開始した。
・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD 版の有償契約による提供を開始した。
・『日本語話し言葉コーパス』DVD 版の有償契約による提供を継続した。
・「日本語歴史コーパス」の公開に向け，平安時代の仮名文学作品のデータ整備を進めた。
・「明六雑誌コーパス」の公開に向け，データの整備を進めた。
・超大規模コーパスのデータ収集のためのインフラ整備に着手。収集用のネットワーク環境整備と機材購入を進めた。
・形態素解析用の電子辞書「UniDic」のアップデート版の公開を行った。
・古い時代の日本語資料を対象とした「近代文語 UniDic」「中古和文 UniDic」の整備と公開を行った。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で，日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に，日本語教育，言語学など，関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

・開室日時：月曜日～金曜日　9 時 30 分～ 17 時
（土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室）
・主なコレクションには，東条操文庫（方言），大田栄太郎文庫（方言），保科孝一文庫（言語問題），見坊豪紀文庫（辞書），カナモジカイ文庫（文字･表記），藤村靖文庫（音声科学），林大文庫（国語学），輿水実文庫（国語教育），中村通夫文庫（国語学）などがある。
・「国立国語研究所 蔵書目録データベース」を Web 検索できる。
・図書館間文献複写サービス（NACSIS-ILL）により，所属機関の図書館を通して複写を申し込み，郵送で受け取ることができる。

所蔵資料数（2012 年 3 月 31 日現在）

	図書	雑誌
日本語	117,922 冊	5,135 種
外国語	28,719 冊	519 種
計	146,641 冊	5,654 種

※視聴覚資料など 7,406 点を含む

Ⅲ

国際的研究協力と社会貢献

Ⅲ 国際的研究協力と社会貢献

1 国際的研究協力

大学共同利用機関としての国語研は，国際的研究協力と社会貢献をキーワードとして，共同研究と共同利用の諸活動を展開している。日本語及び日本語教育に関する研究をグローバルな観点から進めるため，共同研究者に外国人を含めるだけでなく海外の研究機関とも連携を図っている。

オックスフォード大学との提携

新国語研が発足して言語資源研究系で歴史コーパスの設計に着手したのとほぼ同時期に，オックスフォード大学の日本語･日本語学研究センターでも古代語コーパス構築のプロジェクトが開始された。西洋と東洋で開始されたほぼ同じ方向性の２つの研究プロジェクトが相互に連携することによって，作業がより効率化するだけでなく，内容的にも，互いに不足する部分を補完することで汎用性の高いコーパスを世界レベルで提供することが可能になる。両研究所は互いに知見を提供し合って，この困難な事業をより効率的に進めるために学術的な協力関係を結んでいる。

マックスプランク研究所との提携

人類学，言語学，心理学等の分野で世界的な研究を行っていることで定評のあるドイツ・マックスプランク進化人類学研究所の言語学部門と研究協力体制をとっている。同研究所が展開している世界諸言語における動詞の項交替現象（同じ動詞が自動詞にも他動詞にも使えるといった現象）について，国語研は日本語の調査・分析について協力し，アジアからの貢献を行っている。2011 年のマックスプランク研究所で開かれた世界諸言語の項交替に関する国際会議への参加に続き，2012 年には日本語に特化した国際シンポジウムを国語研主催で開催する。

アメリカ議会図書館およびハーバード大学ライシャワー日本研究所との研究連携

アメリカ議会図書館アジア部日本課の協力により，同館が所蔵する『源氏物語』の翻字を進め，全54 巻の本文データのウェブ上での公開を進めている。また，ハーバード大学ライシャワー日本研究所とは日本語および日本語教育の研究に関して情報交換を行っている。

国際シンポジウム・国際会議の開催

NINJAL 国際シンポジウムを年１～２回開催しているのに加え，海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致することも行っている。

海外の研究者の招聘

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に，研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また，海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う，外来研究員として受け入れている。

2 社会貢献

学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきであると考えている。そのため，大学共同利用機関では「共同研究」という用語を《国内外の大学・研究機関との共同研究》という意味で用い，その成果を社会に還元することを任務としている。国語研の共同研究もすべてこの理念にそって推進されているが，ここでは特に社会との係わりが大きい活動を紹介する。

消滅危機方言の調査・保存・分析

2009 年にユネスコは世界各地の消滅危機言語に関するレッドブックを発表した。その中には日本国内の 8 つの言語（方言）が含まれている。これらの諸方言を集中的に記録・保存し，言語学的に分析することは我が国の言語文化を守り，それら諸方言が用いられる地域社会の活性化にも寄与するだけでなく，世界規模で展開されている危機言語研究に貢献することに繋がる。

日本語コーパスの拡充

欧米と比して遅れを取っていた大規模な現代日本語コーパスの構築を推進し，同時に，オックスフォード大学とも連携しながら古代語を含む歴史コーパスの設計を進めている。2011 年には世界初となる日本語コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を全面的に公開した。これにより，用法や表記の揺れの実態が端的に把握でき，言語研究者のみならず日本語（国語）教師，外国人日本語学習者，マスコミ，人工知能など多方面で利用可能となった。更に世界に先駆けて 100 億語からなる超大規模コーパスの設計・構築に着手している。

多文化共生社会における日本語教育研究

近年，在日外国人や留学生の増加に伴って日本語学習に対するニーズが多様化し，そのため，日本語教育の内容や方法にも多様なアプローチが求められている。第二言語（外国語）としての日本語のコミュニケーション能力の教育・習得に関する実証的研究を広範に行うことによって，日本語教育・日本語学習の内容と方法の改善や，異文化摩擦などの社会的問題の解決などに資する成果を提供していく。

訪問者の受入

NINJAL 職業発見プログラム

2010.9.22　群馬県立高崎東高等学校
2010.11.12　長野県松本蟻ヶ崎高等学校
2011.10.26　群馬県立高崎東高等学校

見学・研修・視察

2009.11.20　文部科学省科学技術・学術政策局
2009.12.9　財務省理財局国有財産企画課
2010.4.27　文部科学省研究振興局学術機関課
2010.5.20　文部科学省研究振興局学術機関課
2010.9.8　文部科学省研究振興局学術機関課

2010.9.29　立川手話こぶしの会
2010.10.7　文化庁文化部国語課
2011.5.20　文部科学省関係機関職員研修生実地研修
2011.9.13　科学技術・学術政策局政策課
2011.10.7　国立国語院（韓国）
2011.10.20　第 3 回西東京地区国立大学法人等共同開催職員研修
2011.11.14　第 22 回中国日本語教師訪日団
2012.1.26　文部科学省研究振興局学術機関課
2012.2.1　東京都行政相談委員 11 支部

学会等の共催・後援

共催

・日本言語学会第 142 回大会公開シンポジウム　2011.6.18-19
主催者：日本言語学会
開催地：日本大学文理学部キャンパス

後援

2009 年度
・全養協第 8 回フォーラム　2009.11.14
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会
開催地：国立オリンピック記念青少年総合センター
・日本語ボランティアシンポジウム 2009「広げよう，わたしたちにできること」 2009.12.5
主催者：財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク
開催地：名古屋国際センター
・第 1 回産業日本語研究会・シンポジウム　2010.2.24
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構
開催地：東京大学情報学環・福武ホール
2010 年度
・日本手話研究所 40 周年記念集会　2010.4.29
主催者：社会福祉法人全国手話研修センター
開催地：横浜市開港記念会館
・日本学術会議公開シンポジウム「日本語の将来」 2010.9.19
主催者：言語系学会連合
開催地：日本学術会議講堂
・第 1 回立川文学賞　2010.5-2011.2
主催者：東京立川こぶしロータリークラブ
・全養協第 9 回フォーラム　2010.8.27.
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会
開催地：国立オリンピック記念青少年総合センター
・日本語ボランティアシンポジウム 2010「共に学ぼう！お隣は外国人」 2010.12.4
主催者：財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク
開催地：名古屋国際センター
・第 2 回産業日本語研究会・シンポジウム　2011.3.2

主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構
開催地：東京大学情報学環・福武ホール

2011 年度

・2011 年日本語教育学会シンポジウム企画「活気ある社会づくりと日本語教育」2011.6.25
主催者：社団法人日本語教育学会
開催地：一橋大学兼松講堂

・第 2 回立川文学賞　2011.6-2012.5
主催者：立川文学賞実行委員会

・平成 24 年度日本語教育能力検定試験　2011.10.28
主催者：財団法人日本国際教育支援協会

・「全養協第 10 回フォーラム」 2011.11.20
主催者：社団法人全国日本語教師養成協議会
開催地：千駄ヶ谷日本語教育研究所

・シンポジウム「世界をつなぐ日本語」 2011.12.3
主催者：政策研究大学院大学・国際交流基金日本語国際センター
開催地：政策研究大学院大学

・日本語ボランティアシンポジウム 2011「日本で生きていく！」 2011.12.3
主催者：公益財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク
開催地：名古屋国際センター

・第 3 回産業日本語研究会・シンポジウム　2012.2.29
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構
開催地：東京大学情報学環・福武ホール

一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研究所が主体となって実施する研究や，他機関との連携研究による優れた成果を，学術界だけでなく，広く一般の方々に知っていただくとともに，社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点から，フォーラムを開催している。

2009 年度

2009 年度は人間文化研究機構国立国語研究所設置記念として，2 回のフォーラムを開催した。

○第 1 回「日本語研究の将来展望」

2009 年 10 月 10 日～ 10 月 12 日（国立国語研究所）

国内および海外から日本語学・言語学研究のフロントランナーを迎え，2 つの基調講演と 4 つのシンポジウム（「音声研究の将来」，「変異研究の将来」，「史的研究の将来」，「文法研究の将来」）からなる学術フォーラムを開催した。3 日間の連続講演会・シンポジウムを通して，日本語学・言語学における今後の研究の道標を提供した。影山太郎所長による基調講演のほか，言語類型論研究の第一人者バーナード・コムリー教授を迎え，言語類型論の将来を展望した。音声研究，変異研究，史的研究，文法研究を代表する国内外の研究者が各々の分野における研究の現状を踏まえて今後の研究の方向を探った。

後援：文部科学省

10 月 10 日

基調講演

1. 影山太郎

「複合語のタイポロジーと日本語の特質」

2. Bernard Comrie

“Japanese and the other languages of the world”

コーパスのデモンストレーション

方言資料等の展示

10 月 11 日

シンポジウム 1「音声研究の将来」

発題 1　窪薗晴夫

「外来語からみた日本語の音韻構造」

発題 2　Timothy Vance

「連濁について」

発題 3　前川貴久雄

「韻律アノテーションを施したコーパスによる自発音声の研究」

発題 4　上野善道

「アクセント史研究」

シンポジウム 2「変異研究の将来」

発題 1　木部暢子

「方言アクセントの形成」

発題 2　大西拓一郎

「人的交流と方言分布の形成」

発題 3　狩俣繁久

「方言文法の記述研究 ―消滅と変容をまえにして―」

発題 4　真田信治

「異言語接触による言語変種の形成過程」

発題 5　相澤正夫

「外国語と外来語のあいだ ―変異の生まれるところ―」

発題 6　横山詔一

「文字環境論と共通語化研究」

10 月 12 日

シンポジウム 3「史的研究の将来」

発題 1　近藤泰弘

「日本語史研究とコーパス」

発題 2　金水 敏

「歴史語用論の可能性」

発題 3　鈴木 泰

「古代日本語の形態論」

発題 4　John Whitman

「日本語の内部再構築の試み ―連体形語尾の原形と日本祖語における名詞化の範囲―」

発題 5　Bjarke Frellesvig

「日本語史研究の展開」

シンポジウム 4「文法研究の将来」
発題 1　井上 優
「テンスの有無と言語のデザイン」
発題 2　益岡隆志
「文論の現状と課題」
発題 3　影山太郎
「動詞意味論から名詞意味論へ」
発題 4　Polly Szatrowski
「談話分析の可能性」
発題 5　角田太作
「日本語から一般言語学への貢献」

○第 2 回「日本語教育における教育と研究の融合 ―過去と未来を繋ぐ―」
2010 年 3 月 21 日（国立国語研究所）
基調講演
Rod Ellis
“Explicit Form-Focused Instruction and Second Language Acquisition”
泉子・K・メイナード
「日本語教育と談話論 ―分析レベルの交錯とジャンルの融合について―」
シンポジウム 1「学習者に求められる日本語コミュニケーション能力の研究」
金田智子，福永由佳
「学習者の多様性・多面性にこたえる「生活のための日本語」」
野山 広
「縦断調査データから見える定住外国人の言語生活」
日比谷潤子
「日本語コミュニケーションの観点から望まれる研究」
シンポジウム 2「日本語教育のための実証的研究」
迫田久美子
「学習者データに基づく日本語の習得研究」
宇佐美洋，森 篤嗣
「社会における相互行為としての「評価」―特性論からタイプ論へ―」
砂川有里子
「コーパスを活用した日本語教育研究」
デモンストレーション

2010 年度
○第 3 回「日本の方言の多様性を守るために」
2010 年 12 月 18 日（霞が関瀬尾ホール）
講演
1.「琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機」
狩俣繁久（琉球大学 / 国立国語研究所客員）
2.「「与論の言葉で話そう ―バイリンガル島を目指して―」
菊 秀史（与論民俗村（私設民俗資料館）経営）

3.「消えてゆく小さな島のことば」
トマ・ペラール（日本学術振興会外国人特別研究員 / 京都大学）
4.「辺境から発信する言語学 ―シベリアのコリャーク語は今」
呉人 惠（富山大学）
5.「文化庁委託事業『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究』中間報告」
木部暢子（国立国語研究所）
パネルディスカッション
狩俣繁久，菊 秀史，トマ・ペラール，呉人 惠
コーディネーター：木部暢子

2011 年度
○第 4 回「日本語文字・表記の難しさとおもしろさ」
2011 年 9 月 11 日（一橋記念講堂）
基調講演
「漢字とどうつきあうか」
阿辻哲次（京都大学）
講演
1.「「自由度」こそ日本漢字の魅力」
小駒勝美（新潮社）
2.「放送と漢字」
柴田 実（NHK 放送文化研究所）
3.「文字の認知単位」
横山詔一（国立国語研究所）
4.「学校における表記の非日常性」
棚橋尚子（奈良教育大学）
5.「漢字：その魅力にひそむエンドレス感」
シュテファン・カイザー（國學院大學）
パネルディスカッション
阿辻哲次，小駒勝美，柴田 実，横山詔一，棚橋尚子，シュテファン・カイザー
司会：高田智和（国立国語研究所）
○第 5 回「日本語新発見 ―世界から見た日本語―」
2012 年 3 月 24 日（一橋記念講堂）
基調講演
「世界の言語から見た日本語・日本語から見た世界の言語」
角田太作（国立国語研究所）
講演
1.「近くて遠い，遠くて近い，フィリピンのことばタガログ語と日本語」
片桐真澄（岡山大学）
2.「日本語と韓国語，どこが似ている，どこが違う」
金 廷珉（韓国・慶一大学）
3.「アイヌ語は日本語に似たようなものか？」
アンナ・ブガエワ（早稲田大学）

4.「日本語に特有と言われる現象はアフリカにもある：シダーマ語（エチオピア）の場合」
河内一博（防衛大学校）
パネルディスカッション
角田太作，アンナ・ブガエワ，河内一博，片桐真澄，金 廷珉
司会：ジョン・ホイットマン（国立国語研究所）

NINJAL セミナー

各共同研究プロジェクトにおいて，その研究内容を様々な形で一般の方々に発表する催しを実施した。

○ことばと社会の文化講演会

2011 年 12 月 3 日（鶴岡市立図書館本館）

国立国語研究所と統計数理研究所は，昭和 25 年，46 年，平成 3 年に引き続き 23 年に鶴岡市で 4 回目となる定点経年調査を実施した。それを記念し鶴岡市と鶴岡市教育委員会主催の講演会を行った。

講演

1.「日本人の価値観はどう変わったか ―日本人の国民性調査から―」
中村 隆（統計数理研究所）
2.「日本語のセンスとユーモア」
中村 明（早稲田大学名誉教授）

人間文化研究機構関係　公開講演会・シンポジウム

○ウチから見た日本語，ソトから見た日本語

2009 年 12 月 5 日（有楽町マリオン朝日ホール）

後援：文部科学省，朝日新聞社

講演

1.「方言の多様性から見た日本語」
工藤真由美（大阪大学）
2.「劇作家から見た日本語」
平田オリザ（劇作家，大阪大学）
3.「幼児の言語発達から見た日本語」
喜多壮太郎（イギリス・バーミンガム大学）
4.「世界の諸言語から見た日本語」
角田太作（国立国語研究所）

パネルディスカッション「ウチから見た日本語，ソトから見た日本語」
工藤真由美，平田オリザ，喜多壮太郎，角田太作
司会：木部暢子（鹿児島大学，国立国語研究所客員）

○ことばの類型と多様性

2011 年 2 月 19 日（有楽町朝日ホール）

問題提起

「ことば現象への視座 ―問題提起にかえて」
長野泰彦（国立民族学博物館）

講演

1.「アクセントとイントネーション ―日本語の多様性」
窪薗晴夫（国立国語研究所）
2.「『主語』を問い直す」
大堀壽夫（東京大学）
3.「言語と認知の類型論：日本語とマラーティー語の対照研究から見えてくる認知の多様性」
プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
4.「言語類型の推移に関わる現象」
太田 斎（神戸市外国語大学）
5.「手話の類型論に向けて」
森 壮也（日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所）
総合討論
長野泰彦，窪薗晴夫，大堀壽夫，プラシャント・パルデシ，太田 斎，森 壮也
司会：長野泰彦　コメント：角田太作（国立国語研究所），菊澤律子（国立民族学博物館）

児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム

言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて，学問の楽しさや素晴らしさを知ってもらうため，中学生・高校生の見学を受け入れている。（受入校は，p.139 に掲載）

NINJAL 探検 2011

2011 年 7 月 23 日（国立国語研究所）
児童・生徒・一般の方に研究所を公開し，ことばに親しめるイベントを開催している。
対象：小学校高学年から中学校 1・2 年生程度の児童・生徒
内容：
・ことばのミニ講義
「国語辞典をひくのが面白くなる話」柏野和佳子（言語資源研究系）
「数字とことばの不思議な話」窪薗晴夫（言語資源研究系）
・NINJAL 紹介
「声の出る方言地図」木部暢子（時空間変異研究系）
「方言の地図を見る・読む」大西拓一郎（時空間変異研究系）
「書き言葉コーパス」山崎 誠（言語資源研究系）
「UniDic による形態素解析」小木曽智信（言語資源研究系）
「世界の言語と日本語：主語，目的語，動詞の順番」角田太作（言語対照研究系）
「「外国人の日本語」を体験してみよう」宇佐美洋（日本語教育研究・情報センター）
・展示室
昔の音声機器等を使った調査方法から研究方法の移り変わりやことばの研究の多様性，語彙調査と調査に使用した雑誌からことばの変化を探る研究について，方言地図の投写台から方言研究について紹介。
・スタンプラリー日本語クイズ
・蔵書の一部公開

3　大学院教育と若手研究者育成

（1）連携大学院：一橋大学大学院言語社会研究科

2005 年度から，一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は，日本人及び滞日留学生を対象としたもので，日本語教育学，日本語学，日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。国立国語研究所は日本語学の分野を担当している。

（2）特別共同利用研究員制度

国語研では，国内外の大学の要請に応じて，日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国語研の設備，文献等の利用や，国語研の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

（3）NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を，第一線の教授陣によって，大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で，若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国語研の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ，全国各地で実施している。2010 年度～2011 年度は第 1 回から第 6 回を実施した。

受講対象：原則として，大学院生レベル

・大学院生（修士課程または博士課程に在籍する者）
・修士課程または博士課程を修了後，原則として 6 年未満の者
・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
・大学院進学を目指す学部学生等

○第 1 回　2010 年 7 月 29 ～ 30 日（学術総合センター）
「文法研究の基本問題」
講師：角田太作（言語対照研究系教授）

○第 2 回　2011 年 5 月 30 日（神戸大学）
「琉球方言の調査・研究法 ―喜界島方言―」
講師：木部暢子（時空間変異研究系教授）

○第 3 回　2011 年 7 月 22 日（恵比寿スバルビル）

○第 4 回　2011 年 9 月 29 日（神戸大学）
「数字の音韻論」
講師：窪薗晴夫（理論・構造研究系教授）

○第 5 回　2012 年 2 月 9 日（国立国語研究所）

○第 6 回　2012 年 2 月 16 日（国立国語研究所）
「『中納言』による BCCWJ 検索入門」
講師：前川喜久雄（言語資源研究系教授）

(4) 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させ，若手研究者のキャリアパスとなる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）を設け，公募により積極的に採用している。(2010 年度在籍者 4 名，2011 年度在籍者 5 名)

Ⅳ

教員の研究活動と成果

Ⅳ 教員の研究活動と成果

影山　太郎（かげやま たろう）国立国語研究所 所長

1949 生

【学位】Ph.D（言語学）（南カリフォルニア大学，1977）

【学歴】大阪外国語大学英語学科卒業（1971），大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了（1973），南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了（1977）

【職歴】神戸学院大学（1973–1974），大阪大学（1978–1987），関西学院大学（1987–2009；2009 年より名誉教授），パリ第 7 大学（招聘教授，2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構 教授・日本語研究機関設置準備室長（2009.4），国立国語研究所 所長（2009.10）

【専門領域】言語学，形態論，語彙意味論，統語論

【所属学会】日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，日本英語学会，関西言語学会，アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 会長（2009-2011）・評議員，日本語学会 評議員，日本英語学会 評議員，関西言語学会 運営委員，特定非営利活動法人言語資源協会（GSK）理事，日本国際教育支援協会 理事

【受賞歴】

1994　第 22 回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，著書『文法と語形成』）

1980　市河賞（財団法人語学教育研究所，著書『日英比較 語彙の構造』）

1973　東京言語研究所言語学懸賞論文賞（東京言語研究所，論文「場所理論的見地から」『言語の科学 5』）

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」：リーダー

研究目的：

和語・漢語・外来語・擬態語を含み複雑な語彙の構成を持つ日本語レキシコン（語彙および語形成）は，世界諸言語の中でも特異な性質を豊富に備えている。本プロジェクトは，語彙の仕組みを，辞書における静的な項目列挙としてではなく，意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え，日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため，理論的分析だけでなく，外国語との比較，心理実験，歴史的変化，方言，コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを採る。具体的には，ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れる現象として，（1）事象叙述と属性叙述，（2）動詞の自他と項交替，（3）動詞＋動詞型の複合動詞，（4）語形成と意味･統語の相互作用という 4 つの事項に着目し分析を行う。研究成果は論文集等として国内外に発信するほか，日本語学習者にも有益なデータベースを構築する。

研究成果：

（1）事象叙述と属性叙述，（2）動詞の自他と項交替，（3）動詞＋動詞型の複合動詞，（4）語形成と意味・統語の相互作用という 4 つのテーマに即してチームごとに研究を行った。第二期中期計画の進行に合わせて，2009 ～ 2011 年度は（1）属性叙述チームと（2）自他交替チームの研究を重点的に進めた。属性叙述チームでは，2011 年 6 月 19 日に日本言語学会公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」（日本大学，参加約 320 人）を開催し，発表内容を発展させた論文集『属

性叙述の世界』（影山太郎編，くろしお出版，2012 年 3 月）を刊行した。自他交替チームでは，国語研とマックスプランク進化人類学研究所との研究協力により，2011 年 4 月 14-17 日にドイツ・ライプチヒで開催された Conference on Valency Classes in the World's Languages で発表を行うとともに，参加した諸国の研究者と交流を深めた。日本語に関する発表は Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, Kan Sasaki “Valency Classes in Japanese” と題する論文にまとめた（Mouton de Gruyter から出版予定の論文集 *Valency Classes in the World's Languages* に掲載予定）。

また，共同研究のテーマと関連して，The 20th Japanese/Korean Linguistics Conference（University of Oxford, 2010 年 10 月）及び The 7th International Conference on Practical Linguistics of Japanese（San Francisco State University，2011 年 3 月）において，それぞれ “Distorted argument realization in agent incorporation” と “When ungrammatical expressions become grammatical” の基調講演を行った。

研究者社会への貢献としては，院生・大学生・言語学非専門家向けに，共同研究メンバーによるレキシコン研究入門書（影山太郎（編）『名詞の意味と構文』大修館書店，2011 年 11 月）を出版した。また，日本と中国の言語学研究の交流促進を意図して，影山太郎・沈 力（編）『日中理論言語学の新展望』（くろしお出版より，第 1 巻 2011 年 11 月，第 2，3 巻 2012 年 3，5 月刊行予定）の編集・執筆を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

影山太郎（編）
『レキシコンフォーラム No.5』，ひつじ書房，2010.6.

影山太郎（編著）
『< 日英対照 > 名詞の意味と構文』，大修館書店，2011.11.

影山太郎，沈 力（編）
『日中理論言語学の新展望 1：統語構造』，くろしお出版，2011.11.

影山太郎（編）
『属性叙述の世界』，くろしお出版，2012.3.

《論文・ブックチャプター》

影山太郎
「語彙情報と結果述語のタイポロジー」，小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』，pp.33-65. ひつじ書房，2009.11.

影山太郎
「複合語のタイポロジーと日本語の特質」，『国語研プロジェクトレビュー』1（1），pp.5-27. 2010.

影山太郎
「移動の距離とアスペクト限定」，影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No. 5』，pp.99-135. 2010.6.

影山太郎
「動詞の文法から名詞の文法へ」，『日本語学』29（11），pp.16-23. 2010.9.

影山太郎
「日本語形態論における漢語の特異性」，大島弘子ほか（編）『漢語の言語学』，pp.1–17. くろしお

出版，2010.9.

Taro Kageyama

"Variation between endocentric and exocentric word structures", *Lingua 120*, pp.2405-2423. 2010.8.

影山太郎

「動詞の意味と統語構造」，澤田治美（編）『ひつじ意味論講座第 1 巻　語・文と文法カテゴリーの意味』，pp.153-171. ひつじ書房，2010.12.

影山太郎

「属性叙述の文法的意義」，影山太郎（編）『属性叙述の世界』，pp.3-35. くろしお出版，2012.3.

《その他の出版物・記事》

影山太郎

「日本語の将来と言語研究 ―シンポジウム「日本語の将来」に寄せて―」，『学術の動向』（日本学術会議）16（5），p.94. 2011.5.

影山太郎

「デキゴトの叙述とモノの叙述」，『国語研プロジェクトレビュー』6，pp.17-25. 2011.10.

影山太郎

「個の文化，集団の文化 ―国立国語研究所はこう変わった」，人間文化研究機構 Web エッセイ，2010.1.13.　http://www.nihu.jp/about/bunka/17.html

【講演・口頭発表】

影山太郎

「言語学と機械翻訳をつなぐ語彙意味論」，第 1 回産業日本語研究会シンポジウム（東京大学）2010.2.

Taro Kageyama

"Distorted argument realization in agent incorporation", Invited talk at the 20th Japanese/Korean Linguistics Conference (University of Oxford) 2010.10.

Taro Kageyama

"When ungrammatical expressions become grammatical", Invited talk at the 7th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (San Francisco State University) 2011.3.

Hideki Kishimoto and Taro Kageyama

"Valency classes in Japanese I: Standard language", Conference on Valency Classes in the World's Languages (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology) 2011.4.

影山太郎

「属性と事象の区別とその言語学的意義」，日本言語学会第 142 回大会 公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」（日本大学）2011.6.

影山太郎

「英語学会にとって社会貢献とは？」，日本英語学会第 29 回大会公開シンポジウム「日英語比較研究の可能性 ―その社会的応用をめぐって―」（新潟大学）2011.11.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・日本言語学会第 142 回大会公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」（日本大学）（企画・運営）2011.6.

窪薗　晴夫（くぼぞの はるお）理論・構造研究系 教授，研究系長

1957 生

【学位】Ph.D.（言語学）（エジンバラ大学，1988）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部卒業（1979），名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了（1981），名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退（1982），英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了（1986）

【職歴】南山大学外国語学部 助手（1982），同 講師（1984），同 助教授（1990），大阪外国語大学外国語学部 助教授（1992），カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員（フルブライト若手研究員）（1994-1995），マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員（1995），神戸大学文学部 助教授（1996），同 教授（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授，研究系長（2010）

【専門領域】言語学，日本語学，音声学，音韻論，危機方言

【所属学会】日本音声学会，日本音韻論学会日本言語学会，関西言語学会，日本音響学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 編集委員長・評議員，日本音声学会 評議員，理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員，市河三喜賞 審査委員

【受賞歴】

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

1997　金田一京助博士記念賞（金田一賞）

1995　市河三喜賞

1988　名古屋大学英文学会 IVY Award

1985　イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトは，促音とアクセントを中心に日本語の音声・音韻構造を考察し，世界の言語の中における日本語の特徴を明らかにしようとするものである。促音については，主に外来語に促音が生起する条件およびその音声学・音韻論的要因を明らかにすることにより，日本語のリズム構造，日本語話者の知覚メカニズムを解明する。この成果は，日本語教育や言語障害教育に応用することが期待できる。アクセントについては，韓国語，中国語，スワヒリ語をはじめとする他の言語との比較対照を基調に，日本語諸方言が持つ多様なアクセント体系を世界の声調，アクセント言語の中で位置づける。

研究成果：

1. 海外から著名な研究者を招聘して，アクセントと促音に関する国際会議を合計 3 回開催し，日本国内の成果を海外に向けて発信した（ISAT 2010，GemCon 2011, ICPP 2011）。
2. 国際会議の成果を論文集として取りまとめ，海外の専門ジャーナルに投稿した。
3. 国内の共同研究者を中心として公開の研究成果発表会を毎年 4 ～ 5 回開催した。
4. 上記の国際シンポジウムおよび研究成果発表会において若手研究者に発表の機会を提供し，また旅費支援を行うことによって若手研究者の育成に努めた。
5. PD フェローを 2 名雇用し，若手研究者の育成を図った。

6. プロジェクトの専用 HP を開設し，プロジェクトの活動及び成果を随時英語で発信した。
7. 甑島方言アクセントの音声データをウェブ公開するために，デジタルファイル化の作業を進めた。
8. アクセントと促音に関する文献リスト（Classified Bibliography）を作成し，ウェブ上で仮公開した。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1. 鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査：リーダー

【研究業績】

《著書・編書》

池上嘉彦，窪薗晴夫，大津由紀雄，西山佑司
『ことばワークショップ ―言語を再発見する』，開拓社，2011.

窪薗晴夫
『数字とことばの不思議な話』岩波ジュニア新書 684，岩波書店，2011.

《論文・ブックチャプター》

窪薗晴夫
「発音の仕組みをさぐる」，大津由紀雄（編著）『はじめて学ぶ言語学：ことばの世界をさぐる 17 章』，pp.15-33. ミネルヴァ書房，2009.

窪薗晴夫
“Accent and the lexicon in Japanese”, Shunji.Inagaki et al. (eds.), *Studies in Language Sciences* 8, pp.31-42. Kurosio Publishers, 2009.

Haruo Kubozono
“Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese”, *Lingua* 120, pp.2323–2335. 2010.

窪薗晴夫，福井美佐
「アルファベット頭文字語のアクセントと音節構造」，岸本秀樹（編）『ことばの対照』，pp.257-270. くろしお出版，2010.

Haruo Kubozono
“Japanese pitch accent”, Marc van Oostendorp, Colin Ewen, Elizabeth Hume and Keren Rice (eds.) *The Blackwell Companion to Phonology* 5, pp.2879-2907. Malden, MA & Oxford: Wiley-Blackwell, 2011.

窪薗晴夫
「ことばの曖昧性と方言」，『ことばワークショップ ―言語を再発見する』，pp.47-88. 開拓社，2011.

窪薗晴夫
「喜界島南部・中部地域のアクセント」，木部暢子他（編）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 ―喜界島方言調査報告書』国立国語研究所共同研究報告 11-01，pp.51–70. 2011.

Haruo Kubozono
“Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese”, *The Linguistic Review* 29, pp.109-130. 2012.

《国際会議録》

Haruo Kubozono
“Accent changes in the past and present: Implications of fieldwork studies for historical changes in Japanese”, *Proceedings of the 20th International Conference on Historical Linguistics* (ICHL 2011)（大阪，国立民族学博物館）2011.7.

Haruo Kubozono, Hajime Takeyasu, Mikio Giriko and Manami Hirayama

"Pitch cues to the perception of consonant length in Japanese", *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences*, pp.1150-1153. (Hong Kong) 2011.

《その他の出版物・記事》

窪薗晴夫

「言葉のあいまい性と日本語の発音」,『日本語学』28（15）, pp.13-19. 明治書院, 2009.

窪薗晴夫

「私が勧めるこの一冊　最適性理論：生成文法における制約相互作用」,『日本語学』28（12）, pp.82-91. 明治書院, 2009.

窪薗晴夫

「次世代の音声研究」,『言語』38（12）, pp.38-43. 大修館書店, 2009.

窪薗晴夫

「英語らしい発音の正体は何か」,『英語教育』9 月号, pp.30-31. 大修館書店, 2010.

窪薗晴夫

「英語の命名にはどんな法則があるか」,『英語教育』9 月号, pp.16-17. 大修館書店, 2010.

窪薗晴夫

「Smoke Free と婉曲表現」,『語学ジャーナル』9 月号, pp.169-74. 語学教育研究所, 2010.

窪薗晴夫

「語形成と音韻構造 ―短縮語形成のメカニズム―」,『国語研プロジェクトレビュー』1（3）, pp.17-34. 2010.

窪薗晴夫

［取材記事］「外国語を学ぶということ」, 児童英語交流情報誌『インターペック』101, pp.1-3. 日本児童英語振興協会, 2010.7.

窪薗晴夫

「アクセントとイントネーション ―日本語の多様性」,『人間文化』13, pp.11-16. 人間文化研究機構, 2011.

窪薗晴夫

「音の法則」,『人と自然』2, pp.14-15. 人間文化研究機構, 2011.

窪薗晴夫

「音声研究の新たな展開」,『日本語学』11 月臨時増刊号 . pp.21-28. 明治書院, 2011.

窪薗晴夫

（論文紹介）「Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese. *Lingua* 120, pp.2323–2335.（2010）」,『国語研プロジェクトレビュー』6, pp.51-54. 2011.

窪薗晴夫

「日本語の促音とアクセント」,『国語研プロジェクトレビュー』6, pp.3-15. 2011.

窪薗晴夫

「数字とことば」, 聖教新聞 2011 年 12 月 9 日朝刊文化面, 2011.

【講演・口頭発表】

窪薗晴夫

「外来語から見た日本語の音韻構造」, 人間文化研究機構国立国語研究所設置記念国際学術フォーラム「日本語研究の将来展望」シンポジウム「音声研究の将来」（国立国語研究所）2009.10.11.

窪薗晴夫

「借用語音韻論と第二言語習得」，日本第二言語習得学会・秋の研修会（関西学院大学梅田キャンパス）［招待講演］2009.10.29.

窪薗晴夫

「アルファベット頭文字語の音韻構造」, 第 27 回日本英語学会全国大会（大阪大学豊中キャンパス）［招聘］2009.11.14.

窪薗晴夫，儀利古幹雄，竹安 大

「日本語の促音知覚について ―リリースの有無に着目して」，Sokuon Workshop（神戸大学）2009.12.20.

窪薗晴夫

「ことばの誤解と日本語の発音」，慶應義塾大学 PLT プロジェクト平成 21 年度第 5 回研究会（神戸）2010.2.13.

窪薗晴夫

「鹿児島弁からことばの世界をのぞく」，鹿児島言語の会教育講演会（鹿児島市鴨池公民館）［招待講演］2010.3.21.

窪薗晴夫

「鹿児島・甑島方言のアクセント」，音声文法研究会（奈良，音声言語研究所）2010.4.10.

Haruo Kubozono

“The phonetics and phonology of tone in Koshikijima Japanese”, International Phonetics-Phonology Conference Shanghai（上海外国語大学）［招待講演］2010.5.28-30.

窪薗晴夫

「日本語の促音と実験音韻論」，日本実験言語学会（JELS）（専修大学）［招待講演］2010.8.26.

儀利古幹雄，竹安 大，窪薗晴夫

「日本語話者の促音知覚に閉鎖音のリリースが及ぼす影響」, 日本音声学会全国大会（國學院大學）2010.10.10.

Haruo Kubozono

“Accent of the Koshikijima Japanese”, International Symposium on Accent and Tone（ISAT 2010）（国立国語研究所）2010.12.19.

Mikio Giriko, Takao Ohshita, Haruo Kubozono

“On the accent of the plural morpheme [zu] in Japanese: The emergence of the unmarked”, Poster presentation at the International Symposium on Accent and Tone（ISAT 2010）（国立国語研究所）2010.12.20.

窪薗晴夫，竹安 大，儀利古幹雄

「日本語促音の「位置効果」について」, International Workshop on Geminate Consonants（GemCon 2011）（神戸大学）2011.1.9.

窪薗晴夫

「アクセントとイントネーション ―日本語の多様性」，人間文化研究機構第 14 回公開講演会・シンポジウム「ことばの類型論と多様性」（有楽町朝日ホール）2011.2.19.

窪薗晴夫

「鹿児島県甑島方言のアクセント規則」，日本女子大学公開シンポジウム「N 型アクセントの原理と成立」（日本女子大学目白キャンパス）2011.3.19.

窪薗晴夫

「鹿児島県甑島方言のアクセント規則」，N 型アクセントシンポジウム（神戸大学）2011.5.21.

Haruo Kubozono

"Varieties of pitch accent systems in Japanese", International Workshop on Tone and Intonation (Netherlands, Radboud Universiteit Nijmegen)［招待講演］2011.9.23.

窪薗晴夫

「借用語音韻論に見られる普遍性と個別性」，日本英語学会第 29 回大会シンポジウム講演（新潟大学）2011.11.13.

窪薗晴夫

「日本語の多様性と異文化間コミュニケーション」，東海大学「知のコスモス」公開講演会（東海大学）［招待講演］2011.11.30.

Haruo Kubozono and Mikio Giriko

"Where does loanword prosody come from? Analysis of alphabetic acronyms in Japanese dialects", ICPP 2011（京都大学）2011.12.13.

窪薗晴夫

「日本語の変容，方言の変容」，国際学会「新しい日本語」（パリ第 8 大学）［招待講演］2012.3.9.

【研究調査】

・2009.10　鹿児島方言アクセント調査（鹿児島市）
・2010.11　鹿児島方言アクセント調査（鹿児島市，薩摩川内市）
・2010.11　鹿児島県甑島方言アクセント調査（下甑島鹿島集落）
・2011.3　鹿児島方言アクセント調査（鹿児島市，薩摩川内市）
・2011.11　鹿児島県甑島方言アクセント調査（上甑島中甑集落）
・2011.11　鹿児島方言アクセント調査（薩摩川内市）

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・5th Phonology Festa（企画・運営）2010.2.18-19.
・International Symposium on Accent and Tone（ISAT 2010）（国立国語研究所）（企画・運営）2010.12.19-20.
・International Workshop on Geminate Consonants（GemCon 2011）（神戸大学）（企画・運営）2011.1.8-9.
・6th Phonology Festa（琵琶湖畔）（企画・運営）2011.2.17-18.
・日本英語学会第 29 回大会シンポジウム「言語と言語の接点から見る言語知識の普遍性と個別性」（新潟大学）（企画・運営）2011.11.13.
・International Conference on Phonetics and Phonology（ICPP 2011）（京都大学）（企画・運営）2011.12.10-14.
・7th Phonology Festa（琵琶湖畔）（企画・運営）2012.2.16-17.
・第 1 回理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表会（企画・運営）2012.2.19.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
南山大学人間文化研究科（2009，2010，2011 年度）
広島大学文学研究科（2011 年度）
東京外国語大学（2011 年度）
・大学院特別講義

関西外国語大学大学院英語教育特別研究リレー講義「日英語の音声と発音指導」(2010.11.01)
日本大学大学院特別講義「日英語対照音韻論」(2010.12.15-16)

・NINJAL チュートリアル講師
第 3 回チュートリアル「数字の音韻論」(東京都 恵比寿スバルビル) 2011.7.22.
第 4 回チュートリアル「数字の音韻論」(神戸大学) 2011.9.29.

・博士論文審査委員
神戸大学 (2010.8. 副査)
上智大学 (2011.3. 副査)

Timothy J.Vance（ティモシー・J・バンス）理論・構造研究系 教授

1951 生

【学位】Ph.D.（言語学）（シカゴ大学，1979）

【学歴】ワシントン大学（セントルイス）卒業（1973），シカゴ大学大学院言語学科修士課程修了（1976），シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了（1979）

【職歴】ハワイ大学マノア本校 准教授（1988），コネチカット・カレッジ 准教授（1993），同 教授（1994），アリゾナ大学 教授（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授（2010）

【専門領域】言語学，音声学，音韻論，表記法

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，言語科学会，日本音声学会，日本音韻論学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 編集委員，日本音韻論学会 理事

【2009〜2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン ―連濁事典の編纂」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの最終目的は，連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は，（1）連濁の由来と史的変化，（2）ライマンの法則，（3）右枝条件，（4）連濁と形態・意味構造，（5）連濁と語彙層，（6）他の音韻交替と連濁の相互作用，（7）アクセントと連濁の相互作用，（8）連濁と表記法，（9）連濁に関する心理言語学研究，（10）方言の連濁，（11）連濁研究史，等々。事典には，包括的な参考文献一覧も含める。

研究成果：

2011 年 2 月 4 日にプロジェクト計画会議を国語研で行なった。同年 6 月 4 〜 5 日に山形市内で，10 月 1 日に国語研で共同研究発表会を開催した。2011 年 12 月 10 〜 14 日に京都大学で国際シンポジウム（ICPP2011），2012 年 2 月 16 〜 17 日に滋賀県で第 6 回音韻論フェスタを窪薗班と共催した。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」：

総合地球環境学研究所の連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」に含まれているプロジェクト（Rendaku across Dialects）を開始した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Sachiko Matsunaga and Timothy J. Vance

"Tongue-Twister Effects in the Silent and Oral Reading of Japanese Sentences: An Exploratory Study", *Studies in Language Sciences* 9, pp.61–73. Kurosio Publishers, 2010.6.

Timothy J. Vance

"Rendaku in Sino-Japanese: Reduplication and Coordination", *Japanese/Korean Linguistics* 19, pp.465-482. CSLI, 2011.9.

【講演・口頭発表】

Timothy J. Vance

"*Rendaku* in Sino-Japanese: Reduplication and coordination", 19th Japanese/Korean Linguistics Conference (Honolulu) 2009.11.

Timothy J. Vance

"Benjamin Smith Lyman and *rendaku*", University of Michigan Center for Japanese Studies (Ann Arbor) 2009.12.

Timothy J. Vance

"Is *renjō* (liaison) a live process in Modern Japanese?", 第5回音韻論フェスタ（滋賀県大津市）2010.2.

Timothy J. Vance

"Shifting to a 2-pattern accent system in Tokyo Japanese? The annoying accentual behavior of surnames", Chinese University of Hong Kong Language Acquisition Laboratory (Hong Kong) 2010.5.

Timothy J. Vance

"Transition to a 2-type accent system in Tokyo Japanese? The behavior of surnames", 20th Japanese/Korean Linguistics Conference (Oxford) 2010.10.

Timothy J. Vance

「Benjamin Smith Lyman と連濁：法則の発見」, 山形大学 言語学フォーラム（山形市）2010.11.

Timothy J. Vance

「Benjamin Smith Lyman と連濁：法則の発見」, 国際教養大学 専門職大学院（秋田市）2010.11.

Timothy J. Vance

「*The Sounds of Japanese*（Vance 2008）：練習問題の利用方法」, 言語科学会ワークショップ（名古屋）2010.12.

Timothy J. Vance

「ライマンの音声・音韻研究」, 第6回音韻論フェスタ（滋賀県大津市）2011.2.

Timothy J. Vance

"Benjamin Smith Lyman as a phonetician", 第7回日本語実用言語学国際会議（San Francisco）2011.3.

Timothy J. Vance

"Sequential voicing (*rendaku* 連濁) in Sino-Japanese", National University of Singapore Linguistics Reading Group (Singapore) 2011.3.

Timothy J. Vance

「日本語の漢字仮名交じり文と古アッカド語の楔形文字表記の共通点」, 日本語教育国際研究大会（Tianjin）2011.8.

Timothy J. Vance

"English Announcements on JR Commuter Trains in Tokyo: Is She a Native Speaker?", 音韻論フォーラム（京都）2011.8.

Timothy J. Vance

"*Rendaku* in the Japanese of immigrants to Hawaii", International Symposium: Interdisciplinary Approaches to Oral History Data (Honolulu) 2011.8.

Timothy J. Vance

"The spread of <ou> in recent romanization", 14th Cognitive Neuropsychology Society Conference（名古屋）2011.9.

Timothy J. Vance, Mizuki Miyashita and Mark Irwin

"Rendaku in Japanese Dialects that Retain Prenasalization,", 21st Japanese/Korean Linguistics Conference (Seoul) 2011.10.

Timothy J. Vance

「御雇外国人 Benjamin Smith Lyman の言語研究」, 山口大学異文化交流研究施設（山口市）2011.11.

Timothy J. Vance

「単一形態素名詞に基づいた名字のアクセント」, 東京音声研究会（東京）2012.2.

横山　詔一（よこやま しょういち）理論・構造研究系 教授，研究情報資料センター長

1959 生

【学位】博士（心理学）（筑波大学，1991）

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業（1981），筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得（1983），筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学（1985）

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手（1985），国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員（1991），同 情報資料研究部 主任研究官（1995），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長（2001），同 研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授（2009），研究情報資料センター長（2009）

【専門領域】認知科学，心理統計，日本語学

【所属学会】日本心理学会，社会言語科学会，計量国語学会，日本語学会，日本教育工学会，行動計量学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 理事，計量国語学会 理事，社会言語科学会研究大会発表賞選考委員会 委員長，社会言語科学会編集委員会 委員，日本心理学会教科書作成委員会 副委員長，日本心理学会認定心理士認定基準作成 委員，筑波大学留学生センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員，日本学術振興会特別研究員等審査会，日本学術振興会国際事業委員会審査員，日本心理学会認定心理士カリキュラム検討委員会 委員，日本心理学会認定心理士認定委員会 副委員長

【受賞歴】

2010　社会言語科学会 第 9 回徳川宗賢賞（優秀賞）

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

1997　日本教育工学会 第 11 回日本教育工学会論文賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」：リーダー

研究目的：

日本語の文字表記について，文字環境（文字レキシコンを含む）のモデルを作成する。そのモデルは，日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか，日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。また，文字環境モデルの考え方を音声コミュニケーション研究にも応用することを試みる。具体的には，山形県鶴岡市で 1950 年から約 20 年間隔で 3 回行われた共通語化の縦断調査や，愛知県岡崎市で 1951 年から実施されてきた敬語の経年調査などの大規模データベースを活用しながら，時空間変異研究系と連携して言語変化の新たな理論を導出する。とりわけ，山形県鶴岡市の共通語化研究については，統計数理研究所のプロジェクトと連動しながらデータ整理を進め，言語変化理論の検証に必要な統計解析を可能にするための基盤を整備する。

研究成果：

2009 年度

言語変化のデータ解析に有用なロジスティック回帰分析に関する英語論文がドイツの計量言語学の専門誌に掲載された。また，敬語意識の経年変化を数量的に予測するための，認知科学と統計科学を融合させた研究が，社会言語科学会から徳川賞（優秀賞）を授与された（朝日祥之氏と真田治子氏との共同受賞）。

2010 年度

愛知県岡崎市における敬語・敬語意識の経年調査のデータベース整備を進め，井上史雄教授（明海

大）がリーダーを務める領域指定型共同研究「敬語と敬語意識の半世紀：愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に」プロジェクトでも活用できる準備を完了した。

2011 年度

統計数理研究所と共同研究の連携協定を締結し，山形県鶴岡市において第 4 回の共通語化調査を実施した。個別面接法で収集したデータは，ランダム・サンプルが約 400 名，パネル・サンプルが約 350 名に達した。プロジェクトをより強力に推進するため，岡崎敬語調査プロジェクト（リーダーは井上史雄氏）との連携を深め，7 月と 8 月に合同で研究発表会を実施した。

第 4 回鶴岡調査については，朝日新聞，読売新聞などによる報道のほか，NHK 山形放送局によるテレビのニュースで延べ 7 回にわたって放送された。さらに，NHK ラジオ全国放送『ラジオ深夜便』の「くらしの中のことば」コーナーでは，共同研究員の佐藤亮一氏が鶴岡市の調査本部から生中継で出演し，鶴岡調査の意義などを約 10 分間にわたって解説した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Shoichi Yokoyama and Haruko Sanada

"Logistic regression model for predicting language change", Reinhard Koehler (ed.) *Studies in Quantitative Linguistics 5, Issues in Quantitative Linguistics*, pp.176-192. (RAM-Verlag, Germany) 2009.12.

横山詔一

「文字はココロの眼と指で読む」,『日本語学』28（15）, pp.40-48. 2009.12.

横山詔一，阿部貴人

「地域社会の共通語化に関する多変量解析モデル」,『情報処理学会研究報告．人文科学とコンピュータ研究会報告』2010（4）, pp.33-48. 情報処理学会，2010.1.

横山詔一，真田治子

「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」,『日本語の研究』6（2）, pp.31-45. 日本語学会，2010.4.

横山詔一

「言語と思考」，重野純（編）『言語とこころ』, pp.39-57. 新曜社，2010.4.

横山詔一

「コーパス本文批評と統計的検定の考え方」，荻野綱男・田野村忠温（編）『講座 IT と日本語研究第 4 巻 コーパスの作成と活用』, pp.123-164. 明治書院，2011.6.

横山詔一

「心理学と語彙」，斎藤倫明・石井正彦（編）『これからの語彙論』, pp.213-224. ひつじ書房，2011.12.

横山詔一

「文字表記とミス・コミュニケーション」，岡本真一郎（編）『ミス・コミュニケーション』, pp.25-39. ナカニシヤ出版，2011.12.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

「言語変化は経年調査データから予測可能か？」,『国語研プロジェクトレビュー』（6）, pp.27-37. 2011.10.

横山詔一，朝日祥之

「(受賞紹介) 記憶モデルによる敬語意識の変化予測」,『国語研プロジェクトレビュー』(6), pp.39-42. 2011.10.

【講演・口頭発表】

横山詔一

「文字環境論と共通語化研究」, NINJAL オープニング・セレモニー国際学術フォーラム (国立国語研究所) 2009.10.

Shoichi Yokoyama

"A statistical analysis of OSH III (Okazaki Survey on Honorifics III) by a psychological model", The 19th Japanese/Korean Linguistics Conference (ハワイ大学) 2009.11.

横山詔一, 朝日祥之, 真田治子

「徳川宗賢賞 (優秀賞) 受賞記念講演」, 社会言語科学会第 25 回研究大会 (慶應義塾大学) [招待講演] 2010.3.

横山詔一, 朝日祥之

「敬語意識の経年変化は統計モデルで予測可能か」, 社会言語科学会第 25 回研究大会 (慶應義塾大学) 2010.3.

横山詔一, 阿部貴人, エリク・ロング

「日本の地域社会における共通語化の 40 年研究」, 世界日本語教育学会 (台湾 国立政治大学), 2010.8.

横山詔一, 井上文子, 阿部貴人

「言語生活の生涯変化は多変量解析で予測可能か : アクセントや敬語意識を例に」, 日本行動計量学会第 38 回大会 (埼玉大学) 2010.9.

横山詔一

「音声共通語化の予測と検証」, 日本音声学会第 24 回全国大会 (國學院大學) [招待講演] 2010.10.

横山詔一

「文字の認知単位」, 第 4 回 NINJAL フォーラム「日本語文字・表記の難しさとおもしろさ」(一橋講堂) 2011.9.

【研究調査】

・2010.8　青森県弘前市における共通語化の調査に参加
・2011.11　山形県鶴岡市における第 4 回の共通語化調査に参加

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL セミナー　鶴岡市教育委員会主催「ことばと社会の文化講演会」(山形県鶴岡市立図書館本館) (企画・運営) 2011.12.

【その他の学術的・社会的活動】

横山詔一, 阿部貴人

「鶴岡調査に関する記者発表」(山形県鶴岡市役所の記者クラブにて) (企画・運営) 2011.10.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
筑波大学大学院心理学研究科

小磯　花絵（こいそ はなえ）理論・構造研究系 准教授

【学位】博士（理学）（奈良先端科学技術大学院大学，1998）

【学歴】千葉大学大学院行動科学研究科修士課程修了（文学）（1996），奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了（理学）（1998）

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員（1996），国立国語研究所言語行動研究部 研究員（1998），同 主任研究員（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系准教授（2009）

【専門領域】コーパス言語学，談話分析，認知科学

【所属学会】日本認知科学会，社会言語科学会，言語処理学会，人工知能学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会事業委員，言語処理学会年次大会プログラム委員

【受賞歴】

2002　情報処理学会山下記念研究賞

1996　人工知能学会大会論文賞

1996　人工知能学会研究奨励賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「会話の韻律機能に関する実証的研究」：リーダー

研究目的：

本研究の目的は，音声コーパスに基づく定量的分析を通して会話相互作用における韻律の特徴・機能を実証的に解明することである。会話における韻律の特徴や機能を検討する際，会話音声のみを分析対象とする従来の研究方法に限界があることを踏まえ，本研究では，会話と独話を対象に韻律の傾向を分析・比較し，両者の類似点・相違点などを明らかにした上で，会話における韻律機能を会話固有の機能と，会話･独話を含む話し言葉一般に見られる機能に分けて捉え直す。また分析に利用する『日本語話し言葉コーパス』のうち対話関連情報を中心に一部拡張・修正した上で，各種情報を統合した RDB 形式のデータを構築して一般に公開することも目指す。

研究成果：

1.『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）を対象に，会話への節単位情報の新規付与や言い淀み現象の韻律情報の基準見直し・修正などを行った上で，CSJ DVD 版第 3 刷を 2011 年 11 月に公開した。

2. CSJ のリレーショナルデータベース（RDB）版を試作し，本共同研究プロジェクトおよび話し言葉に関連する他の共同研究プロジェクトのメンバーを対象に内部公開した。

3. 整備データに基づき，会話・独話の局所的・大局的な韻律特徴（句末境界音調，発話内の声の高さや大きさ，速さの変化，非流暢現象など）について分析した。また，ここで取り上げた韻律特徴などに基づき，発話完結点を予測するモデルを試作した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「話者交替における統語的・韻律的特徴の役割 ―日本語三者会話の定量的分析に基づく考察―」，『音声研究』14（3），pp.13-26. 日本音声学会，2010.12.

佐野大樹，小磯花絵

「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 ―「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係―」，『機能言語学研究』6，pp.59-81. 日本機能言語

学会，2011.4.

《国際会議録》

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Takehiko Maruyama, Masaya Yamaguchi, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso and Yasuharu Den

"Design, Compilation, and Preliminary Analyses of Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Proceedings of the 7th conference on International Language Resources and Evaluation* (LREC2010), pp.1483-1486. 2010.5.

Yasuharu Den, Hanae Koiso, Takehiko Maruyama, Kikuo Maekawa, Katsuya Takanashi, Mika Enomoto, and Nao Yoshida

"Two-level annotation of utterance-units in Japanese dialogs: An empirically emerged scheme", *Proceedings of the 7th conference on International Language Resources and Evaluation* (LREC2010), pp.2103-2110. 2010.5.

Hanae Koiso and Yasuharu Den

"Towards a precise model of turn-taking for conversation: A quantitative analysis of overlapped utterances", *Proceedings of the DiSS-LPSS Joint Workshop 2010*, pp.55-58. 2010.9.

Hanae Koiso and Yasuharu Den

"A phonetic investigation of turn-taking cues at multiple unit-levels in Japanese conversation", *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS XVII)*, pp.1122-1125. 2011.8.

Yasuharu Den, Nao Yoshida, Katsuya Takanashi, and Hanae Koiso

"Annotation of Japanese response tokens and preliminary analysis on their distribution in three-party conversations", *Proceedings of the 14th Oriental COCOSDA (O-COCOSDA 2011)*, pp.168-173. 2011.10.

《データベース類》

・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD 版（2011）

・『日本語話し言葉コーパス』DVD 版第 3 刷（2011）

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/data/

《その他の出版物・記事》

小椋秀樹，小磯花絵，冨士池優美，宮内佐夜香，原 裕

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集』第 3 版，2010.3.

【講演・口頭発表】

石本祐一，榎本美香，小磯花絵

「「うん」と先行発話の音響特徴による機能分類」，『電子情報通信学会技術研究報告』，pp.117-122.（芝浦工業大学）2010.2.

伝 康晴，小磯花絵，丸山岳彦，前川喜久雄，高梨克也，榎本美香，吉田奈央

「対話研究にふさわしい発話単位の提案とその評価（2）～長い単位～」，『人工知能学会研究会資料』，pp.13-18.（須磨）2010.2.

小木曽智信，小椋秀樹，小磯花絵，宮内佐夜香，渡部涼子，伝 康晴

「形態素解析辞書のベンチマークテスト ―IPAdic・NAIST-jdic・UniDic のジャンル別精度比較」，『言語処理学会 第 16 回年次大会 発表論文集』，pp.326-329.（東京大学）2010.3.

佐野大樹，小磯花絵

「修辞ユニットを用いた書き言葉の分析 ―「書き言葉･話し言葉」と（脱）文脈化の関係―」,『社会言語科学会第 23 回研究大会発表論文集』, pp.182-185.（慶応義塾大学）2010.3.

小椋秀樹，原 裕，小木曽智信，小磯花絵，宮内佐夜香

「形態素解析辞書 UniDic における語彙素見出しの立項方針」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.85-92.（東京工業大学）2010.3.

冨士池優美，小椋秀樹，小西 光，小木曽智信，小磯花絵，内元清貴，小澤俊介

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における長単位解析の進捗状況」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.93-100.（東京工業大学）2010.3.

小磯花絵，小木曽智信，小椋秀樹，宮内佐夜香

「長単位情報に基づくジャンル間の文体に関する分析」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.183-190.（東京工業大学）2010.3.

小木曽智信，小椋秀樹，小磯花絵，宮内佐夜香，渡部涼子，伝 康晴

「MeCab 版形態素解析辞書 4 種のジャンル別解析精度比較 ―UniDic と IPAdic, NAIST-jdic, JUMANdic―」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.175-182.（東京工業大学）2010.3.

小椋秀樹，原 裕，小木曽智信，小磯花絵，宮内佐夜香

「形態素解析辞書 UniDic における同語異語判別について」,『言語処理学会 第 16 回年次大会 発表論文集』, pp.486-489.（東京大学）2010.3.

小磯花絵，伝 康晴

「話者交替の精密なモデルに向けて：漸進的発話末予測モデルの提案」,『人工知能学会研究会資料』, pp.55-60.（長崎伊王島）2010.7.

冨士池優美，小椋秀樹，小西 光，小木曽智信，小磯花絵

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』長単位解析に基づく予備的分析」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会議予稿集』, pp.101-108.（国立国語研究所）2010.8.

小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子

「テキストの多様性をとらえる分類指標の体系化の試み」,『言語処理学会第 17 回年次大会』, pp.683-686.（豊橋技術科学大学）2011.3.

冨士池優美，小西 光，小椋秀樹，小木曽智信，小磯花絵

「長単位に基づく『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の品詞比率に関する分析」,『言語処理学会第 17 回年次大会』, pp.663-666.（豊橋技術科学大学）2011.3.

宮内佐夜香，小木曽智信，小磯花絵，小椋秀樹

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づくオノマトペの分析 ―品詞性の検討を中心に―」,『言語処理学会第 17 回年次大会』, pp.651-654.（豊橋技術科学大学）2011.3.

宮内佐夜香，小木曽智信，小磯花絵，小椋秀樹

「BCCWJ に基づくオノマトペの品詞と意味についての分析」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.281-288.（時事通信ホール）2011.3.

冨士池優美，小西 光，小椋秀樹，小木曽智信，小磯花絵

「長単位に基づく媒体・カテゴリ間の品詞比率に関する分析」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.273-280.（時事通信ホール）2011.3.

小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子

「テキストの多様性をとらえる分類指標の構築を目指して」,『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ予稿集』, pp.431-438.（時事通信ホール）2011.3.

小磯花絵，伝 康晴
「話者交替の精密なモデルに向けて（2）：漸進的発話末予測モデルの拡張」，『人工知能学会研究会資料』，pp.13-18.（東京大学）2011.3.
伝 康晴，小磯花絵，丸山岳彦，前川喜久雄，高梨克也，榎本美香，増田将伸
「発話の実時間性：コーパス言語学と相互行為言語学からの提言」，『人工知能学会研究会資料』，pp.51-54.（九州工業大学）2011.7.
小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子
「評定実験に基づくテキスト分類尺度の体系化の試み」，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会 予稿集』，pp.47-52.（JA 共済ビル カンファレンスホール）2011.8.
小磯花絵，伝 康晴
「会話における（部分）復唱発話の分析」，『日本認知科学会第 28 回大会発表論文集』，pp.250-255.（東京大学）2011.9.
小磯花絵，石本祐一
「日本語話し言葉コーパスを用いた「発話」の韻律的特徴の分析 ―イントネーション句を切り口として―」，『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp.167-176.（国立国語研究所）2012.3.
小磯花絵，伝 康晴，前川喜久雄
「『日本語話し言葉コーパス』RDB の構築」，『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp.393-400.（国立国語研究所）2012.3.
五十嵐陽介，小磯花絵
「『日本語話し言葉コーパス』における句末境界音調のピッチレンジ制御」，『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp.355-364.（国立国語研究所）2012.3.
伝 康晴，土屋智行，小磯花絵
「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」，『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp.227-234.（国立国語研究所）2012.3.
小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子
「テキストの多様性をとらえる分類指標の体系化の試み（2）」，『言語処理学会第 18 回年次大会』，pp.739-742.（広島市立大学）2012.3.
伝 康晴，小磯花絵
「RDB と既存のアノテーションツールによる統合的コーパス開発環境」，『言語処理学会第 18 回年次大会』，pp.1122-1125.（広島市立大学）2012.3.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・CSJ-RDB 講習会初級編（国立情報学研究所）（企画・講師）2011.11.23.
・CSJ-RDB 講習会中級編（国立国語研究所）（企画・講師）2011.12.9.

高田　智和（たかだ ともかず）理論・構造研究系 准教授

1975 生

【学位】博士（文学）（北海道大学，2004）

【学歴】北海道大学文学部卒業（1999），北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了（2001），北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2005），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語生活グループ 研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学，国語学，文献学，文字・表記，漢字情報処理

【所属学会】日本語学会，訓点語学会，計量国語学会，情報処理学会，日本言語学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事，情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 幹事，情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員，文字情報基盤構築推進委員会 委員，日本言語学会事務局 委員，常用漢字表の改正に伴う漢字 JIS 開発委員会 委員

【受賞歴】

2010　情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

2007　日本規格協会標準化貢献賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」：リーダー

研究目的：

漢文訓点資料は，文字，音韻，語彙，語法などの面で，日本語史研究の資料として活用されてきた。訓点資料は歴史的・文化財的・教学的価値の高いものが多く，原本調査の難しいものが多い。そのため，重要典籍については，研究者による釈文や，影印，複製が公刊されているものもあるが，釈文は純然たる一次資料ではなく，影印，複製それ自体が稀覯品であったり，白黒印刷であったりと，研究利用にあたって少なからず問題もある。また，訓点資料研究においては，釈文の電子テキスト化や，原本の画像化など，総じてデジタル技術の導入が，他の分野に比べて立ち遅れている現状である。本研究では，国立国語研究所図書館蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經卷第一』（平安初期書写，院政期加点）を例に，（1）原本調査に基づいて，解読結果である釈文の構造化記述の方法を検討し，（2）釈文と原本デジタル画像とを対照表示できるシステム開発の基礎研究を行う。また，韓国の口訣資料を扱う研究者との共同研究によって，研究方法や資料共有について知見を交換するとともに，漢文訓読の日韓対照研究の可能性を探ることも視野に入れる。

研究成果：

（1）国立国語研究所蔵金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經閲覧システムの試験公開（2012.3）
http://www2.ninjal.ac.jp/kongochokyo/

人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」（平成 22 年度）「海外に移出した仮名写本の緊急調査（第 2 期）」（平成 23-24 年度）：代表者

研究目的：

海外に移出した仮名写本（米国議会図書館蔵『源氏物語』）について，所蔵機関との連携のもと原本調査を行い，翻字本文・書誌情報などの基礎研究成果を，国内外の日本語学研究者・日本文学研究者へ速報的に提供する（Web 公表及び報告書刊行）。また，作成した翻字本文を用いて，校訂を経る

以前の，一次翻字テキストによる形態素解析処理の実験を行う。
研究成果：
(1) 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文の試験公開（2011.3 桐壺～藤裏葉，2012.3 若菜上～幻）
http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/
(2)『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻 ―桐壺～藤裏葉―』，『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文 ―若菜上～幻―』

【研究業績】

《著書・編書》

白石大二郎（編集），野元菊雄（監修），高田智和（改訂新版監修）
『例解辞典・改訂新版　常用漢字／送り仮名／現代仮名遣い／筆順』，ぎょうせい，2010.7.

ぎょうせい公用文研究会（代表高田智和）編集
『最新公用文用字用語例集　改定常用漢字対応』，ぎょうせい，2010.7.

《論文・ブックチャプター》

高田智和
「常用漢字と「行政用文字」」，『新常用漢字表の文字論』pp.55-64. 勉誠出版，2009.12.

Miyoung Oh, Jinho Park, John Whitman, Valerio Luigi Alberizzi, Masayuki Tsukimoto, Teiji Kosukegawa, Tomokazu Takada.
"Toward an International Vocabulary for Research on Vernacular Readings of Chinese Texts"（漢文訓讀 Hanwen Xundu），SCRIPTA2, pp.61-83, The Hunmin jeongeum Society, 2010.9.

高田智和
「「景観文字」の記録と分析のために」，『世界の言語景観 日本の言語景観』，pp.149-165. 桂書房，2011.3.

高田智和
「ア行の /e/・ヤ行の /je/ を表わす仮名文字の標準化」，『漢字文献情報処理研究』12，pp.4-12.2011.10.

《データベース類》

・国立国語研究所蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』画像
（巻第一を試験公開）（http://www2.ninjal.ac.jp/kongochokyo/）2012.3.
・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文
（桐壺～藤裏葉を公開）（http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/）2011.3.
・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文
（若菜上～幻を追加公開）（http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/）2012.3.

《辞書・辞典類》

高田智和
「文字の使用量」，『計量国語学事典』，pp.49-51. 朝倉書店，2009.11.

高田智和
「文字」，『かたち・機能のデザイン事典』，pp.184-185. 丸善，2011.1.

《その他の出版物・記事》

高田智和
「書評『外字管理と文字同定 ―合理的な外字作成のために―』（長村玄著）」，『戸籍時報』659，pp.142-143. 2010.9.

高田智和
「現代日本語コーパスにおける文字処理」,『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集 2』, pp.31-40. 人間文化研究機構, 2011.3.
高田智和
「ISO/IEC 10646 の CJK 統合漢字拡張 C・拡張 D の日本提案文字」,『情報技術標準 NEWS LE-TTER』90, pp.17-18. 2011.6.
高田智和
「文字コードの標準化 ―ISO/IEC 10646 の開発―」,『国語研プロジェクトレビュー』6, pp.43-45. 2011.10.
高田智和
「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」,『人と自然』2, pp.24-25. 2011.11.
高田智和
「文字生活を探る」,『HUMAN』2, pp.135-138. 2012.3.

【講演・口頭発表】

岡本隆明, 當山日出夫, 高田智和
「デジタル画像資料による文献研究にむけて ―HNG と画像内文字参照システムの統合的運用のこころみ―」, 第 101 回訓点語学会研究発表会（東京大学山上会館）2009.10.
高田智和
「ア行の /e/・ヤ行の /je/ を表わす仮名文字の標準化をめぐる諸問題」, 漢字文献情報処理研究会第 12 回大会（花園大学）2009.12.
高田智和
「言語景観を分析し, 可視化するには」, 日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム「世界の言語景観・日本の言語景観」（富山大学）2010.1.
高田智和
「訓点資料釈文制作における構造化記述の試み」, 第 85 回情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会（琉球大学）2010.2.
間淵洋子, 柏野和佳子, 山口昌也, 高田智和
「コーパスを用いたテキスト分類指標の検討 ―BCCWJ の文書構造情報分析を中心に―」, 言語処理学会第 16 回年次大会（東京大学）2010.3.
田島孝治, 高田智和
「JIS X 0213 文字セット運用のための文字入力支援ツール」, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）（東京工業大学）2010.3.
高田智和
「CJK 統合漢字拡張 C の日本ソース文字」, 東洋学へのコンピュータ利用第 21 回研究セミナー（京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター）2010.3.
高田智和
「台湾の日本語学習者に対する漢字字形デザインの選好調査」, 2010 International Conference on Japanese Language Education（国立政治大学・台北）2010.7.
田島孝治, 高田智和
「「景観文字調査」のための調査結果分類方法に関する一考察」, 第 87 回情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会（皇學館大学）2010.7.

高田智和
「現代日本語コーパスにおける文字処理」，第 4 回人間文化研究情報資源共有化研究会（国立国語研究所）2010.9.
田島孝治，森 安辰，高田智和
「複数人での「景観文字」調査を想定した記録用ツールの試作」，人文科学とコンピュータシンポジウム「人文工学の可能性 ―異分野融合による「実質化」の方法―」（東京工業大学）2010.12.
田島孝治，高田智和
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』向け外字処理ツール」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）（東京工業大学）2010.3.
高田智和，當山日出夫
「訓点資料デジタル画像化の諸問題」，東洋学へのコンピュータ利用第 22 回研究セミナー（京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学センター）2011.3.
高田智和，石塚晴通，安岡孝一，當山日出夫，池田証寿
「ワークショップ：文字研究における画像データベースの利活用」，日本語学会 2011 年度春季大会（神戸大学）2011.5.
小林龍生，高田智和，秋元良二
「電子書籍における外字・異体字問題に関する一考察」，第 81 回情報処理学会デジタルドキュメント研究会（公立はこだて未来大学）2011.7.
高田智和
「BCCWJ「書籍コーパス」の JIS 外字」,『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会（JA 共済ビルカンファレンスホール）2011.8.
高田智和，渡辺さゆり，唐 煒，白井 純，朴 均輯
「ワークショップ：異文化コミュニケーションとしての漢字・漢語・漢文」，2011 International Conference on Japanese Language Education（天津外国語大学）2011.8.
田島孝治・渡邊 愼・三宅 隼・高田智和
「スマートフォンを利用した「景観文字」調査ツールのシステム化に関する一検討」，人文科学とコンピュータシンポジウム「デジタル・アーカイブ」再考 ―いま改めて問う記録・保存・活用の技術―」（龍谷大学）2011.12.
石塚晴通，池田証寿，高田智和，岡墻裕剛，斎木正直
「漢字字体規範データベース（HNG）の活用 ―漢字字体と文献の性格―」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「デジタル・アーカイブ」再考 ―いま改めて問う記録・保存・活用の技術―」（龍谷大学）2011.12.
須永哲矢，高田智和
「明治前期雑誌の異体漢字と文字コード ―『明六雑誌』を事例として―」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「デジタル・アーカイブ」再考 ―いま改めて問う記録・保存・活用の技術―」（龍谷大学）2011.12.
高田智和
「国研本大教王経の漢字字体」，漢字字体史研究国際シンポジウム「字体規範と異体の歴史」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）2011.12.
高田智和，盛 思超，山田太造
「網羅性を志向しない異体漢字対応テーブル」，第 93 回情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会（奄美市立奄美博物館）2012.1.

【研究調査】

・2010.1　米国議会図書館　源氏物語写本調査
・2010.7　大英図書館　敦煌文献調査
・2010.8　京都国立博物館　漢文加点資料調査
・2010.11　園城寺　漢文加点資料調査
・2010.11　フランス国立図書館　敦煌文献調査
・2011.1　米国議会図書館　源氏物語写本調査
・2011.2　京都国立博物館　漢文加点資料調査
・2011.7　ソウル大学校図書館，ソウル大学校奎章閣　漢文加点資料（口訣資料）調査
・2011.11　京都国立博物館　漢文加点資料調査
・2011.11　第 4 回鶴岡調査
・2011.11　フランス国立図書館　敦煌文献調査
・2011.12　京都国立博物館　漢文加点資料調査
・2012.1　京都国立博物館　漢文加点資料調査
・2012.2　米国議会図書館　源氏物語写本調査
・2012.2　京都国立博物館　漢文加点資料調査
・2012.3　国家図書館（台北），故宮博物院（台北）　漢文加点資料調査
・2012.3　碑林博物館（中国西安）　開成石経調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第 4 回 NINJAL フォーラム「日本語文字・表記の難しさとおもしろさ」（企画・司会）2011.9.11.

【その他の学術的・社会的活動】

・講演「日本語学研究の最近の動向」（国立台湾大学日本語文学系）2010.8.2.
・講演「漢文訓読が日本語にもたらしたもの」，日本加除出版株式会社社員研修，2010.9.4.
・講演「JIS 漢字コードと字体・デザインの複雑な関係」，シンポジウム新「常用漢字表」にどう対応するか（出版ネッツ関東支部）2011.2.26.
・講演「漢文訓読が日本語に与えた影響」（専修大学）2011.12.3.

三井　はるみ（みつい はるみ）理論・構造研究系 助教

【学位】修士（文学）（東北大学，1986）
【学歴】東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程単位修得満期退学（1989）
【職歴】昭和女子大学 講師（1989），国立国語研究所 主任研究官（1997），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 助教（2009）
【専門領域】日本語学，社会言語学，方言文法
【所属学会】日本語学会，日本方言研究会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語教育学会，日本語文法学会
【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人，日本音声学会 広報委員，日本音声学会 評議員，日本語教育学会 査読協力者

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」：リーダー
研究目的：
東京首都圏の言語状況を多面的に把握し，この地域の言語を対象とした総合的な研究の基盤を築く。
研究成果：
2010 年 10 月に研究を開始。共同研究者を中心とした研究会を重ねるとともに，公開の共同研究発表会を 3 回開催し，問題意識の共有と研究交流を行った。首都圏若年層における言語の地域差を把握するための調査法について検討し，Real-time Mobile Phone System の開発に着手，予備的調査を行った。首都圏における方言の地域資源としての利用に関する自治体調査とケーススタディを実施した。

基盤型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員
東京都，千葉県において臨地面接調査を行った。

基盤型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：共同研究員
鹿児島県喜界島において臨地調査を行った。

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」：共同研究員
調査研究方針の検討に参画した。首都圏地域のロールプレイ談話の収録と分析を行った。

文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」：分担者
沖縄県与那国島において臨地調査を行った。報告書に「我が国における言語・方言の現状」を執筆した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

三井はるみ
「方言と共通語のはざまで ―生き残り，生まれ，広がる方言―」，『三色旗』752，慶應義塾大学通信教育部，pp.15-21，2010.11

三井はるみ
「九州西北部方言の順接仮定条件形式「ギー」の用法と地理的分布」，『國學院雑誌』112（12）（通号 1256），pp.26-39. 2011.12.

《辞書・辞典類》

三井はるみ

『県別罵詈雑言辞典』真田信治，友定賢治 編：千葉県を担当　東京堂出版，2011.

《その他の出版物・記事》

大西拓一郎，鑓水兼貴，三井はるみ，吉田雅子

『方言メール調査報告書』国立国語研究所共同研究報告：10-02（方言の形成過程解明のための全国方言調査），2011.

三井はるみ

「我が国における言語・方言の現状」，『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』文化庁委託事業報告書，pp.17-36，2011.2.

【講演・口頭発表】

三井はるみ

「首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例」，社会言語科学会第 29 回研究大会（桜美林大学）予稿集 pp.120-123. 2012.3.11.

【研究調査】

・2009.10　千葉県銚子市　表現法調査
・2009.10　佐賀県佐賀市，武雄市　方言文法調査
・2010.2　佐賀県武雄市，大分県別府市　方言文法調査
・2010.3　千葉県銚子市　表現法調査
・2010.8　東京都立川市　談話収録調査
・2010.11　東京都品川区　全国方言分布調査
・2010.11　沖縄県与那国島　危機方言調査
・2010.12　千葉県市原市養老渓谷　全国方言分布調査
・2011.7　東京都立川市　全国方言分布調査
・2011.9　鹿児島県喜界島　危機方言調査
・2011.9　長崎県壱岐島　方言文法調査
・2011.12　千葉県銚子市　全国方言分布調査
・2011.12　東京都港区　ロールプレイ談話収録調査
・2011.12　東京都世田谷区　ロールプレイ談話収録調査
・2012.2　東京都千代田区　ロールプレイ談話収録調査
・2012.2　東京都小金井市　ロールプレイ談話収録調査
・2012.2　東京都文京区　ロールプレイ談話収録調査

【その他の学術的・社会的活動】

・「西砂川の方言と昔のくらし」，たちかわ市民交流大学（立川市西砂学習館）2010.9.5.
・「東京の方言・立川の方言」，立川市立中学校教育研究会（国立国語研究所）2011.7.28.
・「東京のことば・立川のことば」，立川市立立川第四中学校第 3 学年総合的な学習の時間（立川市立立川第四中学校）2012.3.1.
・『日本語学論説資料』編集委員

木部　暢子（きべ のぶこ）時空間変異研究系 教授，研究系長，副所長

1955 生

【学位】博士（文学）（九州大学，1998）

【学歴】九州大学文学部文学科卒業（1978），九州大学大学院文学研究科修士課程修了（1980）

【職歴】純真女子短期大学 助手（1980），純真女子短期大学 講師（1981），福岡女学院短期大学 講師（1985），鹿児島大学法文学部 助教授（1988），同 教授（1999），同 副学部長（2004），同 学部長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授，研究系長，副所長（2010）

【専門領域】日本語学，方言学，音声学，音韻論

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議 連携会員，日本語学会 評議員，日本音声学会 評議員，日本方言研究会 世話人，南日本文化賞 選考委員

【受賞歴】

1990　新村出財団 研究助成

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：リーダー

研究目的：

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。

研究成果：

1. 2010 年 9 月 9 日～ 15 日に，鹿児島県大島郡喜界町で合同調査を実施した。調査参加者は 35 名（共同研究者 14 名，共同研究者以外の大学教員等 3 名，プロジェクト研究員 4 名，学振 PD3 名，大学院生 11 名），調査地点は 9 地点，インフォーマント数は 78 名。
2. 2011 年 9 月 4 日～ 7 日に，沖縄県宮古島において合同調査を行った。調査参加者は 39 名（うち共同研究員 13 名，大学院生 12 名，若手研究者 8 名，その他 5 名）。4 日間で 45 名のインフォーマントの調査を行った。
3. 日本学術会議市民公開シンポジウム「市民のなかの人文･社会科学」（東北大学，2010.7.25.）で，「日本の方言とその将来」の発表を行った。
4. 日本学術会議主催公開講演「日本語の将来」（日本学術会議，2010.9.19.）で，「方言の多様性から見る日本語の将来 ―標準語ばかりでよいのか―」の発表を行った。
5. 危機方言のフィールド調査研究をめざす若手研究者を育成するために，「若手研究者育成のための

危機方言調査支援プログラム」事業を実施した。5 名の若手研究者を採用し支援を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」：共同研究員

研究成果：

1.「九州 2 型アクセントの実態 ―熊本県天草市方言の動詞活用のアクセントを中心に―」公開シンポジウム「N 型アクセントの原理と成立」（神戸大学，2011.5.）の発表。

2. “Intonation at the end of interrogative sentences in Japanese dialects”（ICPP，Kyoto University, 2011.12.13.）の発表。

連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」総括班：共同研究員

研究成果：

1.『人と自然』1（2011 年 3 月）資料紹介「江戸時代のロシア語・薩摩語資料」を執筆。

2.『人と自然』2（2011 年 11 月）「音をめぐる人と自然　音とことばの接点」を編集。

連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-1.「昔がたりにみる自然観・自然思想の解明」：リーダー

研究目的：

各地に残る昔がたりには，人と自然の関わり方を題材にした話が多くある。また，各地の方言が消滅の危機にある現在，方言の語り自体が資料的に大きな価値を持っている。本研究は，日本各地の昔がたりを記録，保存すると同時にそれらの分析を通して，各地の自然観・自然思想について研究することを目的とする。なお，本研究でいう昔がたりは，定型的な昔がたりのほか，昔の生活や経験を方言で語ったものを含んでいる。

研究成果：

1. 2011 年 2 月に岩手県遠野市において「昔がたり」の調査収録。

2. 2012 年 3 月に京都において「昔がたり」を用いた方言研究に関する研究発表会の開催。

連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-3.「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査」：共同研究員

研究成果：

1. 鹿児島県甑島鹿島方言調査　2010.11.

2. 鹿児島県甑島里方言調査　　2011.11.

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「イントネーションの地域差 ―質問文のイントネーション―」，小林 隆，篠崎晃一（編）『方言の発見 知られざる地域差を知る』，pp.1-20. ひつじ書房，2010.5.

木部暢子

「方言アクセントの誕生」，『国立国語研究所プロジェクトレビュー』2，pp.23-35. 国立国語研究所，2010.7.

木部暢子

「鹿児島方言 ―南端の難解な方言―」，呉人 惠（編）『日本の危機言語』，pp.187-202. 北海道大学出版会，2011.6.

木部暢子

「天草市本渡方言のアクセント ―動詞句のアクセント―」，『国立国語研究所論集』2，pp.49-76.

国立国語研究所，2011.11.

木部暢子

「日本語イントネーションのタイポロジー ―疑問文のイントネーション―」，『2011 年台大日本語創新國際學術討論会論文集』，pp.19-30. 台湾大学，2011.11.

《国際会議録》

木部暢子

「日本語イントネーションのタイポロジー ―疑問文のイントネーション―」，2011 年台大日本語文創新国際シンポジウム（台湾大学）2011.11.4.

Nobuko Kibe

“Intonation at the end of interrogative sentences in Japanese dialects”, ICPP, Kyoto University, 2011.12.13.

《その他の出版物・記事》

木部暢子

「失われていく方言の『かなしさ』」，『国語教室』90，大修館書店，2009.11.

木部暢子，三井はるみ，下地賀代子，盛 思超，北原次郎太，山田真寛，

『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』，文化庁委託事業報告書，133 頁，2011.2.

木部暢子

「文化庁委託事業『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究』中間報告」，国立国語研究所第 3 回国際学術フォーラム『方言の多様性を守るために』，pp.46-52. 国立国語研究所，2011.3.

木部暢子

資料紹介「江戸時代のロシア語・薩摩語資料」，『人と自然』1，2011.3.

木部暢子

「方言の多様性から見る日本語の将来 ―標準語ばかりでよいのか―」，『学術の動向』2011（5），pp.108-112. 日本学術会議，2011.5.

木部暢子

「喜界島方言の音韻」，木部暢子，窪薗晴夫，下地賀代子，ローレンス・ウエイン，松森晶子，竹田晃子『国立国語研究所共同研究報告 11-01 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』pp.12-147. 国立国語研究所，2011.8.

【講演・口頭発表】

木部暢子

「島唄から学ぶ奄美のことば」，かごしま地域文化創造事業（喜界町中央公民館）2009.12.6.

木部暢子

シンポジウム「21 世紀の方言使用」，日本方言研究会第 90 回研究発表会（日本女子大学）2010.5.28.

木部暢子

「イントネーションの地域差 ―質問文の音調―」，日本音声学会例会（国立国語研究所）2010.6.26.

木部暢子

「日本の方言とその将来」，日本学術会議市民公開シンポジウム「市民のなかの人文・社会科学」（東北大学）2010.7.25.

木部暢子

「喜界島方言について」，喜界町湾地区高齢者学級（喜界町中央公民館）2010.9.11.

木部暢子

「方言の多様性から見る日本語の将来 ―標準語ばかりでよいのか―」，日本学術会議主催公開講演「日本語の将来」（日本学術会議）2010.9.19.

木部暢子

「日本語諸方言の疑問文イントネーション」シンポジウム「イントネーション研究の現在」，日本語学会（愛知大学）2010.10.23.

木部暢子

「日本の方言の多様性を守るために」，「文化庁委託事業『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究』中間報告，国立国語研究所第 3 回国際学術フォーラム（灘尾ホール）2010.12.18.

木部暢子

「九州 2 型アクセントの実態 ―熊本県天草市方言の動詞活用のアクセントを中心に―」，科研費公開シンポジウム「N 型アクセントの原理と成立」（神戸大学）2011.5.

木部暢子

「しまの方言を守るために」，日本島嶼学会（徳之島中央公民館）2011.9.

【研究調査】

・2010.5,6,9,10　鹿児島方言調査
・2010.9　鹿児島県喜界島方言調査
・2010.11　鹿児島県甑島鹿島方言調査
・2011.2　岩手県遠野市において「昔がたり」の調査
・2011.5,6,7　鹿児島方言調査
・2011.9　沖縄県宮古島方言調査
・2011.11　熊本県天草方言調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・文化講演・シンポジウム「語ろう 宮古島の方言」（宮古島市中央公民館）（企画・運営）2011.9.6.
・国立国語研究所第 3 回国際学術フォーラム「日本の方言の多様性を守るために」（灘尾ホール）（企画・運営）2010.12.18.
・喜界町教育文化講演会「喜界島方言の特徴」（喜界町役場）（企画・運営）2010.9.14.

【その他の学術的・社会的活動】

・日本学術会議 言語・文学委員会 科学と日本語分科会委員
・平成 22 年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究」

【大学院教育・若手研究者育成】

・非常勤講師
鹿児島大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程集中講義　文化政策論　2010.
東北大学大学院文学研究科集中講義　日本語変異論特論Ⅲ（国語学各論）2011.
・NINJAL チュートリアル講師
第 2 回「琉球方言の調査・研究法 ―喜界島方言―」（神戸大学）2011.

相澤　正夫（あいざわ まさお）時空間変異研究系 教授，副所長

1953 生

【学位】修士（言語学）（東京大学，1980）

【学歴】東京大学文学部第 3 類（語学文学）言語学専修課程卒業（1977），東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了（1980），東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第 1 種博士課程単位取得退学（1984）

【職歴】国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員（1984），同 主任研究官（1990），同室長（1991），同言語体系研究部 部長（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授，副所長（2009）

【専門領域】社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，社会言語科学会，日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員，日本音声学会 評議員，『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：リーダー

研究目的：

20 世紀前半から 21 世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性，すなわち「動態」を，従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明する。あわせて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究を開拓する。

研究成果：

1. 通算で 8 回の公開研究発表会を開催し，①言語変化の先端現象の把握・分析，②戦後 60 年余の通時的変化の把握・分析，③多元的分析手法の開発，④新規資料の発掘・分析，⑤言語問題の解決に資する応用研究，といった 5 つの観点に関連するテーマ設定で，共同研究メンバーが各自の研究成果を発表した。多様な専門的背景をもつ研究者による意見交換によって，2011 年度までを予定していた試行的・探索的研究は，ほぼ順調に進められた。
2. 世論調査型の全国調査として，2009 年度に「カタカナ語に関する意識調査」，2010 年度に「方言意識に関する全国調査」「言語表現に関する意識調査」，2011 年度に「言葉の使用に関する意識調査」「言葉の意味・用法に関する意識調査」を実施し，分析結果の一部を論文として公表した。
3. 昭和戦前期の「SP 盤貴重音源資料」の文字化資料（約 18.5 時間分，約 40 万字相当）を新規資料として作成し，プロジェクト内で共同利用するための準備を整えた。

【研究業績】

《著書・編書》

田中牧郎，相澤正夫，斎藤達哉，棚橋尚子，近藤明日子，川内昭浩，鈴木一史，平山允子
『言語政策に役立つ，コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用（最終報告書）』，国立国語研究所，2011.2.

《論文・ブックチャプター》

相澤正夫
「1. 外国語から外来語へ ―言語・社会への定着過程を探る―」，上野善道監修『日本語研究の 12

章』，pp.3-15. 明治書院，2010.6.

田中牧郎，相澤正夫

「難解用語の言語問題への具体的対応 ―「外来語」と「病院の言葉」を分かりやすくする提案―」，『社会言語科学』13（1），pp.95-108，2010.8.

《辞書・辞典類》

林 四郎監修，篠崎晃一，相澤正夫，大島資生編著

『例解新国語辞典 第八版』，三省堂，2012.1.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫

「新刊・寸感」，『日本語学』28（13），pp.68-69. 2009.11.

相澤正夫

「新刊・寸感」，『日本語学』29（5），pp.78-79. 2010.5.

相澤正夫

「新刊・寸感」，『日本語学』29（13），pp.110-111. 2010.11.

相澤正夫

「第 2 章 第 3 節 漢字政策に役立つ漢字表のあり方 ―固有名に使われる漢字の検討のために―」，『言語政策に役立つ，コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』（特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班最終報告書，国立国語研究所），pp.107-126，2011.2.

相澤正夫

「新刊・寸感」，『日本語学』30（6），pp.92-93. 2011.5.

相澤正夫

「新刊・寸感」，『日本語学』30（13），pp.88-89. 2011.11.

相澤正夫

「“言葉の補助輪”のすすめ」，『治療』93（11），pp.2158-2159. 南山堂，2011.11.

【講演・口頭発表】

相澤正夫

「外国語と外来語のあいだ ―変異の生れるところ―」，国際学術フォーラム「日本語研究の将来展望」（国立国語研究所）2009.10.

【研究調査】

企画・実施（共同企画，実査は社団法人中央調査社に委託）

・2010.2　「カタカナ語に関する意識調査」
・2010.12　「方言意識に関する全国調査」
・2011.2　「言語表現に関する意識調査」
・2011.12　「言葉の使用に関する意識調査」
・2012.2　「言葉の意味・用法に関する意識調査」

大西　拓一郎（おおにし たくいちろう）時空間変異研究系 教授

1963 生

【学位】修士（文学）（東北大学，1987）

【学歴】東北大学文学部卒業（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学（1989）

【職歴】東北大学文学部 助手（1991），国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員（1990），同 主任研究官（1996），同 室長（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，日本方言研究会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：リーダー

研究目的：

方言の形成過程を明らかにすることを目的に全国方言のデータを収集する調査・研究を実施する。研究は全国の方言研究者とデータの共有化をともなう共同研究体制で行う。

方言の形成過程の解明には以下の観点からのアプローチが求められる。

（a）言語変化と地理空間の相関把握と分析―特に分布の経年比較

（b）地理空間が有する地域特性と言語の関係の解明

（c）これまで知られていなかった分布の解明・発見

（a）では，言語変化と地理空間の関係を現在の分布として把握するとともに，過去に明らかにされた分布との間の経年的比較が重要な観点となる。従来から分布の通時的説明理論として重要な位置付けを有してきた「方言周圏論」「隣接分布の原則」の検証は，本研究の重要課題である。（b）は，地理空間を軸に社会・交通・自然などの地域特性との関係で言語変異のありかたを解明する。（c）は一見付随的ながら，仮説検証型の（a）（b）とは異なる成果が期待されるもので，ここから得られる分布情報は，文化財的性質を伴うとともに将来の分布調査への重要な手がかりともなる。

研究成果：

・準備調査（2009 年度）

研究目的・仮説（経年比較・言語内外情報の照合・未知分布）に対応した調査項目を選定することが求められるため，既に公刊されている約 30,000 枚の言語地図のデータベースをもとに 400 項目までの絞り込みを行い，主要メンバー等とともに全国約 40 地点での準備調査とその結果の整理を行った（共同研究報告書 10-01・02）。

・事前研究（2009 年度）

共同研究者の中で WG を構成し，準備調査の結果をもとにした本調査項目の選定作業，本調査のための方法の検討を行った（共同研究報告書 10-03）。

・調査基盤構築（2010 年度）

WG による検討を受けて，共同研究者間での討議に基づく本調査項目の決定，調査･報告･データベース化などの方法を細かく定めたマニュアルの作成を行った（調査票・調査票付図・調査の手引き）。また，本調査を実施するにあたっては全国を都道府県基盤の地域ブロックに分け，それぞれの地域

担当者を決め，本調査の地点を計画した。

・調査実施（2010 ～ 2011 年度）

2010 年度約 100 地点，2011 年度約 200 地点で調査を実施した。調査の実施にあたっては，年度初頭に調査担当者向けの講習会を開催した。東日本大震災にともない，計画した地域での調査・研究が遂行可能かどうか，検討した。

・データベース化（2011 年度）

調査結果をデータベース化し，共同研究者・調査協力者間で情報の共有化を進めた。

・分析・研究（2010 ～ 2011 年度）

研究目的・仮説をベースにしながら分析を行い，分析・研究成果は，各種研究集会や国内外の学会で積極的に発表し，諸学会誌・機関誌・専門誌等での論文化を進めた。

・シンポジウム等（2010 ～ 2011 年度）

東京ならびに関西で公開共同研究発表会・シンポジウムを開催した。

独創・発展型共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」：共同研究者

大規模な方言データを多角的に分析することを目的とする研究である。これまでに大量に作成されてきた方言分布データを GIS で扱うための検証を実施した。

庄川流域の自然・人間社会と方言の分布（連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」公募研究）

富山県西部を南北に流れる庄川流域の方言分布を調査し，約 40 年前の調査結果との比較を通して，方言分布の変化・不変化を把握した。また，連携研究広報誌『人と自然』4 号の企画・編集を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Takuichiro Onishi

“Analyzing dialectological distributions of Japanese”, *Dialectologia* SPECIAL ISSUE I, pp.123-135. University of Barcelona, 2010.

Takuichiro Onishi

“Mapping Japanese dialects”, *Dialectologia* SPECIAL ISSUE I, pp.137-146. University of Barcelona, 2010.

Takuichiro Onishi

“Mapping the Japanese language”, *Language and Space: An International Handbook of Linguistic Variation: Language Mapping*, pp.333-354. Mouton De Gruyter, 2010.

大西拓一郎

「日本海と畿内の方言分布をむすぶもの」，『東アジア内海の環境と文化』，pp.50-65. 桂書房，2010.

大西拓一郎

「町の言語景観・里の言語景観」，『世界の言語景観 日本の言語景観』，pp.166-177. 桂書房，2011.

大西拓一郎

「「いろり」の方言形とその分布をめぐって」，『人と自然』1，pp.12-15. 昭和堂，2011.

大西拓一郎

「言語地理学的研究目標是什麼？」，『語言教学与研究』151，pp.1-10. 北京外語大学，2011.

【講演・口頭発表】

Takuichiro Onishi

"Diffusing process of dialectological distributions", 6th Congress 6 of International Society for Dialectology and Geolinguistics. (Slovenia, University of Maribor) 2009.9.16.

大西拓一郎

「ことばの変化と地理的分布」，長野・言語文化研究会（松本市あがたの森文化会館）2010.2.13

大西拓一郎

「ことばの変化と地理的拡散」，日本語学会 2010 年度秋季大会（愛知大学）2010.10.23.

大西拓一郎

「言語地理学は何をめざすのか」，第 1 回中国言語地理学会（中国，北京語言大学）［招待講演］2010.11.21.

大西拓一郎

「言語地理学の目的を考える」，日韓言語地理学方法論研究会（韓国，大邱大学）［招待講演］2011.3.5.

Takuichiro Onishi

"The process of the areal formation of a dialect: A new theory of the formation of the distribution of Japanese dialects", Fourteenth International Conference on Methods in Dialectology (Canada, University of Western Ontario) 2011.8.3.

大西拓一郎

「火と日をめぐる日本の民俗と方言」, 第 1 回中国方言文化国際学術討論会（金沢大学）［招待講演］2012.3.7.

【研究調査】

全国方言分布調査

・2009.7　富山県砺波市（全国方言分布準備調査）
・2011.9　富山県砺波市（全国方言分布調査）

言語地理学調査

・2009.9　富山県庄川流域
・2010.8　長野県伊那地方
・2010.10　三重県伊賀地方
・2011.1　富山県庄川流域
・2011.5　富山県庄川流域
・2011.8　長野県伊那地方
・2011.10　富山県庄川流域
・2011.11　長野県伊那地方

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・日本語学会 2010 年度秋季大会，ワークショップ「ことばの変化と伝播」（企画・運営）2010.10.

朝日　祥之（あさひ よしゆき）時空間変異研究系 准教授

1973 生

【学位】博士（文学）（大阪大学，2004）

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業（1997），エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了（1998），大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員（2004），同研究開発部門言語生活グループ 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】社会言語学，言語学，日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, Methods, Foundation for Endangered Languages（FEL），関西言語学会，日本言語政策学会，日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会

【学会等の役員・委員】日本語学会庶務委員，International Steering Committee（Methods），FEL Executive committee member

【受賞歴】

2010　第 9 回徳川宗賢優秀賞（社会言語科学会）

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトは，地域特性の異なるコミュニティで生じる言語変容の類型化を試みるものである。その方法として，その地域社会における他方言との接触の性格に着目する。その性格の違いによって観察される言語変容は様々に分類できる。この分類を行うのが本プロジェクトの目的である。

研究成果：

当該期間では，共同研究者との関係構築を行い，調査組織（総括班，ニュータウン班，地方都市班，孤立社会班，ハワイ班，北海道班，理論構築班）のそれぞれの担当地域での調査研究，ならびに研究発表（国内外での学会での口頭発表，論文執筆）を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

真田信治，ダニエル・ロング，朝日祥之，簡 月真（編）

『改訂版社会言語学図集』秋山書店，2010.3.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「共同研究の舞台裏」，『日本語学』39（2），pp.34-44. 明治書院，2010.2.

朝日祥之

「サハリンに生まれた日本語の接触方言」，『日本語学』29（6），pp.28-40. 明治書院，2010.6.

Yoshiyuki Asahi

“A new sociolinguistic taxonomy, ‘cookbook', and immigrant communities”, *Slavia Centralis*. 1, pp.113-123. University of Maribor, 2010.7.

Yoshiyuki Asahi
"On the relationship of two Japanese regional koines: evidence from pitch-accent patterns in Karafuto and Hokkaido Japanese", *Bamberg Studies in English Linguistics* 54, pp.321-330. University of Bamberg, 2010.8.

朝日祥之
「国立国語研究所による「ことばの世論調査」」,『よろん』106, pp.46-50. 新情報センター, 2010.10.

朝日祥之
「ニュータウンにおける言語接触」,『日本語学』29（14）, pp.84-97. 2010.11.

Yoshiyuki Asahi
"Another Japanese regional koine of Kuril Japanese", *Dialectologia* Special Issue 1, pp.3-19. Universidad de Barcelona, 2010.12.

朝日祥之
「千島列島で形成された日本語の言語変種に見られる特徴」,「北海道方言研究会会報」87, pp.34-44. 北海道方言研究会, 2010.12.

朝日祥之
「「北の外地」言語景観の対照」,『世界の言語景観・日本の言語景観（内山純蔵監修, 中井精一, ダニエル・ロング編）』, pp.96-109. 桂書房, 2011.3.

朝日祥之
「フィールドワークを行う」, パトリック・ハインリッヒ, 下地理則（編）『琉球諸語記録保存の基礎, pp.118-129. 東京外国語大学, 2011.3.

朝日祥之, ダニエル・ロング
「ハワイのプランテーションで作られた接触方言 ―オーラルヒストリー資料に見られるコイネー日本語―」,『日本語研究』31, pp.1-13. 首都大学東京, 2011.6.

朝日祥之, 尾崎喜光
「北海道釧路市における言語変化 ―「釧路言語調査」の結果から―」,『北海道方言研究会会報』88, pp.1-17. 北海道方言研究会, 2011.12.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之
「新刊・寸感」,『日本語学』29（1）, pp.85-86. 明治書院, 2010.1.

朝日祥之
「新刊・寸感」,『日本語学』29（7）, pp.90-91. 明治書院, 2010.7.

朝日祥之
「新刊・寸感」,『日本語学』30（1）, pp.89-90. 明治書院, 2011.1.

朝日祥之
「新刊・寸感」,『日本語学』30（8）, pp.96-97. 明治書院, 2011.7.

Alena Barysevich and Yoshiyuki Asahi
"Review on the fourteenth international conference on METHODS in Dialectology", *Dialectologia* 8, pp.115-166. Universidad de Barcelona, 2011.12.

朝日祥之
「新刊・寸感」,『日本語学』31（1）, pp.84-85. 明治書院, 2012.1.

真田信治, 朝日祥之, 金 美貞

『サハリンに残存する日本語の談話データ』，pp.1-122，国立国語研究所，2012.2.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

"Okazaki Survey on Honorifics III: An Overview", Japanese Korean Linguistics 19 (University of Hawaii) 2009.11.

Yoshiyuki Asahi

"Japanese and British Contributions to Sociolinguistic Typology", LVLT (Language Variation and Linguistic Theory) Talk (Lancaster University) 2009.12.

Yoshiyuki Asahi

"A Japanese Contact Variety on the Russian Island of Sakhalin", Special Lecture at University of New England, 2010.3.

Yoshiyuki Asahi

"Innovative contact-induced phenomena in an endocentric urban community of New Town", RCLT workshop, Shaping of Language: the relationship between the structures of languages and their social, cultural, historical and natural environments (La Trobe University) 2010.7.

Yoshiyuki Asahi

"'Koineoid' as a result of koineisation: evidence from a Japanese contact dialect", Sociolingusitics Symposium 18 (University of South Hampton) 2010.9.

Ichiro Ota, Shoji Takano, Hitoshi Nikaido, Akira Utsugi, Yoshiyuki Asahi

"Dephrasing as a Sociolinguistic Variable in Japanese Regional Dialects", Sociolingusitics Symposium 18 (University of South Hampton) 2010.9.

朝日祥之

「国立国語研究所の継続する言語の定点経年調査」，日本行動計量学会第 38 回大会（埼玉大学）2010.9.

朝日祥之，ダニエル・ロング

「ハワイのプランテーションで作られた接触方言 ―19 世紀末生まれの日系人の録音資料に見られるコイネ日本語―」，日本方言研究会第 91 回研究発表会（愛知大学）2010.10.

朝日祥之

「方言接触によることばの変化」，日本語学会 2010 年度秋季大会（愛知大学）2010.10.

Yoshiyuki Asahi

"Rises and Falls of the three Japanese Regional Koines", 12th New Zealand Language and Society Conference (Auckland University of Technology) 2010.11.

Yoshiyuki Asahi

"Rises and Falls of the three Japanese Regional Koines", 12th New Zealand Language and Society Conference (Auckland University of Technology) 2010.11.

Yoshiyuki Asahi

"Contact dialectology in Japanese Contexts", NWAV Asia Pacific 1 (University of Delhi)［招待講演］2011.2.

Yoshiyuki Asahi

"Accentuation pattern in a highly isolated sociolinguistic setting: a case of Sakhalin Japanese in Russia", NWAV Asia Pacific 1 (University of Delhi) 2011.2.

Yoshiyuki Asahi

"Sociolinguistic studies on Japanese dialect transplantation", Tuesday Seminar Series at UHM Linguistics Department［招待講演］2011.3.

尾崎喜光，朝日祥之，井上文子，真田信治，陣内正敬，二階堂整，野山 広

「関西への移住者は関西の言葉をどう感じているか？―半構造化インタビュー調査とアンケート調査から―」，第 27 回社会言語科学会研究大会（桜美林大学）2011.3.

朝日祥之，片岡邦好

「『空間参照枠表現』の地域較差と指向性について」，第 27 回社会言語科学会研究大会（桜美林大学）2011.3.

Yoshiyuki Asahi

"Linguistic outcomes of similar dialect contact situations in three Japanese-speaking communities", ICHL20 (National Museum of Ethnology) 2011.7.

Yoshiyuki Asahi, Gavin Furukawa, Mie Hiramoto

"Japanese Language in Hawaii", International Symposium: Interdisciplinary approaches to oral history data (University of Hawaii at Manoa) 2011.8.

Yoshiyuki Asahi

"Why use oral history records into linguistic studies?", International Symposium: Interdisciplinary approaches to oral history data (University of Hawaii at Manoa) 2011.8.

Yoshiyuki Asahi

"Same dialects, similar contact settings, and different sociolinguistic histories: formation of the three regional koines", METHODS XIV (University of Western Ontario) 2011.8.

Ichiro Ota, Shoji Takano, Hitoshi Nikaido, Akira Utsugi, and Yoshiyuki Asahi

"Variation in prosodic phrase of Japanese Dialects", METHODS XIV (University of Western Ontario) 2011.8.

朝日祥之

「社会調査型の言語生活研究を支えるもの」，『第 28 回社会言語科学会研究大会』，2011.9.

Yoshiyuki Asahi

"Role of working experience and age in the innovative honorific form", NWAV40 (Georgetown University) 2011.10.

朝日祥之

「「樺太ことば集」に見る樺太方言と北海道方言の関係」，第 195 回北海道方言研究会例会（札幌市北区民センター）2011.11.

Yoshiyuki Asahi

"On the nativisation of a new town koine: a case of Japanese Seishin New Town", 9th international conference on urban language survey (Xiamen University) 2011.11.

朝日祥之

「ハワイと北米に渡った日系移民の音声資料を用いた社会言語学的研究」，移民とエスニック文化研究所研究会（早稲田大学）2011.12.

Yoshiyuki Asahi

"High dialect contact, acquisition of sociolinguistic variation and the role of a standard variety: the case of a Japanese New Town", ViLA (Variation in Language Acquisition) 2012, (University of Münster, Germany) 2012.2.

【研究調査】

・2010.2　樺太方言調査：ユジノサハリンスク
・2010.3　樺太方言調査：韓国釜山市
・2010.8　方言調査：北海道上富良野町，音更町
・2010.9　方言調査：網走市，標津町
・2010.10　樺太方言調査：ユジノサハリンスク
・2010.12　千島方言調査：北海道根室市
・2011.6　樺太方言調査：北海道稚内市
・2011.9　千島方言調査：北海道札幌市
・2011.12　方言調査：浜益町

井上　文子（いのうえ ふみこ）時空間変異研究系 准教授

【学位】修士（文学）（大阪大学，1992）
【学歴】高知女子大学文学部国文学科卒業（1984），大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了（1992），大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退（1994）
【職歴】大阪大学文学部 助手（1994），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1995），同 主任研究官（1997），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門資料整備グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）
【専門領域】方言学，社会言語学
【所属学会】日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語文法学会，日本言語学会，日本語教育学会

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】
萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」：リーダー
研究目的：
異なる出身地の人と話をしていると，語彙やアクセントではなく，話の進め方そのものに違和感を覚えることがある。もちろん個人差はあるにしても，それぞれの地域に特有の話の進め方がありそうだということを漠然と感じている人は少なくないであろう。しかし，会話のどのような部分に地域差が見られるのか，方言によって談話展開の方法に一定の類型があるのか，などについては，いくつかの先行研究があるものの，まだわかっていないことも多い。このようなことを客観的に明らかにするためには，語や句や文を超えた単位である談話全体をひとまとまりとしてとらえ，コミュニケーションとしての談話を分析することが求められる。本プロジェクトでは，方言談話の地域差・世代差・性差・場面差などを考察するためのパイロット調査として，発話の意図が明確で，話の流れがとらえやすいロールプレイ会話を収集し，談話構造や談話展開の地域差について枠組みや仮説を立てることを目的としている。
研究成果：
選定した重点地域において，高年層（60～70 歳代）女性，高年層（60～70 歳代）男性，若年層（大学生～20 歳代）女性，若年層（大学生～20 歳代）男性のそれぞれのグループについて，電話をかけるという方法で，「依頼」「勧誘」「申し出」などの場面設定の会話を親しい同性の友人同士で実演してもらった（ペア入れ替え式ロールプレイ会話）。また，先輩にあたる同性の人にも参加してもらい，話者のすべての組み合わせが得られるよう総当たりで会話をおこない，同輩同士の会話のほかに先輩と後輩の電話での会話も収録した（リーグ戦式ロールプレイ会話）。

尾崎　喜光（おざき よしみつ）時空間変異研究系 准教授（2009.10 ～ 2010.3）

1958 生

【学位】修士（言語学）（北海道大学，1986）

【学歴】北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業（1983），北海道大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1986），大阪大学大学院文学研究科後期課程日本学専攻退学（1988）

【職歴】大阪大学文学部 助手（1998），国立国語研究所言語行動研究部 研究員（1989），同 主任研究官（1995），同 室長（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 主任研究員（2001），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009），同辞職（2010.3）

【専門領域】日本語学，社会言語学

【所属学会】日本語学会，社会言語科学会，北海道方言研究会

【2009 年度の研究成果の概要】

・基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員

・独創・発展型共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」：共同研究員

・基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語学への応用」：共同研究員

・領域指定型共同研究プロジェクト「敬語と敬語意識の半世紀 ―愛知県岡崎市における調査データを中心に―」：共同研究員

【講演・口頭発表】

尾崎喜光

「日本語の敬語について」，第 21 回中国日本語教師訪日団招請・講演（霞山会館）2009.10.

尾崎喜光

「外来語音は現在どのくらい普及しているか？ ―全国多人数録音調査から―」，国立国語研究所研究プロジェクト「第 2 回 多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」研究会（国立国語研究所）2010.3.

熊谷　康雄（くまがい やすお）時空間変異研究系 准教授

1955 生

【学位】修士（文学）（埼玉大学，1984）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業（1976），埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了（1984）

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1988），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1989），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1993），国立国語研究所 室長（1998），国立国語研究所情報資料部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，計量国語学会，社会言語科学会，日本行動計量学会，言語処理学会，情報処理学会，電子通信学会，American Dialect Society，International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」：リーダー

研究目的：

本研究はこれまで電子化・データベース化を進めてきた『日本言語地図』（LAJ），「各地方言収集緊急調査」や，公開されている『方言文法全国地図』（GAJ）のデータなどの利用も視野に入れ，専門を異にする研究者が全国レベルの大規模な方言資料・データを共同利用し，多角的な研究を通してデータの持つ可能性を引き出し，ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する新たな知見の獲得，研究方法の開発，資料・データの整備と共有を進めることを目的とする。

研究成果：

共同研究のための共有データの整備と共有を進めつつ，整備したデータに関する探索的な分析を並行して行った。

（1）共有データの整備と共有：(1-1)『日本言語地図』データベース（LAJDB）：LAJDB は，プロジェクト開始時点で原カード（約 54 万枚）のほぼ 9 割のスキャンを済ませた状態にあった。このスキャンした原資料カードの画像データから，画像とそれに対応するコードデータを持ったデータベースを作成するための，点検，校正，校閲の一貫した流れを作り，検証と改良を進めながら，項目毎にデータベース化を進め,『日本言語地図』の調査項目 100 項目のデータを整備し, データベース化した。LAJDB のデータ整備は，当初の予想以上に時間を必要とする作業であったため，研究期間を通して整備を進めた。項目毎に整備を進めたデータは，出来次第，項目毎にネットッワークを利用して共同研究者間で共有し，各研究者の分析に供した。また，『日本言語地図』の基礎図，参考地図（地形図，近代道路図，藩領図）の電子化の方法を検討し，電子地図を作成した。電子地図は GIS などとの互換性の高いシェープファイル形式で作成し，また，これを基に GAJ のプラグインの利用に互換性のあるイラストレータ形式（白地図に相当する基礎図も含む）も作成した。また，インフォーマントの属性情報やその他『日本言語地図』の解説にある表などの付帯情報のデータ入力も行った。(1-2) 方言談話資料：『全国方言談話データベース』全 20 巻のデータを集約し，また，全国的な視野での分析を助けるために新たに全 20 巻（全都道府県）の統合版を作成した。オリジナルと同じ形式で，方言と共通語訳が対応したデータベースの形式によるものと方言と共通語訳との対訳形式のテキストファイルなども作成した（11,388 発話）。また，検索，分析のために，統合の文字化テキストデータの共

通語訳テキスト, 方言テキストのそれぞれについて, 文節単位の KWIC（約 15 万レコード）を作成し, これを検索できるデータベースを作成した。対訳形式の KWIC のテキストファイルなども作成した。これらと『方言談話資料』全 19 巻,『方言録音シリーズ』全 15 巻の文字化テキストのデータ，音声ファイルも共有データとして集約し，2010 年 6 月までにプロジェクト内に供した。(1-3) 他プロジェクトへのデータの提供：『日本言語地図』データベースでは，基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(プロジェクトリーダー:大西拓一郎) の依頼により, 同プロジェクトが必要とする 33 項目について，地点毎の回答語形のデータを同プロジェクトに提供した。

(2)『日本言語地図』データベース（LAJDB）を用いた探索的な分析：(2-1) 計算機を用いて，言語地図上で，語形の分布において地理的に連続した領域を認識し，分割，ラベル付する方法の試みとして,『日本言語地図』データベース中の語形を例とし，Delaunay ネットワーク上で語の分布が連続する領域の分割，ラベリングをする手順を考え，試行の結果を得た。(2-2) 電子地図化した LAJDB の参考図を用い GIS ソフト（QGIS）上で道路網と複数回答地点の分布の突き合わせを事例的に行い, データの GIS 上での利用を確認するとともに，複数回答の現象に地理的分布が見え，交通網との関係が観察できた。(2-3) 構築中の LAJDB（100 項目時点）の環境を利用し，探索的，予備的な観察を行い，(2-3-1) 併用回答の分布について併用地点の分布と LAJ 参考図近代道路網との重ね合わせを試行し，道路網と併用地の分布に関係が見られるという見通しの下で多数の項目の集計で，その傾向が観察できる見通しを得た。(a) 項目別併用地点の地理的分布の事例，(b) 55 項目（地点数は地点数 2400 にほぼ同じ）の集計による各地点の併用項目の度数の地理的な分布などを示し，これらの現れ方は無秩序ではなく，有意味な地理的分布がある見通しを得た。(2-3-2) 凡例語形のモーラ数の分布：LAJ の凡例語形のモーラ数を数えるプログラムを作成し，項目毎に，各地点の回答語形のモーラ数を計算（約 70 項目）し，第一段階として県別の語形のモーラ数の度数分布の形に地理的な分布パターンを得た。凡例語形という制約はあるが, 地理的な分布が観察できた。これらの試行を通して, LAJDB を用い，これまでの印刷物をベースにした LAJ の研究では見ることが難しかった事象を浮かび上がらせることができる見通しを得た。(なお，これらの途中経過は共同研究プロジェクトの公開研究発表会等で随時報告した。)

新野　直哉（にいの なおや）時空間変異研究系 准教授

1961 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2010）

【学歴】東北大学文学部文学科卒業（1984），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1986），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1988）

【職歴】宮崎大学教育学部 助手（1988），同 講師（1989），同 助教授（1992），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1996），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門文献情報グループ 主任研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本近代語研究会，表現学会，日本語学会

【受賞歴】

2011　国立国語研究所第 2 回所長賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」：リーダー

研究目的：

本研究は，近現代日本語の新語・新用法について，いつごろ，なぜ，どのように発生・拡大し，現在はどのような状況にあるのを，文献調査に加え，アンケート調査や統計的手法などを用いて明らかにしていく。また，言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し，言語の変異そのものの記述的研究に加え，これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は，古代語や中世語の言語変化の事例に対し，そのプロセスの観察や，背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である，というメリットがある。その成果として，日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で，本研究は，現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

研究成果：

2010 年 11 月に開始した本プロジェクトは，同年度中は 3 月に研究発表会を行った。2011 年度は副詞“全然”に関する研究というテーマのもとで，これまでほとんど使われてこなかった中国資料や日記，昭和 10 年代の学術誌といった資料に基づき各自が研究を行い，メンバー 4 名が 6 月と 9 月の研究発表会で 2 名ずつ発表した。その際及びその後の意見交換・討論を経て，10 月の日本語学会でブース発表を行った。ここでは，「“全然”は本来否定を伴うべき副詞である」という規範意識は昭和 10 年代にはまだ発生していなかった可能性が高いことを明らかにした。この発表については，日本経済新聞ウェブ版「ことばオンライン」で取り上げられ（12 月 13 日掲載），アクセスランキングで当日の全記事中 1 位，月間でも 3 位となるほど多くの人に読まれた。

【研究業績】

《博士学位論文》

新野直哉

「現代日本語における進行中の変化の研究 ―「誤用」「気づかない変化」を中心に」，東北大学大学院文学研究科，2010.3.

《著書・編書》

新野直哉

『現代日本語における進行中の変化の研究 ―「誤用」「気づかない変化」を中心に』, ひつじ書房, 2011.2.

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「特集；「日本語ブーム」の中身「日本語ブーム」と日本語研究」, 『日本語学』29（5）, pp.36-44. 明治書院, 2010.5.

新野直哉

「新聞記事における副詞“全然”の被修飾語について ―明治末～昭和戦前期と現在」,『表現研究』92, 表現学会, pp.42-51. 2010.10.

新野直哉

「昭和 10 年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識 ―副詞“とても”・「ら抜き言葉」などについて」, 『言語文化研究』11, pp.1-14. 静岡県立大学短期大学部文化学会, 2012.3.

《その他の出版物・記事》

新野直哉

「〈著書紹介〉新野直哉 著『現代日本語における進行中の変化の研究 ―「誤用」「気づかない変化」を中心に―』」, 『国語研プロジェクトレビュー』7, pp.45-48. 2012.2.

【講演・口頭発表】

新野直哉, 橋本行洋, 梅林博人, 島田泰子

「言語の規範意識と使用実態 ―副詞“全然”の「迷信」をめぐって」, 日本語学会平成 23 年度秋季大会（高知大学）2011.10.

新野直哉

「「“全然”＋肯定」に関する日本語学研究者の言語規範意識」, JLVC2012（Japanese Language Variation and Change conference2012）（国立国語研究所）2012.3.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・JLVC2012（Japanese Language Variation and Change conference2012）（企画・運営）2012.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

目白大学大学院言語文化研究科

齋藤　達哉（さいとう たつや）時空間変異研究系 助教（2009.10 ～ 2010.3）

1969 生

【学位】修士（文学）（國學院大学，1994）

【学歴】國學院大学文学部卒業（1992），國學院大學大学院博士課程前期修了（1994），國學院大學大学院博士課程後期単位取得退学（1997）

【職歴】国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域（2001），文化庁文化部国語課 併任（2005），文化庁文化部国語課 国語調査官（2006），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員（2008），同 主任研究員（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教（2009），同 辞職（2010.3）

【専門領域】日本語学，文字・表記史，文献学

【所属学会】日本語学会，計量国語学会

【2009 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「仮名写本による文字・表記の史的研究」：リーダー

研究目的：

日本語においては，1000 年以上，仮名表記が行われてきており，特に，変体仮名による表記が行われていた時期が長い。変体仮名資料には，時代による変遷（時代性）が見られる。本プロジェクトは，それを明らかにするために，長期にわたり変体仮名によって転記（書写）された日本語資料（源氏物語）を日本語学的に研究することで，平安から江戸期の表記・敬語・語法・語彙の変遷過程を解明する。

長期にわたり変体仮名によって転記（書写）された日本語資料として，圧倒的な写本数を残す源氏物語を扱うこととする。源氏物語は，平安期の言葉を土台とするが，鎌倉期～江戸期に転記（書写）される過程で，表記・敬語・語彙などに変質が生じ，平安・鎌倉・室町・江戸の言語的特徴が混在した資料と位置付けられる。文学（文献学）の視点からは，源氏の諸写本整理（系統分類）が盛んに試みられてきたが，日本語学の視点から平安・鎌倉・室町・江戸の言語的特徴を峻別・整理した研究は見られない。

表記（文字使用）の史的変遷に関して，花散里（1700 字程度の巻）の写本 55 種を用いた予備調査（斎藤）では，《写年代が新しくなるにつれて，使用される変体仮名の種類が単純化し，漢字使用が増える》ことを確認した。今後，調査範囲の拡大と音韻史的分析の追加により，精度の高い研究結果を得たい。

【研究業績】

《著書・編書》

斎藤達哉，高田智和

『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻 桐壺～藤裏葉』，2010 年度人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査」報告書，国立国語研究所，2011.3.

斎藤達哉，伊藤鉄也，豊島秀範，高田智和，小木曽智信

『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字 若菜上～幻』，2011 年度人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査Ⅱ」報告書，国立国語研究所，2012.3.

《データベース類》

・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文（桐壺～藤裏葉，若菜上～幻）2011.3.
http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/

【研究調査】

・2010.1.24-29.　米国議会図書館　源氏物語写本調査

前川　喜久雄（まえかわ きくお）言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長

1956 年生

【学位】博士（学術）（東京工業大学，2011）

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業（1980），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了（1982），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退（1984）

【職歴】鳥取大学教育学部 助手（1984），同 講師（1987），国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1989），同 主任研究官（1992），同 室長（1994），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長（2001），同 言語資源グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長（2009），一橋大学連携教授（2005-）

【専門領域】音声学，言語資源学

【所属学会】ISCA，日本言語学会，日本音響学会，日本語学会，日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 企画委員長，Phonetica Editorial board member

【受賞歴】

2011　日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」，『音声研究』14（2）

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：リーダー

研究目的：

共同利用研国立国語研究所においては，コーパスの開発作業はコーパス開発センターにおいて実施するが，そのための基礎研究とコーパスを利用した応用研究は言語資源研究系において実施する。コーパスの利用価値は代表性とアノテーション（検索用情報）の積として定まるが，本研究ではコーパスの価値を高めるために，コーパスアノテーションについて基礎研究を行なう。日本語コーパスの場合，形態素よりも上位の階層に属するアノテーションに関する研究を進展させる必要がある。

アノテーションは基本的には言語学の範疇に属する知識に立脚した作業であるが，我が国ではこれまで言語学者（日本語研究者）がコーパスのアノテーションに関与することが少なく，主に自然言語処理研究者の手によってアノテーションの研究が進められてきた。そのため，言語学の観点からすると，仕様に一貫性が欠けていたり，単位の斉一性に問題が生じていたりすることがあった。一方，言語学者の考案する「理論」は品詞分類のような具体的な問題まで含めて，現実の用例をどの程度まで説明しうるかが不明であることが多かった。本研究の目的は，自然言語処理研究者と言語学者とが協力して，現代日本語を対象とする各種アノテーションの仕様を考案し，検討することにある。

研究成果：

共通の言語資源として主に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』をアノテーションの対象とすることとし，共同研究メンバーが従来実施してきた様々なアノテーションの仕様と作業実施上の問題点などの知識を共有化することに努めた。また新たに考案するアノテーションの仕様案について様々な角度から検討した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：リーダー

研究目的：

日本語を対象としたコーパス言語学（コーパス日本語学）は，『日本語話し言葉コーパス』，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の構築によって研究インフラが整いつつあるが，一連のコーパスを

徹底的に解析して，コーパス日本語学ならではの研究成果を挙げることは今後に残された課題である。本研究の目的は，各種コーパスを利用した定量的かつ実証的な日本語研究を幅広く推進して先進的な成果を得，それを学界に周知させることによって，日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることである。この点で本研究は科研費特定領域研究「日本語コーパス」の活動を戦略的に継承するものであり，一種の学会に相当する機能を提供することを目指している。

研究成果：

2009 年度から 2010 年度にかけては，当時実施中であった特定領域研究「日本語コーパス」の成果発表会のサテライトワークショップという形で，一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを開催した。2011 年度からは新たに「コーパス日本語学ワークショップ」を開始した。第 1 回には 54 件の研究発表があり，そのうち半分が当プロジェクトないし「コーパスアノテーションの基礎研究」のメンバーによる発表，残る半分は一般からの応募であった。

特定領域研究の成果を書籍の形でとりまとめるために『講座日本語コーパス』（8 巻，朝倉書店）の刊行計画をたて，第 1 巻の刊行準備を進めた。

『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータを利用した日本語頻度辞書を出版するための準備作業を進めた。

【研究業績】

《博士学位論文》

前川喜久雄

『コーパスを利用した自発音声の研究』（東京工業大学大学院情報理工学研究科）2011.3.

《論文・ブックチャプター》

前川喜久雄

「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における著作権」処理」，『漢字文献情報処理研究』10，pp.30-35. 2009.10.

前川喜久雄

「30 年の時間幅において観察される語義およびコロケーションの変化 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の予備的分析―」，堀 正広，浮網茂信，西村秀夫，小迫 勝，前川喜久雄『コロケーションの通時的研究 ―英語・日本語研究の新たな試み』，pp.183-198. ひつじ書房，2009.10.

前川喜久雄

「コーパス構築と著作権保護」，『人工知能学会誌』25（5），pp.628-632. 2010.9.

Kikuo Maekawa

“Coarticulatory reinterpretation of allophonic variation: Corpus-based analysis of/z/in spontaneous Japanese”, *Journal of Phonetics* 38(3), pp.360-374. 2010.9.

前川喜久雄

「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」，『音声研究』14（2），pp.1-15. 2010.8.

前川喜久雄

「PNLP の音声的形状と言語的機能」，『音声研究』15（1），pp.16-28. 2011.4.

前川喜久雄

「コーパスと言語学」，松本裕治編『言語と情報科学』（シリーズ朝倉＜言語の可能性＞6，pp.115-147. 2011.7.

《国際会議録》

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Takehiko Maruyama, Masaya Yamaguchi, Hideki Ogura,

Wakako Kashino, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, and Yasuharu Den

"Design, Compilation, and Preliminary Analyses of Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Proceedings of LREC 2010*, pp.1483-1486. (Malta) 2010.5.

Yasuharu Den, Hanae Koiso, Takehiko Maruyama, Kikuo Maekawa, Katsuya Takanashi, Mika Enomoto and Nao Yoshida

"Two-level annotation of utterance-unit in Japanese dialogs: An empirically emerged scheme", *Proceedings of LREC 2010*, pp.2103-2110. (Malta) 2010.5.

Masako Fujimoto, Kikuo Maekawa and Seiya Funatsu

"Laryngeal Characteristics during the Production of Geminate Consonants", *Proceedings of INTERSPEECH2010*, pp.925-928. (Makuhari) 2010.9.

Kikuo Maekawa

"Final lowering and boundary pitch movements in spontaneous Japanese", *Proceedings of DiSS-LPSS Joint Workshop 2010*, pp.47-50. (Tokyo) 2010.9.

Kikuo Maekawa

"Discrimination of speech registers by prosody", *Proceedings of the 17th ICPhS*, pp.1302-1305. (Hong Kong) 2011.8.

《データベース類》

・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ），国立国語研究所コーパス開発センター，2011.12.
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

・『鶴岡調査音声データベース 91-92（Tsuruoka91-92)』，国立情報学研究所音声資源コンソーシアム，2010.10.
http://research.nii.ac.jp/src/Tsuruoka91-92.html

【講演・口頭発表】

前川喜久雄

「国立国語研究所における言語資源」，『2009 言語資源シンポジウム「言語・音声データの学術利用に向けて」』，pp.90-93.（国立情報学研究所）［招待講演］2009.10.

Kikuo Maekawa

"Development of Japanese Corpora at the National Institute for Japanese Language and Linguistics: With Emphasis on Five Sources of Difficulty in Japanese Corpus Development", Lexicography: Theoretical and Practical Perspectives (ASIALEX2011 Proceedings), pp.17-26.［基調講演］2011.8.

前川喜久雄

「国立国語研究所における言語資源開発：KOTONOHA 計画の今後」，平成 23 年度情報処理学会関西支部大会［招待講演］2011.9.

Kikuo Maekawa.

"Linguistics-Oriented Language Resource Development at the National Institute for Japanese Language and Linguistics", Proc.Oriental-COCOSDA 2011, pp.1-6.［基調講演］2011.10.

前川喜久雄

「『日本語話し言葉コーパス』を用いた自発音声の分析」，『情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ（2011-CH-92)』，pp.47-54. 2011.10.

Kikuo Maekawa

"Linguistics-Oriented Language Resource Development at the National Institute for Japanese Language and Linguistics", Proc. Oriental-COCOSDA 2011, pp.1-6.［基調講演］2011.10.

前川喜久雄

「特殊な形容詞述語文の生起に及ぼす言語レジスターの影響～『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の分析～」, 電子情報通信学会思考と言語研究会［招待講演］2011.11.

【大学院教育・若手研究者育成】

・連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

小木曽　智信（おぎそ としのぶ）言語資源研究系 准教授

1971 生

【学位】修士（文学）（東京大学，1997）

【学歴】東京大学文学部第 3 類（語学文学）卒業（1995），東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了（1997），同 博士課程単位取得退学（2001）

【職歴】明海大学外国語学部 講師（2001），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学，自然言語処理

【所属学会】日本語学会，言語処理学会，情報処理学会，社会言語科学会，計量国語学会，日本語文法学会，東京大学国語国文学会，近代語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 情報電子化委員長（2009.6-2012.5）

【受賞歴】

2011　情報処理学会山下記念研究賞

2011　国立国語研究所第 2 回所長賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「統計と機械学習による日本語史研究」：リーダー

研究目的：

自然言語処理の技術が発展し，電子化辞書の整備が進んだことにより，従来は不可能であった歴史的資料を対象とした形態素解析が可能になった。これにより日本語史の分野においてもコーパスと統計的手法を活用した新しいタイプの研究が可能になりつつある。本プロジェクトでは，機械学習の手法をもちいて日本語通時コーパスの整備に必要となる各種の技術を開発し，多様な日本語史資料に対する高度なアノテーションを可能にする。同時に，既存のツールを応用して日本語史研究のためのコーパス利用環境を整備する。そして整備したコーパスとその利用環境を用いて，多変量解析などの統計的手法に基づく新しい方法による日本語史研究に取り組む。開発したソフトウェアと研究成果は一般に公開するとともに，国語研で計画中の通時コーパスの構築に活用する。（研究期間：2010.11 ～ 2013.10）

研究成果：

・近代文語文を対象とした濁点の自動付与ツールの作成・公開を行った。

・「中古和文 UniDic」の整備・最新バージョンの公開を行った。

・コロケーション，対数尤度比などを用い中古和文を対象としたコーパス言語学的研究をおこなった。

独創・発展型共同研究プロジェクト「近代語コーパス設計のための文献言語研究」：共同研究員

・「近代文語 UniDic」の整備・最新バージョンの公開を行った。

・『明六雑誌コーパス』の整備を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」：共同研究員

・「日本語歴史コーパス平安時代編」のデータ整備を行った。

人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査（第 2 期）」：共同研究員

・米国議会図書館にて調査を行ったほか，翻字本文の確認を行った。同テキスト本文は Web 上で一般公開を行っている。　http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小木曽智信

「形態論情報の自動付与とその問題点」,『国文学解釈と鑑賞』(特集 日本語研究とコーパス)74(1), pp.35-43. 2009.

小木曽智信

「明治大正期における補助動詞「去る」について」, 近代語学会編『近代語研究 第 15 集』, pp.444-465. 武蔵野書院, 2010.10.

小木曽智信

「自分のプログラムでウェブにアクセスできると」, 荻野綱男, 田野村忠温編『講座 IT と日本語研究 6 コーパスとしてのウェブ』, pp.137-183. 明治書院, 2011.7.

小木曽智信

「明治期国定『高等小学読本』の可能表現形式」,『成蹊国文』45, pp.72-84. 成蹊大学文学部日本文学科, 2012.3.

《データベース類》

・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2011), 国立国語研究所コーパス開発センター
・形態素解析辞書 UniDic(2009, 2010, 2011), The UniDic Consortium
・中古和文 UniDic(2010, 2012)
・近代文語 UniDic(2009, 2012)
・雑誌『国語学』全文データベース(2011)

《その他の出版物・記事》

小木曽智信

「〈受賞紹介〉中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」,『国語研プロジェクトレビュー』7, pp.31-34. 2012.2.

【講演・口頭発表】

小木曽智信

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における可能表現のバリエーション」, 日本語学会, 2009.11.

小木曽智信

「コーパスを利用した近代語研究 ―太陽コーパスと近代文語 UniDic―」, 東京外国語大学 GCOE プロジェクト講演会 / 語学研究所定例研究会, 2009.12.

小木曽智信, 小椋秀樹, 田中牧郎, 近藤明日子, 伝 康晴

「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」, 情報処理学会 第 85 回人文科学とコンピュータ研究発表会, 2010.2.

小木曽智信

「女性向けインターネット Q&A サイトにおける可能表現形式の使用実態」, 第 25 回社会言語科学会研究大会, 2010.3.

小椋秀樹, 原 裕, 小木曽智信, 小磯花絵, 宮内佐夜香

「形態素解析辞書 UniDic における語彙素見出しの立項方針」, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ, 2010.3.

冨士池優美, 小椋秀樹, 小西 光, 小木曽智信, 小磯花絵, 内元清貴, 小澤俊介

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における長単位解析の進捗状況」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ，2010.3.

小木曽智信，小椋秀樹，小磯花絵，宮内佐夜香，渡部涼子，伝 康晴

「MeCab 版形態素解析辞書 4 種のジャンル別解析精度比較 ―UniDic と IPAdic, NAIST-jdic, JUMANdic―」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ，2010.3.

小磯花絵，小木曽智信，小椋秀樹，宮内佐夜香

「長単位情報に基づくジャンル間の文体に関する分析」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ，2010.3.

小椋秀樹，原 裕，小木曽智信，小磯花絵，宮内佐夜香

「形態素解析辞書 UniDic における同語異語判別について」，言語処理学会第 16 回年次大会，2010.3.

小木曽智信，小椋秀樹，小磯花絵，宮内佐夜香，渡部涼子，伝 康晴

「形態素解析辞書のベンチマークテスト ―IPAdic・NAIST-jdic・UniDic のジャンル別精度比較」，言語処理学会第 16 回年次大会，2010.3.

Charles Muller, Kozaburo Hachimura, Shoichiro Hara, Toshinobu Ogiso, Mitsuru Aida, Koichi Yasuoka, Ryo Akama, Masahiro Shimoda, Tomoji Tabata, Kiyonori Nagasaki

"The Origins and Current State of Digitization of Humanities in Japan", The Digital Humanities 2010 conference (DH2010) 2010.7.

小木曽智信，伝 康晴

「UniDic2.0：言語資源としての電子化辞書」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会議，2010.8.

山田 篤，渡部涼子，小木曽智信

「汎用後処理ツールを用いた音変化処理の評価」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会議，2010.8.

冨士池優美，小椋秀樹，小西 光，小木曽智信，小磯花絵

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』長単位情報に基づく予備的分析」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会議，2010.8.

小木曽智信，小椋秀樹，近藤明日子，須永哲矢

「形態素解析辞書「中古和文 UniDic」とその活用例」，日本語学会 2010 年度秋季大会，2010.10.

小木曽智信，中村壮範

「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のための形態論情報データベースについて」，第 16 回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」，2010.11.27.

近藤明日子，小木曽智信，加藤文明子

「『高等小学読本』の形態論情報付きコーパス」，情報処理学会じんもんこん 2010（じんもんこん 2010 論文集 2010（15），pp.189-194.）2010.12.

小木曽智信，須永哲矢

「「近代文語 UniDic」「中古和文 UniDic」を利用した総索引作成システムの開発」，情報処理学会じんもんこん 2010（じんもんこん 2010 論文集 2010（15），pp.119-124.）2010.12.

小椋秀樹，須永哲矢，小木曽智信，近藤明日子，田中牧郎

「「中古和文 UniDic」における言語単位の設計」，言語処理学会第 17 回年次大会，2011.3.9.

小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子

「テキストの多様性をとらえる分類指標の体系化の試み」，言語処理学会第 17 回年次大会，

2011.3.9.

宮内佐夜香，小木曽智信，小磯花絵，小椋秀樹

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づくオノマトペの分析 ―品詞性の検討を中心に―」，言語処理学会第 17 回年次大会，2011.3.9.

冨士池優美，小西 光，小椋秀樹，小木曽智信，小磯花絵

「長単位に基づく『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の品詞比率に関する分析」，言語処理学会第 17 回年次大会，2011.3.9.

中村壮範，小木曽智信

「Web 版コーパス検索アプリケーション「中納言」の公開」，言語処理学会第 17 回年次大会，2011.3.9.

小木曽智信，間淵洋子，前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における形態論情報付き XML フォーマット」，言語処理学会第 17 回年次大会，2011.3.9.

小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子

「テキストの多様性を捉える分類指標の構築を目指して」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ，2011.3.15.

中村壮範，小木曽智信

「Web 版コーパス検索アプリケーション「中納言」のデモンストレーション」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ，2011.3.15.

小木曽智信，間淵洋子，前川喜久雄

「階層的形態論情報を考慮した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の公開用 XML フォーマット」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ，2011.3.15.

小木曽智信，伝 康晴

「UniDic2：設計と実装」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ，2011.3.15.

冨士池優美，小西 光，小椋秀樹，小木曽智信，小磯花絵

「長単位に基づく媒体・カテゴリ間の品詞比率に関する分析」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ，2011.3.15.

宮内佐夜香，小木曽智信，小磯花絵，小椋秀樹

「BCCWJ に基づくオノマトペの品詞と意味についての分析」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ，2011.3.15.

岡 照晃，小町 守，小木曽智信，松本裕治

「機械学習による近代文語文への濁点の自動付与」，第 201 回自然言語処理研究会，2011.5.16.

須永哲矢，小木曽智信

「コーパスとコロケーション強度を用いた中古語の語認定 ―「名詞＋よし／あし／あり／なし」を例に―」，日本語学会 2011 年度春季大会，2011.5.29.

Yasuhiro Kondo, Toshinobu Ogiso

“Introduction to the NINJAL diachronic corpus and the UniDic dictionary”, Oxford-NINJAL Joint workshop on historical corpora for Japanese, 2011.8.1.

小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子

「評定実験に基づくテキスト分類尺度の体系化の試み」，日本語コーパス完成記念講演会，2011.8.2.

小木曽智信，中村壮範，鈴木 泰山，八木 豊，山崎 誠，前川喜久雄
「コーパス検索システム「中納言」デモンストレーション」，日本語コーパス完成記念講演会，2011.8.2.

小木曽智信，間淵洋子，前川喜久雄
「階層的形態論情報を考慮した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の公開用 XML フォーマット」，日本語コーパス完成記念講演会，2011.8.2.

小木曽智信
「歴史的資料を対象とした形態素解析辞書によるテキスト解析」，The 13th International Conference of EAJS (Tallinn, Estonia) 2011.8.25.

小木曽智信
「通時コーパスの構築に向けた古文用形態素解析辞書の開発」，情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会（CH92）2011.10.8.

Teruaki Oka, Mamoru Komachi, Toshinobu Ogiso and Yuji Matsumoto
"Automatic Labeling of Voiced Consonants for Morphological Analysis of Modern Japanese Literature", The 6th International Joint Conference on Natural Language Processing (ChiangMai, Thailand) 2011.11.9.

小木曽智信
「コーパス管理ツール「茶器」による中古和文コーパスの利用」，第 1 回コーパス日本語学ワークショップ，2012.3.5.

小木曽智信，岡 照晃，小町 守，松本裕治
「コーパス管理ツール「茶器」による単語情報付き古典語コーパスの活用」，情報処理学会じんもんこん 2011（じんもんこん 2011 論文集 2011（8），pp.255-260.），2011.12.

小木曽智信，相良かおる
「医療分野で使われる複合語の語種構成」，社会言語科学会，2012.3.11.

小磯花絵，田中弥生，小木曽智信，近藤明日子
「テキストの多様性をとらえる分類指標の体系化の試み（2）」，言語処理学会年次大会発表論文集，2012.3.13

相良かおる，小野正子，小木曽智信，小作浩美
「電子医療記録の分ち書き用ユーザ辞書 ComeJisyo の紹介と単語生起コスト」，言語処理学会年次大会発表論文集，2012.3.13.

【研究調査】

・2012.1.30-2.2　米国議会図書館（ワシントン）源氏物語写本調査

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
東京外国語大学大学院 総合国際学研究科　2010.4-2013.9
一橋大学大学院言語社会研究科　2008.4-2013.3

・NINJAL チュートリアル講師
第 5 回『中納言』による BCCWJ 検索入門（国立国語研究所）2012.2.9
第 6 回『中納言』による BCCWJ 検索入門（国立国語研究所）2012.2.16

・NINJAL 職業発見プログラム講師
「古文の品詞分解とコンピュータ」群馬県立高崎東高等学校　2011.10.26

小椋　秀樹（おぐら ひでき）言語資源研究系 准教授（2009.10 ～ 2012.3）

【学位】博士（文学）（大阪大学，2001）
【学歴】立命館大学文学部卒業（1993），大阪大学大学院文学研究科博士前期課程国文学専攻修了（1995），大阪大学大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻修了（2001）
【職歴】国立国語研究所 研究員（1998），同 主任研究員（2009），同 准教授（2009），同 辞職（2012.3）
【専門領域】日本語学
【所属学会】日本語学会，言語処理学会

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：共同研究員

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に付与した短単位に基づく，係り受け情報の付与について，その仕様等を検討した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を活用した，現代語表記のゆれの研究を行った。

【講演・口頭発表】

小木曽智信，小椋秀樹，田中牧郎，近藤明日子，伝 康晴
「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」，第 85 回人文科学とコンピュータ研究会発表会（琉球大学）2010.2.6.

小椋秀樹，原 裕，小木曽智信，小磯花絵，宮内佐夜香
「形態素解析辞書 UniDic における同語異語判別について」，言語処理学会第 16 回年次大会（東京大学）2010.3.10.

小木曽智信，小椋秀樹，近藤明日子，須永哲也
「形態素解析辞書「中古和文 UniDic」とその活用例」，日本語学会 2010 年度秋季大会（愛知大学）2010.10.24.

小椋秀樹，須永哲矢，小木曽智信，近藤明日子，田中牧郎
「「中古和文 UniDic」における言語単位の設計」，言語処理学会第 17 回年次大会（豊橋技術科学大学）2011.3.8.

小椋秀樹
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における現代語表記のゆれ」，第 98 回国語語彙史研究会（奈良女子大学）2011.9.17.

小椋秀樹
「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査 ―BCCWJ コアデータを資料として―」，第 1 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.3.6.

柏野　和佳子（かしの わかこ）言語資源研究系 准教授

【学位】文学学士

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業（1991）

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア（1991-1998），情報処理振興事業協会（IPA）技術センター研究員（1991-1997），国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会，言語処理学会，情報処理学会，人工知能学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】言語処理学会 理事，情報処理学会情報規格調査会学会試行標準 WG3 小委員会 主査，情報規格調査会学会試行標準専門委員会 委員

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「テキストの多様性を捉える分類指標の策定」: リーダー

研究目的：

コーパスに収録されるサンプルに付与する，適切で有用な分類指標を設け，書籍サンプル 10,000 例以上に，分類指標の付与を行い，体系的に検証を行う。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 収録書籍テキストを対象に，「専門度，客観度，硬度，くだけ度，語りかけ性度」という，5 観点の人手付与が重点課題。難易度に関しては，機械処理と比較分析をし，難易度の基準の分析を行うとともに，自動付与の精度向上を目指す。

研究成果：

人手付与の作業上の問題点の検討として，判断のゆれを検証した（Kashino and Okumura 2010）。明確な判断基準や典型例の例示のない作業初期段階では中～低度の一致であった。しかしながら，作業者間で意見交換を行い，典型例を抽出し，マニュアルを整備することで，一致度の向上を確認することができた。また，分類指標の付与済み 3,324 サンプルを用いて，NDC 別の書籍テキストの特徴を捉えた。専門度は，文学以外が高く，中でも哲学がもっとも高かった。また，芸術，美術の専門度が予測外に低かった。客観度は，文学のエッセー類の客観度が低いと判断されるのは予測通りであったが，歴史もまた低いということが判明した。客観度が高かったのは，哲学と自然科学である。くだけ度は，自然科学の低さが特徴的であった。語り度は，自然科学がもっとも高く，次いで，歴史，産業が高かった。哲学は低かった。以上のように，NDC 別の文体的特徴を捉えることができた。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

柏野和佳子

「第 4 章 形態素解析」，荻野綱男・田野村忠温（編）『講座 IT と日本語研究 2 アプリケーションソフトの基礎』，pp.131-186. 明治書院，2011.5.

柏野和佳子

「コーパスに基づく辞書づくり : これからの国語辞典はこう変わる」，『知能と情報』23（5），pp.705-713. 2011.10.

《国際会議録》

Wakako Kashino and Manabu Okumura

“An Approach toward Register Classification of Book Samples in the Balanced Corpus of

Contemporary Written Japanese", *Proceedings of PACLIC24*, pp.433-438. (Sendai) 2010.9.

《辞書・辞典類》

柏野和佳子

『岩波国語辞典 第七版』，岩波書店，2009.11.

柏野和佳子

「3.3.3 語種」，計量国語学会編『計量国語学事典』，朝倉書店，2009.11.

柏野和佳子

「1.3 辞書」，「1.3.1 国語辞典」，「1.3.3 計算機処理用日本語辞書」，「1.3.4 シソーラス」，言語処理学会編『言語処理学事典』，pp.80-85, 86-87, 90-91, 92-93. 共立出版，2009.12.

柏野和佳子

『岩波国語辞典 第七版新版』，岩波書店，2011.11.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子，丸山岳彦，稲益佐知子，秋元祐哉，田中弥生，佐野大樹，大矢内夢子，山崎 誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のサンプル収録方法」，『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』，pp.196-199.（鳥取大学）2009.3.

柏野和佳子，奥村 学

「和語や漢語のカタカナ表記 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用実態―」，『計量国語学会第 53 回大会』（東京女子大学）2009.9.

柏野和佳子

「「直接的な語り」という表現スタイルをもつ書籍テキストの人手抽出の試み」，『ことば工学研究会』35，pp.63-72.（神奈川大学）2010.8.

柏野和佳子，奥村 学

「国語辞典に「古い」と注記される語の現代書き言葉における使用傾向の調査」，『情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ研究会報告』88（6），pp.1-6.（国立国語研究所）2010.10.

柏野和佳子，奥村 学

「国語辞典に「古風」と注記される語の使用実態調査 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて―」，『言語処理学会第 17 回年次大会発表論文集』，pp.444-447.（豊橋技術科学大学）2011.3.

田中　牧郎（たなか まきろう）言語資源研究系 准教授

1962 生

【学位】修士（文学）（東北大学，1987）

【学歴】東北大学文学部文学科（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1989）

【職歴】国立国語研究所国語辞典編集室（1996），同 主任研究官（1999），同 室長（2000），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 主任研究員（2001），同 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，社会言語学会，言語処理学会，訓点語学会，日本言語学会，日本言語政策学会，万葉学会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員，日本語学会『日本語学大辞典』編集委員，社会言語科学会 編集委員，言語処理学会 編集委員，日本医学会用語管理委員会 委員

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「近代語コーパス設計のための文献言語研究」：リーダー

研究目的：

古代から近世までを対象とするプロジェクト「通時コーパスの設計」（基幹型）を補い，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」との間をつなぐものとして，「近代語コーパス」を設計する。国語研究所がこれまでに作成した「太陽コーパス」や近代語文献の電子化テキストなどをもとに，「近代語コーパス」の原型を作り，これを使ってコーパス近代語研究の開拓方法を研究する。また，重要な文献資料をリスト化し，コーパスの対象にする文献の選び方を検討し，コーパス化する文献言語の構造化や形態素解析の方法について研究する。後継プロジェクトが「近代語コーパス」構築に着手できる段階にまで，このプロジェクトが進める。

研究成果：

日本語史をとらえる通時コーパスの一角を担う「近代語コーパス」について，その役割，含められるべき資料，備えられるべき仕様，付加されるべき情報，提供されるべき利用ツール，開拓されるべき研究領域などを多面的に研究した上での，設計の考え方とその具体像を提示していきつつある。それらを，近代語コーパスの設計に直接役立つ形でまとめる手段についても，報告書の編集とモデルとなるコーパスの公開を計画に定めることで，明確にできた。

【研究業績】

《著書・編書》

沖森卓也，木村義之，田中牧郎，陳 力衛，前田直子

『図解 日本の語彙』，三省堂，2011.9.

《論文・ブックチャプター》

田中牧郎

「言語政策に役立つ，コーパスを用いた語彙表・漢字表などの作成と活用」，『人工知能学会誌』24（8），pp.665-672. 2009.9.

田中牧郎

「〈患者中心の医療〉と新語 ―重要な新語の普及や定着を図る工夫―」，『日本語学』28（14），

pp.46-57. 明治書院，2009.11.

田中牧郎

「中古語情意形容詞「くちをし」の意味記述 ―対象，誘因を表す語句の分析による―」，『古典語研究の焦点』，pp.317-337. 武蔵野書院，2010.1.

田中牧郎

「コーパスの語彙頻度を用いた教育語彙の検討」,『日本語学研究』27, pp.183-191. 韓国日本語学会，2010.3.

田中牧郎，相澤正夫

「難解用語の言語問題への具体的対応 ―「外来語」と「病院の言葉」を分かりやすくする提案―」，『社会言語科学』13（1），pp.95-108. 2010.8.

田中牧郎

「法廷における難解な用語への対応」，『国文学 解釈と鑑賞』76（1），pp.116-124. ぎょうせい，2011.1.

田中牧郎

「医療用語をわかりやすく」，『日本語学』30（2），pp.4-17. 明治書院，2011.2.

《国際会議録》

Makiro Tanaka and Hilofumi Yamamoto

"An analysis of Sino-Japanese words of the Heian period for the development of the historical Japanese dictionary", *ASIALEX2011 Proceedings LEXICOGRAPHY: Theoretical and Practical Perspectives*, pp.496-505. The Asian Association for Lexicography, 2011.8.

《データベース類》

田中牧郎，近藤明日子ほか 6 名

「特定領域研究『日本語コーパス』言語政策班最終成果 CD-ROM（報告書・語彙表・漢字表）」，「BCCWJ 主要コーパス語彙表」，「教科書コーパス語彙表」，「学校･社会対照語彙表」などを収録，国立国語研究所

前川喜久雄，田中牧郎ほか多数

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』，国立国語研究所コーパス開発センター　国立国語研究所 Web ページ http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ 及び DVD 版で公開

《辞書・辞典類》

甲斐睦朗，田中牧郎，棚橋尚子

『小学新国語辞典（改訂版）』，光村教育図書，2010.12.

甲斐睦朗，笹原宏之，田中牧郎，棚橋尚子

『小学新漢字辞典（改訂版）』，光村教育図書，2010.12.

《その他の出版物・記事》

田中牧郎

「教科語彙を辞書記述に取り込むために」，荻野綱男編『特定領域「日本語コーパス」平成 21 年度研究成果報告書コーパスを利用した国語辞典編集法の研究』，pp.101-111. 2010.2.

田中牧郎

「新刊･寸感　安部清哉ほか著『シリーズ日本語史 2 語彙史』/ 計量国語学会編『計量国語学事典』」，『日本語学』29-3，pp.104-105. 明治書院，2010.3.

田中牧郎

「病院の言葉を分かりやすく伝える工夫」，『治療』92-5，pp.1406-1407，2010.5.

田中牧郎
「新刊・寸感　東照二著『選挙演説の言語学』/ 堀田秀吾著『法コンテキストの言語理論』」,『日本語学』29-11, 明治書院, pp.88-89. 2010.9.
陣内正敬・田中牧郎・庄司博史
「巻頭言　特集「日本社会の変容と言語問題」」,『社会言語科学』13-1, pp.1-3. 2010.8.
田中牧郎
「わかりにくい病院の言葉」,『Nutrition Care』19, pp.28-30. 2010.11.
田中牧郎, 相澤正夫, 斎藤達哉, 棚橋尚子, 近藤明日子, 河内昭浩, 鈴木一史, 平山允子
『特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班報告書「言語政策に役立つ, コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用」』, 2011.2.
田中牧郎
「新刊･寸感　野村剛史著『話し言葉の日本史』/ 山口仲美著『日本語の古典』」,『日本語学』30 (3), 明治書院, pp.84-85. 2011.3.
田中牧郎
「新刊･寸感　高野繁男著『日本語になった西洋語 ―急増するカタカナ語―』/ 吉岡泰夫著『コミュニケーションの社会言語学』」,『日本語学』, 30（11）, 明治書院, pp.78-79. 2011.9.

【講演・口頭発表】

田中牧郎
「コーパスの語彙頻度を用いた教育語彙の検討」, 韓国日本語学会第 20 回国際学術発表会（韓国･建国大学）2009.9.
田中牧郎
「外来語の定着のために」, 第 36 回 語彙・辞書研究会 研究発表会（新宿 NS ビル）2009.11.
田中牧郎
「国語教育で語彙レベルを使うために」, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ（国立国語研究所）2010.3.
田中牧郎
「一般語彙リストの作成について」, イタリア日本語教育協会第 4 回日本語・日本語教育シンポジウム（ローマ大学）2010.3.
佐野大樹, 田中牧郎, 丸山岳彦
「「病院の言葉」の類型の推測とモデル化 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における語の使用度数を用いた一考察―」, 日本言語学会第 140 回大会（筑波大学）2010.10.
田中牧郎
「雑誌コーパスでとらえる明治・大正期の漢語の変動」, 国際学術研究集会：漢字漢語研究の新次元（国立国語研究所）2010.7.
田中牧郎, 近藤明日子, 河内昭浩, 鈴木一史, 棚橋尚子
「〈学校の語彙〉と〈社会の語彙〉―「教科書コーパス」と「流通実態サブコーパス」の比較―」, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会（国立国語研究所）2010.8.
田中牧郎, 近藤明日子, 河内昭浩, 鈴木一史, 棚橋尚子
「「学校・社会対照語彙表」の作成と活用」, 日本語学会 2010 年度秋季大会（愛知大学）2010.10.
田中牧郎
「近代雑誌コーパスの作成」, 公開集中講演会 ―二葉亭四迷「浮雲」を見直す―（共立女子大学）

2010.11.

田中牧郎

「言語政策に役立つ語彙分類 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と教科書コーパスによる―」，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会（JA 共済ビル・カンファレンスホール）2011.8.

Makiro Tanaka and Hilofumi Yamamoto

“Quantitative Analysis of Loanwords of Eight Literary Works in the Heian Period”, Osaka Symposium on Digital Humanities 2011, 2011.9.

田中牧郎

「平安時代末期における語彙の文体的変異 ―同文説話の語彙比較を通して―」，第 99 回国語語彙史研究会（大阪大学）2011.12.

田中牧郎

「日本語研究のためのコーパス ―国立国語研究所のコーパスを中心に―」，日本語文学会（韓国・慶北大学）2012.2.

田中牧郎

「新漢語定着の語彙的基盤 ―『太陽コーパス』を用いて―」，漢字文化圏近代語研究会（中国・浙江財経学院）2012.3.

田中牧郎

「近代語史をとらえるための文献選定とコーパス」，第 1 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.3.

【その他の学術的・社会的活動】

国立国語研究所が実施した「外来語言い換え提案」，「病院の言葉を分かりやすくする提案」の成果を受けて国立国語研究所の外部で始まった同様の活動に協力を続けている。また，国立国語研究所の活動自体の，普及，啓発活動もいくつか行った。

1. 医学生への助言

2011 年 10 月から，日本医療学会医学生部会「医療ことばを創る会」では，国立国語研究所の「病院の言葉を分かりやすくする提案」を受けて，医療用語を分かりやすくするための活動を行っている。この活動の月例会に参加し，医学生に対する助言を行った。

http://www.jhcs.jp/s/bukai/index.html

2. 医療者の研修会での講師

2009 年から，「病院の言葉を分かりやすくする提案」についての医療者研修会に講師として協力した。

3. 医療系情報誌への協力

2009 年から，「病院の言葉を分かりやすくする提案」についての医療情報誌の記事執筆に協力した。

4. 原子力用語を分かりやすくする検討への協力

2010 年 4 月から，関西電力・原子力安全システム研究所が実施している，原子力用語を分かりやすく説明するためのワーキンググループの月例会等に参加し，分かりやすい説明方法の検討や報告書執筆などに協力した。

丸山　岳彦（まるやま たけひこ）言語資源研究系 准教授

1972 生

【学位】修士（文学）（神戸市外国語大学，1997）

【学歴】神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業（1995），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科日本語日本文化専攻修士課程修了（1997），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科文化交流専攻博士課程単位取得退学（2000）

【職歴】株式会社 ATR 音声言語通信研究所 客員研究員（2000），国際電気通信基礎技術研究所 ATR 音声言語コミュニケーション研究所 研究員（2001），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学，コーパス日本語学

【所属学会】日本語文法学会，言語処理学会

【学会等の役員・委員】社団法人電子情報技術産業協会知識情報処理技術専門委員会言語資源分科会委員（2007.4-2010.3），自然言語処理研究会（NL）運営委員（2007.4 ～ 2011.3）

【受賞歴】

2006　言語処理学会第 12 回年次大会 優秀発表賞「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」（共著）

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

特定領域研究「日本語コーパス」において，『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の設計と実装，公開に携わった。特にサンプリング作業を統括し，マニュアルの公開，データ整備などを担当した。また，『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』を用いた話し言葉の文法研究を進めた。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

丸山岳彦

「第 3 章 コーパスデータの処理方法」，荻野綱男・田野村忠温編『講座 IT と日本語研究 5 コーパスの作成と活用』，pp.83-122. 明治書院，2011.

丸山岳彦

「第 10 章 コーパス日本語学」，益岡隆志（編）『はじめて学ぶ日本語学』，pp.185-202. ミネルヴァ書房 . 2011.

《国際会議録》

Maruyama, Takehiko, Makoto Yamazaki, and Kikuo Maekawa

"Statistical sampling method used in the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Current ISSUES in Unity and Diversity of Languages: Collection of the Papers Selected from the CIL 18*, 3864-3876. LSK (The Linguistic Society of Korea) 2009.

Maekawa, Kikuo, Makoto Yamazaki, Takehiko Maruyama, Masaya Yamaguchi, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, and Yasuharu Den

"Design, Compilation, and Preliminary Analyses of Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Proceedings of the 7th International Conference on Language Resources and Evaluation* (LREC2010), pp.1483-1486. (Valletta, Malta) 2010.5.

Den, Yasuharu, Hanae Koiso, Takehiko Maruyama, Kikuo Maekawa, Katsuya Takanashi, Mika

Enomoto, and Nao Yoshida

"Two-level annotation of utterance-units in Japanese dialogs: An empirically emerged scheme", *Proceedings of the 7th International Conference on Language Resources and Evaluation* (LREC2010), pp.2103-2110. (Valletta, Malta) 2010.5.

Maruyama, Takehiko, Katsuya Takanashi, and Nao Yoshida

"An Annotation Scheme for Syntactic Unit in Japanese Dialog", *Proceedings of DiSS-LPSS Joint Workshop 2010. The 5th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech, and The 2nd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech*, pp.51-54. (Tokyo) 2010.9.

《辞書・辞典類》

丸山岳彦

「1.2 コーパス」,「1.2.1 コーパスの類型」,「1.2.2 コーパスの構築」, 言語処理学会編『言語処理学事典』, pp.58-71. 共立出版, 2009.

《その他の出版物・記事》

丸山岳彦, 山崎 誠, 柏野和佳子, 佐野大樹, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 田中弥生, 大矢内夢子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの概要（4）―コーパスの設計とサンプリングの実際―」,『特定領域「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』, pp.37-46. 2010.

山崎 誠, 小椋秀樹, 小沼 悦, 柏野和佳子, 佐野大樹, 高田智和, 冨士池優美, 間淵洋子, 丸山岳彦, 山口昌也

「研究活動・成果の総括：データ班 代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築」,『特定領域「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』, pp.149-156. 2011.

丸山岳彦, 山崎 誠, 柏野和佳子, 佐野大樹, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 田中弥生, 大矢内夢子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの概要（5）―サンプリングの最終結果―」,『特定領域「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』, pp.241-250. 2011.

丸山岳彦, 柏野和佳子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの設計と実施」,『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会 予稿集』, pp.21-26. 2011.

丸山岳彦, 山崎 誠, 柏野和佳子, 佐野大樹, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 田中弥生, 大矢内夢子

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの原理と運用』, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度研究成果報告書（JC-D-10-01), 特定領域研究「日本語コーパス」データ班, 2011.2.

丸山岳彦, 山崎 誠, 柏野和佳子, 佐野大樹, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 田中弥生, 大矢内夢子

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に含まれるサンプルおよび書誌情報の設計と実装』, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度研究成果報告書（JC-D-10-02), 特定領域研究「日本語コーパス」データ班, 2011.2.

【講演・口頭発表】

伝 康晴, 小磯花絵, 丸山岳彦, 前川喜久雄, 高梨克也, 榎本美香, 吉田奈央

「対話研究にふさわしい発話単位の提案とその評価（1）～短い単位～」,『人工知能学会研究会資

料』SIG-SLUD-A803，pp.75-80. 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会，2009.
田頭（谷口）未希，丸山岳彦
「接続助詞「カラ」の音調と焦点構造」，日本音声学会 第 320 回研究例会，2009.
伝 康晴，小磯花絵，丸山岳彦，前川喜久雄，高梨克也，榎本美香，吉田奈央
「対話研究にふさわしい発話単位の提案とその評価（2）～長い単位～」，『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-A903，pp.13-18. 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会，2010.
佐野大樹，丸山岳彦
「評価表現に基づくブログ分類の試み ―アプレイザル理論を用いて―」，『言語処理学会 第 16 回年次大会 発表論文集』，pp.174-177. 言語処理学会，2010.
丸山岳彦，高梨克也，吉田奈央
「対話研究にふさわしい統語的単位の認定基準 ―対話節単位の設計―」，『言語処理学会 第 16 回年次大会 発表論文集』，pp.387-390. 言語処理学会．2010.
丸山岳彦
「代表性を有するコーパスの設計とサンプリングの実際 ―コーパスに基づく言語研究の可能性と限界―」，『言語処理学会 第 16 回年次大会 発表論文集』，pp.150-153. 言語処理学会，2010.
佐野大樹，田中牧郎，丸山岳彦
「「病院の言葉」の類型の推測とモデル化 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における語の使用度数を用いた一考察―」，『日本言語学会 第 140 回大会 予稿集』，pp.370-375. 日本言語学会，2010.
田頭（谷口）未希，丸山岳彦
「話し言葉にみられる「から」「ので」の音調」，『第 24 回日本音声学会全国大会予稿集』，pp.179-184. 日本音声学会，2010.
伝 康晴，小磯花絵，丸山岳彦，前川喜久雄，高梨克也，榎本美香，増田将伸
「発話の実時間性：コーパス言語学と相互行為言語学からの提言」，『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-B101，pp.51-54. 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会，2011.
保田 祥，柏野和佳子，立花幸子，丸山岳彦
「「語り性」を有する書きことばの典型例の分析」，『第 1 回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』，pp.139-146.（国立国語研究所）2012.
柏野和佳子，立花幸子，保田 祥，丸山岳彦，奥村 学，佐藤理史，徳永健伸，大塚裕子，佐渡島紗織
「テキストの硬さと軟らかさの考察 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に―」，『第 1 回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』，pp.131-138.（国立国語研究所）2012.
丸山岳彦
「大規模コーパスの利用とメタデータの役割」，『第 1 回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』，pp.203-210.（国立国語研究所）2012.
丸山岳彦
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた文末表現のバリエーションの分析」，『言語処理学会 第 18 回年次大会 発表論文集』，pp.591-594. 言語処理学会 . 2012.

山口　昌也（やまぐち まさや）言語資源研究系 准教授

1968 生

【学位】博士（工学）（東京農工大学，1994）

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業（1992），東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了（1994），東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了（1998）

【職歴】東京農工大学工学部 助手（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語資源グループ主任研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】知能情報学，科学教育・教育工学

【所属学会】社会言語科学会，日本教育工学会，日本語学会，言語処理学会，情報処理学会

【受賞歴】

2007　財団法人博報児童教育振興会 第 1 回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究」：リーダー

研究目的：

本研究プロジェクトでは，単語周辺の文脈情報から，複合的な言語要素（例：複合名詞）の意味記述（文脈情報）を合成的に導出する理論の確立を目指し，(1)（個々の）単語周辺の文脈情報と，複合的に用いられたときの文脈情報との関係の解明，(2) 文脈情報の表現方法などを含めた分布仮説の検証，(3) 自然言語処理結果の言語学的観点からの検証，を行う。

研究成果：

・Web 用例収集ツールの改良を行い，収集効率，Web データ特有のノイズ除去などの性能を向上させた。
・複合動詞・構成動詞の用例集を作成した。また，検索用のツールを整備した。
・複合動詞，構成要素の動詞間の格要素の対応関係を自動認識するための実験を上記の用例集を使用して実施した。
・日本語教育における複合動詞学習のための教育基盤整備として，Web ベース作文支援システムを日本語教育の作文授業に導入した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山口昌也，北村雅則，棚橋尚子
「相互教授モデルに基づく学習者向け作文支援システムの実現」，『自然言語処理』16（4），pp.65-89. 2009.10

《国際会議録》

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Takehiko Maruyama, Masaya Yamaguchi, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, and Yasuharu Den
"Design, Compilation, and Preliminary Analyses of Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese" *Proceedings of LREC 2010*, pp.1483-1486. (Valletta, Malta) 2010.5.

《データベース類》

・全文検索システム『ひまわり』ver.1.3 公開，http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/，2011.7.

【講演・口頭発表】

山口昌也，北村雅則，加藤良徳，棚橋尚子

「作文支援システム TEachOtherS における添削の「効率化」」，言語処理学会第 16 回年次大会予稿集，2010.3.

北村雅則，加藤良徳，棚橋尚子，山口昌也

「学習者同士の相互添削にみる作文支援システムの教育効果」，言語処理学会第 16 回年次大会予稿集，2010.3.

山口昌也，北村雅則，棚橋尚子

「日本語文章表現授業に対する作文支援システム導入手法の開発」，日本教育工学会研究報告集 10（1），pp.93-100. 2010.3.

北村雅則，棚橋尚子，山口昌也

「作文支援システムを用いた作文指導とその可能性」，日本教育工学会研究報告集 10（1），pp.101-108. 2010.3.

山口昌也，棚橋尚子

「日本語教育における多様な作文指導形態へ対応した Web ベース作文支援システム」，第 15 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（ルーマニア）2010.8.

山口昌也，北村雅則

「相互教授型作文支援システムにおける相互添削促進手法の実現」，日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集，2010.9.

北村雅則，山口昌也

「相互添削を取り入れた作文授業の設計と実践」，日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集，2010.9.

山口昌也，北村雅則

「作文授業における引用技術習得を支援する手法の提案」，言語処理学会第 17 回年次大会予稿集，2011.3.

北村雅則，山口昌也

「作文支援システムを使った「引用」学習課題の導入と展開」，言語処理学会第 17 回年次大会予稿集，2011.3.

山口昌也，佐野香織，金田智子，于 日平

「作文支援システムを媒介とした，海外の日本語作文授業と日本の大学における日本語教育授業連携の試み」，異文化コミュニケーションのための日本語教育 2，pp.780-781. 2011.8.

山崎　誠（やまざき まこと）言語資源研究系 准教授

1957 生

【学位】修士（文学）（筑波大学，1983）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業（1980），筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第 5 学年中退（1984）

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員（1984），同言語体系研究部第一研究室 研究員（1988），同 主任研究官（1993），同 第一研究室 室長（1995），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員（2001），同研究開発部門第一領域長（2003），同研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

【所属学会】日本語学会，計量国語学会，言語処理学会，語彙研究会，社会言語科学会，情報知識学会，日本語文法学会，日本行動計量学会，情報処理学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会理事

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「テキストにおける語彙の分布と文章構造」：リーダー

研究目的：

従来の語彙研究は，集合論的定義に基づいた静的な存在として語彙をとらえてきた。例えば，ある調査対象について頻度表を作成したり，語種や品詞の構成比を求めたりすること等である。これらはテキストにおける時間軸（語彙の系列）という概念を用いない分析であった。

しかし，語彙を構成する個々の語は，それぞれの文脈において使用されているのであるから，使用実態そのものを対象とした動的な語彙論が考えられる。すなわち，テキストにおける語彙の時系列的分布に基づく語彙論である。

本研究では，その一例としてテキストの産出過程とともに形成される動的な語彙を文章構造との観点から定量的に分析する。利用するデータは，コーパス開発センターで構築が進められている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されている，ひとまとまりの完結したテキスト及び学術論文等である。これらを用いて，語彙の分布の可視的な記述方法の開発，語の使用頻度と出現状況との関係，とくに文章構造と語（内容語，機能語）の出現状況との関係を語彙的結束性の現れという観点から探る。また，当該テキストの持つ特性（表現意図，ジャンル，文体等）との相関を調査・分析し，語彙に内包された文章構成機能を明らかにする。

研究成果：

共同研究発表会で以下の 5 件の発表を行った。

「テキストにおける多義語の意味分布と語彙的結束性」，2010.2.15.

「出現間隔と意味的距離から見た多義語の意味分布」，2010.8.23.

「テキストにおける語彙的連鎖」，2010.12.5.

「語彙の分布の視覚化」，2011.6.26.

「文章における共起語率の分布」，2011.9.24.

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

研究成果：

共同研究発表会で以下の 2 件の発表を行った。

「テキストにおける語の分布を利用した文章特性の記述」，2010.2.1.

「共起語集合の頻度分布と語の属性との相関」，2011.9.3.

独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」：共同研究員
研究成果：
　共同研究発表会・国際ワークショップで以下の 2 件の発表を行った。
「基本動詞選定のための基礎データについて」，2010.1.30.
「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の概要」，2012.3.25.

【研究業績】
《著書・編書》
　石川慎一郎，前田忠彦，山崎 誠
　　『言語研究のための統計入門』，くろしお出版，2010.12.
《論文・ブックチャプター》
　村田菜穂子，前川 武，山崎 誠
　　「今昔物語集の形容詞対照語彙表 ―本朝仏法部―」，『国際研究論叢』23（1），pp171-178.（大阪国際大学）2009.10.
　山崎 誠
　　「語彙表の種類と見方」，「語彙調査の方法」，「見出し語情報の設計」，「語彙の計量に役立つ資料」，『計量国語学事典』，朝倉書店，2009.11.
　村田菜穂子，前川 武，山崎 誠
　　「今昔物語集の形容詞対照語彙表 ―本朝世俗部―」，『国際研究論叢』23（2），pp.153-163.（大阪国際大学）2010.1.
　山崎 誠
　　「2008 年・2009 年における日本語学界の展望 ―研究資料（現代）」，『日本語の研究』6（3），pp.13-16. 日本語学会，2010.7.
　村田 年・山崎 誠
　　「「手」の慣用句を指標とした文章ジャンルの判別 ―現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて―」，『日本語と日本語教育』39，pp.75-88.（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター）2011.3.
　山崎 誠
　　「現代日本語書き言葉均衡コーパスの設計」，『現代の図書館』49（2），pp.133-139. 日本図書館協会，2011.6.
　山崎 誠
　　〔書評〕「橋本和佳著『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』」，『日本語の研究』8（1），pp.130-135. 日本語学会，2012.1.
　村田 年，山崎 誠
　　「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向 ―後項動詞を指標として―」，『日本語と日本語教育』40，pp.83-112.（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター）2012.3.
《データベース類》
・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』，2011.12.
《その他の出版物・記事》
　山崎 誠
　　「コーパスにみる特許関連文章の特徴」，『Japio 2009 YEARBOOK』，pp.118-121. 日本特許情報機

構，2009.11.

丸山岳彦，山崎 誠，柏野和佳子，佐野大樹，秋元祐哉，稲益佐知子，田中弥生，大矢内夢子
『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの原理と運用』，特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」データ班，2011.2.

丸山岳彦，山崎 誠，柏野和佳子，佐野大樹，秋元祐哉，稲益佐知子，田中弥生，大矢内夢子
『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に含まれるサンプルおよび書誌情報の設計と実装』，特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」データ班，2011.2.

山崎 誠
「文末表現の分布と文体 ―「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用して」，『Japio 2011 YEARBOOK』，pp.280-283. 日本特許情報機構，2011.11.

【講演・口頭発表】

山崎 誠
「語の平均使用度数に現れるテキストの特徴」，特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ（東京工業大学大岡山キャンパス）2010.3.

山崎 誠
「テキストにおける多義語の意味実現の傾向」，計量国語学会第 54 回大会（大正大学）2010.9.

山崎 誠
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を利用した語彙研究の進展」，北京日本学研究センター創立 25 周年記念シンポジウム（北京日本学研究センター）［招待講演］2010.10.

山崎 誠
「多義語における意味の分布」,『特定領域研究「日本語コーパス」』平成 22 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）（時事通信ホール）2011.3.

山崎 誠
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築と活用」，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会（JA 共済ビル カンファレンスホール）2011.8.

山崎 誠
「語彙の豊かさを表す指標に影響を与える品詞の特徴」，第 10 回日本語教育国際研究大会，天津外国語大学，2011.8.

山崎 誠
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の概要と日本語教育への応用」，第 10 回日本語教育国際研究大会（天津外国語大学）2011.8.

山崎 誠
「産業日本語に関連する動向報告」，第 3 回産業日本語研究会（東京大学情報学環福武ホール）2012.2.

山崎 誠
「ウェブ版『現代日本語書き言葉均衡コーパス』検索ツールの紹介」，シンポジウム「Web でつながる日本語教育」（日本女子大学）2012.3.

山崎 誠
「共起語率の分布からみるテキストの語彙的特徴」，第 1 回コーパス日本語学ワークショップ（国

立国語研究所）2012.3.

山崎 誠

「『現代日本語書き言葉コーパス』による日本語研究の展開」，言語処理学会第 18 回年次大会（NLP2012）（広島市立大学）［招待講演］2012.3.

山崎 誠

「前後の段落との共起を利用した文章の結束性の測定」, 言語処理学会第 18 回年次大会（NLP2012）（広島市立大学）2012.3.

【その他の学術的・社会的活動】

・産業日本語研究会世話人会（2009 年度～2011 年度）

【大学院教育・若手研究者育成】

・連携大学院

一橋大学言語社会研究科 連携教授

・大学院非常勤講師

慶應義塾大学大学院（2009 年度）

慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター（2010 年度，2011 年度）

・NINJAL チュートリアル講師

第 5 回『中納言』による BCCWJ 検索入門（国立国語研究所）2012.2.9.

第 6 回『中納言』による BCCWJ 検索入門（国立国語研究所）2012.2.16.

角田　太作（つのだ たさく）言語対照研究系 教授，研究系長（2009.10 ～ 2012.3）

1946 生

【学位】Ph.D.（言語学）（モナシュ大学，1979）

【学歴】東京大学文学部第三類（語学文学）卒業（1970），モナシュ大学大学院修士課程修了（1974），モナシュ大学大学院博士課程修了（1979）

【職歴】グリフィス大学言語センター Senior Teaching Fellow（1979），名古屋大学文学部 助教授（1979），筑波大学文芸・言語学系 助教授（1990），同 教授（1993），東京大学文学部附属文化交流研究施設 教授（1994），東京大学大学院人文社会系研究科 教授（2004），ジェイムズ・クック大学 特任教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 教授，研究系長（2009），同 定年退職（2012.3）

【専門領域】言語学，豪州原住民語学，言語類型論，言語消滅危機と言語活性化

【所属学会】Australian Linguistic Society，日本言語学会，Association for Linguistic Typology

【学会等の役員・委員】日本言語学会評議員，Pacific Linguistics（The Australian National University）の Editorial Advisory Board，*Studies in Language*（John Benjamins）の Board of Consulting Editors，Linguapax（Barcelona）の Advisory Board

【受賞歴】

2012　国立国語研究所所長賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型研究プロジェクト「形容詞節と体言締め文：名詞の文法化」：リーダー

研究目的：

日本語の「太郎が東京に行く予定だ」や「外は雨が降っている模様だ」のように，「節の述語＋体言＋だ」が一つの複合的な述語を形成する文を角田太作（1996）は体言締め文と呼んだ。この構文は，従来，あまり研究されていない。本研究では，この構文について，（ⅰ）地理的分布，（ⅱ）意味と機能，（ⅲ）体言・名詞の文法化のプロセスなどを明らかにすることを目的とする。

研究成果：

2010 年度は，国内・海外の研究協力のネットワークが整ってきた。現地調査も行った。共同研究発表会を 4 回行い，のべ 12 人が発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

2011 年度は，体言締め文について各共同研究員が担当する言語のデータを収集し，分析を進めた。研究会を 5 回行い，合計 8 人が研究成果を発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

研究目的に沿って言語学的成果を整理すると次のようになる。（ⅰ）地理的分布については，20 言語（アジア，アフリカ）で当該構文が見つかった。（ⅱ）意味と機能に関しては，テンス，アスペクト，ムード，証拠性，スタイル，談話機能などがあり，統語的に体言締め文とは逆の体言始まり構文も見つかった（両構文を「人魚構文」と総称）。（ⅲ）文法化に関しては，体言スロットに現れる名詞は「もの，こと，ところ，とき」などに当たる総称的な意味を持つ名詞と「様子，形」などに当たる証拠性を表す名詞の 2 種類があり，形態的に独立語のままである場合のほか，接語あるいは接尾辞になる場合があった。

【編集追記】本プロジェクトの成果は，のちに次の報告書としてまとめられた。

Tasaku Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of*

Nouns. (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). 国立国語研究所．2013.4.

基幹型研究プロジェクト「節連接へのモーダル的・発話行為的な制限」：リーダー

研究目的：

角田三枝（2003，2004）は，日本語の原因・理由，条件，逆接の三つの意味分野を考察し，節連接について五つのレベル（即ち，五段階）を提案した。特に，どの接続表現がどのレベルで使えるか，使えないかについて，同じ意味分野の接続表現（例えば，原因･理由を表す「ために」,「ので」,「から」）でも，五段階における分布が異なることを示した。本研究は，世界各地の 30 近くの言語を対象として，その原因・理由，条件，逆接の三つの意味分野について，以下のことなどを明らかにすることを目的とする。（ⅰ）接続表現がいくつあるか，（ⅱ）どの接続表現がどのレベルで使えるか，使えないか，（ⅲ）どの接続表現がどのレベルで使えるか，使えないかについて，通言語的な共通点はあるか，相違点はあるか。

研究成果：

2010 年度は，国内・海外の研究協力のネットワークが整ってきた。現地調査も行った。共同研究発表会を 4 回行い，のべ 12 人が発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

2011 年度は，節連接について，各共同研究員が担当する言語のデータを収集し，分析を進めた。研究会を 5 回行い，合計 20 人が研究成果を発表した。共同研究発表会以外の場でも，口頭発表を行い，論文を刊行している。若手研究者の育成の面でも成果が挙がった。

上記の研究目的に沿って言語学的成果を整理すると次のようになる。（ⅰ）接続表現の数については，従属節の接続表現の方が等位文の接続表現より多いという傾向が見られた。従属節の接続表現が少ない言語でも，原因・理由の接続表現と条件の接続表現は存在する傾向があった。（ⅱ）と（ⅲ）接続表現が使えるレベルに関しては，通言語的に，大まかな傾向として，節連接の五段階のレベルⅠ，Ⅱ，Ⅲで使いやすく，Ⅳ，Ⅴで使いにくく，また，五段階において連続帯を成す傾向がある。節連接の五段階の区別は通言語的に有効である。

【編集追記】本研究は，のちに次の報告書にまとめられた。

Tasaku Tsunoda (ed.) *Five Levels in Clause Linkage*. Two volumes. Tsukuba, Japan: The editor, 2013.9.

【研究業績】

《著書・編書》

Tasaku Tsunoda

A Grammar of Warrongo. Berlin and New York: De Gruyter Mouton, 2011.12.

《論文・ブックチャプター》

Tasaku Tsunoda, Mie Tsunoda

"The revival movement of the Warrongo language of northeast Australia", Jelisava Dobovsek-Sethna, Frances Fister-Stoga and Cary Duval (eds.), *Linguapax Asia: A Retrospective Edition of Language and Human Rights Issues [:] Collected Proceedings of Linguapax Asia Symposia 2004-2009*, pp.12-18. Tokyo: Linguapax Asia, 2010.

角田太作

「世界の諸言語から見た日本語」，『人間文化』11，pp.40-47. 人間文化研究機構，2010.

角田太作

「言語の記述，特に危機言語の記述」，『日本エドワード・サピア協会研究年報』25，pp.1-10. 2011.

角田太作
「フィールド言語学における「文法」の位置」,『日本語学』5, pp.4-15. 明治書院, 2011.
角田太作
「世界から見た日本語の多様性」, 呉人惠（編）『日本の危機言語：言語・方言の多様性と独自性』pp.265-279. 北海道大学出版会, 2011.
角田太作
「人魚構文 : 日本語学から一般言語学への貢献」,『国立国語研究所論集』1, pp.53-75. 2011.

【講演・口頭発表】

角田太作
「世界の諸言語から見た日本語」, 人間文化研究機構第 11 回公開講演会・シンポジウム「ウチから見た日本語 ソトから見た日本語」（有楽町朝日ホール）2009.12.5.
角田太作
「言語の記述, 特に危機言語の記述」, 日本エドワード･サピア協会第 25 回研究発表会（専修大学）［招待講演］2010.10.23.
角田太作
「人類文化からみた日本語記述文法の未来」, 日本語文法学会第 11 回大会シンポジウム「日本語の記述文法の未来を考える」（就実大学）［招待講演］2010.11.6.
角田太作
「言語消滅危機と言語再活性化：世界各地におけるとりくみ」, 第 32 回南島文化市民講座「“しまくとぅばの未来”―少数派の言語とその再活性化―」（沖縄県立博物館）［招待講演］2010.11.13.
角田太作
「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」, 中右実先生御退休記念シンポジウム「明日の言語研究に向けて」（麗澤大学）［招待講演］2011.2.12.
角田太作
「ことばの類型と多様性」, 人間文化研究機構第 14 回公開講演会・シンポジウム「ことばの類型と多様性」（有楽町朝日ホール）2011.2.19.
角田太作
“The hierarchy of two-place predicates: its limitations and uses”, Conference on Valency Classes in the World’s Languages (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig, Germany)［招待講演］2011.4.16.
角田太作
「ワロゴ語（豪州）における属性の表現」, 日本言語学会第 142 回大会公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」（日本大学文理学部）2011.6.19.
角田太作
「世界の言語から見た日本語・日本語から見た世界の言語」, 第 5 回 NINJAL フォーラム「日本語新発見―世界から見た日本語―」（一橋記念講堂）2012.3.24.

【その他の学術的・社会的活動】

The Australian Literacy and Numeracy Foundation の招待を受け, 2011 年 9 月に豪州クイーンズランド州のタウンズビルとパーム・アイランドを訪問して, ワロゴ語復活運動のための教材作成に参加・協力した。

【大学院教育・若手研究者育成】

・併任教授：東京大学大学院人文社会系研究科において講義・論文指導 2009.10-2010.3.

・非常勤講師：山口大学大学院人文科学研究科 2009.11.

・博士論文指導：研究指導委託（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程学生 2 名）2010.4-2011.3.

・博士論文審査委員：東京大学（2011.7. 副査），東京大学（2011.10. 副査）

井上　優（いのうえ まさる）言語対照研究系 教授（2009.10 ～ 2011.3）

1962 生

【学位】修士（文学）（東京都立大学，1988）

【学歴】東北大学文学部文学科卒業（1985），東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程国文学専攻修了（1988），東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程国文学専攻中退（1988）

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 文部教官（1988），同 情報資料研究部（1989），同 日本語教育センター（1992），同 主任研究官（1997），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門 主任研究員（2001），同 領域長（2004），同 日本語教育基盤情報センター グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 教授（2009.10），同 辞職（2011.3）

John Bradford Whitman（ジョン ブラッドフォード ホイットマン）

言語対照研究系 教授

1954 生

【学位】博士（言語学）（ハーバード大学，1985）

【学歴】Harvard University，Linguistics & Philosophy 卒業（1976），筑波大学文芸言語研究科修士課程修了（1980），Harvard University，Linguistics 博士課程修了（1985）

【職歴】ハーバード大学 助教授（1986），コーネル大学 助教授（1987），同 教授（2003），同 Chair（教授）（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 教授（2011）

【専門領域】言語学，歴史比較言語学，言語類型論，東洋言語学

【所属学会】日本言語学会，訓点語学会，アメリカ言語学会，国際韓国語学会

【学会等の役員・委員】*Cahiers de Linguistique - Asie Orientale*（パリ）編集委員，『言語研究』（韓国）編集委員，*Korean Linguistics*（オランダ Brill 社）副編集長

【受賞歴】

2011　国立国語研究所第 3 回所長賞

【研究業績】

《著書・編書》

John Whitman, Dianne Jonas and Andrew Garrett
Grammatical Change: Origins, Nature, Outcomes, Oxford: Oxford University Press, 2011.

《論文・ブックチャプター》

John Whitman
"Northeast Asian linguistic ecology and the advent of rice agriculture in Korea and Japan", *Rice* 4(3-4), pp.149-158. 2011.

John Whitman
"The ubiquity of the gloss", *Scripta* 3, pp.95-121. 2011.

John Whitman, Dianne Jonas and Andrew Garrett
"Introduction", Dianne Jonas, John Whitman and Andrew Garrett (eds.) *Grammatical Change: Origins, Nature, Outcomes*, Oxford University Press, pp.1-12. 2011.

John Whitman and Jaklin Kornfilt
"Introduction: Nominalizations in linguistic theory", Jaklin Kornfilt and John Whitman (eds.) *Nominalizations in linguistic theory* (special issue), Lingua.121(7), pp,1160-1163. 2011.

John Whitman and Jaklin Kornfilt
"Afterword: Nominalizations in linguistic theory", In Kornfilt, Jaklin and John Whitman (eds.) *Nominalizations in linguistic theory* (special issue), Lingua.121(7), pp.1297-1313. 2011.

John Whitman and Tomohide Kinuhata
"The genesis of indefinite pronouns in Japanese and Korean", William McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 18, pp.88-100. Stanford: CSLI. 2011.

John Whitman and Bjarke Frellesvig
"Prenominal complementizers and the derivation of complex NPs in Japanese and Korean", William McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 18. pp.73-87, Stanford: CSLI. 2011.

《その他の出版物・記事》

ジョン・ホイットマン，矢田 勉，清水康行，金水 敏

「言語資源としての日本語」（金水 敏他との座談会録）Bungaku 12（3），pp.2-51. 岩波書店，2011.

【講演・口頭発表】

John Whitman and Yuko Yanagida

"A Korean grammatical borrowing in Early Middle Japanese kunten texts and its relation to the syntactic alignment of earlier Korean and Japanese", Japanese/Korean Linguistics 21 (Seoul National University) 2011.

John Whitman, Nayoung Kwon, Jiwon Yun, and John Hale

"Processing of Noun Complement Complex NPs with subject and object pro in Korean", CUNY 2011 (the 24th Annual Conference on Human Sentence Processing), (Stanford University) 2011.3.24-26.

【大学院教育・若手研究者育成】

・論文指導

コーネル大学博士課程言語学専攻学生 5 名（主査）

コーネル大学博士課程言語学専攻 4 名（副査）

イギリス オクスフォード大学（副査）

Prashant Vijay Pardeshi（プラシャント・ウィジャイ・パルデシ）

言語対照研究系 教授

【学位】博士（学術）（神戸大学，2000）

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【職歴】神戸大学文学部 講師（2005），同 人文学研究科 講師（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 教授（2011）

【専門領域】言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】日本語文法学会，日本言語学会，関西言語学会，国際類型論学会（ALT）

【学会等の役員・委員】日本語文法学会大会委員会 委員（2010.4-2013.3）

【受賞歴】

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

2007　第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞：パルデシ・プラシャント，桐生和幸，石田英明，小磯千尋（編）2007.『日本語 ―マラーティー語基本動詞用法事典』（428 ページ）。財団法人博報児童教育振興会 2005 年度第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書。

2000　The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to "*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*", Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: "The Passive and Related Constructions in Marathi."

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」：リーダー

研究目的：

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が（ⅰ）出来事の認識，（ⅱ）その言語表現および（ⅲ）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約 40 言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。

研究成果：

・日本語，韓国語・中国語の比較対照を通じて，言語の基本デザインに関する類型論的研究を展開するための観点が見出された。
・他動性の研究に新たな，かつ重要な展開をもたらすための枠組みが構築できた。
・他動詞文の実現に関して，他動性と意図性のどちらが，どの程度優先するかという観点から類型化できることが明らかになった。
・言語類型論チームおよび心理言語学チームでは上述以外に数々の成果があがっている。言語類型論チームの最終成果は論文集の形で纏める予定である。心理言語学チームの成果は主に国内外の学会や論文雑誌などに公開する予定である。言語習得チームでは類型論と第二言語習得研究の共同研究の基盤整備を行っており，成果が出るのは時間がかかると見通している。言語習得チームの成果も主に国内外の学会や論文雑誌などに公開した。

【研究業績】

《著書・編書》

堀江 薫，プラシャント・パルデシ

『言語のタイポロジー ―認知類型論のアプローチ』（講座認知言語学のプロンティア第５巻）（担当：第４章，５章，pp.185-243.），研究社，2009.

西光義弘，プラシャント・パルデシ（編）

『自動詞・他動詞の対照』（中川政之，西光義弘，益岡隆志 編 シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第４巻），くろしお出版，2010.

《論文・ブックチャプター》

Peter Hook and Prashant Pardeshi

"The semantic evolution of EAT-Expressions: ways and byways", John Newman (ed.) *The Linguistics of Eating and Drinking*, pp.153-172. John Benjamins, 2009.

プラシャント・パルデシ

「南アジア諸語における非顕在的な動作主構文」，東北大学言語認知総合科学 COE 論文集刊行委員会編『言語・脳・認知の科学と外国語習得（Language, Brain, and Cognition: Typological, Neurocognitive, and Applied Perspectives)』，pp.21-40. ひつじ書房，2009.

Peter Hook and Prashant Pardeshi

"A Taxonomy of EAT-Expressions in Marathi", Rajendra Singh (ed.) *Annual Review of South Asian Languages and Linguistics* 2009, pp.41-63. Mouton de Gruyter, 2009.

Kazuyuki Kiryu and Prashant Pardeshi

"Research on South Asian Languages in Japan: 2000-2008", Rajendra Singh (ed.) *Annual Review of South Asian Languages and Linguistics* 2009, pp.149-169. Berlin: Mouton de Gruyter, 2009.

Luming Wang, Kaoru Horie and Prashant Pardeshi

"Toward a functional typology of noun modifying constructions in Japanese and Chinese: A corpus-based account", Shunji Inagaki et al. (eds.) *Studies in Language Sciences* 8, pp.213-228. 2009.

吉成祐子，プラシャント・パルデシ，鄭 聖汝

「非意図的な出来事における他動詞使用と責任意識 ―日本語・韓国語・マラーティー語の実態調査を通じて―」，岸本英樹編『ことばの対照』，pp.175-189. くろしお出版，2010.

プラシャント・パルデシ

「マラーティー語における他動性のスペクトル」，西光義弘，プラシャント パルデシ編『自動詞・他動詞の対照』（シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第４巻），pp.7-32. くろしお出版，2010.

プラシャント パルデシ，西光義弘

「他動性のプロトタイプとその拡張におけるバリエーション」，西光義弘，プラシャントパルデシ編『自動詞・他動詞の対照』（シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第４巻），pp.1-6. くろしお出版，2010.

Prashant Pardeshi

"A contrastive study of metaphorical extensions of in front of and behind in Marathi, Hindi and Japanese", P.A. George (ed.) *Japanese Studies: Changing Global Profile*, pp.552-558. New Delhi: National Book Centre, 2010.

Prashant Pardeshi, Kaoru Horie, and Shigeru Sato

"An anatomy of the posture verb'sit'in Marathi: A cognitive-functional account", Sally Rice and

John Newman (eds.) *Empirical and Experimental Methods in Cognitive/Functional Research*, pp.91-107. Stanford: CSLI, 2010.

Shinohara Kazuko and Prashant Pardeshi

"The more in front, the later: The role of positional terms in time metaphors", *Journal of Pragmatics* 43, pp.749–758. 2011.

Prashant Pardeshi

"A descriptive account of the transitivity spectrum in Marathi", Omkar N. Koul (ed.) *Indo-Aryan Linguistics*, Mysore, India: Central Institute of Indian Languages, pp.181-200. 2011.

Peter Hook and Prashant Pardeshi

"Sylleptic uses of EAT-expressions in Indo-Aryan verbal art", Omkar N. Koul (ed.) *Indo-Aryan Linguistics*, pp.87-93. Mysore, India: Central Institute of Indian Languages, 2011.

《データベース類》

・『外国人学習者の日本語誤用例集』データベース版：寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』（大阪大学；データベース版，国立国語研究所，2011.）

・『外国人学習者の日本語誤用例集』PDF 版：寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』（大阪大学；PDF 版，国立国語研究所，2011.） http://teramuradb.ninjal.ac.jp/

《その他の出版物・記事》

プラシャント・パルデシ，吉成祐子

「他動性と意図性の相関関係」，『日本語文法学第 11 回大会発表予稿集』，pp.75-83. 2010.

プラシャント・パルデシ

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」〈共同研究プロジェクト紹介〉，『国語研プロジェクトレビュー』7，pp.23–29. 2012.

【講演・口頭発表】

Prashant Pardeshi

「日本語と韓国語はどこが，どのように，そしてなぜ違うのか：受動構文の対照を通じて」，筑波大学人文社会科学研究科 IFERI・漢陽大学 Brain Korea 21 主催 次世代の東アジア学生知的交流国際会議（筑波大学）2010.1.9.

Prashant Pardeshi

「主観性のタイポロジー：日・英・韓・中・南アジア諸語・東南アジア諸語における受動表現，逆行表現，授受・受益表現の対象を通じて」，麗澤大学言語研究センター 第 45 回研究セミナー，2010.1.21.

Prashant Pardeshi

"Blowing hot, hotter and hotter yet: Temperature vocabulary in Marathi and Hindi-Urdu and its extension to the world of emotions", Presented at the Workshop on Temperature in Language and Cognition, Department of Linguistics (Stockholm University, Sweden) 2010.3.19-20.

Hsin-hsin Liang, Prashant Pardeshi, and Peter E. Hook

"Semantic neutralization in complex predicates in East and South Asian languages", Presented at the International Association of Chinese Linguistics (IACL)-18 & North American Conference on Chinese Linguistics (NACCL)-22 (Harvard University, Cambridge, MA, USA) 2010.5.20-22.

Prashant Pardeshi and Peter Hook

"When Marathi meets Farsi: A case study in language contact", Presented at the 13th International Conference on Maharashtra: Culture and Society (University of Saints Cyril and Methodius in Trnava, Bratislava, Slovakia) 2010.6.17-19.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習バイリンガル辞書の開発と対照研究の接点 ―『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』の作成を振り返って―」, 平成 22 年度筑波大学国際連携プロジェクト企画国際研究フォーラム「日本語学習者辞書の開発と日本語研究」(筑波大学) 2010.12.11.

プラシャント・パルデシ, 吉成祐子, 鄭 聖汝

「他動性と意図性に関わる言語表現使用の検証 ―日本語とマラーティー語の対照研究および日本語教育への応用―」, 第 7 回日本語実用言語学国際学会 (サンフランシスコ州立大学) 2011.3.5-6.

Prashant Pardeshi

"Motion events in Marathi: Variation in the encoding of path and deixis", Presented at the 11th International Cognitive Linguistic Conference (ICLC 11), Xi'an International Studies University, Xi'an, China, 2011.7.11-17.

プラシャント・パルデシ, 赤瀬川史郎

「BCCWJ を活用した基本動詞ハンドブック作成 ―コーパスブラウジングシステム NINJAL-LWP の特徴と機能―」,『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会, 2011.8.3.

プラシャント・パルデシ, 山崎 誠, 今村泰也

「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」, 第 10 回世界日本語教育研究大会ワークショップ「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の概要と日本語教育への応用」(天津外国語大学) 2011.8.20.

Prashant Pardeshi

"The passive and related constructions in Marathi (Indo-Aryan)", Presented at the Department of Linguistics (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig, Germany) 2011.9.13.

Yuko Yoshinari, Prashant Prdeshi and Sung-Yeo Chung

"Use of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean: A psycho-linguistic study", Presented at the 21st Japanese/Korean Linguistics Conference (JK21), (Seoul National University) 2011.10.20-22.

プラシャント・パルデシ, 吉成祐子

「他動性と意図性の相関関係」, 日本語文法学会第 11 回大会パネルセッション 自動詞・他動詞の対照研究の新地平 (就実大学) 2011.11.6-7.

赤瀬川史郎, Prashant Pardeshi

「理論言語学とコーパスの接点 ―NINJAL-LWP による言語分析―」, 国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会 (国立国語研究所) 2012.2.18.

Prashant Pardeshi, 赤瀬川史郎

「コーパスを利用した基本動詞ハンドブック作成 ―コーパスブラウジングツール NINJAL-LWP の特長と機能―」, 言語処理学会第 18 回年次大会 (NLP2012) テーマセッション :「コーパス日本語学―その期待と可能性」(広島市立大学) 2012.3.15.

プラシャント・パルデシ, 今村泰也

「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」プロジェクトの歩み, 国立国語研究所独

創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」国際ワークショップ「日本語―マラーティー語基本動詞ハンドブックの作成に向けて：現状および未来の展望」（Sumant Moolgaokar Auditorium, Mahratta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (MCCIA), Trade Tower プネー，インド）2012.3.25.

赤瀬川史朗，プラシャント・パルデシ，今村泰也

「BCCWJ コロケーション検索ツール NINJAL-LWP デモンストレーション」，国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」国際ワークショップ「日本語―マラーティー語基本動詞ハンドブックの作成に向けて：現状および未来の展望」（Sumant Moolgaokar Auditorium, Mahratta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (MCCIA), Trade Tower プネー，インド）2012.3.25.

プラシャント・パルデシ，赤瀬川史朗

「コロケーションをどう教えるか ―学習者向けコロケーション可視化ツールの開発」，国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」国際ワークショップ「日本語―マラーティー語基本動詞ハンドブックの作成に向けて：現状および未来の展望」（Sumant Moolgaokar Auditorium, Mahratta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (MCCIA), Trade Tower プネー，インド）2012.3.25.

【その他の学術的・社会的活動】

・「言語と認知の類型論：日本語とマラーティー語の対照研究から見えてくる認知の多様性」，人間文化研究機構第 14 回公開講演会・シンポジウム ことば類型と多様性（有楽町朝日ホール）2011.2.19.

【大学院教育・若手研究者育成】

・博士論文審査

神戸大学 2010.

東京外国語大学 2012.

淺原　正幸（あさはら まさゆき）コーパス開発センター 特任准教授

1975 生

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学，2003）

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業（1998），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了（2001），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了（2003）

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教（2004），大学共同利用機関法人国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授（2012.1）

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会，言語処理学会

【受賞歴】

2011　Yanyan Luo, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto
Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering, “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”

2010　Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto
The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine), “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”

2008　岩立将和，浅原正幸，松本裕治
言語処理学会第 14 回年次大会 優秀発表賞，「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」

2003　浅原正幸
平成 15 年度情報処理学会 山下記念研究賞，「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto
“Robust integrated models for Chinese predicate-argument structure analysis”, *China Communications* 9(3), pp.10-18. 2012.3.

《国際会議録》

Asad Habib, Masakazu Iwatate, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto, and Wajeeha Khalil
“Optimized and hygienic touch screen keyboard for large set languages”, *Proceedings of International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication* (ICMIMC-2013), 2012.1.

【講演・口頭発表】

浅原正幸，小野 創，狩野芳伸
「アノテーションと心理言語学」，第 1 回コーパス日本語学ワークショップ併設シンポジウム，2012.3.

Yanyan Luo, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto
“Dual decomposition for Chinese semantic role labeling”，情報処理学会研究報告第 205 回自然言語処理研究会，2012-NL-205-5，pp.1-7. 2012.1.

岩立将和，浅原正幸，松本裕治

“並列構造アノテーションの制約を利用した係り受けアノテーション支援”，情報処理学会研究報告第 205 回自然言語処理研究会，2012-NL-205-6，pp.1-7. 2012.1

【大学院教育・若手研究者育成】

・論文指導

奈良先端科学技術大学院大学 2 名（副査）

宇佐美　洋（うさみ よう）日本語教育研究・情報センター 准教授

【学位】修士（文学）（東京大学，1991）
【学歴】東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（1997）
【職歴】新潟大学留学生センター 講師（1997），国立国語研究所日本語教育センター第三研究室 研究員（1999），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同 主任研究員（2004），同 日本語教育基盤研究センター評価基準グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 日本語教育研究・情報センター准教授（2010）
【専門領域】評価論，言語能力論，日本語教育
【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，待遇コミュニケーション学会，PAC 分析学会
【学会等の役員・委員】日本語教育学会 評議員，同 学会誌委員，日本語検定 審議委員
【受賞歴】
2011　日本語教育学会第 9 回日本語教育学会奨励賞
2011　日本語教育学会第 6 回日本語教育学会林大記念論文賞

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】
基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員（「社会における相互行動としての「評価」研究」を担当）
研究成果：
社会的相互行為の中で，ひとは他者の，あるいは自分の言語運用をどのように解釈・評価し，それをいかにして次の言語運用につなげていっているか，そのプロセスについての調査を量的・質的手法によって行い，理論化の準備を進めている。さらにその理論を踏まえつつ，自らの評価のあり方を内省できるようになるとともに，他者の評価のあり方をも尊重できるようになるような教育システムを考案し，試行している。こうした教育システムは，異なる価値観を持つ人々同士がともに生きる多文化共生社会において，人間同士がよりよい人間関係を作っていけるようになるためには極めて重要なものである。

【研究業績】
《論文・ブックチャプター》
宇佐美洋，森 篤嗣，吉田さち
「「外国人が書いた日本語手紙文」に対する日本人の評価態度の多様性 ―質的手法によるケーススタディ―」，『社会言語科学』12（1），pp.122-134. 社会言語科学会，2009.10.
宇佐美洋
「実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類 ―「生活のための日本語」全国調査から―」，『日本語教育』144，pp.145-156. 日本語教育学会，2010.1.
宇佐美洋
「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み ―学習者が書いた日本語手紙文を対象として―」，『日本語教育』147，pp.112-118. 日本語教育学会，2010.12.
宇佐美洋
「生涯学習的立場からみた評価」，『AJALT』34，pp.42-45. AJALT，2011.6.
宇佐美洋
「日本語学習者の書いた謝罪文に対する日本語教師の評価態度 ―質的分析によるその多様性の解

明―」,『フランス日本語教育』6, pp.99-106. フランス日本語教師会, 2011.11.

《その他の出版物・記事》

宇佐美洋

「言語運用に対する「評価観生成理論」の構築に向けて」,『社会言語科学会ニュースレター』29（http://www.jass.ne.jp/news_letter/JASS_NL29.pdf）, pp.3-4. 社会言語科学会, 2010.3

【講演・口頭発表】

宇佐美洋

「「外国人が日本で行う行動」の, 因子分析による再分類 ―各行動の実行頻度の相関から―」, パネルセッション「「生活のための日本語」全国調査 ―定住型外国人の言語生活を探る―」（発表者: 金田智子, 矢部まゆみ, 福永由佳, 森 篤嗣, 宇佐美洋）, 2009 年度日本語教育学会春季大会（明海大学）2009.5.

宇佐美洋

「学習者に対する評価の観点と, その重みづけに基づく日本人グルーピングの試み」, 2009 年度日本語教育学会秋季大会（九州大学）2009.10.

宇佐美洋

「日本語学習者の書いた謝罪文に対する日本語教師の評価態度 ―質的分析によるその多様性の解明―」, 第 11 回フランス日本語教師会シンポジウム（フランス リヨン・インサ工科大学）2010.5.

横山紀子, 宇佐美洋, 文野峯子, 松見法男, 森本郁代

「「実践報告」における教育効果の測定・評価方法」, パネルセッション「『実践報告』とは何か ―知見の共有を目指して―」, 2010 年度日本語教育学会春季大会（早稲田大学）2010.5.

宇佐美洋

「学習者が学びたいこと（1）～国研の全国調査から～」, 日本語ボランティア養成講座（浜松国際交流協会）［招待講演］2010.6

宇佐美洋

「謝罪文において「書き手の態度」を評価する, とはどういうことか ―PAC 分析によるケーススタディ―」, 2010 世界日語教育大会（台湾・国立政治大学）2010.7.

野原ゆかり, 吉田さち, 森 篤嗣, 宇佐美洋

「「生活場面で必要となる日本語書きことば」データに対するコミュニケーション機能の付与 ― 4 種類の交渉場面に関する文章を対象として―」, 社会言語科学会第 26 回大会（大阪大学）, 2010.9.

吉田さち, 野原ゆかり, 森 篤嗣, 宇佐美洋

「「日本語学習者による日本語／母語発話の対照言語データベース」へのタグ付け ―コミュニケーション研究に対する多様な応用のために―」, 社会言語科学会第 26 回大会（大阪大学）2010.9.

宇佐美洋, 森 篤嗣, 野原ゆかり, 吉田さち

「外国人の日本語話しことばに対する日本人評価の多様性を探る ―質問紙による量的調査―」, 第 7 回日本語実用言語学国際会議（サンフランシスコ州立大学）2011.3.

宇佐美洋, 近藤 彩, 内海由美子, 早野恵子

「教室外の世界で行われている「評価」―その多様性を探る意義―」, 日本語教育学会 2011 年度春季大会（東京国際大学）2011.5.

宇佐美洋, 田中真理, 徳井厚子

「評価の「個人差」に着目することの意味 ―より深い自己認識につなげるための評価論―」，13th International Conference of EAJS（エストニア・タリン大学）2011.8.

宇佐美洋

「あなたにとって「許せない日本語」とは？ ―「外国人の日本語」に対する評価の観点を問い直す」，東京女子大学夏季特別講座，［招待講演］2011.8.

【大学院教育・若手研究者育成】

・政策研究大学院大学 客員准教授

・博報児童教育振興会「日本語海外研究者招聘事業」による外来研究員 2 名受入

野山　広（のやま ひろし）日本語教育研究・情報センター准教授

1961 生

【学位】修士（文学）（早稲田大学，1988），修士（日本語応用言語学）（モナシュ大学，1995），修士（教育学）（早稲田大学，1996）

【学歴】早稲田大学卒業（1985），早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了（1988），豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了（1995），早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了（1996），早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学（2001）

【職歴】文化庁文化部国語課専門職員（日本語教育調査官）（1997），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員（2004），同 領域長（2005），同 整備普及グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009），同 准教授（2010）

【専門領域】応用言語学，日本語教育学，社会言語学，多文化・異文化間教育，言語政策・計画研究

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，異文化間教育学会，移民政策学会，日本言語政策学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 理事（研究大会委員会委員長，広報委員会委員），日本語教育学会 理事（大会委員会副委員長），移民政策学会 理事（企画委員），日本語プロフィシェンシー研究会 副会長（地域の日本語教育研究担当），港区国際化推進プラン検討委員会 委員長

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトは，独立行政法人国立国語研究所の日本語教育基盤情報センターで実施した縦断調査（約 2 年半）から得られた会話データと新たに収集したデータを言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて分析することを目的とする。これにより，多言語化・多文化化が進む現代日本の地域社会における外国人定住者の日本語習得や言語生活の実態をより的確に捉え，日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題に応えるための応用言語学的アプローチの基盤が築かれることが期待される。

研究成果：

日本語教育基盤情報センターで実施した調査も含め，2012 年 3 月まで 5 年間の縦断調査のレイティングの結果から，次のことが判明した。

(1) 散在地域（秋田県能代市）の学習者に対する OPI の枠組みを活用した縦断調査から，レベルの変化と彼らが必要とする日本語会話力に関する一定の特徴がみえてきた。

(2) 集住地域（群馬県大泉町）の学習者に対する OPI の枠組みを活用した縦断調査から，①発達段階に応じて言語能力が向上すること，②家庭内で母語を使用する等，二言語を併用することが好影響を与えることが分かった。

(3) 5 年分の音声データ，文字化されたデータ，インタビュー等から，方言使用，発話スタイル等の特徴についても一定の傾向が判明した。

【研究業績】

《著書・編書》

日本語教育政策マスタープラン研究会（今村和宏，門倉正美，木村哲也，嶋田和子，新矢麻紀子，野山 広，平高史也，宮崎里司，山田 泉）
『日本語教育でつくる社会 ―私たちの見取り図』，ココ出版，2010.10.
野山 広，河原俊昭，山本忠行
『日本語が話せないお友だちを迎えて～国際化する教育現場からのQ&A ～』，くろしお出版，2010.11.

《論文・ブックチャプター》

野山 広
「日本の多文化化の状況と地域日本語支援活動の展開 ―持続可能な共生社会の構築に向けて―」（語学堂の50周年記念シンポジウムの招待講演内容の特別寄稿論文，日本語・韓国語両言語で掲載），『外国語としての韓国語教育 第34集　외국어로서의 한국어교육 34』，延世大学校　言語研究教育院韓国語学堂，（ISSN番号：1598-8201），pp.1-32. 2009.12.
野山 広
「群馬県太田市・大泉町の場合 日系ブラジル人就労者の言語生活と日本語教育」，『日本語学（特集 多言語社会・ニッポン）（定住外国人との共生）』（2009）28（6），pp.60-69，明治書院，2009.5.
野山 広
「地域日本語教育の展開と複言語・複文化主義」，北脇保之編『「開かれた日本」の構想 ―移民受け入れと社会統合』（シリーズ多文化・多言語主義の現在4），pp.148-181. ココ出版，2011.12.
野山 広
「国語教育，日本語教育，外国語教育との連携・協働をめぐって ―ことばの教育という観点からの課題整理と展望―」，『英語展望』NO.119（WINTER 2011）「特集 小学校外国語活動の可能性を求めて」，ELEC，pp.32-38. 2011.12.

《データベース類》

・「日本語学習者会話データベース縦断調査編」https://dbms.ninjal.ac.jp/judan_db/
・「日本語学習者会話データベース」https://dbms.ninjal.ac.jp/nknet/ndata/opi/

《その他の出版物・記事》

野山 広
「『つなぎ役』『企画役』『調整役』として」（多文化社会コーディネーターの可能性・意義・役割―各分野からの視点―），『シリーズ多言語･多文化協働実践研究別冊3「多文化社会コーディネーター」』，pp.78-82. 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター，2010.6.

【講演・口頭発表】

野山 広
「外国人生徒の日本語会話能力と言語生活の変容に関する縦断的研究 ―集住地域と分散地域の日本語学習者の事例を比較しながら―」，Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese（サンフランシスコ州立大学）2011.3.6.
野山 広，嶋田和子，當作靖彦，岩崎典子
「日本の地域における日本語教育支援の展開とオーセンティシティ」，第8回国際OPIシンポジウム，［パネルディスカッション］（米国・ポートランド州立大学）2011.8.
野山 広
「地域日本語教育専門家に必要な知識・能力に関する一考察 ―地域日本語教育の実態に関する調査報告を事例として―」，日本語教育世界大会（国際研究大会ICJLE）（中国天津大学）2011.8.20.

野山 広，嶋田和子，山辺真理子，今村圭介
「結婚移住女性の言語的特徴と日本語教育支援の在り方に関する一考察 ―散在地域における 4 年間の縦断調査結果を事例として―」，2011 年社会言語科学会第 28 回研究大会［ポスター発表］（龍谷大学）2011.9.17.

野山 広
「子どもの言語学習・就学支援と多文化社会 ―地域社会・家族・学校の役割と責任―」，韓国バイリンガリズム研究学会第 30 回記念国際大会（International Conference Commemorating the 30th Anniversary of the Korean Society of Bilingualism）（韓国・成均館＝ソンギュングァン大学校）［招待講演］2011.11.6.

野山 広
「分散地域における『外国人住民』に対する日本語支援体制構築の課題と可能性 ―OPI の枠組みを活用した縦断調査から地域社会への参加を目指して―」（浜松市 静岡文化芸術大学）2012.2.4.

【研究調査】

日本語学習者の縦断調査（日本語学習者の会話力と言語生活の実態に関する縦断調査（フォローアップ調査））

・2010.2　群馬県大泉町
・2010.3　秋田県能代市
・2010.9　秋田県能代市
・2011.2　群馬県大泉町
・2011.3　秋田県能代市
・2011.9　秋田県能代市
・2012.2　群馬県大泉町
・2012.3　秋田県能代市

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第 8 回国際 OPI シンポジウム：テーマ「日本語教育におけるオーセンティシティ」（ポートランド州立大学）（企画・運営）2011.8.
・「ウェルフェア・リングイスティクスの可能性について考える ―調査における研究者と当該コミュニティとの関係性という観点から―」，社会言語科学会第 28 回大会（企画・運営）2011.9.18.

【その他の学術的・社会的活動】

・2009 年 10 月から 2012 年 3 月までに，大学の特別講座（お茶の水女子大学，東京大学，佐賀大学，東京外国語大学），自治体・教育委員会（前橋市，豊橋市，千葉市，能代市等），国際交流協会・NPO 等（浜松市，松本市，西東京市，練馬区，広島市，札幌市）の研修等に講師として（年に 5 回～ 10 回，1 回 2 時間～ 3 時間）招聘され，研究成果の一部を活用しながら研修やワークショップを行った。

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院客員教授
連携大学院（国際交流基金・政策研究大学院大学）の修士課程の授業（2009.10 ～ 2012.3）及び博士課程の学生の指導・論文審査（主査：2012.2 ～ 3）

森　篤嗣（もり あつし）日本語教育研究・情報センター 准教授（2009.10 ～ 2011.3）

1975 生

【学位】博士（言語文化学）（大阪外国語大学，2004）

【学歴】兵庫教育大学学校教育学部初等教育教員養成課程卒業（1998），兵庫教育大学大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻修士課程修了（2000），大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程言語社会専攻修了（2004）

【職歴】チュラロンコン大学文学部東洋言語学科 専任講師（2004），実践女子大学文学部国文学科 助手（2005），独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター 研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 助教（2009），同日本語教育研究・情報センター 准教授（2010），同辞職（2011.3）

【専門領域】日本語学，日本語教育，国語教育

【所属学会】日本語文法学会，社会言語科学会，日本語教育学会，日本語学会，全国大学国語教育学会，言語科学会，日本認知言語学会，計量国語学会，国語教育史学会，関西言語学会，待遇コミュニケーション学会

【学会等の役員・委員】日本語文法学会学会誌委員（2010-2013），社会言語科学会研究大会委員（2011-）

【2009 年度～2010 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員

「社会における相互行為としての「評価」研究（リーダー：宇佐美洋）ならびに，「「生活のための日本語」の内容に関する研究（リーダー：金田智子）」に共同研究員として所属し，前者では「評価」を「社会における相互行為」と捉え直した上で，日本人と外国人との接触場面における「評価」の実態を捉える研究を，後者では定住型外国人の「生活のための日本語」を明確化・体系化し，その教育利用（教材やテスト等のシラバスデザイン）を可能とする方法について研究した。

基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」：共同研究員

日本語母語話者同士の文字コミュニケーションや，日本語母語話者と日本語非母語話者の接触場面における文字コミュニケーションについて，主に学校教育現場をテーマに研究をおこなった。

【研究業績】

《著書・編書》

森 篤嗣，牛頭哲宏

『小学生のための会話練習ワーク：ロールプレイでコミュニケーションの達人を育てる』，ココ出版，2010.3.

森山卓郎，森 篤嗣

『言語指導の方法：確かな定着と活用のために』，光村図書出版，2011.2.

《論文・ブックチャプター》

森 篤嗣

「母語話者の受験結果による日本語能力試験聴解問題の検証 ―小中高生の受験結果とアンケートからわかること―」，『言語教育評価研究』1，pp.35-46. 言語教育評価共同研究所 AELE 編集委員会（桜美林大学，国際交流基金）2009.10.

森 篤嗣

「母語話者が書いた日本語メール文」に対する非母語話者の評価 ―中国系非母語話者 3 名の質的手法によるケーススタディ」，『待遇コミュニケーション研究』7，pp.81-96. 2010.1.

森 篤嗣，豊田 誠
「日本語教育の方法を応用した話し言葉教育の試み：ロールプレイを用いた高等学校国語科の授業」，『教育実践学論集』11，pp.97-106. 2010.3.
森 篤嗣
「「まで」と「までに」の肯否体系について」，『日本語／日本語教育研究』1，pp.187-205. 2010.5.
庵 功雄，岩田一成，筒井千絵，森 篤嗣，松田真希子
「「やさしい日本語」を用いたユニバーサルコミュニケーション実現のための予備的考察」，『一橋大学国際教育センター紀要』1，pp.31-46. 2010.7.
庵 功雄，岩田一成，森 篤嗣
「「やさしい日本語」を用いた公文書の書き換え：多文化共生と日本語教育文法の接点を求めて」，『人文・自然研究』5，pp.115-139. 一橋大学，2011.3.
森 篤嗣
「職種別に見た滞日年数と言語能力の相関 ―日本語能力自己評価と言語行動可能項目数を指標として―」，『社会言語科学』13（2），pp.97-106. 2011.3.

《その他の出版物・記事》

森 篤嗣
「国語教育と日本語教育の違い」，『月刊日本語』22（12），pp.14-15. アルク，2009.12.
森 篤嗣
「コラム「日本語を母語としない子どもたちにとっての「国語」」，森山卓郎・達富洋二（編）『国語教育の新常識 ―これだけは教えたい国語力』134，明治図書，2010.3.
森山卓郎，三宅知宏，森 篤嗣
「日本語文法学会の展望「展望1 記述的研究と教育的研究」，『日本語文法』10（1），pp.131-138. 2010.3.
内海由美子，森 篤嗣
「山形県における定住アジア女性の日本語使用 ―首都圏･全国との比較から特性をみる―」，『「生活のための日本語」に関する基盤的研究 ―段階的発達の支援を目指して―＜中間報告書＞』，平成20-23年度科研費基盤研究B（課題番号14510444），pp.75-86. 2010.3.
森 篤嗣
「職業別に見た滞日年数と言語能力の相関 ―日本語能力自己評価と個人別可能項目数を指標として―」，『「生活のための日本語」に関する基盤的研究―段階的発達の支援を目指して―＜中間報告書＞』平成20-23年度科研費基盤研究B（課題番号14510444），pp.150-159. 2010.3.
森 篤嗣
「配布地域別に見た言語行動の頻度傾向 ―都市規模・人口密度・外国人登録者数・外国人集住率から―」，『「生活のための日本語」に関する基盤的研究―段階的発達の支援を目指して―＜中間報告書＞』，平成20-23年度科研費基盤研究B（課題番号14510444），pp.160-173. 2010.3.
森 篤嗣
「地域で役立つ教材～会話の中で自らを語り，生活に必要な日本語を身につけよう～「にほんごこれだけ！ 1」」，『地域日本語支援ニュース こだま』，社団法人国際日本語普及協会（AJALT）メールマガジン167，2010.7.
森 篤嗣
「コミュニケーション能力を伸ばす「タスク先行型ロールプレイ」」，『総合教育技術』65（5），pp.12-13. 小学館，2010.7.

森 篤嗣
「UD と自覚的な自己評価」,『UD 教育』(5), p.1. 長岡技術科学大学国際課, 2010.8.
森 篤嗣
「学校文法と日本語教育の文法」,『月刊日本語』23(10), pp.12-14. アルク, 2010.9.
森 篤嗣
「よくわかる日本語文法研究史」,『月刊日本語』23(10), pp.26-27. アルク, 2010.9.
森 篤嗣
「授業を支える日本語コミュニケーション」,『平成 22 年度研究のまとめ　平成 20・21・22 年度国立教育政策研究所「学力の把握に関する研究指定校事業」／平成 22 年度尾道市教育課題解決パイロット校(国語科)』p.45. 尾道市立栗原北小学校, 2011.3.

【講演・口頭発表】

庵 功雄, 岩田一成, 森 篤嗣
「「やさしい日本語」を用いた公文書の書き換え ―多文化共生と日本語教育文法の接点を求めて―」, 2009(平成 21)年度日本語教育学会秋季大会(九州大学)2009.10.11.
森 篤嗣
「国立国語研究所による日本語の平易化の取り組み」, 質の高い大学教育推進プログラム(教育 GP)「UD に立脚した工学基礎教育の再構築」講演会(長岡技術科学大学マルチメディアシステムセンター)2009.11.
森 篤嗣
「やさしい日本語による公文書の書き換え」, 第 5 回国際連携教育シンポジウム「国際連携教育とユニバーサル・デザイン」(長岡技術科学大学マルチメディアシステムセンター)2010.3.
松田真希子, 児玉茂昭, 竹元勇太, 石坂達也, 森 篤嗣, 川村よし子, 山本和英
「コーパスの異なりと単語親密度を活用した日本語共通基礎語彙の抽出」, 言語処理学会第 16 回年次大会(東京大学本郷キャンパス)2010.3.10.
森 篤嗣
「公的文書のための基本語彙」, 2010(平成 22)年度日本語教育学会春季大会(パネルセッション「日日ほんやくコンニャクプロジェクト ―「やさしい日本語」を用いたユニバーサルコミュニケーション社会実現を目指して―」)(早稲田大学)2010.5.22.
森 篤嗣
「フランス語母語話者の作文における日本語母語話者の評価 ―日本語教師と一般日本語母語話者による全体評価と部分評価の相関から―」, 第 11 回フランス日本語教育シンポジウム(インサ工科大学リヨン校)2010.5.28.
岩田一成, 森 篤嗣
「初級を軽くする ―使役に関する考察―」, 2010 年世界日本語教育大会(台湾国立政治大学)2010.8.1.
野原ゆかり, 吉田さち, 森 篤嗣, 宇佐美洋
「「日本語学習者による日本語／母語発話の対照言語データベース」へのタグ付け ―コミュニケーション研究に対する多様な応用のために―」, 第 26 回社会言語科学会研究大会(ポスター発表)(大阪大学)2010.9.5.
吉田さち, 野原ゆかり, 森 篤嗣, 宇佐美洋
「「生活場面で必要となる日本語書きことば」データに対するコミュニケーション機能の付与

―4種類の交渉場面に関する文章を対象として―」，第26回社会言語科学会研究大会（ポスター発表）（大阪大学）2010.9.5.

森 篤嗣

「言語使用調査による日本語教育文法研究 ―着点を表す助詞「に」と「へ」を例にして―」，日本語文法学会第11回大会（パネルセッション「日本語教育文法研究のための多様なアプローチ」）（就実大学）2010.11.7.

宇佐美洋，森 篤嗣，野原ゆかり，吉田さち

「外国人の日本語話しことばに対する日本人評価の多様性を探る」，The Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese（ICPLJ7）（サンフランシスコ州立大学）2011.3.6.

森 篤嗣，バトラー後藤裕子

「授業場面における教室内コミュニケーションでの言語形式と発話意図のギャップについて」，The Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese（ICPLJ7）（サンフランシスコ州立大学）2011.3.6.

森 篤嗣

「書き換えによる頻度差情報を用いた公的文書基本語彙の序列化」，公開シンポジウム「やさしい日本語」研究の展開，2011.3.13.

【その他の学術的・社会的活動】

森 篤嗣

「フォローアップ・インタビューとは」，尾道市立栗原北小学校校内授業研究会（尾道市立栗原北小学校）2009.12.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

政策研究大学院大学 特定課題研究演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　2009.10 ～ 2010.9.

日本大学 総合科学研究所日本語講座 上級読解　2009.10 ～ 2010.3.

島村　直己（しまむら なおみ）日本語教育研究・情報センター 上級研究員

1952 生

【学位】修士（教育学）（東京教育大学，1978）

【学歴】東京教育大学教育学部卒業（1976），東京教育大学大学院教育学研究科修士課程教育学専攻修了（1978），筑波大学大学院教育学研究科博士課程教育学専攻中退（1978）

【職歴】国立国語研究所言語教育研究部第一研究室研究員（1978），同 主任研究官（1987），同 室長（1988），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員（2001），同 日本語教育基盤情報センター 主任研究員（2007），人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター上級研究員（2009）

【専門領域】言語教育

【所属学会】全国大学国語教育学会，日本語学会，日本読書学会，日本教育心理学会

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

基本度 501 位～ 1000 位までの語彙の意味記述を行った。小・中学生の語彙力の調査を行った。近代日本人のリテラシーの記述的研究を行った。

リテラシー研究の副産物として，「近代学校と寺子屋 ―文字教育を中心に―」という小論をまとめて NINJAL サロンで発表を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

島村直己

「世界のリテラシー」，『人文科教育研究』37，pp.1-6. 人文科教育学会（筑波大学教育学系人文科教育学研究室内）2010.8.

【編集追記】在職中の研究成果は，のちに以下にまとめられた。

島村直己，佐藤亮一，正保 勇，飛田良文

『日本語基本語辞典 ―基本 1001 位～1500 位―（試行版）』，2013.1.

金田　智子（かねだ ともこ）日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009.10 ～ 2010.3）

1960 生

【学位】修士（文学）（コロンビア大学，1996），修士（教育学）（コロンビア大学，1997）

【学歴】広島大学教育学部教育学科卒業（1983），広島大学大学院教育学研究科博士課程前期教育行政学専攻中退（1986），コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ Languages, Literature and Social Studies-TESOL 卒業（1997）

【職歴】インディアナ州リッチモンド市アーラム大学 講師（1997-1998），広島大学留学生センター 講師（1998），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門 主任研究員（2001），同 日本語教育基盤情報センター グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009），同 辞職（2010.3）

福永　由佳（ふくなが ゆか）日本語教育研究・情報センター 研究員

【学位】修士（日本語教育）（ウィスコンシン大学，1993）

【学歴】金沢女子大学文学部英米文学科卒業（1991），ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了（1993）

【職歴】国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員（2009）

【専門領域】日本語教育学，社会言語学，リテラシー，個人・社会の多言語性

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，移民政策学会，日本質的心理学会

【2009 年度～2011 年度の研究成果の概要】

「日本語教育・学習に資する研究」：共同研究員（2009 年度）

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員（2010 年 4 月～）

在日外国人を，日本語を含む多言語の使用者として再定義し，彼らの言語選択と社会文化的・心理的要因との関連を明らかにするために，まず社会言語学，第二言語習得，バイリンガリズムを中心とした関連する言語（教育）の先行研究を精査しデータベース作成に着手した。また，既存調査データの再分析を行い，在日外国人の言語使用の特徴について統計的な分析に着手した。さらに，言語使用者として在日パキスタン人コミュニティに着目し，言語使用と彼らの言語的・社会的背景に関してエスノメソドロジーによる研究を進めた。これらの成果は，「滞日パキスタン労働者の生活と日本語使用 ―日系ブラジル人労働者との比較から―」（7th International Conference on Practical Linguistics of Japanese，2011 年 3 月），「滞日パキスタン人の社会生活と言語使用 ―少数派南アジア移住者の言語生活―」（日本語教育研究・情報センター公開シンポジウム「多文化共生社会における日本語教育研究」, 2012 年 2 月），「富山在住パキスタン人住民の日本語使用と学習ニーズ ―「生活のための日本語」全国調査からわかること」（「移民コミュニティの言語生活研究会」第 1 回, 2011 年 3 月）等で発表した。

【研究業績】

《その他の出版物・記事》

福永由佳

「仕事を通じ外国人理解 ―共生をテーマに研究会」，北日本新聞 18 面，2012.3.20.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「在日外国人住民の言語事情と社会参加 ―「生活のための日本語」全国調査と日本語教育支援の動向―」，日本の移民コミュニティと移民言語研究会（国立民族学博物館）［招待講演］2011.2.

福永由佳，中河和子

「富山在住パキスタン人住民の日本語使用と学習ニーズ ―「生活のための日本語」全国調査からわかること」，移民コミュニティの言語生活研究会第 1 回研究発表会（環日本海交流会館）2011.3.

福永由佳

「滞日パキスタン労働者の生活と日本語使用 ―日系ブラジル人労働者との比較から」，7th International Conference on Practical Linguistics of Japanese（サンフランシスコ州立大学）2011.3.

福永由佳

「言語教育と「社会参加」―日本と米国の言語教育政策からみえるもの―」,「市民社会による移住者コミュニティ受容の日韓比較：人間安全保障の観点から」研究会（大阪経済法科大学）［招待講演］2011.6.

福永由佳，矢部まゆみ

「言語教育と「社会参加」―米国の成人教育スタンダード（EFF）における「リテラシー」と「社会参加」の概念分析から―」, 2011 年度日本語教育学会秋季大会（米子コンベンションセンター）2011.10.

福永由佳

「コミュニケーション能力重視の会話授業」，霞山会日本語教師訪問団（国立国語研究所）［招待講演］2011.11.

福永由佳

「言語教育が築き上げる「社会参加リテラシー」―米国の成人言語教育の内容とリテラシーの定義の分析から―」，早稲田大学大学院日本語教育研究科［招待講演］2011.12.

福永由佳

「アメリカにおける成人識字教育の仕組みと動向 ―EFF の開発とその後―」，神奈川大学言語政策公開研究会：移民の人権と言語教育（神奈川大学）［招待講演］2012.3.

【研究調査】

「日本語教育・学習に資する研究」

・2009.12.7, 12.15, 2010.1.20, 2.1

千葉市立高浜第一小学校・千葉市立高浜中学校：外国人児童生徒に対する日本語支援や外国人児童生徒の保護者とのコミュニケーションに関するインタビュー調査

・2009.12.14, 12.25

千葉南公共職業安定所・千葉公共職業安定所：外国人利用者とのコミュニケーションに関するインタビュー調査

・2010.1.24, 1.30

稲浜公民館：外国人就労者のコミュニケーションに関するインタビュー調査

・2010.2.8

イオンリテール（株）マリンピア店：外国人就労者のコミュニケーションに関するインタビュー調査

・2010.2.10, 2.19, 2.25

ホテルニューオータニ幕張：外国人就労者とのコミュニケーションに関するインタビュー調査

「多文化共生社会における日本語教育研究」

・2010.8.10

富山県射水市：パキスタン人集住地域に関する情報収集

・2011.11.21-22

射水市国際交流協会：パキスタン人住民との地域社会との関係及び日本語支援の状況等に関する情報収集

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・日本語教育研究・情報センター共同研究プロジェクト 公開シンポジウム「多文化共生社会における日本語教育研究」（企画・運営）2012.2.

【その他の学術的・社会的活動】

・第１回移民コミュニティの言語生活研究会（代表：福永由佳，トヤマヤポニカとの共催）（環日本海交流会館）（企画・運営）2011.3.24.

V

資　料

V 資　料

1 国立国語研究所の発足に関する巻末資料

―大学共同利用機関への移管と，移管後２年目の検証―

国立国語研究所は，2009（平成 21）年 10 月 1 日に，「独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律」により，大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移管された。

大学共同利用機関法人人間文化研究機構への移管の経緯

2007（平成 19）年 12 月 24 日

「独立行政法人整理合理化計画」が閣議決定され，国立国語研究所は組織形態を見直し，大学共同利用機関法人に移管されることとなった。

2008（平成 20）年 1 月 31 日

国語に関する学術研究の研究体制・研究組織の今後の在り方や国による支援の在り方などの検討を行うため，科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会の下に「国語に関する学術研究の推進に関する委員会」が設置された。

2008（平成 20）年 7 月 7 日　**※資料 1**

科学技術・学術審議会学術分科会による「国語に関する学術研究の推進について」（委員会報告）において，各大学に散在している学術資料を収集，整理，提供する必要性，各大学に在籍している研究者の持つ知見を集積する必要性，多彩な分野にわたる国語に関する学術研究について，分野間の研究交流を活性化する必要性などから，国語に関する学術研究を推進するための中核的研究機関としての機能を持った大学共同利用機関を設置することが必要であり，国立国語研究所は，もっとも関連の深い人間文化研究機構に設置されることが望ましい，とされた。

2009（平成 21）年 3 月 31 日　**※資料 2**

「独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律（平成 21 年法律第 18 号）」（独法改革法）が成立した。

2009（平成 21）年 4 月 1 日

人間文化研究機構内に国立国語研究所設置準備室を設置し，移管後の組織体制，研究計画，職員の移行及び処遇等の検討・準備を行った。

2009（平成 21）年 10 月 1 日

独立行政法人国立国語研究所は「解散」し，国立大学法人法第 2 条に定める大学共同利用機関法人人間文化研究機構がその権利及び義務を「承継」した。国立大学法人法施行規則に係る文部科学省令により，人間文化研究機構国立国語研究所が発足した。

資料１

「国語に関する学術研究の推進について」報告

平成 20 年 7 月 7 日

科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会
国語に関する学術研究の推進に関する委員会

１．はじめに

国語は，長い歴史の中で形成されてきた我が国の文化の基盤を成すものであり，文化そのものでもある。また，知識の獲得や論理的な思考などを支える，知的活動の基盤である。国語は，人文・社会科学，自然科学を問わず，様々な分野の学術研究の発展のためにも不可欠なものである。なお，国語は「我が国において最も一般的に使われている言語」のことであって，すなわち日本語が我が国の国語である。（注）

また，平成 16 年 2 月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」に述べられているように，母語としての国語の力という意味で，国語力の向上が求められている。国語に関する書籍が数多く出版されたり，テレビ番組において言葉の使い方が採り上げられたりしていることは，社会の国語力に対する関心の高さを示すものと考えられる。また，初等中等教育においても，知的活動やコミュニケーション，感性･情緒の基盤として，国語科を中心に言語活動の充実が図られている。

さらに，平成 19 年 2 月の文化審議会答申「文化芸術の振興に関する基本的な方針の見直しについて」等においては，文化の基盤としての国語の重要性を踏まえ，個々人はもとより，社会全体としてその重要性を認識し，国語に対する理解を深め，生涯を通じて国語力を身に付けていく観点から，大学等における国語に関する調査研究の充実を図ることが求められている。

一方，国語に関する学術研究は，現在，各大学等において行われているが，研究成果や学術資料の共有や研究者の養成，全国の大学等の研究者による共同研究の推進等が求められている。

これらの状況を踏まえ，国語に関する学術研究のさらなる推進のための方策や研究体制について検討するため，平成 20 年 1 月に，学術分科会学術研究推進部会のもとに「国語に関する学術研究の推進に関する委員会」が設置された。本委員会は，以後，鋭意審議を行い，今回，国語に関する学術研究の推進について，報告として取りまとめるに至った。

（注）「日本語」とは，「国語」を世界の諸言語の一つとして，例えば英語や中国語などと対比して客観的にとらえて表し得る用語である。国民一般にとっては，日常生活などにおいて「国語」の用語が定着しており，法令等においても特別な定義を添えずに用いられているところである。

２．我が国の国語に関する学術研究の現状と課題

我が国の国語に関する学術研究は，現在，大学の関係学部・研究科を中心に，言語の研究としての観点から，文字・表記，音声・音韻，語彙・意味，文法，文章・談話，敬語，言語行動，方言など多

くの分野にわたって行われている。その方法としては，文献等の研究や，フィールドワーク等がある。その課題としては，次のようなことが挙げられる。

① 研究成果や学術資料の共有の必要性

国語に関する学術研究は，大学等に在籍する個々の研究者が，各々の興味関心に基づき行うものが多く，共同研究による研究の知見の共有が行われにくい。このため，分野の細分化が進み，学問の体系化が不十分であるとの指摘もある。

また，得られた研究成果や学術資料等が各国公私立大学の各研究室に散在し，それらの資料等が研究者の退職に伴い消失している状況も見られる。

② 国語に関する研究者の養成

近年，国語に関する学術研究に従事しようとする学生が少なくなっていることが指摘されている。その理由としては，国語に関する学術研究に従事しても，就職先が少なく，知識や経験が将来活かされるかどうか不安であることなど，自分の将来像が見えにくいことが考えられる。

また，研究成果などの情報発信が積極的に行われておらず，学生にとって魅力ある学問となっていないことも課題として指摘されている。

さらに，先に述べたように，分野の細分化が進んだ結果，学術研究の成果が十分に体系化されず，大学教育に活かされていないことも課題である。

このような課題を踏まえ，各大学の枠を越え，大学等の関係機関が一体となって，国語に関する学術研究をさらに推進することが必要である。

3．国語に関する学術研究の推進に当たっての当面の重点課題

(1) 当面，特に重点を置いて推進する必要のある研究分野

国語に関しては，これまで，文字・表記，音声・音韻，方言等，多彩な分野にわたり，書籍や新聞等における書き言葉の収集や話し言葉の聴き取り調査など，これらの言語資源を基礎としたコーパス（言語研究用に作られたデータベースのことで，体系的に収集され，研究用の情報を付加された言語資料）の構築や言葉の多様な使用実態の継続的な把握などが行われてきた。これらは，国語に関する学術研究の基盤となるものであり，さらに推進することが必要である。

他方，収集されたこれらの言語資源の分析や分析結果から普遍的な法則を発見し，それをさらに検証するなどの理論研究は，十分に行われておらず，今後，各分野にわたってこのような理論研究を推進することが不可欠である。

また，国語が我が国の文化の基盤であることを踏まえ，現代の国語について，これまでどのような歴史的変化を遂げてきたか，地域的，社会的にどのような変異があるかについての研究も必要であり，これらの基盤となる資料の収集やデータベースの構築等が求められる。

さらに，近年，自然科学分野を含めた関連分野との共同研究の重要性が高まっている。言語情報処理研究や言語習得研究など，新たな学際的研究の発展の観点を踏まえた推進も重要である。

加えて，我が国の文化の基盤である国語について，その特質と普遍性とを明らかにするため，国際的な研究協力を推進しつつ，他の諸言語との対照研究を行うことも重要である。

(2) 特に，新たに展開する必要のある研究形態・方法

我が国における国語に関する学術研究は，これまで，個人による研究が主体であるとともに，分野

が細分化されたために，個々の研究者や研究分野の研究の視点や手法，成果が共有されにくい状況が見られた。今後は，個々の研究者や研究分野の知見を共有し，既存の成果の検証や新たな法則の発見等を推進することにより，学問体系全体としてさらなる発展を図るため，全国の大学等の研究者による共同研究を推進することが必要である。

このため，国語に関する学術研究論文を含めた学術資料等の収集をさらに進めるとともに，情報技術を活用し，これらの学術情報が簡便に入手できるような基盤整備が必要である。また，全国の研究者に開かれた共同研究の場を作ることも必要である。

なお，共同研究の推進に際しては，新たな学際的研究の発展を視野に入れて推進することが重要である。このため，例えば，情報工学や認知科学など関連分野の研究者が積極的に共同研究に参画できるようにするための仕組みの整備が求められる。

４．国語に関する学術研究の体制

(1) 大学共同利用機関の必要性

① 大学共同利用機関の必要性

国語は，我が国の文化の基盤を成すものであり，知識の獲得や理論的な思考などを支える知的活動の基盤である。我が国の文化や学問の発展のため，現在，各大学等において行われている国語に関する学術研究の一層の充実を図ることが求められる。

我が国における国語に関する学術研究においては，全国の大学等に在籍する研究者個人による研究成果が，研究者コミュニティ全体に共有されにくく，また，研究者が多数の大学に散在していることもあり，研究に必要な学術資料等も全国の国公私立大学に広く散在している。今後，全国の大学等の研究者による共同研究を推進していくに当たっては，これらの学術資料を収集，整理，研究，提供するとともに，研究者コミュニティの持つ知見を集積し，各分野における共同研究の場となる中核的な機関が必要である。

また，国語に関する学術研究の基盤となるデータベースの構築や，方言に関する調査研究など全国的に展開する必要のある大規模な調査研究を円滑かつ継続的に行うためにも，中核的な機関が必要である。さらに，現在，国語に関する学術研究は多彩な分野にわたっており，各々に関する学会が存在するが，これらの間の組織的な研究交流は必ずしも積極的に行われているとは言えない。今後，このような既存の分野間の研究交流を活性化することにより，国語に関する学術研究全体を体系化するとともに，新たな学際的分野を創成していくためにも，研究者コミュニティ全体の意向を踏まえて共同研究を推進するための機関が求められる。

さらに，その機関は国内のみならず，海外の日本語研究者に対しても，研究の方法等に適切な方向性を示し，世界的な日本語研究の中核となることが期待される。

加えて，これまで，大学の研究は，言語の研究としての観点から行われてきたが，これにとどまらず，国語が我が国の文化の基盤をなすものであることを踏まえ，例えば，他国の文化との比較対照など多様な観点からの研究が行われ，海外にも積極的に発信されることが求められる。

このため，国語に関する学術研究を推進するための中核的研究機関としての機能を持った大学共同利用機関を整備することが必要である。

② 大学共同利用機関の設置の在り方

人間の文化活動並びに人間と社会及び自然との関係に関する学術研究を担う大学共同利用機関法人として，現在，人間文化研究機構がある。文化の基盤である国語に関する学術研究については，現在

存在する４つの大学共同利用機関法人のうち，同機構が最も関連の深い法人であると考えられる。したがって，大学共同利用機関の整備に当たっては，人間文化研究機構における検討を踏まえ，同機構の下に設置されることが望ましい。

また，国語に関する調査研究を行う機関としては，現在，独立行政法人国立国語研究所がある。同研究所は，これまで，「言語データベース KOTONOHA」の構築や，「方言文法全国地図」の作成など，大規模な調査研究に関する経験と成果とを蓄積している。これらをさらに大学における学術研究に活かす観点から，大学共同利用機関の整備に当たっては，同研究所を大学共同利用機関に改組・転換することが適当である。人間文化研究機構においては，後述の基本的考え方を基に，ふさわしい運営体制及び研究組織を早急に構築することが求められる。その際，同研究所がこれまで行ってきたコーパスの構築や方言に関する調査研究等を，新しい大学共同利用機関においても大学の研究者や国民等の協力を得ながら円滑に行うなどの観点から，新しい大学共同利用機関の名称については，当面，「国立国語研究所」を引き継ぐことが適当である。

なお，これまで独立行政法人国立国語研究所においては，日本語教育情報資料の作成・提供に係る事業が行われてきた。新しい大学共同利用機関においても，日本語教育の基盤となるデータの収集，整理，研究等を通じて，日本語教育に一定の貢献を行うことが望まれるが，現在も，多くの大学において，日本語教育に関する研究・教育が行われているところであり，大学との役割分担に留意する必要がある。また，日本語教育に係る基準等の開発や，資料の作成・提供等の事業については，政策上の必要性の観点から，その実施主体・方法等について，委託研究による推進なども含めて，別途検討を行うことが望ましい。

(2) 大学の役割と大学共同利用機関との連携

国語は日本文化の基盤であると同時に，知識の獲得や論理的な思考などを支える，知的活動の基盤である。また，国語は，自然科学の分野を含め，様々な学問の基盤でもある。

このような国語の重要性を踏まえ，これに関する学術研究が，大学・大学共同利用機関とが一体となって進められることが必要である。このことは，研究者の養成においても同様である。

このため，各大学においては，国語に関する学術研究が安定的・継続的に行われるよう，研究者の養成・確保や，研究環境の整備が求められる。また，各大学の研究者や研究組織が，新しく整備される大学共同利用機関を中心としてネットワークを構築し，連携を深めていくことも重要である。

さらに，国語に関する学術研究の成果が，自然科学系や教員養成系の学部等を含め，大学教育全般に活かされることが求められる。

５．新しい大学共同利用機関の組織整備の基本的考え方

これまで述べてきたことを踏まえ，次のような考え方を基本とし，国語に関する新しい大学共同利用機関の組織を整備することが適当である。

(1) 基本方針

① 我が国の国語である日本語を世界の諸言語の中に位置付け，その特質と普遍性の研究を推進する国際的研究拠点とする。
② 現代日本語研究を中核とし，歴史研究を含む言語研究諸領域を包括する。
③ 日本語以外の言語研究や関連する分野との共同研究の推進を図る。

④　大学を中心とする国内外の日本語研究者に開かれた協業の場として，組織，運営する。

(2) 研究領域

新しい大学共同利用機関においては，次のような領域の研究を行うことが適当である。また，これらの領域を超えた学際的研究や，特定の課題に機動的に取り組むプロジェクト研究が積極的に行われることが望ましい。

①　理論・構造研究（文字・表記，音声・音韻，語彙・意味，文法など）
②　空間的変異研究（方言など）
③　時間的変異研究（歴史など）
④　言語資源研究（コーパスの構築など）

(3) 主要事業

①　日本語研究に関する資料・文献の収集，研究，整理，提供
②　日本語研究の重要課題に関する共同研究の推進
③　日本語研究に関する国際交流・連携の強化・推進
④　国内外の日本語研究情報の集積，発信

(4) 組織・運営

大学共同利用機関としての機能を十分発揮できるようにするため，特に次の点に留意することが求められる。

①　運営会議の重視

研究者コミュニティの意見を基礎とした，運営を確保するため，外部研究者が過半数を占める運営会議において，事業の基本計画，所長・研究者人事等を審議し，その結果を尊重することが求められる。

②　柔軟な研究組織の形成

事業目的に即した柔軟な研究組織を形成するため，任期制の導入，内外研究者の客員教授採用，プロジェクト参加の年俸制研究者雇用等の方策を講ずることが望ましい。

③　大学院教育への協力

総合研究大学院大学の基盤機関となるなど，大学院教育に積極的に協力する。

資料２

独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省学術関係法律の整備等に関する法律（抄）

（国語に関する調査研究等の維持及び充実のための措置）

第十四条　国は，国立国語研究所において行われていた国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育に関する科学的な調査及び研究並びにこれに基づく資料の作成及びその公表等（以下「国語に関する調査研究等」という。）の業務が，人間文化研究機構において引き続き維持され，及び充実されるよう，必要な措置を講じなければならない。

資料３

（検討）

第十五条　国は，国語に関する調査研究等の業務の重要性を踏まえ，当該業務の人間文化研究機構への移管後二年を目途として当該業務を担う組織及び当該業務の在り方について検討を加え，その結果に基づいて所要の措置を講ずるものとする。

［衆議院］

独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律案に対する附帯決議

※平成 21 年 3 月 18 日衆議院文部科学委員会

政府及び関係者は，本法の施行に当たり，次の事項について特段の配慮をすべきである。

三　国立国語研究所の大学共同利用機関法人人間文化研究機構への移管に当たっては，これまで担ってきた日本語教育事業の重要性に鑑み，引き続き日本語教育事業を主体的に担っていくための十分な財源措置及び人的配置を行うものとすること。また，移管後の国立国語研究所に，日本語教育事業を担当する部門を設置し，さらなる充実を図るとともに，新たな中期計画に日本語教育事業の質の向上を図るための措置を盛り込むこと。

四　国立国語研究所が担ってきた国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育の調査研究の重要性に鑑み，学術研究の中核機関として共同研究の活性化を図るとともに，引き続き，国語政策への貢献と外国人に対する日本語教育の振興という観点からの基盤的な調査研究，必要な研究課題の設定・実施，その成果の活用が図られるよう努めること。さらに，将来的には国の機関とすることを含めて組織の在り方を抜本的に検討すること。

［参議院］

独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律案に対する附帯決議

※平成 21 年 3 月 30 日参議院文教科学委員会

政府及び関係者は，本法の施行に当たり，次の事項について特段の配慮をすべきである。

三，独立行政法人国立国語研究所の大学共同利用機関法人人間文化研究機構への移管に当たっては，これまで担ってきた日本語教育研究及び関連する事業等の重要性にかんがみ，引き続き当該研究や事業等を主体的に担っていくための十分な財源措置及び人的配置を行うものとすること。また，同研究所に，大学共同利用機関の特性に配慮しつつ，当該研究や事業等を担当する部門を設置し，更なる充実を図るとともに，新たな中期計画にその質の向上を図るための措置を盛り込むこと。

四，移管後の国立国語研究所においても日本語教育データベースの更新，既存の研究開発や研究者ネットワークの継続等に支障を来さないよう，大学共同利用機関の特性に配慮しつつ，研究職にある者を適切に移籍させるとともに，適正な手続に基づき処遇すること。

五，独立行政法人国立国語研究所が担ってきた国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育の調査研究の重要性にかんがみ，学術研究の中核機関として共同研究の活性化を図るとともに，

引き続き，国語政策への貢献と外国人に対する日本語教育の振興という観点からの基盤的な調査研究，必要な研究課題の設定・実施，その成果の活用が図られるよう努めること。さらに，将来的には国の機関とすることを含めて組織の在り方を抜本的に検討すること。

資料４

国立国語研究所組織・業務調査委員会設置要項

平成 23 年 5 月 24 日
人間文化研究機構長裁定

（趣旨）

第１条 「独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律」附則第 15 条の規定に基づき国が行う検討に資するため，人間文化研究機構（以下「機構」という。）として国立国語研究所における調査研究等の業務・組織について検証し，検証結果を報告することを求める文部科学省の依頼に応えて必要な調査検証を行うため，この要項に定めるところにより，機構に「国立国語研究所組織・業務調査委員会」を設置する。

（組織）

第２条　委員会は，次に掲げる委員で組織する。

（１）人間文化研究機構長（以下「機構長」という。）が指名する理事　１名

（２）国立国語研究所長

（３）機構長が指名する機構の大学共同利用機関の長　１名

（４）機構の役員及び職員以外の学識経験者　４名

２　前項第４号の委員は，機構長が委嘱する。

（任期）

第３条　前条の委員の任期は，平成 23 年 5 月 24 日から平成 23 年 10 月 31 日までとする。

（調査・検証内容）

第４条　独立行政法人国立国語研究所（以下「旧研究所」という。）の業務・組織と対比して，大学共同利用機関国立国語研究所における業務及び同業務を担う組織について，それが大学共同利用機関にふさわしいものとなっているかについて調査・分析を行い，特に，国語に関する調査研究等にかかわる旧研究所の関連業務・組織を大学共同利用機関として適切に継承しているかを検証する。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き，第２条第１項第１号の理事をもって充てる。

２　委員長は，委員会を招集し主催する。

３　委員長は，委員会の検証内容について機構長に報告するものとする。

（議事）

第６条　委員会は，過半数の委員の出席がなければ，議事を開くことができない。

（意見の聴取等）

第７条　委員長は，必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

（作業部会）

第８条　委員長は，必要に応じて，委員会の下部組織として作業部会を設けることができる。

（庶務）

第９条　委員会の庶務は，機構本部事務局総務課及び国立国語研究所管理部総務課において処理する。

（その他）
第 10 条　この要項に定めるもののほか，必要な事項は，機構長が別に定める。

附則
この要項は，平成 23 年 5 月 24 日から施行する。

人間文化研究機構国立国語研究所組織・業務調査委員会委員名簿

今西 祐一郎　　人間文化研究機構国文学研究資料館館長〈専門：日本文学〉
影山 太郎　　人間文化研究機構国立国語研究所所長〈専門：言語学〉
工藤 眞由美　　大阪大学大学院文学研究科教授〈専門：日本語学（方言）〉
庄垣内 正弘　　京都大学名誉教授，京都産業大学文化学部客員教授〈専門：言語学〉
中尾 正義〔委員長〕人間文化研究機構理事〈専門：地球環境学〉
廣瀬 正宜　　名古屋外国語大学外国語学部教授〈専門：日本語教育学・言語学〉
宮崎 恒二　　東京外国語大学理事〈専門：人類学〉

人間文化研究機構国立国語研究所組織・業務調査委員会 作業部会メンバー名簿

相澤 正夫　　国立国語研究所 副所長／時空間変異研究系教授
前川 喜久雄　　国立国語研究所 言語資源研究系長・教授／コーパス開発センター長
横山 詔一　　国立国語研究所 理論・構造研究系教授／研究情報資料センター長
野山 広　　国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター准教授

人間文化研究機構国立国語研究所組織・業務調査委員会審議日程等

2011.5.12
文部科学省から，人間文化研究機構長あてに，国立国語研究所における移管後の業務等の検証について依頼。
2011.5.24
人間文化研究機構長裁定により，「国立国語研究所組織・業務調査委員会」を設置。
2011.6.3
国立国語研究所組織･業務調査委員会（第 1 回）を，人間文化研究機構本部において開催。調査･検証の基本方針及び調査・検証項目について議論。国立国語研究所の現状について聴取。
2011.6.13
人間文化研究機構経営協議会で進捗状況等を報告。
2011.6.14
国立国語研究所において組織・業務調査委員会作業部会（第 1 回）を開催。
2011.6.21
組織・業務調査委員会作業部会（第 2 回）を開催。
2011.6.23
人間文化研究機構教育研究評議会で進捗状況等を報告。
2011.6.24
組織・業務調査委員会（第 2 回）を，国立国語研究所において開催。
国立国語研究所の現地視察の後，調査・検証項目ごとに個別に協議。

（報告書作成にあたっては，メール審議にて行うこととなった。）

2011.7.8 ～ 7.25

調査・検証の報告（案）について，メールにより協議。

※各委員の意見を踏まえ，委員長が報告書を取りまとめ。

※国立国語研究所組織・業務調査委員会委員長から機構長に，「国立国語研究所の調査・検証について」報告。

組織・業務調査委員会の報告書（抜粋・要約）

●調査・検証事項

独立行政法人と大学共同利用機関法人は，法律上，目的及び性格を異にしているため，附則第十四条で求められている，旧国語研から新国語研への業務引き継ぎについて調査・検証する際には，新国語研の大学共同利用機関としての特性に配慮した検討が必要となった。大学共同利用機関における研究活動は「大学における学術研究の発展等に資するため」（国立大学法人法第 2 条第 4 項）であるから，旧国語研からの業務の承継についても，研究者コミュニティの意向や最近の研究動向を踏まえつつ主体性を持って行い，以下の 1）～ 6）の項目に沿って，調査・検証を行った。

1）資料・情報の収集・整理・発信等
2）調査研究の推進
3）国際交流・連携活動
4）大学院教育等若手研究者の育成
5）社会への貢献等
6）組織・予算等

●検証結果

新国語研の活動は，旧国語研のデータベースや業務を大学共同利用機関として適正かつ発展的に承継するとともに，「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」というテーマに研究所全体として取り組み，旧国語研では行われていなかった日本語の〈理論・構造研究〉，〈時間的変異研究〉，及び〈他の諸言語との対照研究〉の分野を含んで活発な共同研究が行われるようになったことは，大学共同利用機関として新国語研が〈現代日本語研究を中核とし，歴史研究を含む言語研究領域を包括する〉役割を十分に果たしているものと思われる。また，日本語教育研究分野についても，従来の研究内容を承継するとともに，社会言語学や心理言語学，コーパス言語学等の幅広い学問領域と連携を保つことが，当該分野の一層の発展に寄与するものと考えられる。このことは，〈全国の大学等の研究者による共同研究を推進〉するのみならず，新たに 100 億語を対象とするコーパスの開発に取り組むなど，〈大規模な調査研究を行う中核的機関〉としての役割を担うとともに，〈海外の日本語研究者に対しても研究の方法等に方向性を示し得る学術研究機関〉としての役割を果たしていると考えられる。すなわち〈国内外の日本語研究者に開かれた協業の場〉を提供していることは，大学共同利用機関として適切であると考えられる。さらに大学共同利用機関法人傘下の大学共同利用機関としての利点を生かし，〈文化の研究としての観点からわが国の国語をとらえる研究〉を開始するなど，学際的研究も積極的に実施している。

また，「NINJAL チュートリアル」や PD フェローの採用を通して大学院生を含む若手研究者の育成に対して貢献している。

さらに，研究成果を一般国民に積極的に還元するとともに，政策に対しても一定の貢献を行っている。

研究系については，「分科会報告」を受けて適切な組織となっているとともに，センターとして日本語教育研究･情報センター，コーパス開発センター，研究資料情報センターを設置することにより，研究活動と社会との連携を図る体制が整備されている。予算についても，緊縮財政下において相応の予算が計上されている。

このように，新国語研は，大学共同利用機関として〈国際研究拠点として，日本語を世界諸言語の中に位置付け〉，〈日本語以外の言語研究や関連する分野との共同研究を推進〉する業務を十分に実施していると評価できる。

資料５

国語に関する調査研究等の業務及びこれらを担う組織の在り方についての検討結果

独法改革法附則第 15 条では，国語研の移管後２年を目途として国語に関する調査研究等の業務及びこれらを担う組織の在り方について検討を加え，その結果に基づいて所要の措置を講ずることを国に求めているため，平成 23 年９月に，科学技術･学術審議会学術分科会研究環境基盤部会の下に「国語に関する学術研究の推進に関する作業部会」，あわせて国語政策及び日本語教育政策の観点から国語研について検討を行うために，文化審議会国語分科会の下に「国語研究等小委員会」が設置され，合同で会議を開催するなど，両者の緊密な連携が図られた。

作業部会，小委員会における検討に先立って，人間文化研究機構が設置した外部有識者を含む国立国語研究所組織・業務調査委員会が平成 23 年７月にとりまとめた「国立国語研究所の組織・業務に関する調査・検証結果」が重要な資料となり，次の検討結果が報告された。

平成 24 年２月 29 日

国立国語研究所の業務及びこれを担う組織の在り方に関する検討について

科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会
国語に関する学術研究の推進に関する作業部会
文化審議会国語分科会
国語研究等小委員会

「独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律」附則第 15 条において，「国は，国語に関する調査研究等の業務の重要性等を踏まえ，当該業務の人間文化研究機構への移管後二年を目途として当該業務を担う組織及び当該業務の在り方について検討を加え，その結果に基づいて所要の措置を講ずる」こととされている。

これを受け，昨年９月，科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会の下に「国語に関する学術研究の推進に関する作業部会」を，文化審議会国語分科会の下に「国語研究等小委員会」をそれぞれ設置し，両委員会合同の会議も開催しつつ議論を重ね，このたび検討結果を取りまとめた。

国語に関する学術研究の推進に関する作業部会においては，「移管後２年間の国語研において，委員会報告（※）及び独法改革法附則第 14 条等を反映した形で，組織の整備を図り，多様な業務を着実に実施している」，「国語研の在り方について，国語に関する学術研究の中核である大学共同利用機関として適切なものである」等との結論に至った。

また，国語研究等小委員会においては，「移管後も，旧国語研において行われていた国語に関する調査研究等の業務が承継して実施されており，その成果は国語政策・日本語教育政策の企画立案・推進の観点から必要に応じ，国において適切に活用されていると認められ，また今後も活用されることが期待される」，「国語に関する調査研究等の業務を実施するために必要な連携が，当該業務を担う国，国立国語研究所，大学等研究機関・団体の間で適切に図られている」等との結論に至った。

さらに，両委員会より，大学共同利用機関である国立国語研究所の今後の機能強化等について，幾つか提言を行っている。

今後，人間文化研究機構及び国立国語研究所において，両委員会報告を十分に踏まえ，国語に関する調査研究等の業務の更なる充実と組織の強化に取り組むことを期待したい。あわせて，国においても，財源の確保など積極的な支援を期待したい。

※「国語に関する学術研究の推進について」（平成 20 年７月国語に関する学術研究の推進に関する委員会報告）

科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会
国語に関する学術研究の推進に関する作業部会　委員名簿

（臨時委員）
◎樺山 紘一　　印刷博物館館長
　北川 源四郎　情報・システム研究機構長
（専門委員）
　飯野 雅子　　津田塾大学長
　上野 善道　　国立国語研究所客員教授，東京大学名誉教授
　尾崎 明人　　名古屋外国語大学外国語学部教授
　砂川 有里子　筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
　中村 雅美　　江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授
　（注）◎：主査

文化審議会国語分科会国語研究等小委員会委員名簿

　伊東 祐郎　　東京外国語大学教授
　上野 善道　　国立国語研究所客員教授
　尾崎 明人　　名古屋外国語大学教授
　東倉 洋一　　国立情報学研究所副所長
　西原 鈴子　　元東京女子大学教授
◎林　 史典　　聖徳大学教授

（専門委員）
砂川 有里子　筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
（注）◎：主査

2 運営会議

運営会議規程
・委員は 20 名以内，内過半数は所外の学識経験者。
・所内委員は，副所長，研究系長，センター長，その他所長の氏名する教授又は客員教授 若干名。
・会議は所長の求めに応じ，議長がこれを招集する。
・委員の過半数の出席がなければ議事を開き，議決することができない。
・会議の議事は出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは議長の決するところによる。
・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会，人事委員会，名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
・議長は，必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

2009 ～ 2011 年度の開催状況

2009 年度
○第 1 回　2009 年 10 月 10 日　12：20 ～ 13：35（国立国語研究所）
議事
1．議長の選出について
2．専門委員会の設置について
3．当面の審議事項について
4．その他

○第 2 回　2010 年 1 月 22 日　11：00 ～ 12：30（学術総合センター）
報告
1．平成 22 年度の国語研の予算について
審議
1．前回議事概要（案）について
2．第 1 期中期目標・計画に基づく実施状況について
3．第 2 期中期目標・計画に基づく年度計画について
4．日本語教育研究・情報センターの目指すべき方向等について
5．研究教育職員（客員を含む）の人事異動について
6．研究教育体制について
7．その他

○第 3 回　2010 年 3 月 19 日　14：10 ～ 15：30（国立国語研究所）
審議
1．前回議事概要（案）について
2．今後の研究教育体制について

３．客員教授の推薦について
４．第１期中期目標・計画に基づく実施状況について
５．第２期中期目標・計画に基づく年度計画について
６．その他
・平成 22 年度運営会議開催スケジュールについて

2010 年度

○第１回　2010 年 6 月 18 日　11：00 ～ 13：50（学術総合センター）

報告
１．国立国語研究所の活動状況について
２．第一期中期目標・中期計画に係る評価について
３．第二期中期目標・中期計画における研究活動の進捗状況について
４．共同研究プロジェクトの外部公募について
５．平成 23 年度概算要求について
６．その他

審議
１．前回議事概要（案）
２．国立国語研究所内部公募における研究教育職員候補者について
３．その他

○第２回　2010 年 9 月 2 日　11：00 ～ 12：30（学術総合センター）

審議
１．前回議事概要（案）
２．研究教育職員の選考について
３．その他

報告
１．国立国語研究所の活動状況について
２．共同研究プロジェクトについて
３．その他

○第３回　2010 年 12 月 18 日　11：00 ～ 12：30（東海大学校友会館）

審議
１．前回議事概要（案）
２．研究教育体制について
３．共同研究・共同利用に係る実施計画及び評価体制の基本的考え方（案）
４．平成 22 年度行動研究プロジェクト採択課題について
５．その他

報告
１．国立国語研究所の活動状況について
２．その他

○第４回　2011 年 2 月 21 日　10：30 ～ 13：15（学術総合センター）

審議

1．前回議事概要（案）

2．研究教育体制について

3．国立国語研究所平成 23 年度計画について

4．その他

報告

1．平成 23 年度の国立国語研究所の予算について

2．国立国語研究所の活動状況について

3．NINJAL プログラムについて

4．その他

・「日本語研究・日本語教育文献データベース」試験公開について

2011 年度

○第 1 回　2011 年 8 月 8 日　10：00 ～ 13:30（八重洲富士屋ホテル）

審議

1．前回議事概要（案）について

2．研究教育体制について

3．その他

報告

1．第 1 期中期目標期間の業務の実績に関する評価の結果について

2．平成 22 事業年度に係る業務の実績に関する報告書について

3．平成 24 年度概算要求（案）について

4．国立国語研究所の活動状況について

5．その他

○第 2 回　2012 年 2 月 24 日　10：30 ～ 13：30（八重洲富士屋ホテル）

議題

1．検証に関する報告及び今後の方向等について

・研究図書室の目指すべき方向等について

2．人事関連事項について

・所長選考の進め方等について

・客員教授選考について

・人事委員会の設置について

・名誉教授候補者選考委員会の設置について

3．中期目標計画関連事項について

・平成 23 事業年度に係る業務の実績に関する報告（案）について

・平成 24 年度計画（案）について

4．平成 24 年度予算について

5．その他

・人間文化研究機構日本研究功労賞受賞候補者の推薦について

・国立国語研究所の活動状況について

・Handbooks of Japanese Language and Linguistics 出版計画について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

2009 年度　開催なし

2010 年度　開催なし

2011 年度　開催なし

(2) 人事委員会

人事委員会規程

・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。

・委員会は運営会議委員のうち運営会議長が指名する，研究所外の者若干名と研究所内の者若干名で組織する。

・委員の任期は１年とし，再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。

・委員会は委員の過半数の出席の過半数で議事を開催する。

・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは委員長の決するところによる。

・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

2009 年度開催状況

2010 年 1 月 22 日（第 1 回）

日本語教育研究・情報センターの整備について審議

日本語教育研究・情報センター職員の選考のため，人事委員会の下に日本語教育小委員会を設置

2010 年 3 月 19 日（第 2 回）

研究教育職員の公募日程等について審議

日本語教育研究・情報センター

言語対照研究系，日本語教育研究・情報センター

研究系に所属する研究職員について，1 年に 2 回（4 月と 10 月）昇任の機会を設ける

2010 年度開催状況

2010 年 4 月 19 日（第 1 回）

研究教育職員の選考についての内規等の制定について審議

今後の人事関係委員会の開催日程について審議

言語対照研究系及び日本語教育研究・情報センターの公募要項について審議

2010 年 6 月 11 日（第 2 回）

日本語教育研究・情報センター　准教授として宇佐美洋氏，野山 広氏，森 篤嗣氏を運営会議に推薦（2010 年 6 月 18 日開催の運営会議で採用決定）

2010 年 8 月 5 日（第 3 回）

日本語教育研究･情報センター教授として野田尚史氏，言語対照研究系教授としてジョン･ホイットマン（John Whitman）氏を運営会議に推薦（2010 年 9 月 2 日開催の運営会議で採用決定）

2010 年 12 月 18 日（第 4 回）

内部昇任について，時空間変異研究系及び言語対照研究系について小委員会を設置することについて審議

2011 年 2 月 7 日（第 5 回）

日本語教育研究・情報センター教授（センター長候補者）として迫田久美子氏を運営会議に推薦

内部昇任について，時空間変異研究系准教授として新野直哉氏，言語対照研究系准教授としてプラシャント・パルデシ（Prashant Pardeshi）氏を運営会議に推薦
（2011 年 2 月 21 日開催の運営会議で採用・昇任決定）

2011 年度開催状況

2011 年 7 月 19 日（第 1 回）

コーパス開発センター　特任准教授として淺原正幸氏を運営会議に推薦
内部昇任として，言語資源研究系准教授として山口昌也氏，丸山岳彦氏を運営会議に推薦
（2011 年 8 月 8 日開催の運営会議で採用・昇任決定）

(3) 名誉教授候補者選考委員会

2009 年度　開催なし
2010 年度　開催なし
2011 年度　開催なし

3 評価体制

国立国語研究所では，効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し，その評価結果を適切に業務運営に反映させるため，自己点検・評価委員会を設置し，この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため，外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では，研究所の「研究」，「組織・運営」，「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し，外部評価委員がその専門的立場から検証する。

自己点検・評価委員会

この委員会では，自己点検・評価の基本的な考え方の作成，自己点検・評価の実施，評価結果の公表及び活用に関すること，外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。

外部評価委員会

外部評価委員会規程

・委員会は，自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること，研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること，共同研究プロジェクト等の評価に関すること，その他評価に関することについて審議する。
・委員会は 10 名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
・委員の任期は 2 年とし，再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
・委員会は，委員の過半数が出席しなければ，議事を開き，議決をすることができない。委員会の議事は，出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。
・委員会は，必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。
・外部評価の実施は，研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は，評価の結果を所長に報告するものとする。

開催状況

○外部評価委員会（第１回）

2010 年 2 月 17 日　14：00 ～ 16：00（都道府県会館）

議事

国語研の基本方針について

１．委員長の選出

２．第一期中期目標・中期計画の評価（案）について

３．第二期中期目標・中期計画及び平成 22 年度計画（案）について

４．依頼事項について

５．その他

○外部評価委員会（第２回）

2011 年 6 月 10 日　16：00 ～ 18：00（国立国語研究所）

報告

１．第一期中期目標期間の業務の実績に関する評価の結果について

審議

１．共同研究の進捗状況確認結果について

２．今後の評価の進め方について

３．その他

共同研究プロジェクトヒアリング

開催状況

2010 年度

・2011 年 2 月 9 日　13：00 ～ 17：00

2010 年度基幹型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）

基幹型 7 件，研究系・センター 2 件

・2011 年 2 月 16 日　13：30 ～ 17：00

2010 年度基幹型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）

基幹型 6 件，研究系・センター 2 件

・2011 年 2 月 22 日　13：30 ～ 14：30

2010 年度基幹型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）

基幹型 1 件，研究系・センター 1 件

・2011 年 2 月 23 日　13：30 ～ 15：20

2010 年度独創・発展型，萌芽・発掘型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及びヒアリング）

独創・発展型 4 件，萌芽・発掘型 1 件

・2011 年 3 月 2 日　13：30 ～ 14：50

2010 年度独創・発展型，萌芽・発掘型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及びヒアリング）

独創・発展型 1 件，萌芽・発掘型 3 件

2011 年度

・2012 年 2 月 12 日　10：00 ～ 17：35
2011 年度基幹型，独創・発展型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）
基幹型 13 件，研究系・センター 4 件

・2012 年 2 月 13 日　10：00 ～ 13：50
2011 年度基幹型，領域指定型，独創・発展型，萌芽・発掘型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）
基幹型 2 件，領域指定型 2 件，独創・発展型 1 件，萌芽・発掘型 2 件，研究系・センター 3 件

・2012 年 2 月 21 日　10：30 ～ 14：00
2010 年度領域指定型，独創・発展型，萌芽・発掘型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）
領域指定型 1 件，独創・発展型 3 件，萌芽・発掘型 3 件

・2012 年 2 月 27 日　10：30 ～ 14：20
2011 年度領域指定型，独創・発展型，萌芽・発掘型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検ヒアリング（研究成果報告及び外部評価ヒアリング）
領域指定型 3 件，独創・発展型 1 件，萌芽・発掘型 4 件

平成 21 年度実績に関する自己点検・評価状況について

本研究所では，効率的且つ効果的な自己点検・評価を実施し，その評価結果を適切に運営改善に反映させるため，自己点検・評価委員会を設置している。また自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため，本研究所自ら外部評価委員会を設置している。

【自己点検・評価委員会】

本委員会では，管理運営，研究等について本研究所が自ら行う点検及び評価に関する基本的な考え方をまとめ，自己点検・評価を実施し，その結果の活用について検討・協議する。併せて，中期目標，中期計画及び年度計画の策定について検討する。

〔開催状況〕

平成 21 年 10 月から平成 22 年 2 月上旬までに 5 回開催し，21 年度計画にかかる実施状況の確認及び現況の調査を行った。これらの自己点検結果を本研究所外部評価委員会に提示して意見を求め，外部評価委員会からの評価結果を踏まえて，平成 22 年 3 月末までに 3 回自己点検・評価委員会を開催して再考し，業務実績報告書，現況調査票及び研究業績をまとめた。

【外部評価委員会】

本委員会では，本研究所がまとめた自己点検・評価について，所外の専門家の立場から検証する。外部評価委員は，次のとおりである。

〔外部評価委員〕

板橋秀一（国立情報学研究所特任教授，筑波大学名誉教授）＜専門：情報学，音声データベース＞
久野マリ子（國學院大學文学部教授）＜専門：日本語学，方言学，音声学＞
郡司隆男（神戸松蔭女子学院大学学長）＜専門：計算言語学，日本語学，知能情報学＞
林 徹（東京大学大学院人文社会系研究科教授）＜専門：一般言語学，トルコ語学＞
廣瀬正宜（名古屋外国語大学外国語学部教授）＜専門：日本語教育学，言語学＞

〔開催状況〕

自己点検・評価委員会が取りまとめた実施状況及び現況調査結果を検証していただくため，平成22年2月17日（水）に外部評価委員会を開催し，評価内容に関する説明を外部評価委員に行った。外部評価委員からは，検証期間の後，本研究所の評価内容に対する非常に有益なコメントをいただいた。主なコメントは，次のとおりである。

〔主なコメント〕

・英語名称にLinguisticsが加わったことから，COE性をもっと強調してはどうか。
・消滅危機方言に関する研究については，成果の公開方法や研究者以外の利用対象を具体的に記載した方がよいのではないか。
・現代語及び歴史コーパスに関する成果については，一般の方々が理解しやすい記載にすることが望ましい。また，英語のコーパスはすでに大規模なものがあるが，日本ではまだ初期段階にあるので，本研究の学術的意義は極めて高い。国際的にも貢献する内容であることも付記してはどうか。
・国立国語研究所における日本語教育研究及びその成果は，帰国生徒・学生にとっても，また国外における外国語としての日本語教育研究においても重要である旨を強調した方がよいのではないか。
・病院などでの専門領域の言葉を分かりやすくする提案は意義深く，また時宜を得ている。日本の国際化にも結びつく。様々な分野の言葉を分かりやすくする提案を，今後も引き続き行っていただきたい。

4 広報

○国語研Webサイト　http://www.ninjal.ac.jp/
　各種催し物，データベース等，国語研の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで，幅広いコンテンツを紹介
○国立国語研究所要覧2010/2011
　国語研の特色や研究系，センターの活動，共同研究プロジェクトの紹介冊子
○NINJAL英文リーフレット2010
○国語研からの御案内（メールマガジン）
　シンポジウム，コロキウム等のイベント，データベース紹介，職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。

5 所長賞

功績顕著な職員に対し，所長からその功績をたたえた表彰を行い，研究所の活性化に資することを目的とするもので，学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし，原則として年2回行う。

○第1回所長賞：（2009年10月1日～2010年9月30日）
　・窪薗晴夫（理論・構造研究系 教授）
　　〈論文〉
　　論文“Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese”（*Lingua* 120，2010年）の

刊行によって，優れた研究業績を挙げた。

・前川喜久雄（言語資源研究系 教授）

〈論文〉

論文“Coarticulatory reinterpretation of allophonic variation: Corpus-based analysis of /z/in spontaneous Japanese”（*Journal of Phonetics* 38, 2010 年）の刊行によって優れた研究業績を挙げた。

・プラシャント・パルデシ（言語対照研究系 准教授）

〈著書〉

著書『言語のタイポロジー ―認知類型論のアプローチ―』（研究社，2010 年）の刊行によって優れた研究業績を挙げた。

・横山詔一（理論・構造研究系 教授）

〈受賞〉

社会言語科学会の第 9 回徳川宗賢賞（2009 年度）を受賞（2010.3.13）した。

・朝日祥之（時空間変異研究系 准教授）

〈受賞〉

社会言語科学会の第 9 回徳川宗賢賞（2009 年度）を受賞（2010.3.13）した。

・髙田智和（理論・構造研究系 准教授）

〈受賞〉

情報処理学会の 2010 年度標準化貢献賞を受賞（2010.7.12）した。

○第 2 回所長賞：（2010 年 10 月 1 日～ 2011 年 3 月 31 日）

・新野直哉（時空間変異研究系 准教授）

〈著書〉

博士論文『現代日本語における進行中の変化の研究 ―「誤用」「気づかない変化」を中心に』（ひつじ書房，2011 年 2 月）の刊行によって，優れた研究業績を挙げた。

・小木曽智信（言語資源研究系 准教授）

〈受賞〉

論文「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」で，情報処理学会の平成 22（2010）年度山下記念研究賞を受賞（2011.3.3）した。

・下地賀代子（時空間変異研究系 プロジェクト PD フェロー）

〈論文〉

論文『石垣・宮良方言の係助辞 -du の文法的意味役割』が日本語文法学会学会誌『日本語文法』10 巻 2 号（2010 年 9 月 30 日発行）に掲載されたため。

・早田美智子（管理部研究推進課 専門職員）

〈研究支援業務等で優れた功績〉

冊子媒体で刊行していた「国語年鑑」と「日本語教育年鑑」のデータを統合して，ウェブ上で情報発信できるよう『日本語研究・日本語教育文献データベース』を構築した。2011 年 1 月 31 日に公開し，年 3 回のデータ更新を可能とした。これにより，情報提供の迅速化が図られ，研究者の利便性向上に寄与した。

○第 3 回所長賞：（2011 年 4 月 1 日～ 2011 年 9 月 30 日）

・ジョン・ホイットマン（John Whitman）（言語対照研究系 教授）

〈論文〉

Jaklin Kornfilt（ジャクリン・コーンフィルト）氏とともに，言語学の分野で，世界のトップレベルのジャーナルである専門誌 *Lingua*，第 121 巻，第 7 号（2011 年 5 月）として，

Nominalizations in Linguistic Theory（言語理論における名詞化）という題の特別号を編集した。更に，Jaklin Kornfilt（ジャクリン・コーンフィルト）氏と共著で，Introduction: Nominalizations in syntactic theory（導入：統語理論における名詞化）と Afterword: Nominalizations in syntactic theory（まとめ：統語理論における名詞化）を執筆した。

・宇佐美洋（日本語教育研究・情報センター 准教授）

〈受賞〉

論文「実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類 ―「生活のための日本語」全国調査から―」で，第 6 回日本語教育学会林大記念論文賞を，また，一連の評価研究と近年のその意欲的な成果の発表により第 9 回日本語教育学会奨励賞を受賞（2011.5.21）した。

・小川晋史（時空間変異研究系 プロジェクト PD フェロー）

〈受賞〉

論文「今帰仁方言のアクセント体系」（他 5 編）で，2011 年度沖縄言語研究センター仲宗根政善記念研究奨励金を受賞（2011.7.9）したため。

・池田理恵子（管理部研究推進課 専門職員）

〈研究支援業務等で優れた功績〉

「国語研プロジェクトレビュー（NINJAL Project Review）」及び「国立国語研究所論集（NINJAL Research Papers）」の編集について，日本語に対する専門性を背景に高度な編集企画力を発揮し，その支援業務を本格的に軌道に乗せることに功績があった。これにより，研究所外への情報提供の迅速化が図られ，研究者の利便性向上に寄与した。

○第 4 回所長賞：（2011 年 10 月 1 日～ 2012 年 3 月 31 日）

・前川喜久雄（言語資源研究系 教授）

〈論文〉

論文「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」（『音声研究』第 14 巻第 2 号掲載）により，2011 年 12 月に日本音声学会優秀論文賞を受賞。本論文は，現代日本語有声破裂音における閉鎖調音弱化の実態と要因を詳細に検討したもので今後多く引用されるであろうこと，またコーパスを利用する意義と方法を提示している点が評価された。

・角田太作（言語対照研究系 教授）

〈著書〉

単著 *A GRAMMAR OF WARRONGO* を言語学の分野で傑出した出版活動を続けている国際的学術出版社である De Gruyter Mouton 社より 2011 年 12 月に刊行。ワロゴ語の最後の話者から聞き取りを行い，消滅したワロゴ語の記録・分析に顕著な功績を挙げた。

・竹田晃子（時空間変異研究系 プロジェクト非常勤研究員）

〈社会的な業績〉

冊子『東北方言オノマトペ用例集』を医療・介護関係者を主な対象として企画・制作・配布し，東日本大震災の被災者・被災地域に対して，方言研究の専門家の立場から支援を行い，一般社会に対して貢献した。

6 研究教育職員の異動（2009 ～ 2011 年度中の異動者）

2009 年度

2009.10.1	教授	角田太作	採用	東京大学教授より
2009.10.1	准教授	プラシャント・パルデシ	採用	神戸大学講師より
2010.1.1	教授	ティモシー・バンス	採用	アリゾナ大学教授より
2010.3.31	准教授	尾崎喜光	辞職	
2010.3.31	助教	齋藤達哉	辞職	
2010.3.31	研究員	金田智子	辞職	

2010 年度

2010.4.1	教授・副所長・研究系長	木部暢子	採用	鹿児島大学教授より
2010.4.1	教授・研究系長	窪薗晴夫	採用	神戸大学教授より
2010.7.1	准教授	野山広	昇任	研究員より
2011.3.31	教授	井上優	辞職	
2011.3.31	准教授	森篤嗣	辞職	

2011 年度

2011.4.1	教授	プラシャント・パルデシ	昇任	准教授より
2011.4.1	准教授	新野直哉	昇任	助教より
2011.8.1	教授	ジョン・ホイットマン	採用	コーネル大学教授より
2011.10.1	准教授	丸山岳彦	昇任	助教より
2011.10.1	准教授	山口昌也	昇任	助教より
2012.1.1	特任准教授	淺原正幸	採用	
2012.3.31	教授	角田太作	定年退職	
2012.3.31	准教授	小椋秀樹	辞職	

国立国語研究所　年報　2009 – 2011 年度

2015 年 3 月 20 日　発行

編集・発行
大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561　東京都立川市緑町 10-2
TEL：042-540-4300　　FAX：042-540-4333
http://www.ninjal.ac.jp/

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所